
倫子のメロドラマ

長沢陵輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

倫子のメロドラマ

【Nコード】

N3290A

【作者名】

長沢陵輔

【あらすじ】

前半は人生を切り開くパワーを持った女性が結婚して出産して離婚して再婚へ至るまでの半生を兄の目を通して綴っています。後半はほとんど介護小説です。それぞれ独立した小説群になっています。すべてがタイトルの女性名を主人公としてしているわけではないです。ホントにメロドラマを期待している人は誤解のないように。カテゴリは・・・何なんでしょう？カテゴリないかも。変な小説だと思って読んでやってください。

序

わが甥たちへ

君たちの前にこれから提示される文章が君たちに何らかの意味を持つとしたら、それは単なる小説として楽しんでもらう以上の意味を持ちません。このエッセイとも小説ともいえぬ文章は、確かに君たちの叔父たる私と君たちのお母さんとの関係の一部分を切り取り、それを元に綴られたものではありませんが、決してこの文章からお母さんの真の姿を知ろうとは思わないでください。お母さんの真の姿は君たちしか知りえないものです。その意味でこの文章には小説以上の意味はありません。

しかしながら、もしこの文章に少しでもお母さんを思い浮かばせる何かがあつたら、その印象を大事にしてほしいと思います。そして、自分を誇らしく思ってください。自分にはこの人の血が流れているのだと。お父さんを思い浮かべても同じです。君たちのお父さんもお母さんもとても強い人です。人生を前向きに捉えることのできる立派な人格者です。生きる力を持った人たちです。君たちはこの二人の間から生まれたくて生まれてきたのであって、決して他の人たちから生まれたかっただけではないのです。このことを忘れないでください。

君たちの前には輝かしい未来が開けています。とはいえ時には悲しいこともあるでしょうし自分がみじめ思えてならないこともあるかもしれません。そんな時この文章のことを少しでも思い出してもえれば、叔父はうれしく思います。

これから綴られる文章を愛する君たちに捧げます。

平成17年12月 叔父記す

結婚篇

妹の倫子が最初の結婚をしたのは私が大学三年の春、倫子は十九歳だった。結婚相手は三十一歳、干支で言つと倫子の一回り上のウサギ年に当たり、私より十歳年上だった。義理とはいえ自分より十も年上の弟ができることに私は妙なとまどいを覚えた。義理の弟は私のことを何と呼ぶのか、そして私は彼を何と呼べばいいのか、想像もできなかった。

義理の弟になる正明は父親が経営する運送会社の重役だった。自分でも中古車販売をはじめ、レンタルレコード店や弁当屋などを多角的に経営しているという。いわゆる地元経済界の名士で、新潟市内の高級ホテルで催された披露宴はまことに豪勢なものだった。

結婚式の司会者は正明のこと「青年実業家」と紹介した。その言葉は当時大学生だった私に卑屈な気持ちを抱かせた。

「あたしが選んだ男性は兄貴なんかよりずっとすごい人なのよ」倫子が暗にそんなふうに通っているように思えた。来賓には市会議員も来ており、スピーチでは新郎のマイク音が割れるくらいの大声で人間的なすばらしさについて語った。語るといふよりどなりまくっている感じで、新郎よりもむしろ選挙演説のように自分を売り込んでいるように見えた。

私は倫子の結婚を喜ぶでもなく悲しむでもなく、披露宴の様子をごく冷ややかに眺めていた。その態度は来賓客に不遜に見えるだろうと思つた。会場のみんなが自分を敬遠しているように思われた。

結婚式が始まる前、親戚一同が親族控室で待つ間に軽い地震があった。

「おや、地震らて。」

「結構揺れるねっか。」

「初めっからこんげ地震があるようらと、この先はどんげになることらるの。」

親戚は口々に囁きあつた。

そもそもこの結婚には両親、親戚一同、みな猛反対であつた。

倫子は子供の頃から大柄で、中学入学の頃には伸張が1メートル75センチあつた。足が速くまた運動神経がよかつたので、陸上競技部に入部した。これはまた父のたつての願いでもあつた。

一年生ながら初めて出場した市内大会で走り幅跳びの県記録を出して優勝した。その後も出場する大会大会ごとく優勝し、生徒数が千人を超えるマンモス中学校の中にあつて倫子はとびぬけて目立つ存在となつた。

倫子の入学によつて私の生活も変わつてきた。さして親しくもない同級生の男達が妙に親しく声をかけてくるようになったのだ。女子達にキヤーキヤー騒がれるような目立つ男子というのがどの学校にも何人かいるもので、そんな奴らを私は遠くから憧れと羨望をもつて見ていた。そんな女生徒のアイドル的な連中までが大人しく目立たない存在だつた私に急速に接近してきたのだから、倫子の影響力たるやすごいものがあつたのに違いない。

おそらくアイドル男連中はこんなふう語り合つていたのだろう。「おい、あの優勝した一年のでっけえ娘、ちつとかわいいねかやあ。」

「あああいつか、おれらと同じ学年に兄貴がいるれ。」

「ほんとか、誰ら、それは？」

「五組の長沢らいや。」

「長沢？知らねえなア・・・。」

そう、私は昔から目立たぬ存在だつたのだ。倫子は逆に派手好きで、小学校の頃からけっこうモテていた。

倫子が変わりモテてて初めて知つたのは、小学生の頃、学校のそばの神社のお祭りに倫子連れて行ったときだ。

倫子が出店で女の子のオモチャを見ているとき、私のすぐそばで年下の男子達が「おい、長沢倫子が来てるぜ」と噂し合っているの

を耳にした。その兄が自分たちの目の前にいることを、彼らはまったく知らなかったようだ。

父も若い頃陸上競技をやっていた。父は自分の果たせなかった夢を倫子に託したのかもしれない。倫子を県内の体育系の高校に入れ、大学を出て、末は体育教師になってほしいと願っていたようだ。この結婚でその夢はもろくも崩れ去ってしまった。

高校時代、倫子は東京のW大の陸上部の学生とつきあったことがある。父はそのカレには好感を持っていたようだ。倫子のカレシの話之父から聞かされて、W大受験に見事に失敗した私はやっぱり卑屈な気持ちを抱いた。

しかしそのW大生のカレと倫子は結局うまくいかなかった。三十一歳の青年実業家とつき合い出したのはその直後あたりからだったらしい。

「W大のカレとうまくいかんかったすけ、あんな男にだまされたがいや。寮になんかに入れねえで、家から通わせれば良かったいや。」

父はそう嘆いた。

倫子から私あてに手紙が届いたのはちょうどその頃だ。手紙に倫子曰く、

今真剣につき合っている人がいます。

その人はわたしより一回りも年上で会社を経営しています。

今すぐにも結婚したいと思っっているのですが、お父さんもお母さんも許してくれませ

ん。

お兄さんも知つてのとおり、お父さんは心の狭い人です。

じぶんの思い通りにならないことはすべて反対で、わたしの気持ち聞いてくれようさ

えしません。

お母さんは心の広い人ですので、お母さんには正直な気持ちをすべて打ち明けています。

でもそのお母さんでさえ、いまずぐ結婚するのには反対しています。

結婚するにしても体育大学を卒業して教員免許を取ってからと言っています。

お兄さんはどう思いますか・・・

私を兄と見込んで、倫子は涙ながらの相談を持ちかけてきたのだ。にもかかわらず私はすぐに返事を出さなかった。あまりに突然の出来事に何も判断することができなかつたのだ。いろいろ考えることはあつても、それを言葉に表したらすべてそれに規定されてしまう。また言葉の流れについて従つてしまつて、本来言いたい気持ちと違うことが手紙に書かれてしまうように思われる。この世にただ一人の妹のことだけに、事はそんなに単純ではないはずだ。いや、それは単なるいい訳だろう。はつきり言つて自分のまとまらない気持ちを書くのが面倒くさかつたのだ。

倫子によつやく返事を出したのは、手紙を受け取つて1ヶ月近くが経つてからだった。今、私はその内容をまったく覚えていない。ただ、当時ブンガクバカだった私は、自分の複雑な気持ちを何とか伝えるべく、またオレはこんなに勉強してこんな表現ができるんだぞ、どうだ兄貴はすごいだろうと喧伝すべく、やたらに難しい理屈をこねまわして、根本的な問題解決法を煙に巻いてしまった印象だけが残っている。要は、いま自分のことで精一杯でお前の行動を判断できない、ということだったようだ。まこともつて冷たい兄であつた。

倫子に返事を出してからしばらくして、父から電話があつた。明日倫子の結婚の件で親族会議を開くから今日中に長岡へ帰つて来い

という。

新聞配達のアルバイトでなかなか抜けられないところを店の好意で休暇をもらい、早急に帰長した。真冬のこと、当時まだ上越新幹線が開通しておらず上野駅から特急「とき」に乗り清水トンネルを越えた時、川端康成の小説のすごさを感じたりした。新潟は吹雪であつた。墨絵のような新潟の景色が車窓に現れたとき、乗客の間から一斉に「おおっ」というため息が漏れた。つい先ほどまで群馬の山々の上にはカラリとした青空が広がっていたのに。

親族会議には父方の親戚の主だつた面々が集まつた。みんな倫子を説得しようと必死だつた。倫子は彼らの前で涙を浮かべ、うなだれていた。母は泣いていた。父はどなりまくっていた。泣いてはいたが、倫子は誰が何を言つても頑として聞き入れなかつた。私はほとんど意見を言わなかつた。

話の流れで倫子から私にあてた手紙の件が出た。兄貴に相談したのか、と問われたのだ。私は一瞬どきつとした。倫子は言った。

「だつてお兄ちゃん、返事全然くれなかつたじゃん。」
私は何も言えなかつた。

暗い座敷の大きなテーブルを囲んで、泣きじゃくる倫子、声を荒げる父、鼻をすする母、必死に説得する伯父と従兄達……。そんな光景を見ながら、私はまるでテレビのメロドラマのようだと思つた。座が静まると石油ストーブにかけられたヤカンから蒸気の噴き出す音がさびしく聞こえた。会議は深夜に及んだ。伯父の一人が言つた。

「倫子、そんなに言うがあきや、相手の男の本当の気持ちを確認めんきやならねえだろう。いまみんなに言われたこと、その男に電話してちつと相談してみれ。」

正明への電話を終えて戻つてくると、倫子は

「これからこつちへ来るつて。」
と言つた。みんな一瞬身構えた。

すでに深夜1時を回っている。新潟市内から長岡までどんなに車

でとばしても1時間半はかかる。大急ぎでかけつけた正明は主だった親族一同の前で深々と土下座して言った。

「倫子さんを幸せにします、どうか結婚させてください。」
やはりメロドラマだと私は思った。

一晩を徹して行われた親族会議の結果は、結婚は許可する、ただしすでに体育大学の推薦入学が内定しているのだから大学を卒業するまで待つ、その間二人がつき合うことは認める、という至極妥当なものだった。

倫子が正明に連れられて帰った後、父は私に言った。

「どうせ東京出ればあいつのことなんか自然に忘れるいや。他にいい男もいっぱいいるろうしな。まあ4年もあるすけな。」

この結果に落ち着かせるのに最も貢献したのは、隆治伯父だった。隆治伯父は六人いる父の兄弟の上から二番目で、長岡のはずれのYという小さな町で郵便局長をしていた。他のみんなは理屈で説得しようとしていたが、この人だけは倫子と正明の感情にうったえかけたのだった。

「倫子、お前たちの考え方がまじめらということはおじさん、よくわかった。こんな誠実な人を選んだお前は立派らこてや。正明さんはお前を絶対に幸せにできる人らとわかった。本人もいまみんなの前でそう誓ったねかや。お父さんもお母さんもその気持ちよくわかったすけ、もう結婚に反対しねえろう。本当に好きなもん同士結婚するのが一番みんなによるこばれるこてや。」

「ただどお前達ももう大人んがあすけ、もうちつと考えてみてくんねえか。お前はもう体育大学に推薦が決まってがある？推薦取るために先生やお父さんお母さんがどれだけ苦労したかわかるか？いま結婚して大学行かんかったらお前、お父さんやお母さんが一生懸命に働いて育ててくれたお前の人生を、お前が自分から壊すことになるねかや。おんなじに結婚するがあきやあ、みんなに迷惑かけて結婚するよか、ちゃんと大学を卒業して体育の先生になって、みんなから祝福されて結婚したほうがよっぽど幸せらこてや。大学の四

年間なんてすぐ終わる。伯父さんは陸上であれだけががんばった倫子だったら四年ぐれえ我慢できると信じてる。

正明さん、悪リイも四年だけ待ってやってくんねえか。その間ぜったい会っちゃだめらてわけじゃねえし、もうちっとしたら新幹線ができる。そうすりゃ東京と新潟なんかすぐらこてや。いつでも会えるねかて。」

隆治伯父は、新潟弁特有の歌うようなやさしい口調で倫子と正明氏に語りかけた。隆治伯父の言葉に感銘した二人がようやく折れた頃はすでに長い夜が明け始めていた。

その隆治伯父は、倫子が無事体育大学に入学したその年の春に死んだ。ガンだった。父の兄弟の中で、戦死以外で亡くなった初めての人であった。

隆治叔父の葬式は、暖かくなつたとはいえまだ日陰に汚れた残雪が残る頃にしめやかに執り行われた。喪服すら持っていない私は、大学通学用の一張羅のカラーシャツにジャンパー、ジーンズに汚れたスニーカーといういでたちで葬儀にかけた。倫子も来ていた。さすがに隆治伯父への感謝とお詫びの気持ちがあつたのだろう。

「お前、今日だけは一日家についてくんねえか？」

一通り葬儀が終わつた後母がそう言つと、倫子は言った。

「実はこれから正明さんと会うことになつてるんだわ。せつかく新潟まで帰つて来たんだしね。明日、試験なんよ。今日中に東京に戻らんばなんねんだわ。」

「あきや、そいがあけ。じゃあ、お兄ちゃんはどうが？」

「おれも明日からまた新聞配達あるんで、今日中に帰るよ。」

「そいじゃあ二人で一緒に帰ればいいねかね。倫子は新潟から電車に乗るがある？ お兄ちゃんに自由席、取つといてやればいいねかて。たまには兄妹二人、じっくり話しながら帰ってみれさ。」

倫子が帰ってしまうと、母はこっそり私に言った。

「お兄ちゃん、倫子と二人で話してみて、後でどんな様子らか知ら

せてくれね。あたしには言えねえこともあんなには言うかもしねえすけ。」

東京へ向かう電車の中、私は倫子と隣合わせに座った。隣の派手な洋服の女が自分の妹だとは到底思えなかった。兄妹らしい会話はほとんどなく、倫子の心がすでに正明に占領されていることが感じられた。倫子が急に大人びたように感じた。一緒にいると倫子の立派さに比べて自分がいかに卑屈な存在であるか、身にしみて感じられた。もしかしたら倫子は、私の体からじんわりとにじみ出る卑屈なにおいを嗅ぎ取り、兄というより男として自分のそばにいたくないのではないか、そんなふうにまで思われて、私は悲しかった。

長岡を発つたのは夕方だったのに、窓の外はすでに真っ暗になっていた。窓ガラスに張り付いた水滴が流れ出し、くねくねと黒い筋を作っていた。東京へ着くまでの間、倫子は窓の手摺にほおづえをつき、顔を傾けて黒い筋の向こうに見える暗い景色をずっと眺めていた。正明との思い出にでも耽っているのだろうか。兄らしい言葉の一つもかけてやらねば、という使命感のようなものから、私は倫子に聞いた。

「おい、正明さんって、何の会社をやってたんだ？」

「いろいろ手広くやってんだわ。お父さんの運送屋も手伝ってるし、自分で中古車のディーラーもやってるし、あとレンタルレコードと弁当屋。あたし、高校時代にレンタルレコード屋でアルバイトしてたんだよ。」

倫子がレコードを探していると正明のほうから声をかけてきたという。

「会社のほうは景気いいの？」

「あの人、けっこうお客さんとケンカするんだわ。それで損すること多いがあて。」

「商売人にしちゃ器用なほうじゃないのかもな。」

「まあ、そういう人らっけんね。」

正明がお坊ちゃん育ちで我慢が苦手なのではないか、経営者とし

てはちょっと不安だ、ということを私は暗に倫子にうつたえたのだが、倫子は欠点も含めて正明のすべてを肯定しているのだった。すでに倫子をこちら側に引き戻すのは不可能で、倫子にとって正明以外の男は、兄である私を含めてみな同じに見えるのにちがいない。親族会議では二人の間に肉体関係は一切ないと強調していた倫子であったが、私にはとても信じられなかった。

倫子はその後、誰に相談することもなく勝手に大学を中退し、1年近くの間われわれから行方をくらました。翌年の冬ようやく見つけ出した時、倫子はすでに妊娠していた。どうやら倫子は新潟市内にアパートを借りて、正明と二人で暮らしていたらしい。倫子の陸上部の旧友から母がこっそり居所を聞きだしたのであった。

「倫子、お前という娘は！」

母は嫌がる倫子の手を引っ張り、アパートの前で何度も平手打ちを食わせたそうだった。母は涙を浮かべて一部始終を私に語った。

「そのときに気がついたがあて。倫子、お前なんだかお腹大きいがねえけ、と聞いたら素直に白状したて。まあほんつとに思い切ったことをする娘らて。こうなったらもう結婚させんきやだめらねえ。」

私は倫子のメロドラマのような生き方をうらやましく感じた。倫子くらいの意思と行動力が自分になれば、何でもできるように思った。

結婚式はつつがなく終わった。父は親戚一同を引き連れ、逃げるようにマイクロバスに乗り込んだ。その際、運転手に五千円のご祝儀を手渡した。運転手が固辞すると、

「いや、お祝いらすけ、受け取ってくんなさい。」

と言った。母が

「そんげ、関係ない人にまでお金やらんたつていいねかて。」

とたしなめると父は、

「バカ、こんげん時に金をけちつてどうする。みみっちい女らいや、

ナ（おまえ）は！」
と自分で自分を納得させるように答えた。

結婚した年の夏、倫子は長男を生んだ。正明の家は初孫の誕生を盛大に祝ったそうだ。生まれてきた子を見て、父は私に

「ぜんぜん倫子に似てねえがいや。」

と報告した。子供の頃の倫子のような愛くるしい顔立ちを期待していたのだらう。そうは言うものの、さすがに初めての孫の誕生はよほどうれしかったものと見える。たいそう立派な祝いの品を贈り、孫のためと言ったたびたび倫子に少なからぬ小遣いを渡していた。

倫子は大いに喜んだが、父は私にこうこぼした。

「正明、倫子に小遣いやつてねえみてえらな。旦那様の家らすけ、嫁に小遣いは要らなくてあるかな。」

「ああいう家は逆に金勘定にはうるさそうだよ。会社経営してんだから、資金のやりくりとかで大変なんだよ、きつと。人を使ってんだから、給料もはらわなきゃいかんしね。嫁なんて人件費なしで働きたい社員みたいなもんじゃないの？」

私はそう答えたのであった。

三年後、倫子は女の子を産んだ。この子は倫子そっくりで、母は倫子が家族で来るたびその子の名前を「倫子」と呼び間違えていた。結婚して二十年めになる昨年の春、正明の借金が原因で倫子は離婚した。そしてその半年後、まったく別の福島出身の男性と再婚した。どうやらその男性も私より年上らしいのだが、新しい弟となるその男に、私はいまだに会っていないのである。

家族篇

結婚とはつくづく不思議なものである。昨日までまったく見ず知らずの他人同士が身内の一人の婚姻によって、一日にして「親戚」となるのだから。

梨本家との親戚づきあいが始まった。

いつの間にか正明は私を「おにいさん」と、私は「正明さん」と呼ぶようになっていた。倫子の結婚式が始まる直前に梨本・長沢両家親族一同の顔合わせがあった。両家とも相手の家の表情を恐る恐るうかがっていた。こちらが倫子と正明の結婚に猛反対したように、向こうでも同じようなことが行なわれていたのではないかと私は思った。そのとき向こうが反対した理由は家の格の違いだったのかもしれない。

「あんななどこの馬の骨ともしれない素性の家の娘なんて！こちらは仮にも格式ある梨本家十一代目の跡取り息子なのよ……。」
こんな言葉がやりとりされていたのかもしれない。

仲人から一人一人紹介され、そのつど一同頭を下げたが、たぶん誰が誰なのか誰もわかっていなかったろう。今でもわからんが……。

私は新婦側・長沢家の長男で倫子の兄として梨本家に紹介された。「倫子の兄の陵輔です。いま東京の大学に通ってます。よろしくお願ひします。」

と挨拶はしたものの、その態度にどこかしら相手を小ばかにした不遜なところが透けて見えたにちがいない。披露宴のとき自分が敬遠されていると感じたのが何よりの証拠だ。

梨本家は新潟市内の旧家である。代々造り酒屋を営んでいて、正明の父の代に運送会社を起こした。これが戦後の好景気に乗じて大当たりした。現在正明の父は県内の運送業組合の理事を任されている。

る。政界とのパイプも太い。正明はその会社を継ぐヤングエグゼクティブというわけだ。

正明には二つ違いの姉がいた。すでに結婚して男の子が一人いる。その夫、すなわち正明にとってもう一人の義理の兄にあたるが、この人もまた何かの会社を経営しているという。姉は正明に瓜二つの顔立ちをしていた。やせ気味の体つきに小ぶりな頭、真つ黒な髪の毛に狭い額。一重まぶたで細長く白眼がちの目は目尻が下に垂れている。鼻は小ぶりだが魔女のように鷲鼻になって先端がとがっている。唇は薄く、口元がへの字だ。笑うとこれらの部分部分が皺の中に縮小され、一層強調される。とても第一印象で好かれる印象の顔立ちではないが、少なくともこの姉と正明とが姉弟であることは、初対面の人でもわかるだろう。

結婚した翌年に倫子が生んだ男の子も彼らと同じ顔をしていた。父は嘆いた。倫子に似てくれれば、長沢家の血がもつと濃ければ、愛くるしい顔立ちになったにちがいないのだ。長沢家は昔から美男美女の家系だ。まず、みな背が高い。色白で大きな二重まぶたの目に筋の通った高い鼻梁を持っている。越後人にありがちなゴツゴツした骨つぽさを持ちながらも西洋人の秀囲気を漂わせるのが長沢家の一族なのだ。

梨本家の顔立ちだとはいえ、さすがに初孫はかわいいのだろう。いざ孫を目の前になると肉親の愛情には勝てなかったようだ。父は私が家に電話するたびに、さもうれしげに「正道」と名づけられた初孫の近況を語って聞かせた。私にはどうでもいいことに思えたが、父はまだ言葉も話せない赤ん坊に、「あの子は将来大物になるて。そんげん顔してるて。何せあの梨本の血が入ってるすけな。」と最大級の賛辞を捧げた。

私が初めて新潟の梨本家へ招かれたのは倫子が結婚して数年経つてからのことであった。正道の小学校入学のお祝いをするからせひ

お越しいただきたい、との梨本家からの誘いであった。ゴールデンウィークの真ん中の春のポカポカした陽気の日で、当時私は高崎で大手メーカー系のソフトハウスで働いており、ゴールデンウィークは会社の仲間達と海外旅行する計画であったが、父母からの再三の要請に折れ、ようやく重い腰を上げたのであった。

父が珍しくスーツにネクタイという姿で出かけようとするので、

「何だい、そんな格好してかなくちゃダメなのかい？」

と聞くと、母が

「当たり前らねかて、よその家にお呼ばれするがあすけん。」

と返す。見れば母もまた小綺麗なスーツを着、安っぽいアクセサリなどつけて濃い化粧を施している。父の実家へ行くときに二人がそんな格好をしたことはこれまで一度だつてない。その旨を二人に言うと、二人とも黙ってしまった。背広など持たず気軽な気持ちで帰郷した私が真つ赤なチエックのオープンシャツに紺のブレザー、薄汚れたジーンズにデッキシューズという姿で出かけようすると、

「何だ、おめえ、背広ぐれえ持って来んかったがあか。」

と、逆に父にたしなめられてしまう始末であった。

倫子はそのときすでに二児の母となつていた。長男の正道を生んだ三年後に産んだ女の子は、ヒラガナで”あずさ”と名付けられた。あずさは倫子に似ていた。倫子夫婦が一家総出で長岡の家に来ると、母はあずさを「みっちゃん」と子供の頃の倫子と呼び間違え、

「アラ、また間違えたてエ。だつてそっくりらすけ。」

と笑いながら謝ることがたびたびあった。そのときの母のうれしそうな表情を私は忘れることができなかった。

梨本の家は阿賀野川の支流の小さな川の土手沿いにあった。広い敷地の古い屋敷で、屋敷の周りを檜や栗、ブナなどの様々な樹木が取り巻いていた。庭は十分に手入れが行き届いており、間に石畳の小道が敷かれ、座敷の縁側まで続いていた。石畳の両側に一本ずつ石の灯籠が立っていた。縁側からは、土手を借景した日本庭園を挟

んで、奥の左手に大きな土蔵、右手に青々とした竹林が見渡せた。竹林を背に左手、ちょうど屋敷の右にまがったところに小さな中庭があった。中庭には小さな畑が耕されており、野菜の自家栽培を行っていた。この畑の手前にはついこの間まで大きな柿の木が立っていたが、父の転落事故で切り倒してしまっただけで、今は大きな鯉幟が立っている。

父の転落事故の顛末はこうである。気のいい父は孫達に柿の実をとってくれとせがまれ、運動神経のいいところを見せてやろうと、年甲斐もなくこの柿の木に登り、足を滑らせて真つ逆さまに落ちてしまった。落ちた際、柿の木の又に頭を挟まれ、ちょうど頭を支点に木の又の間に逆立ちした格好になり、足をじたばたさせていたらしい。倫子と孫達に何とか救出され、真つ赤な顔で畑に座り込んでぐったりしている間に母が救急車を呼んだ。そのまま新潟市内の救急病院に運ばれたが、幸いなことに軽い打撲で済んだ。今となつては滑稽にも思える話だが、父はそのとき、これで自分は死んだと本当に思っただけだ。母は、

「柿の木から落ちて、かえってボケが直った。」
などと今でも軽口を叩いている。

梨本家の人々はすでに全員座敷に集っていた。みな背広姿であった。倫子は美しい着物姿で出迎えた。私はいまさらながら場違いな自分の格好に気が引けた。広い玄関口から座敷に通された父母と私は、まず梨本家一同に向いて正座し、深々と頭を下げた、

「本日はお招きいただきましてありがとうございます。倫子がいろいろとご厄介をおかけしております……。」
と、丁重な挨拶をした。それがこの家の流儀なのだと悟り、私もあわてて同じように頭を下げた。梨本家の親族一同、同様にかしこまって正座していた。甥っ子たちまで正座して頭を下げていた。子供の頃からこうやって躡けられるのだな、かわいそうなものだと思つた。親戚の人たちは結婚式で一度会っているはずだが、私には

ほとんど初対面のようなものだった。もうすぐ七十になる正明の父がしわがれ声で父の挨拶に返す。

「こちらこそ、本日はご多忙のところこんなに遠くまでお足をお運びいただきまして、ありがとうございます。先日は正道に過分な贈り物を頂戴しまして、ありがとうございます。」

過分な贈り物というのは、床の間に飾つてある五月人形と徳川家康の兜のことを言っているのだろう。端午の節句に父が正道に贈つたものらしい。その床の間の壁には、なにやら由緒ありげな中国山水画の掛け軸が飾られている。隣の違い棚には大小さまざまな骨董の類が並んでいた。いずれも高そうな品物だ。鴨居には額に入った書が数枚かけられており、そのうちのひとつには、雄大かつ厳格な字で『希典』と銘打たれている。乃木將軍にちがいない。とりわけ目を惹くのは、菊の御紋とともに毛筆で『朝臣 梨本正太郎 従七位 下ヲ下賜ス』とか何とか書かれた色紙だ。薄緑色の勲章のようなものと一緒に額に収められている。父はこれを見て、

「梨本のお父さんは天皇陛下の家来か何からろうな。陵輔、おめえ、あれがどういう意味かわかるか？」

と私に聞いてくる。私は適当に答えたが、果たして現代にもこんな律令制の官位制度みたいなものが存在しているのかどうか、見当もつかなかった。

私は梨本家と長沢家とを比較せずにはいられなかった。長沢家はもともと農家の一族だ。確かに戦前は地主であったとはいえ、挨拶ひとつとってもこのような格調高い挨拶が父の実家でやりとりされる光景を、これまでに見たことがない。これが家の格式の違いともいうものなのか。

宴会が始まった。山海の珍味が次から次へと美しい漆塗りの食器に盛られ、金箔のお膳で運ばれてきた。まめまめしく立ち働く女性達の中に晴着を着た背の高い倫子の姿もあった。正明の父が乾杯の音頭をとった。酒が進むにつれてみな多弁になり、当初梨本家と長沢家とを隔っていた格式の壁が徐々に取り払われていくように見え

た。一人だけ場違いな格好をした私は引け目を感じて運ばれた料理を黙々と食べているだけだった。正明の父と私の父は政治談議に花を咲かせていた。隅のほうでは正明が隣の初老の人と楽しげに話している。子供たちは隣の部屋でテレビを見ながら食事をしている。

黒ぶちの眼鏡をかけた男が勺を手に私のそばに来た。赤い顔をしてヘラヘラ笑いながら何度も頭を下げ、ビールを勧める。

「長岡のお兄さん、まあひとつ。私、正明の姉の夫で、田中孝雄と言います。正明と一緒に中古車のディーラー会社をやっています。今日はわざわざ群馬から来ていただいたとか。どうもありがとうございます。」

さほど酒を飲めない私は、帰りの車を運転しなければならないことを口実に断ると、手早くビール瓶を小脇に置いて、

「あ、それじゃあお茶にしますか。おうい正江さん、ここ、お兄さんのところにウーロン茶持ってきて。」

とパンパンと手を叩いて正明の姉を呼ぶ。正明の姉はウーロン茶を持って来、そのまま居座った。私は正明の実姉と義理の兄とを相手することになった。姉は私が倫子に似て美男であると言う。半分は社交辞令だとしてもややうれしくなる。二人ともかなり私に気を使っているのが察せられる。話題は倫子に及ぶ。

「いやあ、倫子さんには本当に感謝してるんですよ。倫子さんはパソコンができるので、私の会社の事務方をちよっと手伝ってもらってるんです。それまではこいつが帳簿をつけていたんですが、なんとかいう会計ソフトを倫子さんに入れてもらったおかげで、かなり楽になりました。何でもお兄さんもコンピューターの会社にお勤めだそうで。」

「はあ、高崎でSEやってます。」

「やっぱりお忙しいんでしょうね、いやあ大変だ。ひとつこれからも末永く願いますよ。」

以前、倫子は正明が中古車会社を経営していると話していたが、その会社がこの義兄の言う会社なのだろうか。正明は自分で会社経

営してるのでなく、義兄と共同経営してるということなのか。それを問うてみたかったが、あえて避けた。

それにしてもこの孝雄という義兄、なんと腰の低い男だろう。いつもニコニコ笑顔を絶やさず、もみ手をしながら話しているようにさえ見える。まさしくコメツキバッタというやつだと私は思った。もしかしたらこの人も梨本家から嫁をもらう際に格式の違いを思い知らされたのかもしれない。そして家庭内では妻に父の偉大さと比較されて、卑屈になっているのかもしれない。梨本家における彼はいつもこんな態度なのかもしれない。

いやいや、決してそうではあるまい。本当の商売人というのは、押しなべてこのような人たちなのかもしれない。正明の父にもどことなく同じような雰囲気を感じ取ることができる。ここがサラリーマンと個人経営者の違うところだ。

三人の会話は長く続かなかつた。夫婦が去って再び退屈になった私は、正道がそばを通ったのをこれ幸いとばかり声をかけた。

「おい正道、おじさんと野球やるか？」

梨本家の庭は子供がキャッチボールをやるに十分な広さがある。正道はピンク色に輝くゴムボールと黄緑色のビニールでできた小さなバットを持ち、顔を輝かせて俊について来た。いそいそと庭に出て行く正道を見て、「あたしもやる」と、あずさまで一緒について来た。まだ小さいあずさを球拾い係の守備に回し、私が下手投げで放ったゴムボールを正道が打つのだが、空振りばかりで、ろくにバットに当たらない。後ろへそらしたボールを正道は何度も追いかける。白ワイシャツに赤い蝶ネクタイを結び、ガーターベルトで半ズボンを釣った姿のまま、大声上げて庭を走回る。

「何だ、正道、バットにかすりもしないじゃないか。へったくそだな。」

「おじさんがもつといい球投げてくれればちゃんと打てるんだよ、おじさんがへたくそなんだよ。」

鼻っ柱の強いやつだ。かなり甘やかされて育てられたと見える。

ふと見ると、小学生用の学生服に身をつつんだ正道の姉の子が玄関に出てきていて、キャツキャとはしゃぐ正道とあずさを、さもつらやましげに眺めている。私は気を聞かせて

「君もやるかい？」

と声をかけたが、黙って首を横に振る。ずいぶん暗い子だと私は思った。この子はその後、登校拒否児童になった。現在は二十歳をとうにこえているはずだが、いまだに定職につかず、いわゆる“ヒキコモリ”の生活を送っているとのことだ。

庭が騒がしくなってきたせいか、大人たちが縁側に出てきた。その中にいた母が、

「まあちゃん、おばあさんと野球やるうて。」

と言つて、そそくさと玄関から外へ出てきた。母は宴会の間中、ずっと猫をかぶっていたようだ。私同様、できるだけその場にいたくなかったのにちがいない。しばらく正道とキャッチボールをしたが、そのあまりのへたくそさに

「やっぱりおじさんとやる。」

と愛想をつかされてしまった。仕方なしに母はあずさを連れて土手に上がり、道端に咲くシロツメクサやすみれなどを摘んでいた。すでに春の陽は傾きかけ、川面は黄金色に輝いていた。

洋服に着替えた倫子と正明が外に出てきた。久しぶりの運動でかいた汗をふきながら、私は野球ができるほど広い庭があることがうらやましいと褒めた。すると正明は言った。

「いや、これだけ広いと手間ばっかりかかって、どうしようもないですよ。オヤジの趣味だから何も言えないですけどね。ずいぶんと金もかかっていますよ。」

「庭もすごいですけど、座敷の骨董品とかもすごいですね。」
と私が言つと、

「あれよりすごい宝物がこの蔵んにたくさんありますよ。」
と正明は言つ。

正明の言によると、自分は梨本家の十一代目に当たるが、この土蔵は江戸時代の初代からあるもので、中にどんな宝物が納められているのか、父でさえはつきり把握していないとのことである。その中でも伝説とされる珍品がある。それは、ダイヤモンドやらルビーやらで目いっぱい装飾を施された純金製の王冠で、何代か前の先祖が借金のカタに巻上げたものらしい。正明の祖父が盗難に合わないよう、どこかに隠してしまったのだが、現物を見たことがあるのは、今や正明の母以外いない。それも何十年前の話で、まさに伝説の一品というわけである。

「きつと、じいさんこの辺のどこかに埋めたに違いないんですわ。」以前に一度、宝探しと称して家中隈なく探したが、結局王冠は見つからなかった。そのときこの蔵の中に入ったことがあるが、蔵の中の土は江戸の昔から何百年と変わらずずっとそこに在り、庭の他の土と明らかに色合いが違っていてどす黒く湿って、なにやら薄気味悪いという。まるで生き残って後世に何事か教訓めいたものを伝えようとしているような土なのだそうだ。

他にも梨本家にはこんな伝説がある。

家の主が死ぬと、この庭の樹木のどれか一本必ず枯れるのだそうだ。正明がまだ小さい頃竹林の前に大きな楓の木があったが、曾祖父の死と同時に枯れ果ててしまった。

「たぶんうちのオヤジが死ぬと、必ずどれか一本、枯れますわ。植物も生きていて、自分と同じ時代を生きた人と一緒に一生を終えるんですね。」

鬱蒼と生い茂る梨本家の庭の樹木の中、私は不思議な感覚に捉えられた。時空を超えたいけとしいけるものの性を目の当たりにしたというか、何かこう梨本家にいまも息吹く土地の霊とでもいったものに私の存在が認知されたような感覚だった。私は現在の梨本家だけでなく、その土地の霊にさえ卑屈にされたのかもしれない。

帰り際、筍をお土産に持って行けというので、正明と竹林に行っ

た。筍はまだ小さく、赤茶けた土の上からすまなそうに可愛らしい頭をのぞかせていた。

「放っておくとここまで全部竹になっちまう。」

と言って、正明は地面に勢いよく鍬を突き立た。そして、まるで人の首でも狩るかのようにぎっくぎっくと根元の奥のほうから筍を掘り起こした。切り離された筍はみずみずしい薄黄色の素肌を空気にさらし、次から次へと地面に放り投げられた。両手いっぱいにかかえた筍からは、淡い精液の匂いがした。

帰りの車の中、私は梨本家の伝説のことばかり考えていた。わが一族には果たして伝説らしきものがあるのだろうか。そもそも伝説とは次から次へ世代を超えて伝えられる言葉たちだ。梨本家の伝説に対抗するには、これから自分が新たな伝説を作り上げるしかない、と私は思った。まさか自分がこの十数年後、まったく同じ伝説に不意打ちされようとは、そのとき想像だにしなかった私であった。

二十歳代の中半を境に男性「後半、女性「前半を」結婚適齢期」とする時代はすでに終わった。いまだにこんな考え方を持っているのは親達だけだ。当事者たる若い人達は、これはあくまで理想ではないと思っている。「そのくらいまでに結婚できればいいナア」などと口では言うものの、一体どれだけの若者がそのとおりになっているだろう。

現代ほど”結婚適齢期”がいつかわからなくなっている時代はない。いつだれと結婚しようがしょせんは個人のことであって、結婚するのは本人なんだし、最終的に幸せな家庭を築くことができればいいのだから、周りはやたらと騒ぎ立ててくれるな、というわけだ。最近の身近な夫婦の実態を見ると、ひとつの傾向がうかがえる。あくまで印象にすぎないが、あまりに年若くして結婚したカップルは比較的離婚率が高いのだ。これは”結婚適齢期”の意識が薄れてしまったことと何か関係があるのかもしれない。

私は三十二歳で結婚したのだが、燃え上がるような大恋愛の末ようやく結ばれたというわけではないし、長い交際期間を経てお互い十分理解しあつた上で結ばれたというわけでもない。この女性以外生涯の伴侶は考えられないというわけでもなく、たまたまその時つき合っていた女性が妻になったというだけだ。そろそろ結婚してもいいナと半ば妥協、半ば諦めにも似た気持ちで結婚したのであつた。しかしながら、いま現在この妻なくしての家庭生活は考えられないのだから不思議なものだ。これからわかるのは、見合にせよ恋愛にせよ、恋愛感情をまったく抜きにした結婚はあり得ないだろうが、結婚を支配するものが恋愛感情だけではないということだ。結婚には《契約》の要素が切り離せないのではないだろうか。燃え上がるような恋心だけで結ばれた情熱的な恋愛のたどりつく先が必ずしも結婚でないことはあまりによく知られているではないか。

以前、ある女性とこんな会話をしたことがある。その女性は都内の理工系の大学を卒業して会社に入り、すぐに同期の男性と結婚した。なかなかの美人で、私が彼女に下心を抱きつつ、

「結婚なんて妥協の産物だと思うよ。」

と妻が理想の女性ではないことを漏らすと、

「いいえ違いますよ、結婚って勢いですよ。」
と返してきた。

しばらくしてその女性は離婚した。いま思えば彼女の結婚生活はそのときすでに破綻していたのかもしれない。彼女を離婚へと追いやった原因についていろいろな人がいろいろなことを憶測で言うが、はっきりしたことは誰にもわからない。仕事が忙しく、家事に手が回らなかったというのがいちばん考えられそうな理由だが、そんな夫婦は他にもざらにいて、みんなそれなりに円満な家庭を築いている。

結婚するときなぜ結婚したのかを問う人はいないが、離婚するときには、人はその理由をはっきりさせたがる。そして相手の浮気や金銭問題といった夫婦関係の外部に理由を求めてしまう。しかし一番はつきりした理由は、夫婦がお互いに一緒に生活したくないから、という一言に尽きる。結婚の理由をあえて求めるとすれば、いつもその人と一緒にいたいから、一生をともしごしたいから、ということなるうが、まさにその逆が離婚の真の理由なのだ。

さて、倫子が親戚一同の猛反対を押し切って駆け落ち同然で結婚したのは十九歳のときだ。早すぎる結婚だった。それでも二十年結婚生活を送り、その間に二人の子供を生んだ。

結婚当初には、ドラマなどでよくある嫁と姑の確執関係もあったと聞く。

親戚筋の会合か何かがあって、倫子が晚餐の食器を並べていると、姑がそばを通りかかり、

「倫子さん、お客様にこんなお碗でお出しするのですか？」

と縁の欠けたお椀を手にとって言う。すると母の手伝いをしていた娘のあずさが姑の手からお椀をひったくって、

「あたしがこれで食べたいとお母さんに言ったの!」
と大声で言った。

あずさは、毎日のようにおばあさまにお小言を言われ、子供たちに隠れて陰で泣いている母を見ていたのだ。その時あずさはまだ小学校に上がる前だったが、幼いながら母の苦勞とその原因を本能に近い感覚で嗅ぎ取っていたに違いない。嫁姑の関係で同じように苦勞したらしい母の友人が母からこの話を聞いて、思わず涙を流したという。

格式の高い梨本家にあつて、倫子は生来の押しの強さとやりくりのうまさや武器に、徐々に頭角を現していったようだ。それを支えたのは二人の子供たち、とりわけあずさであつた。

男の子にしては優しすぎる正道が、周りを気にしてなかなか思つたことをはつきり言えないのに対し、あずさは怖いもの知らずとも言えそうな果敢さと、自分の信念を主張する強さを持っていた。あずさは倫子の行動的かつ男性的な性格の一部を確実に引き継いでいた。にも

かかわらず、いかに小さくとも女の子だと思わせるのは、優しさを大人たちの前で積極的に表す術を心得ていたことで、大人たちは倫子に似た愛くるしい笑顔を振りまきながら周りを氣遣うあずさに、思わず笑みを浮かべずにいられなかつた。頑固者の舅は未だに一家の長として君臨しており、我儘三昧でたびたび倫子を困らせたが、あずさに一言、

「そんなわがまま言うおじいちゃんなんて、大キライ!」
などと言われれば、頑なになつた表情を崩さざるを得ないのであつた。

しかしながら、格式の高い梨本家における日々の格闘はさすがに気が張るのだらう、倫子はたまたに家族で長岡に帰ると、張り詰めて

いた緊張の糸が一拳にほぐれ、暇さえあれば眠りこけていた。父も母もその大変さが十分にわかっていたのでそつとしておいた。

倫子ではできるだけ私の長期休暇に合わせて長岡の実家に遊びに来た。そこには母と二人きりのさびしい老後をすごす父の意向が働いていた。長い休みの時くらい家族が一同に会してほしかったのにちがいない。私にしてみれば倫子とはもかく、十歳も年上の義弟、正明と一緒に来るとなるとどうしても遠慮してしまい、せつかくの長期休暇がもつたいたないような気になる。

ある年の夏休み、いつものように私が帰省しているところに、夜になって倫子が子供たちをつれて来た。その日は一泊して、仕事の関係で来れない正明が翌日の昼過ぎには迎えに来るといふ。

久方ぶりの実家で思い切り開放された倫子は、父に勧められるがまま晩酌をはじめた。酔いが回ってきた倫子は梨本家の嫁いびりを愚痴りはじめた。

昔からの裕福な家庭で育ったせいなのか、義母にはほとんど生活感覚がない。これまでならそれでやってこれたかもしれないが、このご時世、義父に全盛時のような働きぶりを期待できない以上、ある程度生活を切り詰めるのは当然の成り行きだ。いまこそ“庶民の生活感覚”が必要で、自分はそのつもりで上手にやりくりしているのだが、それを姑は非難する。逆に少しでも贅沢なそぶりを見せると、今度は儉約ができていないなどと言って文句をつける。とにかく自分のやることなすことすべてが気に入らず、何か口を挟まずにいられないのだ。自分のことを非難するだけならまだ我慢できる。家の格式まで口にされることもあり、本当に腹が立つ。義父は義母の言うことがすべて正しいと思っっている。それゆえ義母が我を通そうとする場合は必ず義父に言いつける。正明にもっと自分の味方になってくれるよう、何度も言っているのだが、やはり育った環境にはなかなか太刀打ちできないようだ。今の自分の味方は二人の子供たちだけだ……。

父も母も倫子の言葉に同感する。そして相槌をうちながら、

「倫子おめえじゃねけりや、できん事らいや、それは。がんばれや。話を聞いてりやあ、おめえの言うことのほうが十分道理になつて。もう少しがんばってみれ。そうすりゃ、いつかおめえが梨本の家を引っ張って行かんきゃあならん時代がきつと来るすけえ。」

などと激励する。調子付いた倫子はさらに酒をあおる。私と違い父の血を濃く引いた倫子はけっこういけるクチだ。父もいつしよになつて、さもうれしそうに酒を飲む。私はテレビを見ながら寝転がって倫子の話を聞くだけだ。父も母も私より倫子と話しているほうが楽しげに見える。

そのうち倫子は「ああ、疲れた」と言つて畳の上にごろりと寝転がると、そのまま大の字になつて大いびきをかきはじめた。その脇で正道とあずさが、

「おかあさん、ねえ、おかあさん、起きなよ。」

と大きな体を揺らすのが、一向に起きる気配はない。仕方なく私と父とで持ち上げて奥の寝室まで運び出すことにした。何しろ大きな女だ。持ち上げるだけで一苦労だ。

「おめえ足のほう持てや。おれは手持つすけ。」

父が倫子の両手を持ち上げると、腋の下から真っ黒な剛毛が表れた。手入れくらいしろよなと思しながら、やっとの思いで丸太のような太い足を両脇に抱えると、水色のワンピースの裾がめくれ上がって、白いパンツが丸見えになった。股のところが浅黄色に汚れている。濃いスネ毛が掌の中でざらつく。私は思わず苦笑し、父に言った。

「こいつはもう女じゃあないな。」

倫子は翌日の昼ごろになつてようやく起床した。正明は昼前に来、皆にさんざん愛想を振りまいて帰っていった。

当時倫子は新潟市内で弁当屋をやっていた。正道とあずさだけで初めて長岡に泊まったとき、倫子が子供たちは二人とも弁当屋の方に連れ帰ってくれというので、車で妻と母を連れて行ったことがあった。

『万代橋亭』と名付けられたこの弁当屋は、郊外の比較的交通量の多い通りに面して、ひっそりと立っていた。ラジオCMを流したこともあるというが、そのわりには地味な作りで、甥っ子達に教わらなければすぐには見つけれなかっただろう。この店がかろうじて弁当屋だとわかるのは黄色地に赤文字で店の名を書いた小さな看板と埃にまみれたノボリがあることだけで、これがなければ一体何をやっている家なのか誰にもわからなかっただろう。

店の入り口は薄暗くて狭く、アルミサッシの扉を引くと、いきなりガラス張りの陳列棚がある。そのすぐ奥が厨房になっている。陳列棚にはほうれん草のおひたしやら煮豆やら鶏のから揚げやら焼豚やらフライやらが、アルミ製の四角い大皿に盛られ、お客さんからお声がかかるのをだらけた雰囲気です待っている。どうやら客が好きな惣菜を選び、店がオリジナル弁当として組み上げる方式の弁当屋らしい。日替り特製メニューもあるらしく、陳列棚の上のレジスターの隣に厚紙にマジックペンで

本日のお勧め 鯖の味噌煮弁当 ￥600円

・ 鯖の味噌煮

・ 厚焼玉子

・ きんぴらごぼう

・ ポテトサラダ

・ みかん

などと書かれたメニューが金メッキのスタンドに挟まれて立っていた。

店はアルバイトの主婦が手伝っていて、裏口から出入りしていた。この主婦がたびたび店から晩のおかずをちよるまかしているのを倫子は知っていたが、安い賃金で働いてもらっているだけに文句を言えなかった。裏口は二階に上がれるようになっていた。二階は二間

の住居部屋になっていて、子供たちがそこで母を待つ間のオモチャやら絵本やらが雑然と置いてあった。店の奥はアパートになっていた。

「たいしたもんだな、これだけの店をやりくりするなんて。おまえの料理の腕が上がった理由がこれでわかったわ。」

久しぶりに母に会ったうれしさに狭い厨房の中をはしゃぎまわる甥っ子達を尻目に私がそう言うと、倫子はさも得意げな顔をする。

「店は繁盛してるのか？もうかってんのか？」

「それがさ、トントンになればいい方なんだ。でもまあこれやっていけば、とりあえず自分達の食べる分だけは何とかなるすけんね、それが精一杯らて。」

自分達の食べる分だけは何とかなる？ それはどういうことだ？

この店がなければ食うものもないというのか。聞けば、正明は義兄の経営していた中古車販売会社が倒産して以来、家に生活費をまったく入れていないのだという。

正明の義兄には梨本家での正道の小学校入学祝の宴会で一度会っている。物腰のやたら低い、相手に卑屈な感じさえ与えかねない商人然とした中年男だったが、その義兄の会社が数年前に不渡りを出して倒産した。そのとき倫子は会社の経理を手伝っていた。義兄、義姉そして夫の正明はその会社の役員に名を連ねていて、倫子は単なるアルバイト、しかも嫁ゆえの薄給で奴隷にも似た境遇でしかなかったが、彼らは毎日のように殺気立って押し寄せる債権者の対応をすべてこのアルバイト兼嫁に押し付けたのであった。義兄は家族そろって夜逃げし、正明は自分の経営する会社のほうが忙しくなったという理由で事務所に姿さえ表そうとしなかった。会社の負債は億を超えていた。

倫子は事務所に鍵をかけ、表で乱暴にドアを叩きながら口汚く怒鳴りまくる債権者達を相手に、一日中無言を押し通したという。私

にはその倫子の姿を容易に想像することができた。己の信じる道を貫き通す強烈な意思を持つ倫子でなければ到底できることではなかった。

精神的にへとへとになって帰宅する倫子であったが、家に帰ると今度は幼い子供達が容赦なく母親に甘えて来る。いらついで、つい邪険に扱ってしまう。そんな毎日が続いた。ある夜倫子が寝ていると、誰かが布団にもぐりこんでくる。夫が遅く帰って来たのかと思つたが、どうもそうではない。小さな手が倫子の乳房をまさぐる。やわらかく滑らかで温かい懐かしい感覚が乳房に蘇る。それは、とうの昔に乳離れを終えた小学生の正道が半分眠りつつ泣きながら母の乳房を吸っているのであった。あまりに強い衝撃を受けた倫子はこの一件を母に相談した。母は倫子に言った。

「そりゃあお前、小学校上がったと言つてもまだ子供らねかて。おあさんに甘えたくて仕方ねえ年頃んがて。お前が毎日つらい思いをして大変なのはわかるも、子供達の気持ちもよく考えて見れて

倫子夫婦の生活に微妙な変化が起きたのはその頃かららしい。まず正明が生活費を入れなくなった。以前はたまにまとまつたお金を持つてくることもあつたが、それも徐々に少なくなり、弁当屋の仕事が主になる頃にはまつたく途絶えた。

義兄の倒産は長沢家にも影響を及ぼしていた。梨本家から債務の弁済のために新潟の土地を買つてくれと申し入れがあつたのである。本来ならば坪十万は下らない土地だが、親戚なので坪五万でいい。四百坪で二千万円。梨本家を助けると思つてぜひ買つてくれないか、とのことだった。

一度その土地を見てほしいというので、正明に連れ添われて、私は父と母とで下見に行った。乾いた春風の吹きつける日で、車を降りると地面から舞い上がる埃が目に入って痛んだ。土地は白鳥が飛来するので有名な瓢湖のそばにあつた。周りにはのどかな田園風景が広がっていた。倒産した中古車会社が使っていたらしく、もはや

鉄クズとしてしかこの世に存在し得ないような赤錆まみれのひしやげた車の残骸が山に積み上げられ、所狭しとその醜さを人目に晒していた。ようやくと人が歩けるのは両側の鉄クズの山の谷間になった小径しかない。

「あんな土地買ってどうするんだよ。何かに使おうたって、あの車の鉄クズを処分しなきゃ使い道がないじゃないか。それだけで結構金がかかるぜ。」

私が言うと、父は梨本家からの提案を伝えてくれた。土地の名義だけが長沢家になり、土地自体は正明の父の運送会社がそのまま使う。つまり長沢家が大家になって、梨本の会社が店子というわけだ。賃借料は月二十万円。これが安いかどうかは分からないが、父はそれで手を打つことに決めた。

「まったく悪いところに嫁にやりたいや。でもこれで少しでも倫子が楽になればそれでいいがいや。」

父は私にそうこぼしながら退職金を前借してその土地を購入した。父の退職後の夢は好きな釣りをしながら退職金で寺泊の海のそばに小さな魚屋を開業してのんびり余生を過ごすことだった。父の夢はまたもや倫子によって打ち砕かれたのだった。

正明はあの厳格な父親と二人で長沢家を訪れ、安月給のサラリーマンである父の前に土下座し、深々とこうべをたれた。

この土地は決して梨本家を助けるために買うのではない、あくまで倫子を助けるために泣く泣くの思いで買うのだ。このことを十分心得てほしい。この金で倫子を決して不幸にしないように、そして子供たちを泣かすことのないように改めてお願いする、と父は子供を叱るように正明に言った。正明が父の前で土下座したのは結婚のお願いに続いて二度目だ。正明は死んだ魚のような目をして唇をぎゅっとかみ締め、さらに続く父の容赦のない言葉に、何度もうなづいていた。

月々梨本の会社から支払われる賃借料はほとんど父のパチンコ代に消えていた。母は言った。

「自分の退職金でもらってるお金らすけ、オヤジが何にどう使おうと、わたしや何にも言わんでおくが。」

正明が父の言葉を裏切って生活費さえ家に入れないことを知った時の父の激昂ぶりはすさまじかった。もつと早く知っていれば賃借料の二十万円で倫子を扶助するなり子供たちの学費を払ってやるなりして援助できたはずなのだ。

父は早急に正明を長岡に呼び出し、大声で怒鳴りつけた。正明はひたすら平身低頭し、謝罪の言葉を述べるだけだった。

「おめさん、お父さんの会社からもらってる給料もあるが？それはどうしてるが？家にも入れないで、何に使ってるが？」
父が聞くと正明は答えた。

「給料って、役員報酬のことですか。いや、実はまだ借金を全部返し終わってたわけじゃねえんですわ。それでオヤジの方の会社もかなりきつくて、私はほとんどタダ働きなんです。」

それを聞いて私は思った。それじゃあ正明は弁当屋の倫子に食わせてもらっているだけの、ただのヒモではないか。結婚式の新郎紹介で司会者の言った『青年実業家』が聞いてあきれられる。金がなければ座敷の骨董類なり蔵の宝物なり売り払えばいいではないか。結構な金になるはずだ。まさかあれはすべてニセモノで、一文にもならないというわけではないだろうな……。父もあきれてもものも言えなかったという。

梨本家に買わされた土地は数年後、購入した価格のまま梨本家に買い戻された。一割でも二割でも高くして売りつけるべきだと私と母は主張したが、義理と人情を重んじる父は梨本家の言うなりの価格で売ってしまった。

今から考えれば、おそらくあの時点ですでに梨本家の新潟の家屋敷は抵当に入れられていたのだらう。そして残りの弁済額を何とか融通しなければならぬが、これ以上どこからも融資が見込めなく

なつて、やむなく親戚を頼つたのだらう。その親戚は実直さ以外何のとりえもないサラリーマンが適任だったのだ。まじめに勤め上げれば数年後には退職金が入るし、その土地を利用して何か新たな事業を立ち上げるといった冒険心をサラリーマンが起こすことはまずない。結局のところ、一時的にまとまった金を作るためにうまい具合に親戚関係を利用されたわけだ。あまりに当初計画どおりで、まさに商人たる梨本家の面目躍如ではないか。そのことを私が皮肉たつぷりに父に言うとなつて父は顔を赤くして

「わかつてるいや！そんげんこと！倫子を放っておけんかったがいや！」

と怒鳴つた。

離婚篇

倫子が梨本の家を飛び出してあずさを連れて長岡の実家に転がり込んだのは、結婚して二十年目の夏だった。すでに正道は東京の私大に進学しており、あずさは高校受験の真つ最中であつた。

あずさが帰宅して部屋で受験勉強をしていると、家に電話がかかつてきた。階下に誰かいるだろうと思つて放つておいたが、誰も受話器をとろうとしない。すでに八十を越えていた祖父は、耳が遠くなつたとはいえ電話くらいわかるはずだが。誰も出ないところを見ると、祖母と二人で散歩にでも出かけたのだろう。この電話は普段家族の間の連絡のみに使つていたので、会社の取引先などからかかつてくることはまずない。母か父からだと思つて受話器を上げると見知らぬ太い男の声である。あずさの声を聞いて、男は父がいないか問う。不在を告げると、猫なで声だった男の声色が豹変する。

「ふざけんな、このクソガキ！ 本当はそこにいるんだろ、出せや！」

びつくりしたあずさが本当に不在だと言つと、

「仕方ねえな、おめえじゃ。クソオヤジが帰つてきたら、早く五十万店に入れねえとおめえん家まで押しかけると言つておけ！金が作れねえんだつたら目玉でも肝臓でも売つて来いと言つとけ！」
そしてまた猫なで声に戻つて、

「そのうちお嬢ちゃんにもいいところで働いてもらつことになるかもしれねえからねえ、いまのうちからきれいにして、覚悟しておいて頂戴ね。」

あずさはあまりの恐怖にしばらくの間足が震えて止まらなかつたという。弁当屋から帰つた倫子はあずさからこの報告を受け、早急に正明に問い糺した。必死に隠そうとする正明を追い詰め、ついにサラ金から金を借りたことを白状させた。借りた金を正明は競輪につき込んでいたのだった。今日あずさが受けた電話は、先週金曜日

が返済日だったのだが、忙しくてつい忘れてしまい、その督促だったのだ……。

それにしても額が大きすぎないか、サラ金とは、初めての督促で電話の相手が子供でもそこまで人を脅すものなのか。何よりも五十万円などという大金を今日明日でどうやって返済するのか。アテがあるのか。どこかおかしいと思った倫子はさらに正明を問い詰める。育ちのいい正明は、倫子に理詰めで問われるとなかなか答えられない。ウソがウソを呼んでしまい、そこからさらに追求される。

結局わかったのは、これまで正明は父の会社からきちんと役員報酬を受け取っていたこと、それを家に入れることなくすべて競輪につき込んでしまったこと、負けが込んでつい父の会社の金に手をつけてしまい、その穴埋めにずいぶん前からサラ金を利用していたこと、サラ金への返済のために別のサラ金からお金を借りようとしたが、もう通常のサラ金からはお金を借りられなくなってしまったこと、そして当座の返済をしのぐべく、やむなく闇金融から五十万円を借りたことなど、あらいざらい白状させた。サラ金への負債総額は一千万円近くに膨れ上がっていた。

腹を立てた倫子は、こうしてあずさを連れて梨本家を出てしまったのだった。

私は自分の子供たちの七五三のお祝いを東京でなく、わざわざ長岡に帰って来て行なった。親に喜んでほしいからというのが理由だが、それよりも自分の生まれ育った土地に対して子供達に愛着を持つてもらいたかったのだ。

その年は次女の七歳のお祝いに当たっていて、家族総出で悠久山の蒼柴神社に出かけた。夏休みに子供たちを連れて遊びに来たときは油蟬の泣き響く山中の参道を歩いて境内に上がるまでの間に大汗をかいたのだが、すでにあたりは一帶に秋の気配が色濃く立ち込め、冬物の背広を着てきてよかったと思った。朱色の鳥居をくぐって石畳の参道を登るとき、突然目の前を茶色の蛇がSの字を描きながら

しゆるしゆると横切った。皆一瞬息を飲んだ。東京育ちの子供たちは生まれて初めて目にする野生の蛇に大騒ぎし、一番下の男の子などは大声で泣き出してしまった。蛇も冬眠の身支度におおわらわなのかもしれない、と私は思った。

私が家族で帰郷した時には私の家族用に二階の部屋があてがわれる。高校まで私が使っていた勉強部屋だ。その隣にも部屋があるのだが、そこは私が出た以来、ずっと物置部屋として使われていて、私が昔使った勉強机やら壊れたオーディオやら古びたアルバムやらフォークギターやらのガラクタ類が埃をかぶって置かれていた。

その部屋がこのたび帰ったときには綺麗に片付けられていて、人の住める部屋になっていたのに、私は驚いた。しかもただ整理してあるだけでなく、裾にレースのついたピンク色の布団を敷いたベッドが二つ、ディズニーキャラクターの可愛い目覚まし時計、白い陶器に赤い擬似宝石を蓋にあしらった化粧箱、花柄模様のビニール製の簡易衣装ダンスなど、いかにも女の子らしい雰囲気をかもし出していたのであった。梨本の家を出てから倫子とあずさがこの部屋に住んでいたのだな、とすぐにわかった。あずさはまだ中学生だ。長岡から新潟まで中学生が毎日通うのは容易なことではない。あずさのけなげさが胸にしみた。しかし、肉親二人の同居のために汚い部屋を模様替えしたり、二人を連れて買い物に出かけ、新しい調度品類を選ぶ母の楽しげな姿が想像でき、親にとってはありがたいことのようにも思えた。父も母も口では倫子の里帰りを嘆くもの、どことなくうれしそうだった。家全体が活気づき、心なしか明るくなったようにさえ思えた。

当然と言えば当然なのだが、倫子が長岡に帰っていることはすぐに梨本家に知れた。失踪して一ヶ月が過ぎた頃、正明が迎えにやってくる。正明は再び父の前で土下座した。土地を買わされたときよりさらにひどい叱責の言葉が矢のように父の口から正明に浴びせられた。正明はひたすら詫びるだけで、一言も返す言葉がなかった。

父は次のことを正明に約束させたうえで倫子を引き取らせた。

― これまでの借金はすべて梨本の父に頼んで弁済してもらおう
こと

- ― 今後は決して競輪に手を出さないこと
- ― 父の会社の役員報酬は必ず生活費として家に入れること
- ― 金銭に係わることは倫子に隠し立てしないこと

これらの約束のうちどれかひとつでも破ったときは即離婚させる、と父はきつい口調で正明に申し渡した。

これを聞いて、私は父と母に言った。

「おれは学生時代に新聞配達してたからわかるんだけど、いったんバクチにのめりこんでしまった人間はそこから絶対に這い出せないよ。新聞配達の專業さんって、そういう人達がほとんどなんだ。まっとうな職に就こうと思えば就けるのに、バクチやりたいばかりに新聞配達

やってるんだよ。新聞配達って昼間はヒマだから、競馬でも競輪でも好きなときに行ける。そこで借金作って、集金した金を使い込んでまた店に何年か縛られる、そんな生活を送ってたよ、連中は正明は直らないよ、たぶん。」

すると、結婚前は銀行で働いていた私の妻が、さしでがましいようにですけど、と口を挟む。

「いま正明さんの競輪の負債が一千万円近くあるんでしょう？ 梨本のお父様がそれを一括返済できればいいんでしょうが、できないと自転車操業になってしまいますよ。お義姉さんの会社の倒産で家屋敷全部担保に取られていたら、これ以上どこからも借りれませんか。ね。何番抵当までつけられているのか知らないですけど、少なくとも銀行はもう貸してくれないですよ。」

正明さんは友達の弁護士を通じてなんとか清算するって言っけど、いったん弁護士介入された物件なんて、ややこしくなるばかりですから。そうすると残るアテはヤミ金しかないですね。」

冷静な妻の口調に、父も母も俯いてしまった。私はたたみかけるように言った。

「この際こつちに火の粉が飛んでくる前に離婚させるのが一番いいんじゃないの？このまま雪ダルマ式に借金が膨らむと、いずれの間みたいに親戚を頼ってくるよ。連中に取っっちゃあ、そのための親戚なんだもの。」

父は黙ったままだったが、母は大いに賛成であった。しかし義理堅い父は正明との約束があるのでもう少し様子を見たいと言った。

《契約》とは、もしかしたら究極的な人間関係の在り方なのかもしれない。商取引はもちろん、恋愛だってセックスだって、そして結婚でさえ何らかの《契約》関係抜きでは存在しないのではないだろうか。そもそも言葉を使って人と話すことがすでに《契約》的な行為ではないだろうか。人間は本来個々バラバラな存在であって、人の痛みを自分が感じることができないし、人が考えていることをすべて理解することなど到底不可能なはずだ。そこで何とかお互いに理解し合おうとして手始めに作ったのが言葉なのかもしれない。聖書が「はじめに言葉ありき」と言っているのは極めて正しいと思う。(もつとも聖書では神が作ったことになっているが。)ひとたび言葉を使い始めると次に人間は自分に都合のいいように己れの考えを主張しはじめる。漱石先生ではないが、本来バラバラな人間同士が己れの利害を主張しはじめるとそれこそキリがない。この世は闇だ。とてもやっていけないものではない。どこかに妥協点を見出さねばならない。利害の異なる人間同士がお互い妥協しあった内容、それこそ《契約》と呼ぶのではないだろうか。その意味で、話される言葉というのはすでに多分に《契約》的な存在だ。

正明と父との約束は、残念ながら正明に一方的に破られてしまった。倫子が梨本家に戻って半年、正明は競輪から一切足を洗ったかに見えた。しかし孫を連れて弥彦に遊びに行った弁当屋のアルバイト主婦が新聞片手に競輪場から険しい顔で出てくる正明を見かけ、こっそり倫子に報告した。そこですべて発覚してしまった。借金はすでに一千万を軽く超えていた。倫子はもう限界だと思った。翌年の春、父との約束どおり倫子夫婦は正式に離婚した。倫子の子供達は、泣きはしたものの離婚に反対しなかった。

倫子は梨本家に内緒で吉田町にアパートを借り、新潟市内の公立高校に進学したあずさとともにそこに住んだ。倫子は父のコネで長岡の福祉事務所で事務の仕事に就いた。給料は安いが、このご時世この年で職につけるだけでもありがたいと言う。父は吉田町の倫子のアパートの家賃を負担してやっている。

「いくつになっても、あいつばつかしや金のかかる子らいや。毎月十万近くおれが家賃払ってやってるがあれ。おれが死んでもあいつにやビター文遺産はやらねえや。」

父はそこまで私にこぼすが、言葉とは裏腹に、実はうれしいのかもしれない。

正道は私がそうしたように東京で住み込みの新聞配達のアルバイトをしながら大学に通っている。すぐ就職活動をするようになるが、父は正明に給料をタカられるかもしれないので、新潟では絶対に就職しないよう、正道に諭している。正道もそれを希望している。

倫子が離婚して半年ばかり経ったある晩のこと、母から私に電話があった。

「私ちゃん、倫子が結婚したてえ。昨日籍入れたがって。びっくりしたて、本当に急なこと。相手は高校の陸上部の先輩らって。あんたより二つばっか年上で、今までずっとOB会の幹事やってたがってさ。向こうも離婚してて、社会人の男の子が一人と大学生の女の子が一人いるがってさ。もう向こうの親も知ってて、来週会いに

行かんきやあならんがて。ほんとにあの子ばつかしゃ、思い切ったことをすぐ実行する子らて。二人とももう大人らし、二回目らすけんね。もう結婚式も何にもしねえでおくが。本人同士がいいと思えばもうあたしらは何にも口ださねえて。」

「そりやまた、ずいぶん早いな。正明は知ってるのかい？そのこと。」

「いや、何にも言わねえでおくがて。正明はあの子がまだここにいて思つてがあて。吉田町にいることは何も教えてねえが。見つかると思つてあて、内緒にしてがあて。」

「確かに見つかると思つたらわかるからんからな。」

「だいたいうちの親戚筋にもまだ何も報告してねえがて。お父さんは顔が立たねえすけん親戚には何も言わんでいいと言つてが。あたしもそれでいいと思つてるけど、あんたにだけには報告しておかんとね、兄貴らすけ。」

「で、今度長岡にはいつごろ来るが？正月らけ。そんな時に新しい旦那さん連れてお前に挨拶したいって言つてるすけ、まあよろしく頼むて。」

離婚後わずか半年にして再婚……。私は倫子の初めての結婚の時ほどの卑屈感は無かったものの、なにかまた大切なものを失つたような気がした。それは寂しさではなかったし、嫉妬でもなかった。あえて言えば苛立ちに似ていた。離婚のしたときにははつきりあった倫子を見守る気持ちが薄れていくことへの苛立ちだったのかもしれない。そして私は母に言った。

「でもさ、あいつみたいに条件が悪けりや再婚なんてなかなかできるもんじゃないよ、普通。あいつ、もしかして最初からその人と再婚したくて正明と離婚したんじゃないだろうな。まさかとは思うけど、あんまり早すぎるからさ。」

母は笑つて冗談だと受け止めたようだったが、私は本当にそう思つたのだった。倫子が今度はどういう恋愛を経て再婚したのか、詳しい経緯を私はまったく知らない。二人の間にいつ恋愛感情が芽生

え、どのような愛の言葉をささやき合い、いつどこで肉体関係を結んだのか、そして再婚に際してどんな約束が取り交わされたのか、お互いの親や子供をどのように説得したのか、離婚する前は不倫関係だったのではないかなど、いろいろなきことが想像できる。しかし本当のことはわからない。これらの事柄は、離婚のときは異なり、あくまで当事者二人の間だけでしか知り得ないことなのである。

私はいまだに新しい義弟に会っていない。当然その家族や親戚についてもまったく知らされていない。逆に先方は倫子の言葉を通してしか私のことを知らないはずだ。それでいいのだ、と私は思った。なぜなら私は今、倫子の新しい夫と何らかの《契約》をするつもりはさらさらないからだ。

再婚篇（上）

離婚篇からこの再婚篇を書き記すまで約一年半が過ぎた。その間に中越大地震が発生し、長岡の我が家は半壊一歩手前まで崩れた。

そのとき私は東京の自宅でサッカーの衛星放送を見ていた。鹿島アントラーズ対浦和レッズ戦。浦和が優勝するか否かの大一番だった。浦和の勝利で試合が終わらんとする頃突然グラッと来、それから大きな揺れがしばらく続いた。部屋の蛍光灯が左右に揺れて埃を舞い上げ、娘の机の上の立てかけたマンガ本がバタバタ倒れた。ようやく揺れが収まった頃、テレビは鹿島アントラーズの某選手がサポータと取っ組み合っている映像を映していた。一体何があったのか、地震よりもそっちのほうを知りたかった。（後でわかったことだが、どうやら負けた怒りを選手にぶつけるサポーターがペットボトルを選手に投げつけ、そのボトルを選手がサポーター席に投げ返したことから来るイザコザだったらしい。）サポーターにボコボコにされ、9・11テロで倒壊するビルさながらにゴールネットに崩れ落ちるH選手の絵をもちよつと見ていたかった。しかし画面は突然地震情報に切り替わった。

「震源地は新潟県中越地方、震度5強」

そう告げるアナウンサーの声に、えっ？と思つて見入ると、ちょうど長岡の中心部あたりに赤い×印がついた地図が映し出されている。東京で感じる地震の震源地はだいたいが茨城県沖かそこらだから今回もその辺だろうな、などとタカをくくっていたら、まさか新潟で発生した地震が東京にこれだけの揺れを引き起こすとは……。

新潟はさぞやすごいことになっているのではないかと懸念され、私は即座に実家に電話した。しかしすでに時遅し、全くつながらない。何度かけなおしてもプープーいう嫌味な金属音が受話器から流れるだけだ。すでに新潟への回線が集中しているのだ。懸念は心配

に変化する。心配はさらに大きくなると不安に変化する。

父も母も無事だろうか。火事など起きていないだろうか。あのボロ屋のことだ、屋根が崩れ落ちて下敷きになっているかもしれない。。。

情報はテレビからしか入らない。手当たり次第チャンネルを回しニュース速報を見る。当然詳しい映像は出ないが、現地のリポーターからわが家の近所で大きな火災が発生しているとの情報など入る。私の通った小学校のすぐ近くだ。不安はますます募るばかりである。

ようやく母と連絡が取れたのは、夜九時近くになってからだ。私たちが心配しているだろうと気を遣って、母のほうから電話をかけてくれたのだ。こちらからつながりにくくても、向こうからだとなんかつながるものらしい。とりあえず父母の無事を確認し、私はほっと胸をなでおろした。

母から家の被害状況を聞く。

まず台所。ここは冷蔵庫が前面に押し出され、食器棚から食器が全部飛び出して、床はガラスの破片だらけになった。

次に玄關脇の小部屋。ここには私の書棚が二つ置いてあるが、これが両方倒れてここもまたガラスの破片だらけ。

さらに奥の小部屋。ここは父が一日中何もせずテレビを見るためだけの部屋なのだが、この父専用の小型テレビが宙にふっ飛んだ。書棚も倒れて、これまたガラスの破片まみれ。

最も被害がひどかったのが二階の二部屋だ。私が性欲に芽生えた中学、高校時代、誰にもジャマされずに落ち着いたプライベート時間をすごした最も思い入れの強い部屋だ。この部屋の壁がすべて崩れ落ち、部屋一面、壁土まみれだとのこと。

「でもまあ人間が無事で良かったことや。」

普段は東京弁しか喋らない私が長岡弁でそう言うと、母は、

「ほんと、そうらいね〜。」
と返す。

最初に揺れが来た時母は夕食の支度で鍋をかけていた。あまりに揺れが大きいのでこれは危険だと本能的に判断し、慌てて外へ飛び出した。慌てはしてもガスの火をちゃんと消したのはなかなかエライ。ちやうど近所の人たちもみな外に出ていて、お互いにこわごわ顔をのぞきあいながら無事を確かめ合ったという。

「オヤジはどうした？」

と聞くと、しばらくしてから鳩が豆鉄砲を食らったような顔でひよこひよこ出てきたとのこと。まずは我が身とばかりに、母は父を家に置き去りにして、一人脱出したのだ。

そんなふうには電話で話している間、地震はなおも続いていたようだ。母のおびえた声が電話口に響く。

「あきやあ、また揺れてるてえ、わあ大きいて。おお、おつかねえ。じゃあね、電話切るすけね。」

「気をつけてな。また落ち着いたら電話してくれ。」

そう言って受話器を置いた私は、まさにリアルタイムで大地震の真つ只中で恐怖に叫ぶ人の生の肉声を耳にしたわけだ。

読者の皆さんすでにご存知の通り、中越地震はそれからもしばらく続いた。各地に避難所が設けられ、たくさんの方の義捐金が集められた。崖崩れに埋もれた車の中から奇跡的に救出された子供の映像を見たときは、本当に泣けた。お母さんもお姉ちゃんも助かっていてほしいと心の底から願ったのだが、不幸にして亡くなったとわかると、余計涙が出た。新潟にはアルビレックス新潟というサッカークラブがあるが、震災の翌週も試合があった。アウェイのジュビロ磐田戦、私はこれもBSでテレビ中継を見ていたのだが、試合開始前ホームの磐田のサポーターの人たちが、敵方にもかかわらず「新潟のみなさんがんばってください」と書かれた大きな横断幕を掲げてくれ、キックオフ直前には、スタジアム全体で震災で不幸に会われた方々への黙祷が捧げられた。これにも目頭を熱くせずにはいられなかった。

いつ大きな余震が来るかわからない不安から、母は夜を避難所で過ごすことにした。避難所に寝泊りし、朝方家に戻って壊れた家屋の後片付けなどをする。そして明るいうちに風呂に入り、夕方になるとまた避難所に戻る、そんな毎日を過ごしているという。

何でも避難所では夕食と朝食をもらえるところのこと、

「何だ、そりゃ避難してんじゃなくて、タダメシ食いに言ってるだけじゃねえのか？」

そう私がからかうと、

「そうらあねえがあて。やっぱりね、大勢の人といると、安心して眠られるがあて。家にいるとちよつと揺れただけで目が覚めて、とっても落ち着いてなんて眠らんねえて。」

などと言いつく。てつきり父も一緒なのだろうと思っていいたら、あにはからんや、一人で家に閉じこもっているという。

「何、そりゃあ大変だ。だめだよ、首に縄つけても避難所に連れてけよ。」

「だめんがて、もう私の言うことのなんかちつとも聞かんがあて。家つぶれてもいい、おれが苦労して建てた家らすけ、おれはこの家と心中するとか言つて、動こうともしねえて。」

年を取ってからの父のワガママぶりはすでに皆の知るところだったが、まさかそこまで強情を張るとは……。私はあきれてものが言えなかった。

母は続けて言う。

「たぶんね、なんだかんだとでつけえ事言つても根は小心者らすけ、本当はよその人と一緒に寝泊りするのが嫌んがろと思うよ、私は。」

なるほど、それは合点がいく。

七十をこえた今でも社交ダンスの会に入り、友人たちとたまに旅行などして老後を楽しむ母と違い、父は小部屋に引き籠ってテレビを見るだけの毎日を過ごしている。外に出るのはせいぜい朝の散歩

くらいのものだが、その散歩も近年めつきり回数が減った。昔から旅行嫌いで、私の子供の頃の思い出に家族旅行はほとんどない。

「私やもう放っておくことにしたて。自分の思うとおりによればいい。」

年をとるほどにワガママになり、母にしか己をさらけ出せない父。母に対してありったけのワガママを通し、少しでも気に入らぬことがあると大声で怒鳴りつける父。世間の気に入らぬすべてを母に愚痴る父。そんな父をいつしか母も見放しつつあったのだが、この大地震でその傾向にさらに拍車がかかったようだ。

そんな父に私自身が投影されるときがまれにある。私もまた妻に対してだけワガママを言いがちなのだ。そんなときわが妻は私にこう言う。

「私にあんたのお母さんじゃないんだからね！」

まったくそのとおりである。しかし、男が最後に求めるのはいつだって母親なんだよ、きつと。ある高名な文芸批評家が何かの中で「『女が書けていない』小説家の書く『女』とは、すべてその小説家の母親だ」と書いていたのを思い出す。

さて、その後私は家に再三再四電話を入れ、何か手伝えることはないか訊いたのだが、母から帰ってくる答はいつも同じだった。いま帰ってきてもらってもこの先大きな余震がないとも限らず子供には大いに危険だ、だいいち崩れ落ちた壁を片付けないと寝泊りする場所もない……。

「みんな来てても、後片付けが終わらんきゃあ泊まるとこねえよ。」そんな母の言葉の裏に、家族みんなに来てほしい、孫たちに会いたいという希望が透けて見える。そもそも私は自分一人で帰ろうと思っていたので、その旨を言うと、母はちよつとガツカリした声色で、「いや、もうすぐ後片付けも終わるすけ、無理して来んでもいい。あんた忙しいがる？」

そう言われても無理を押しして親のために手伝いに行くのが親孝行な息子の在り方というものだ。母も内心は私が無理を押しすることを期待していたのではないか。「あんた忙しいがろ？」という言葉に母の本心が集約されている。しかし私は自分に都合のいいように母の言葉をまったく文字通りに受け取り、結局後片付けに行くことはなかった。まったく親不孝この上ない男である。

ようやく実家に行ったのは震災から一カ月も経ち、余震の心配もなくなつて、復旧が進み始めた頃だった。震災で家を失った人たちはいまだに避難所暮らしを余儀なくされていたが、ニュースで目にした上越新幹線の脱線車両はみごとに復旧していたし、関越高速道も何とか通行可能になっていた。そろそろ冬の訪れを感じようかという直前の季節、長岡にいた頃私が最も好きだった季節で、もちろん私一人で行つたのではなく、母の望みどおり家族そろつて車で行ったのだった。

長岡インターに近づくとつれ、アスファルトの道路が激しく脈打ち始め、車は上下に気持ち悪く揺れ出した。関越道は所々ひしゃげていた。震災前は美しく整列していた道路脇のガードレールは風に揺れる稲穂のように波打っていた。トンネルの上部には補強のためであろうか、それまでに見たこともないパイプ状の設備が穿たれていて、瀕死の病人を助けるべく差し込まれたチューブ管を思わせた。小千谷に入ろうとする頃、二車線道路はとつぜん一車線に規制された。脇に赤い字で『震災復旧』と書かれた看板が立っている。高速道の向こうに見える山々は、ところどころ緑の山肌の間から赤茶けた土がのぞける。まるで生皮を無理矢理はがされたようで痛々しい。インターをおりると、交差点の脇のビルが完全に倒壊していた。電柱は微妙に傾いているように見えたとし、一般道はどこか走り心地が悪い。震災後の長岡の街並は、一様にガタついたような、いびつな印象がぬぐえなかった。

ガタが来たのは街だけではなかった。なんと父にまでガタが来ていたのだ。

震災後、父はすっかり老け込んでしまった。以前の父は、お世辞にも若いとは言えぬものの、白髪染めやおしゃれな服装で若作りを欠かさない、それなりのバイタリティを備えた老人で、決して人に老いを感じさせることはなかったものだ。しかしいま私の目の前にいるその人はまさに「老人」の二文字が相応しい人であった。

平安時代ごろの絵で、飢えた亡者らが京の街路の片隅にうずくまっていた。肌艶悪く、長い髪の毛はまばらで、垂れた目に光は失せ、顔こそ私の知る父にちがいないが、これは父ではないと私は思った。私の中の父は、顔の皺が増えようが髪の毛が薄くなるうが総入れ歯になるうが、子供の頃からまったたく変わっていない。実際は多少姿形が変わっているのだが、最も身近な肉親という存在が必然的にかもし出す関係性が築き上げたイメージとでもいうべきものなのだろうか、父は父だった。家の中では暴君でやりたい放題、外面は親分肌で大声でしゃべる闊達な人、しかし実は極度の小心者、父はそんな人だった。

もしかしたら「若さ」とは「何かしたいことがある」ということかもしれない。言葉を変えれば「生きがいを持つ」ことだ。若い人に「生きがい」などといっても始まらない。彼らには生きていくとがすでに自明なのだから。生きていくことそのものがすでに生きがいなのだから。「生きがい」を失った人は年齢に関係なくおしなべて「老人」といえるだろう。

そもそも父の「生きがい」とは何だったのだろうか。これさえやっていたら他に何もいらないうようなものが、父にあったのだろうか。私が記憶する限りそんなものは一切ない。強いてあげれば、

自分の部屋で一日中テレビを見ること、人と会って話をするこく
らいだっただろう。実は、この半年後さらなる悲劇が私たちを待つて
いたのだが、それに比べればこのとき父はまだまだ人並みの人間だ
ったのである。半年後、長岡の町並み以上に崩れ落ちた父に対して
私は改めてこう聞いてみた。

「オヤジの生きがいつてなんだ？これさえやっていけば他に何もい
らない、というようなものがあるのか？」

もはや半分あちらの世界に行っていた父は、うつろな目で空中を見
上げ、しばらく考えるふうな表情を浮かべた後、まるで自分に言い
聞かせるかのようにポツリとこう言ったのだった。

「そうらな……。ねえな。」

私にはそんな父の姿が震災後の長岡の街並みと妙にダブって映し
出されて仕方がないのである。

長岡の街は徐々に復興していったが、父は逆にますます老いが進
んだ。決定的だったのは、あの地震から一年後の転倒事件だった。

家族そろって群馬のキャンプ場にいた私は、母からの突然の電話
に即刻キャンプを中止し、上越新幹線の上毛高原駅から長岡に戻っ
た。夜、家に着いたとき奥の部屋の布団にうつぶせになって私を迎
えたのは、見るも哀れな父の姿だった。それはすでに父ではなかつ
た。老人でさえなかつた。転んだ時に作ったと思しき青味がかつた
大きな瘤が左目の上にでき、まるで四谷怪談のお岩さんのようで、
入れ歯をはずした口は開けっ放しで、ヨダレが流れるままに糸を引
いていた。地震直後の父は、たしかに老いはしたが、これほどでは
なかつた。いま布団の中から私を見つめるその人は、見た目は老人
だが、赤ん坊を思わせた。その人のまなざしがまさに赤ん坊のそれ
であったからにちがいない。無邪気で世の中のしがらみを何も知ら
ず、純真な愛くるしいほどのまなざし、悪く言えば人間の眼ではな
く、ガラス玉でできた人形の目玉、死んだ魚の目玉であった。その

目玉がしばらくの間私をじっと見据えていた。その間、父はいま部屋に入ってきた人が自分の息子であることを認識していなかったのではないだろうか。

「おいどうした、じいちゃん、ひどい格好だな。」

私が声をかけて初めて、彼は私が自分の息子であることを悟ったようだ。だらしなく開けられた口元からは、わずかながら笑みがもれたように見えた。

母によれば、転んですぐ救急車を呼び、信濃川を渡ってすぐの救急病院に運んだが、あいにく脳外科の先生が不在で研修医だけだったため、とりあえずの措置として左目の瘤の痛み止め薬と化膿止め薬をもらい、CTスキャンを撮ってきたとのこと。専門の先生に見せたほうがいいと言っているので、明日病院に連れて行きたいのに本人が嫌がつて、絶対に受け付けない。昔から気が小さく、医者嫌い、ワガママ頑固一徹な人であったので、イヤだといったらテコでも動かない。母が何度も明日病院へ行こうと言ってても、「へえ治りたいや！」と大声で怒鳴るだけで埒が明かない。母が急遽私を呼び出したのは、父を病院に行くよう説得するためだったのだ。ガンコな父も息子の言うことなら聞くかもしれない、ワラにもすぎる思いで母は私に連絡を入れたのであった。

父は明らかに様子がおかしかった。何を問いかけられても以前のよような反応がなく、どこか遠くのほうを見つめているような表情で、まるでこの世の向こう側へ行ってしまったように思われた。

「おい、じいちゃん、おれが何言ってるか、わかってるか？」

何を語りかけても無反応な父であったが、明日病院へ行こうという私の言葉にだけは、

「何でらいや？ おれはどっこも悪くねえねかや」

と反応する。母は言った。

「私が言うことはまったく聞こうともしねえで、全然反応しねえく

せに、今日病院行って医者が両手を挙げて、というとしっかり挙げるがあて。ほんとにわかつてがあかわかつてねえがか。ボケが進んでがあるかね。」

すると父は、
「誰がボケてるいや！」

怒った表情で母をにらみつけた。どうやら都合の悪いことは聞こえているらしい。しかしそれ以外はまったく無反応で、私はいま自分が相手しているのが人間だと思えないのであった。

そんな崩れ落ちた父がちょっとだけ戻った気がしたのは、何とか風呂に入れ、その後テレビでスポーツニュースが流れたときである。大相撲で人気力士がコロナと土俵から転げ落ちる映像を見て、その滑稽な姿に私が笑うと、父も笑ったのだった。父の笑顔を見たのが本当に久しぶりに感じられた。

翌日、嫌がる父を改めて説得し（実は昨夜からずっと説得していて、寝る前によく納得してもらったのだが、今朝になって全然覚えていなかったのだ）、ようやく病院まで連れ出した。当然歩けないので、車椅子で外来まで異動する。しばらく待って脳外科の医師に呼び出されると、母は転倒した顛末から救急車で運ばれたこと、CTスキャンを撮ってもらったこと、そして昨夜来の父のおかしな言動などについて、医師の前で一氣にまくし立てた。

まだ若いのだろうか頭の禿げ上がった人なつこそうな先生は、カルテを書きながら長岡弁でさもうるさげに答えた。

「まあちつと待たえて。順番に聞いていくすけ！」

母に順番に質問する形で必要とおぼしき事項を一通り聞き終わると、先生は父に向かって聞いた。

「お名前は言えますか？」

「長沢三郎」

「お年は？」

「五十六・・・らったかなあ」

「五十六ねえ!？」

先生は笑いながら驚いた様子をし、さらに聞く。

「今日は何年何月何日かわかりますか？」

「今日かね、今日は平成六年の・・・いつ日^からったかねえ・・・」

先生はおどけた目で「ダメだ、こりゃ」という表情を私達に向けた。

「ここがどこかわかりますか？」

「ここ?ここは石地らるがね。」

石地というのは、長岡から車で四、五十分ほどの海岸の名前で、田中角栄出生の地、西山町にある。ここ、長岡市内の総合病院が石地などであるわけがない。

先生は質問を変えた。

「じゃあね、長沢さん、”十一ひく七”はいくつわかりますか？」

父は首をひねりながら答えた。

「”十一ひく七”ね。”十一ひく七”・・・いくつらったかな・・・。”六”らったかの?・・・」

おいおい、じいちゃん、ウチのガキだってその程度の計算できるぞ。

「じゃ長沢さん、ちよつと両腕を上げてみて。」

先生の指示に父はさつと両腕を上げた。私や母がああしろこうしろと指示してもボケたフリして一向言うことをきかないくせに、医者言うことは子供のように素直に従いやがる。ふざけたオヤジだ。

その日先生の下した診断はこうだ。まずCTの写真を見るかぎりでは、確かに年齢のせいだ脳が痩せ気味ではあるが(つまりちよつと老ボケしてるということだ)、脳に目だった損傷はない。記憶が正常でないのは転倒の衝撃から来る一時的なものかもしれない。しかし、転んだときの衝撃でCTでは見えない部位に損傷ができている可能性もあるので、MRIを撮ってもう少し詳細に診断する必要がある。

CTとかMRIとか言われても、何がどう違うのかよくわからない

が、先生の話の前後の文脈から想像するに、ともかくMRIというのはCTよりも詳細に体の中を調べる機械であるらしい。

「で、今日はどうしたらいいでしょうか。」

母がそう聞くと、午後からMRIを撮って、顔のキズもひどいのでひとまず緊急病棟に入院してほしいとのことであった。

これで一安心とほっとするも束の間、看護婦さんが緊急病棟入院の際に家族の方に付き添いをお願いしたいと言ってきた。誰か父といっしょに一晩病院に泊まれ、と言っているのである。冗談ではない、明日は会社だ、今日中に東京に戻らねばならないと母に言う。MRIの結果は明日出るから、何とか会社を休んで、今日一晩父のそばにいてくれないか、と言う。

「その後は私が付き添うすけ、あなたは明日帰っていい。」

母のその言葉に私は翌日東京に帰ったのだが、今にして思えば、倫子を呼んで母の代わりに付き添いさせるべきであった。一年後、まさか母まで介護疲れで倒れてしまうとは……。

倫子は当時、再婚して山形に嫁いでいた。倫子が正明と離婚したのが震災の約一年半前、再婚はその半年後だということから、ずいぶん早い。どういいういきさつでいまのダンナと知り合ったのか、いまだに私にはわからない。ただ離婚して半年後に再婚というのは、あまりに早すぎやしないか。もしかしていまのダンナと再婚したいがためにバクチだの倒産だのと理屈をつけて離婚したのではないだろうなどと、ついゲスの勘繰りを入れたくなってしまう。まさかそんなはずはあるまいが、いずれにしても倫子の再婚はあまりに唐突であった。

倫子の新しいダンナ・矢野隆行氏は私より四つ年上で、倫子同様バツイチで二人の連れ子があったが、二人ともすでに成人していて、再婚する上で問題はまったくなかったという。私たち家族は、否が応でも矢野氏と前夫・正明を比べてしまう。そこでまず矢野氏の人となりから記そう。

矢野氏は、背は倫子より高く、天然パーマに前夫同様のタレ目、濃い髭に浅黒くたくましい顔、笑顔がとても人なつこそうな、朴訥な東北人である。山形市内にある某メーカーの工場に勤めるサラリーマンで、「ヤングエグゼクティブ」を気取った没落資産家の前夫と比べると、前夫にあつたどこか人を見下したような嫌味な風が一切なく、同じサラリーマン家庭に育った私たちには、親近感が持てた。大酒のみであるにもかかわらず、酔っても少しも乱れることなく、陽気にニコニコと明るい笑顔を浮かべるだけで、父も母もかくいうこの私も、この人になら心を許せると思った。どうやら矢野氏、倫子と二人で毎晩大酒をあおっているらしい。焼酎が好きで二人で一晩でボトル一本を空けることもあるという。

そんなふうにする倫子の幸せそうな表情が私に安心感を与えると同時に、どこかでくすぶっていた兄としての自分を呼び覚ましたようである。私が新しい倫子の夫に好感を抱いたのは、本人のキャラクターも無視できないが、もしかしたらこちらの影響が大きいのかもしれない。

しかし誰より彼になついたのは私の子供らであつた。倫子は彼を「タカちゃん」と呼んだが、子供らは、彼の明るい笑顔がちよつと前に売れたお笑い芸人・ギター侍の波田陽区に似ているところから、「ハタちゃん」などと呼んだ。もっとも本人は「中村雅俊と呼んでくれ」と言っていたが。（たしかに若い頃は似ていたかもしれないな）

二人の再婚には、これから新たな家庭を築くのだというような初々しさ、人生への期待感ほとんど感じられなかった。すでに子育ての終わったバツイチ同士が、お互い気の合ったところで「じゃ結婚しよか」みたいな軽いノリではじめたというような、どこかしら軽いおもむきがあつて、それはそれで幸福に思えた。しかし父も母も世間体を気にし、倫子が離婚、再婚したことについて、親戚には一言も告げなかった。

再婚に際し、倫子は正道とあずさには相談したという。正明と離

婚するときは大泣きした二人の子は、この再婚には大賛成だったよ
うだ。とはいえ、二人が矢野家の籍に入れることはなかった。これ
は正明以降の跡取りを不在にできない梨本家の事情を鑑みてのこと
らしい。この頃、正道はすでに私立大生で東京に下宿していたし、
あずさは梨本家を出て新潟市内にアパートを借りて住んでいたから、
籍だけ梨本に置いたまま、実際は正明とは別居していた。梨本家の
家業は、以前よりずいぶんよくなったというが、正明はいまだ競馬
狂いから抜け出せないらしい。

（再婚篇・下へ続く）

再婚篇（下）

（再婚篇・続き）

話を父に戻そう。

救急病棟の病室の窓からは、晩夏の信濃川のどかな河川敷風景が見えた。

窓の右手には大手大橋、左手には長岡大橋、この二つの橋に挟まれた河川敷はその昔、鬱蒼と藪が生い茂り、ヨーロッパの森のような不気味さをかもし出していたものだ。今現在はそんな面影は一切ない。あるところは畑になり、あるところは野球場になったりしている。藪に包まれたその頃、この当たり一帯にツツガムシが出るといので、全国的に有名になった。今のような姿になったのは、田中角栄以降らしい。さすが土建屋だ。

そんな風景を横目に見ながら、「本島一の大河なる信濃川」（このフレーズ、ウチの高校の校歌のパクリだ）は、長生橋のはるか彼方から流れ来て、人間の欲望と思惑にまみれ平らにならされた河川敷を時に暖かく時に厳しく見守りながら、ゆったりと静かに、まさに「北海さして流れゆく」のであった。

対面の土手を超えた一帯は旧長岡の街並。積み木のようなビル群が軒を並べ、それなりの誇らしさで街を彩っている。窓のほぼ正面にオレンジ色の帽子をかぶった「水道タンク」が目立つ。ここは小学校一年生の遠足で行ったところだ。子供の頃は感じなかったが、今見るとこの建物の形、によっきり立った男性シンボルを思わせるものがあった。結構イヤラシイ。

街並の背景になっているのは「名だたる連峰ノコギリ山」（これも高校の校歌のパクリ）である。東の空の下に薄青くかすんで聳え、その前面の人工の街を包み込むようにして際立たせている。東の山

々が脈々連なる風景に見入るたび、故郷に戻ったなあと実感できる。地震の傷跡はまだ完治してはいなかったが、それにしてもよくそここまで立ち直ったものだ感慨深くなったりする。

病室のベッドに横たわってだらしなく口を開け、ぼんやりと窓の景色を見つめる父。その横で簡易ベッドに座って、父を見つめる私。父と私との間には、まるでゆったり流れる信濃川のリズムに相呼応するかのよう、長くて静かな時間が流れた。そこには何にもなかった。私から呼びかけなければ父は話そうとしなかったし、私はこんな父に一体何を語りかけたらいいのか、まるでわからなかった。いったい何を考えているんだろう。試しに

「じいちゃん、今どこにいるか、わかるかい？」
と問うと、

「ここか、ここは左近の土手らろが。」
と答える。

左近の土手というのは、我が家からさらに信濃川上流にある土手のこと、今私たちがいるところでないことはもうわかりだろう。当然石地でもないし……。

「あれは左近のブドウ畑らろが。」
そう言っ父は河川敷の畑を指差す。いったいどこから左近の土手のブドウ畑が出てきたのか、医者じゃなくとも父の脳の中を開いてどんな構造をしているのか覗いてみたい気持ちになる。その後私は折にふれて父にここがどこかわかるか聞いてみたのだが、そのつど答えは違っていた。答えにはだいたい三つのパターンがあることがわかった。「左近の土手のブドウ畑」と「石地」と「七日町」。

病室は夜中でもエアコンがガンガン効いていた。簡易ベッドで一晩付き添った私はそのせいで風邪をひいた。

翌日、例の人懐こそうなワカハゲ先生からMRIの検査結果を聞かされた。

どうやらMRIというのはCTに比べ、より立体的に体内の写真

を撮れるシロモノであるらしい。ワカハゲ先生、私と母の前に父の脳内のMRI写真をズラリと並べて、こんなことを言った。

「今回の転倒による大きな損傷はありませんね。痴呆が進んだように見えるのは、転倒した際の何らかのショックと思われる。」
この時点ではああそうですか、としか答えようがない。先生は続ける。

「しかしですね、今回の検査でそれとは別な部分に大きな問題が見つかりました。」

大きな問題？ 今以上に大きい問題があるというのか？

先生によると、まず小脳に脳梗塞の跡があるとのこと。あくまで跡であるから、今回の転倒でできたものでなく、ずいぶん前に発生して、それと知らずに今日まですごして来たのであるとのこと。

さらに問題。脳には大きな動脈と静脈がそれぞれ行っておりそれが途中で二股に分かれそれぞれ左右の大腦・小脳に行っているが、小脳へ行っているほうの血管の一つがまったく無くなってしまっている、さらにもう一方の血管は今や塞がる寸前で、大変危険な状態だ、とのこと。

「ホラ、ここの血管ですね、見てください、こんなに狭くなってるでしょ？」

先生はMRIの写真を指してそう教えてくれた。確かに写真を見ると、黒く浮かんで映し出された血管は途中でキュツと萎んでいて、まるでウインナーソーセージが繋がったような形をしている。

「ここが血栓で詰まるともう呼吸もできなくなります。生きていけない、ということですよ。」

当たり前だ、呼吸できなきゃもう死ぬしかないじゃないか。心の中でそう思った私であったが、実はもっと後になって、必ずしも呼吸ができなくても、生かす方法がある、いや死なさない方法があることを教えられたのである。しかしこのときは、なんとか父を元に戻したかった。その思いは母も同じであったらう。

「どうやったら治るんでしょう？」

母が聞くと、先生は答えた。

「手術でこの血管を広げることできます。しかし、長沢さんの年齢の方になると、血管自体がもろくなっていて、手術すると余計に危ない。そもそも体力的にも手術には耐えられないでしょう。」

「じゃあどうすればいいんでしょうか。」

「血液を流れやすくする薬で何とか血管を詰まらせないようにするしかないでしょうね。もしかしたら、いま痴呆がひどいのはこれが原因で脳への血液の流れが悪いからかもしれない。」

なるほど、要するに血の巡りが悪いってことか、アタマの悪いやつをそんなふうにつづることがあるが、昔の人はよくわかってたんだな・・・などと、どうでもいいことが頭をよぎる。

先生の解説は続く。

「血液の流れを良くする薬というのは、実は血小板を固まりにくくする薬なんです。血小板というのはご存知ですか？ 傷ができたときなんかは血の流れを止める働きをする血液の成分です。（そのくらい知ってるヨ！と心の中で私）ですから大怪我などと、血が止まりにくい状態になりますから、これはこれで危険です。十分に注意してください。とりあえず、しばらくこちらに入院してもらって、薬で対処しながらリハビリテーションを続けることですね。」

結局、父はそれから約三ヶ月間、入院生活を送った。その間、母はほとんど父に付きつきりで、好きな社交ダンスにでかけることもままならなかった。それが後に母の不幸を引き起こすことになるのは、そのときの私には思いもよらなかった。

リハビリと薬の効果で、無事退院した父は、以前とまったく同じというわけにはいかなかったが、それなりに回復していた。

リハビリセンターは病院の脇に設置されていて、体操用のマットがあったり、自転車のような器具（名前を何とつか知らない）や平均台があったりと、一見アスレチック・ジムのような雰囲気であった。ジムとの違いは、そこにいる人が健康であるかどうかの違

いのようにだ。若いオニイチャンなんかもいるのだが、バイク事故が何かで足を骨折したんだろう、大きく石膏で膨らんだ足と松葉杖が痛々しい。父の車椅子姿ももちろん痛々しいのだが、オニイチャンの場合若いだけにちよつと気の毒だ。

私が顔を出したとき、父は若い看護婦さんに介添えされながら（ちよつとつらやましかつたりする）、必死の形相で平行棒につかまって歩いていて。この当時、父にはまだそれなりの認知力があつた。この一年後、父は家族でさえも声かけされなければ、誰かわからなくなってしまうていたから。私の顔を見ると笑みを浮かべ、急に元氣を取り戻したようなそぶりを見せて言う。

「どつら、だいぶ歩けるようになったらう。おれは昔からスポーツは得意らつたすけんな。」
これつてスポーツじゃないんだけど……。

父の退院後、快氣祝いをやろうと言い出したのは誰だつたのだらう。いつの間にやらわが家にはそんな会話が飛び交い、あれよあれよという間に旅行好きなわが妻が県内の温泉場を予約してしまつた。もしかしたら言いだしつぺは父本人だつたのかもしれない。というのは、この一年後父は再び入院したのだが（二度と家に戻ることはない入院だつた）、その際父は私たちに繰り返し「良くなつたらみんなでまた温泉行ごうな」と語つていたからである。その口調は、まるで病氣になつたのが自分ではなく私たちのほうだと思われるような、優しいいたわりに満ちていた。

十一月半ばの、もうすぐ雪が降ろつかという季節だつた。この時期の新潟が私はいちばん好きだ。やや肌寒いものの秋の日差しはこぞとばかりに最後の輝きを見せ、田んぼは刈られた稲穂が日差しを受けて浅黄色に毛羽立っている。赤とんぼの群れがせわしそうに飛び回る。中には車のフロントガラスにぶつかつてグシャリ潰れる慌て者もいる。農家の庭には熟しすぎた柿の実がぶら下がり、それ

をカラスがあさりに来る。どことなくのんびりしながらも、仄かな寂しささえ感じさせるそんな晩秋の新潟を味わいながら、黄色い田んぼの平原を貫く田舎道を車は走り抜けた。赤茶色に萌えた山々を夕陽がすまなそうに照らす頃、私たちは新発田に近いひなびた温泉宿に着いた。

倫子の再婚以後、家族が一同に会したのは、このときが初めてであった。私達家族はもちろん、倫子夫婦と、すっかり大人になった正道とあずさが来た。二人はちよつと遅れて車で来たのだが、運転は正道だという。ずいぶんと成長したものだ。叔父としてはちよつと感慨深いものがある。この大学二年生、いまどきの若いモンらしく、ナマイキにも茶髪にアゴヒゲなんぞをたくわえていやがる。あずさは”女性”のとはぐちに差し掛かっていて、初々しいほの色香が何気ない動作にのぞいて見える。

部屋に入るなり、メシ前に風呂に行こうということになった。

「お父さん、おじいちゃんを連れて行って来なよ。」
妻が余計なことを言う。

「何でだよ、面倒だな。」と私。

「当然でしょ、一人息子なんだから。」

「大丈夫だよ。もう良くなつたんだから一人で行けるよ、心配ないよ。」

「何言つてんの、風呂場で何かあつたら大変でしょ！」

テレビの大相撲中継に集中している父を尻目にそんなやりとりをしていると、横から矢野さんが口を出す。

「いいですよ、私が付き添いますよ。・・・さあ、お父さん、温泉行きましよう。」

他人からそう申し出られたら私も行かないわけには行かない。しぶしぶ父を連れて矢野さんと風呂へ行った。ちよつと気詰まりなので、保育園年長さんのわが息子を一緒に連れて行くことにした。部屋を

出がけに、妻は追い討ちをかけるように言う。

「矢野さん、すみません。うちのお父さんだけだと心配だけど、矢野さんとアキちゃん（コレ、わが息子の名前です）がついていれば大丈夫。アキちゃん、おじいちゃんのこと、よろしくね。」

裸の父はどこどころ皺くちやにたるみ、シミの斑点をつけた皮膚が太い骨を覆っていて、一見ホラー映画に出てくる人工の怪獣のようで、大いに薄気味悪かった。矢野さんは父の浴衣を脱がせるところから手助けし、風呂場に入るときはその肩をしっかりと抱きかえた。血を分けた親子でありながら私は何一つできなかつた。

湯船に仰向けになって細い脚を伸ばし、肩まで湯に浸かつた父は、薄目を閉じて幸福そうな笑みを浮かべた。その表情は、まるで極楽へ行ったかのような安らぎに満ちていた。そして矢野さんに言うのだった。

「ありがとうのオ、矢野さん。ありがとういてエ、ありがとういてエ。」

「陵輔さん、私、先に背中流してきますから、お父さんを見ていてください。」

矢野さんに言われ、ハアわかりました、としか言えない私。

「いいなあ、陵輔、ありがとうえや。ありがとうなア。」

私は何もしていないのに、父は言う。温泉に連れてきてくれてありがとう、ほどの意味だろう。

「極楽らて、ありがとうえて。」

すると、今度はわが息子・アキちゃんが湯船の中の父の手を引いて、「おじいちゃん、お風呂あがって。アキちゃんが背中流してあげるよ。」

アキちゃんは皺だらけシミだらけの父の細い腕を取り、湯船から引き上げる。父は顔を歪めて言う。

「おお、アキちゃん、おじいちゃんうれしいてエ。アキちゃんも大人になつたねエ。ありがとう、ありがとう。また小遣いあげるすね。」

結局四人で一緒に風呂に行ったものの、私は何一つ父の面倒を見なかった。父は矢野さんとアキちゃんには最大限の感謝の言葉を述べていた。そこまで言うかというくらい感謝。わざわざらしいほどに聞こえたのは、実の息子たる私へのアテツケなのか……。

夕食になつて、一家総勢十一人はお座敷をコの字型に囲む。コの字の真ん中に、風呂で疲れたのかちよつとやつれたふうな父と、うれしそうな母が並ぶ。季節の料理に彩られたお膳が運ばれて来る。大人の脇にはビール瓶、子供の脇にはオレンジジュースが立つ。乾杯の音頭を父が取る。正道は結構飲めるらしく、あつと言つ間にコップのビールを飲み干した。うまそうに呑むその姿をちよつとナマイキに感じたりする。

みんな酒が回つて来た。父はほとんど何もしゃべらない。

倫子が部屋の隅に置かれた大型のカラオケボックスを引っ張り出して来、カラオケをやるうとはしゃぐ。宿に着いたときから上機嫌の母、この誘いに乗る。

「おお、カラオケあるがあげ、いいねえ、やるてやるて。」

「なあに、おめさんも歌うてがかね、歌えるがあげ？」

倫子が母に言う。最近倫子が母を呼ぶとき、母を「おめさん」という。この言い方は、長岡で「あなた(you)」を呼ぶときにありがちな言い方だ。長岡では、話者が熱心に語っていて、相手に軽い同意を得る時などに会話の中に挟まれることもある。「・・・だこてや、もしそれがそうならおめさん、世の中ひっくり返るこてね。」というふうな使い方だ。「おめさん」これくらい長岡的な表現もなかるう。

「だうじよぶらて、昔の演歌らきやあ歌えるて。」
「はしゃぐ母。」

「おばあちゃんが歌うの？ ウッソー！」
「あずさと正道が大笑いする。」

「まかしとけて！」

ノって来た母に、

「おめさんは後らて！　まずはあたしから。」

と、倫子は勝手に予約を入れてしまった。曲はドリカムの”うれし
楽し大好き！”。

やっぱりそうだ

あなただったんだ

決してうまくはないが、この歌を倫子が歌うのを聴いてると、心の底から矢野さんにほれてるのがわかる。今、本当に幸せなんだな。倫子が歌っている間、母は一生懸命に自分の持ち歌を探していた。ようやく見つかった時には、すでにあずさが次の曲を入れてしまっていた。いま風な曲で、誰の何と言う曲か、オジサンにはサッパリわからん。

「おめさんも何かやれて。」

倫子は私にも「おめさん」と言っつて歌を促すが、家族でのカラオケなど、どうにも気分が乗らない。

「おれはいいよ」
と断ると、

「決まっつたて。これ入れて。」

と母。正道が予約を入れる。

母の選んだ曲は懐メロ。何と、今ではコロツケバージョンのほう
がすっかり有名なチアキナオミの”喝采”ではないか！　イントロ
が流れた瞬間、一座は爆笑に渦に包まれる。母はうる覚えのチアキ
ナオミの振り付けを真似し、ゆっくりと右手を上げながら「いつも
のよおおおに」と歌いだす。さらに大爆笑。顔までコロツケにして
いやがる！

母のヘタクソなチアキナオミが終わると、次は矢野さんだ。矢野
さんがカラオケボックスのところに行くと、

「ハタヨウクやれー」だの「ギター侍やれー」だの、うちの子供た

ちからヤジが入る。

「きみら、うるさい！」

笑いながら矢野さんは言い、歌った曲は”恋人も濡れる街角”。ナカムラマサトシの曲だ。

「若い頃はハタヨウクじゃなくて、ナカムラマサトシと言われたもんだけどな・・・。」

と矢野さんはマイク越しにつぶやく。

「おめさんも歌わねえかね？」

倫子は父にもカラオケを促すが、父は私同様「いいて」と断るばかりであった。

その後も正道の最近のロックをはじめ、わが妻のマツモトイヨ（容姿はともかく歌声だけはソックリなのだ）、子供たちの”ドラえもん”と、カラオケはつきることなく続いた。その間、母ははしゃぎっぱなしだった。年取った母のはしゃぐ姿がまた子供たちの笑いを誘った。父のというより母の快気祝いのようだった。

みんながはしゃぐ中、つまらなそうにしていた者が二人いた。それは父と私であった。倫子も子供たちも、父に何度も歌うよう促したが、父は決して席を立とうとはしなかった。それは私も同じだった。私と父との間には、二人で病室にいたときのようになり、相変わらず長くて静かな時間だけが流れていたのだった。信濃川の流れるリズムのように。

介護篇（上）

人は還暦を迎えると赤いちゃんちゃんこを着せられて祝われる。

これは人生を十二年一区切りと考え、その一区切りが六回目を迎える、つまりちようど六十歳になると「生まれたときに還る」ことを意味しているらしい。赤いちゃんちゃんこは赤ん坊の象徴というわけだ。しかし今の若い人は「赤いちゃんちゃんこ」と聞くと例の怪談を思い浮かべてしまうかもしれない。学校で噂されるいちばん隅の開かずのトイレ、そう、アレだ。薄暗くクモの巣だらけで壁のシミが妙に不気味なトイレ。そこに入るとどこからか「赤いちゃんちゃんこ着せましょか？」という震える声が……。 「いりません」と言えばまだ救われるものの、ツツパって「着せられるもんなら着せてみる！」などという「ギャーッ！」という例のアレである。知ってるかな？知らない人は「赤いちゃんちゃんこ」でググってみてください。

昔、人の一生が短かった頃六十歳まで生きる人はまれで、輪廻転生というわけではないが人間は六十年生きると新しい人生を迎えるように考えられたという。小津安二郎という映画監督は六十歳の誕生日の日に見事に死んだらしい。しかもその誕生日が十二月十二日というから驚きだ。偶然といえば偶然なんだろうが、あまりにもできすぎで機械のような人生に見えてくる。

何で冒頭にこんな話をしたか。あの日以来、父が幼い子供に、いや赤ん坊にまで還っていったからである。「還暦」という言葉が、赤ん坊から幼児期・幼少期を経て青春を迎えて子孫を残し、老年とともに再び幼少期、幼年期へ、そして赤ん坊へと還っていった父の姿にそっくりそのまま重なるからである。

中越大地震の一年後、父が転んで入院し約三ヶ月の入院&リハビリ生活を終えて家に戻ってきた時、父の介護生活を支えたのは母だ

った。

快気祝いの温泉旅行がたたったのか、その年の冬父は肺炎で再度入院した。約二週間にわたる入院であった。例によって病院側は「誰か付き添いの方を・・・」と言うのでやむなく母がずつと付き添った。二週間もの間、父のベッドの隣に狭い簡易ベッドを据え付け、父のワガママし放題に付き合いながら寝泊りするというのは、並大抵の神経でできるものではない。私は改めて母の辛抱強さに感心するとともに、自らの怠慢さに自らあきれたものだった。このときにも私は「一日くらい付き添い替わろうか」と母に申し出たのだが、「いい、あんた忙しいがろ。」とやんわり断わられたのであった。しかし、そう、そうなのだ、いくら断られても行くのが親孝行な息子というものなんだ。

結局私が長岡に帰ったのは、父が退院した年末年始の休みに入ってからだった。前回の帰省では父の老け込みように驚いたのであったが、今回は母がすっかり老け込んでしまったことに驚かされた。そこにいたのは、老いたとはいえそれでもどこかに「女」らしさをキープしていたかつての母ではなく、しわくちやに小さく縮んだ田舎の薄汚い婆さんであった。この老いつぶりは、きつと父の介護のつらさから来ているのに違いない。というより、母にとっては、父と暮らす毎日がすでに地獄の日々だったのである。

前々回の入院でやったりハビリの成果でなんとか車椅子なしに歩けるようになったものの、父は誰に気兼ねすることもなく歩けるようになったわけではなかった。歩いていてもどこかふらついていて、見ているだけで危うい。いわゆるヨボヨボ歩きというやつだ。そのくせ気持ちだけは若い頃のまままでやたら急くので、早歩きとなる。そのため家の中でもしょつちゅう転ぶ。

ある時、畳敷きの座敷に入る際に障子の縁に躓き、

「ナア（おまえ）がこんげんとこへ物置くすけ、つまづいたねっかや！ー！」

と母を怒鳴りつける。誰もそんな人の出入りするとところに物なんか置いてない。

歩行だけではない。手の所作もまた一人前とはいかなくなっていて、細かい動作がほとんどできないのだ。何かの用事で背広を着て外出することになり、ワイシャツを着る際、第一ボタンをはめることができなかったそう。そのときも父は大声で母を怒鳴りつける。「ナアがこんげんでつけえボタンつけるすけ、はめらんねえねかや！」

Yシャツについているのは普通のボタンだし、そもそも既製品のシヤツなんだから、母がつけたボタンではない。

母にしてみればもうたまったものではない。自分ができないことは自分の能力がないせいではなくすべて母のせいであり、自分の機嫌を損ねる原因となるものはすべて母によって引き起こされたことになってしまふのだから。そしてそのたびにいかにも憎憎しげな表情を浮かべ母を怒鳴りつける父。まったく駄々っ子とおんなじだ。そう、父はまさに子供に帰っていったのだ。

そもそも子供は母親なしでは生きていけない。子供を叱りつける母親は、それが自分の子供であればこそ、未来への希望と深い愛情とにささえられた叱り方をするものだ。大いなる包容力でわが子を包み込むものだ。だから、子供を叱るその言葉に、どこかしら愛情がこもっている。振り返って、わが母の父に対する接し方はいかが似てはいるものの、その接し方は決して母親のそれではない。父のあまりのワガママぶりにカンニン袋の尾をきらした母は父にこう言った。

「そんげことまで言うがきや私はもういねえほうがいいね。私もうやってらんねえて。お互い別々に暮らしたほうがいいねかね。私は出て行くから、これからはあんた一人で勝手気ままに生きていけばいいすけね。」

これにはさすがの父もワビを入れずにはいらなかった。俺が悪かった、これからはいい子になるすけ頼むから一緒にいてくれ、と

涙目で母に訴えたのだそうだ。

「ほんと、あん時ばつかしや気分がスーッとしたて。」
母は得意げにそう言った。

そのときばかりはそう言って反省した父であったが、さすがは認知症、前の日に言ったことなどほとんど覚えていなかった。翌日には再び自分だけが正しく自分より劣る母は自分の命じることに従って当然とばかりに母に当たり散らし、ますます母を悩ませるのだった。

だいたい何故に父は母が自分より劣ると思っていたのか。父のどこかに母に対して優越感があったに違いないのである。この優越感に至って単純なものである。それは出自の差から来ている。父も母も長岡の在の農家の生まれであるが、同じ農家であっても、父の家は戦前は地主階級であり、母の家のような小作農とは格式が違う、というわけだ。父には、自分が「イトコの坊ちゃん」であるという自負心があり、そんな「イトコの坊ちゃん」が格下の家柄からお前を嫁にもらってやったのだからありがたく思え、そんな感じなのだ。実際には単なる長岡のはずれの田舎の農家の五男坊であったから、決して「イトコ」でもないし、ましてや「坊ちゃん」でさえもない。いざ結婚する際には泣いてプロポーズしたとの話もある。しかし、他の人にはどんなにヒクツになっても、母にだけは優位な気持ちを抱く、あるいは見下して女中さんのように思ってた父なのであった。このような傾向は、昭和一ケタ世代の男にありがちなようだ。実を言うと私の妻の家も似たようなところがある。

認知症の父のワガママ三昧に付き従う生活が続けていた母がとつぜん心筋梗塞で倒れたのは、まさに必然的なことだったのかもしれない。

父が無事退院した半年後の夏、私達一家は四家族合同で伊豆のキャンプを楽しんでいる真っ最中だった。照りつける日差しの中、懸

命に海岸でバーベキューの火を起こしていると、突然私の携帯に電話が入る。倫子からだった。母が救急車で運ばれた、もしかしたらこれから大手術になるかもしれないから、即刻長岡まで戻って来い、とのこと。すわ一大事である。私の火お越しを手伝っていた美人のSさんの奥さんは看護婦さんで、私の会話から、いかにも専門家らしい冷静な口調で、「まずカテーターを入れるんだろうね。」と言った。カテーターって何？と聞いて返って来た答を聞いても私には何やらチンプンカンプンだったが、大ごとであるらしいことだけはわかった。だいたいシンキンコウソクとは、いかにもすごそうな名前だ。病気の名前と言うのはどれを聞いてもすごそうに聞こえる。そういうえば、昨年父が倒れたとき呼び出されたのもやっぱりキャンプの真っ最中だったな。

さて、私は即刻長岡まで帰らなければならない。どうやって帰ったらいいだろうかと妻と相談し、まず私だけ新幹線で長岡まで行くその後家族みんなで行ったん東京に戻り、何日かつきつきりになるだろうから泊まる準備をして、それから全員で車で長岡まで向かうということになった。

キャンプ場から三島駅まで車で送ってもらおう。JRの窓口で「長岡まで」と駅員さんに告げると、ここでは買えませんというので、同じJRでもここは東海だからダメなのかな、と思つて運賃表を見上げると、東日本線の新幹線にちゃーんと載っているではないか。

「上越新幹線の長岡なんですけど・・・」
と改めて告げると、駅員さんそれでガテンが良かったらしく、

「ああ、越後長岡のことですね。」
と切符を切ってくれた。どうやらこの近辺の伊豆長岡とカンチガイしたらしい。なるほどね。

キャンプ場を出たのが二時ちょっと過ぎ、三島で新幹線に乗ったのが四時半頃だったと記憶する。ようやく長岡に着いたのは九時近かった。母は病院三階の集中治療室でみんなに囲まれて横たわっていた。薄目をあけて私の顔を見、

「来てくれたがあげ、キャンプ中に悪かったね」

と言う。意識はしっかりしているようでまずは一安心した。ベッドに横たわった母の鼻には呼吸器のチューブ、手首には脈拍を計測すると思われる器具、胸元にも何やら機器が取り付けられていて、そこからチューブが伸び、脇の計測器につながっている。なにやらSFチックな、まるで人造人間の生誕とでもいった物々しさである。

「手術は？」

と問うと、倫子が

「それがさ、手術しなくて良さそうんがて」と答える。

倫子は、私の到着によってつかの間の安堵感を得たが、早急に事態を伝えたいという思いが混じった表情で私を見る。その脇で、矢野さんが心配そうな表情を浮かべている。その隣に、すっかり目の光を失った父が立っている。急な事態にいったいどう振舞ったらよいのやらわからぬといった表情である。私の到着と同時に勢いづいたのか、父は母に向かって怒鳴りつけた。

「ナア（お前）がこんげんなるすけ悪いがらいや！」

おいおい、それが瀕死の病人に向かって吐く言葉かよ。しかしさすがに母は大人であった。

「あんた、悪かったね、あたしがこんげんなったばかりにさ。」と、やや芝居がかかった言葉を父にかけるが、顔の表情はもううんざりと言っていた。父が怒鳴ってきたらこう言っただけであらかじめ考えていたことを思わせる言い方であった。

医師から病状を簡単に聞いたところによると、通常は血栓が詰まったままで緊急手術となるとところであったが、血栓は幸いにも流れた様子なので、あえて手術は避けた、それでも血栓が完全に流れ去ったのかどうかわからないし、仮に流れたとしてもいつどこでまた詰まるかわからない、最悪の事態は免れたものの、今後しばらく絶対安静が必要なのは間違いなく、しばらくの間入院してもらって、様子を見守る必要がある、とのことであった。母の入院、これは大

変なことである。母にとってではなく、むしろ父にとって大変なことなのだ。さあどうしたらいいか、誰が父の面倒を見るのか……。そんな私の心配をよそに、見舞い客が次々訪れた。久しぶりに会う親戚の面々だった。私以上に倫子には久しぶりだったに違いない。何しろ先の梨本との結婚以来、親戚一同の前に倫子が姿を現したことは一度もなかったはずだから。世間体を気にしすぎるほど気にする父は、親戚一同が集まる機会があってもあえて倫子の話題は出さなかったし、またその父の思いを親戚一同みな察していたらしく、向こうからあえて聞こうともしなかった。

母の弟夫妻（つまり私たちの母方の叔父、叔母です）が来たとき、倫子に矢野さんを紹介され、あれ、ちょっと前に会った人と違うな、と彼らを感じたのは当然のことだ。何しろみんな二十年以上倫子に会っていないのだから。おばさん、矢野さんに思わず「すっかりご無沙汰しまして・・・」と挨拶してしまったそうだ。後でこっそり私に「失敗したて」とつぶやいた。おばさんに「倫子ちゃん、再婚したがあけ、いつ？」と聞かれ、私はことの顛末をかいつまんで話した。父方の親戚にとっても事態は同じであった。親戚全員が矢野さんとは初対面だった。そんなわけではからずも母の入院が倫子の新しい夫・矢野さんのお披露目となってしまったのだった。

とりあえず母は手術しなくて済んだが、当面の問題、実はこれが最も大きな問題なのだが、母が入院している間、一人で生きていけない父の面倒を誰が見るのか。母はそのへんをよーく心得ていた。すでに倫子に担当の介護士に電話連絡させていて、明日介護士が家に来るから倫子と矢野さんとお前で会って、父を施設に入れる段取りをしろと言う。それだけではない。母は入院の際に持参した手提げバッグから茶色の封筒を取り出し、その中から厚みのある札束を引き出して、指を舐め舐め勘定しポツキリ十万円を倫子に渡す。

「何かあると悪いすけんね。」

この病院、例によって、誰か家族の方に付き添ってくれと言ってきた。集中治療室を出たすぐの所に宿泊所がある。その日は倫子が

泊まり、明日は私が泊まるということの話がついた。私は矢野さんと一緒にひとまず父を連れて帰った。

母のいなくなつたわが家はどこか陰気で、幽霊屋敷のような静けさだつた。帰りがけに買ってきたコンビニ弁当を開ける。父はシャケ弁をいかにもまずそうに食う。矢野さんは一人黙々と焼酎をあける。夏真つ盛りであつたにもかかわらずエアコンもつけず、扇風機だけで済ませている。モーター音が静かさを助長する。早速私は父を説得する。

「ばあちゃんが入院してる間、施設に入ってくれ。」

「嫌らいや。おれは自分で何でもできるいや！」

何度私が言つても、この一点張りである。

「どうやってメシ食うんだよ！自分でメシ作れんのかよ！だいたいの料理で火を着けて、そのまま忘れたら火事になつてしまうぞ！火事になつたらこの家だけじゃない、隣の佐野さんの家まで燃えちまつて、家財一式なくなつてしまうぞ！それでもいいのか！？」

怒鳴りつける私。怒鳴り声には怒鳴り返すのが適切とばかり、

「だいじょぶらいや！そんげことを言わんでもちゃんと一人でできるいや！今までらつてばあちゃんが前んとこ行つてたときはおれ一人で何でもやつてたねっかや！」

確かにそうなのだ、大地震の前までは、転んで入院する前までは、痴呆の始まる前までは。

「昔はそうらつたかもしらんが、今じゃお前一人じゃ何にもできねえじゃねえか！お前は介護されてるんだぞ、病人なんだぞ！」

だんだん腹が立つて来て、父に対し「お前」呼ばわりになる私であつた。

「おれのどごが悪いがいや。どつこも体悪くねえねかや。」

「どこも悪くねえヤツが、何で薬飲んだり毎週施設行つたりするんだ？お前は一人じゃ何にも出来ないんだよ。赤ん坊と一緒になんだよ！」

「そんげんことまで言われたら、おれらって腹立ついや！嫌らいや、ぜったいに施設なんか入らねえすけんな！」

「じゃあ勝手にしろ！火事出すなりのたれ死ぬなりすりゃあいいや！こつちは一切面倒見ないからな！」

あまりの父の聞き分けのなさに私のほうがむしろ腹が立ち、大声を上げてテーブルを叩く。バーンという音とともに、矢野さんが飲んでいた焼酎のグラスがグラグラ揺れる。怒りに口の中がむしように乾いてくる。こんな聞き分けのない男と母は毎日暮らしていたのかと思うと、本当に不憫に思えてくる。体を壊すのも無理はない。私の怒りに圧倒されたのか、父は今度は急に涙声になる。

「じゃあ、おれはどうすりゃいいがいや。家にいらんねえきゃあ、どうすりゃあいいがいや……。」

この父の態度の急変を見て、それまで黙ってやりとりを見守っていた矢野さんが、すかさず父に声をかける。

「お父さん、陵輔さんがこうやって怒鳴るのはもつともな事なんですよ、お父さんを心配してるんですよ。ここは陵輔さんの言うことをよく聞いて、いったん施設に入ったほうがいいと思いますよ。お母さんが帰ってくるまでの間だけじゃないですか。お母さんだってお父さんの心配がなければ、きつと早く退院できると思いますよ。お母さんを安心させてあげられるのは、お父さんだけなんですよ。」

矢野さんの優しい言葉に泣き出す父。
そうだった、相手は子供なのだった。プライドの高い駄々っ子相手には、ガミガミ叱り付けるよりほめたほうが効果的なのだ。自分の子育てを思い出した私であった。

結局その日は矢野さんの一言で何とか施設に入ることを納得した父であったが、明日になればまた同じことの繰り返しになるにちがいない。何せ認知症とはそういうものだ。

翌朝目覚めたとき、驚いたことに父が朝食の用意を済ませていた。私たちの前にほかほかのごはんと味噌汁、そして茶色の玉子焼きが運ばれてくる。ごはんと味噌汁は母の作り置きだったが、この玉子

焼きは父が今朝焼いたものだった。この茶色い玉子焼き、見た目と
いい味といい、私が子供の頃から覚えていたあの父の玉子焼きにち
ががなく、私は久しぶりに父の手料理を食べた。実は、私は母が作
った玉子焼きよりも父のこの玉子焼きが好きだった。母の玉子焼き
は黄色の光に輝いていていかにもうまそうに見えるが、やや塩気が
強い。それに比べ父のは茶色くひなびていかにもまずそうなのだが、
味はけっして悪くないのである。気色悪い茶色はどうやら玉子に醬
油を混ぜるせいらしい。これに砂糖を効かせた味を想像してみても
ほしい。その玉子焼きが何十年ぶりかで私の目の前に蘇ったのだ。懐
かしくてたまらなかったが、それと同時に昨夜怒鳴りつけた手前、
父の気遣いに対してすまなく思い、また、自分はまだまだ一人で何
でもできるというところを私達に見せたいのだろうなと察せられ、
そんな父がいじらしく思えてならなかった。

しばらくすると母の担当医から電話で呼び出しがあった。

父を矢野さんに任せ、私と倫子と義弘叔父さんと三人で見舞いが
たら、母の病状について説明を受けた。担当医は若い医師で、相談
室に私たちを通し、パソコンを操作しながら、カテーテルを流した
母の心臓の映像を見せた。パソコンの画面に映し出された母の心臓
の内部と思しき映像に、黒い影がさあっと走る。影は徐々に先細り
になり、やがて複雑な血管の形を形成する。その様子はさながら濡
らした紙にぼつんと垂らした墨がとぐるを巻いて流れるのと同じイ
メージだ。

先生はさらに診断説明書に心臓の絵を描いて説明する。一般的に
心臓には血管がこう這っている、母の場合この血管が多少人より長
めだが、この血管の先端に血の塊が詰まったのだ、幸なことに血の
塊はいつの間にか勝手に流れていったため、最悪の事態は免れた、
しかし心臓の一部は壊死してしまった。そう説明する先生の息がち
よつと臭い。

「いずれにせよしばらく入院してもらった後、もう一度カテーテル

を入れて調査する必要があります。その間安静にしていってもらう必要があります。」

説明を聞いて、倫子がすかさず聞く。

「どのくらいの入院期間になりますか？」

心配なのは、母の体ではなく、むしろいつ母が出てくれるか、そしてその間父をどうするか、という自分自身に差し迫った問題のほうだと言わんばかりの質問だ。

「最低でも二ヶ月くらいは入院してもらわなければならないね。」
私たちは愕然とした。長くてもせいぜい一月ほどと踏んでいたのに、まさか最低二ヶ月とは……。

午後になって介護士が家に来た。私たちはまさに地獄に仏の気持ちで彼を迎え入れた。介護士が紹介した施設は長岡のはずれのYという町にあり、父以上の認知症の老人もいれば、寝たきりの老人もいて、さらに内科医が常時勤務するという老人専門の施設であった。父以上の高齢者も多くいるそうだ。介護士の話を聞く限り、そこに預けておきさえすれば今回の一件はすべて丸くおさまるように思われた。ただし、である。入居期間は一ヶ月間のみ。どうやら空きがあるのが短期入居用のベッドしかない状況らしい。厄介なことに、連続して二ヶ月間入居するのはダメとのことで、仮に母の入院が二ヶ月だとすると、残る一ヶ月間、どうしたらいいのか。これが入院期間が三ヶ月と言い渡されたら……。介護士は言う。

「ひとまずここに入っていたらいい、その間に次の施設を見つけたしかありません。何とかがんばってみますが、果たして空きがあるかどうか。」

「さんのお力で、そこを何とかして、一ヶ月だけでも延長できないものでしょうか。」

と私は食い下がったが、返事はこうだった。

「何度か掛け合ってみますが、おそらく無理でしょう。ご存知のよう()にさほど存じているわけではなかったが……、いま老人施

設の数が逼迫していて、なかなか空きがない状況なのです。空きを待っている人が次々におられますので、施設側としてもそう簡単に規則を曲げることはできないと思われます。」

家族があまりにしつこいようだったらこう言えばいい、という介護士マニユアルに従ったような言い方である。来たときには後光が差していたかに見えた介護士だったが、とたんにタダの人、それも役所の木っ端役人に見えてきたから不思議なものだ。いずれにせよ引き返す道はない。私たちは介護士の提案をのんだ。ついては、ひとまず入居のための診断と介護レベルの症状を把握するために本人と面談したい、連れて来てほしいと施設側が言っているとのこと。何のことはない、テイのいい入居審査だ。

「じいちゃんが今度入る施設は、Ｙにあるんだってさ」
そう父に言つと、

「何の施設ら？」
もう忘れている。

「じいちゃんがこれから入る施設だよ。昨日入るって言ったじゃないか。」

「いいや、そんげん施設なんか、おれは入らなくていいや。家がいちばんいいや。」

ああ、また始まった。

と、ここで怒りを露わにはいけない。先ほど母にコッソリ教わった理屈を使つて、駄々っ子をあやす要領で言つてあげなければならぬ。

「そうじゃなくて、施設のほうがじいちゃんにぜひ来てくれ、と言つてるんだよ。ホラ、じいちゃん、今まで週に一、二度ずつ市の施設が迎えにきてたろ？あれと同じような施設がどうしてもじいちゃんに手伝つてほしいんだってさ。若い女の子ばかりで手が足りないんだってさ。じいちゃんのあの手品を年寄り連中に披露してあげてほしいんだってさ。」

父の目の色が変わる。

「そういうことらきゃあ、何日か行ってもいいもな。」

母のマニユアルは実に正しい。いまの父の扱い方をよく心得ている。さすが夫婦である。《駄々っ子あやし作戦》は大成功である。小心者のくせに見栄が強く、見ず知らずの人の前に出ることをあれだけ恐れる父が、なぜ毎週二回欠かさずに老人福祉センターに通うことができたのか。母の情報によると、どうもそこに勤める若い女性が目的らしいのである。その中に気に入った女性がいたに違いなし。若さを保つ秘訣が生きがいを持つことにあるとはよく言われることだが、人間が生き物の一種である限り、その生きがいの根元にあるのが種の繁殖であることは間違いない事実らしい。人間の行為のすべての根本はリビドーであると言ったフロイトは、正しいのかもしれない・・・自信はないが。

「じゃあ、明日いつしよにその施設行ってみようよ。」

「どこにあるが？」（さつきYだって言ったじゃないか！）

「Yだってさ。」

そう言うと、父はいきなり目をむいて、「なにやあ？Y？」と怒鳴る。失敗か？「Yなんかおりゃあ行きたくねえいや、あんげん田舎長岡がいいや。」

こいつは困った、予想外の事態だ。母のマニユアルに対処法はない。とっさに私は言った。

「そう言うなよ、じいちゃん。Yって、たしか死んだ隆治おじさんが郵便局長やってたところじゃなかったか？おじさん、あそこで死ぬまで働いてたんじゃないか。おれも倫子も隆治おじさんにはずいぶん世話になったしなあ。これはきつと隆治さんがさびしがっていて、じいちゃんを呼んでるんだよ。」

普段から鈍重な私にしては機転が利いていた。隆治伯父という人は父の八人兄弟の次男で、もう亡くなって二十年数年たつ。倫子の最初の結婚で一族総出で猛反対したとき、倫子に情を説いて一度は納得させた、あの伯父である（結婚篇参照のこと）。Yの町と聞いて私が第一に思い浮かべたのがこの隆治伯父だったのである。父は懐

かしそうに言った。

「おお。そうらったなあ、隆治がずうつと局長やっつたとこらなあ。そうらろつかなあ、おれを呼んでがあるかな。」

「そうだよ、きつと。とりあえず、明日行ってみようよ。そうだ、義弘おじさんも来てもらおう、だって隆治さんがずつと郵便局長やっつたとこへ行くんだからね。いま残ってる兄弟は義弘さんしかないじゃないか、兄弟で言ったほうがいいだろ？」

父は納得した。死んだ隆治伯父にまた助けてもらった。私は感謝の思いを新たにし、心の中で合掌するのだった。

その夜、私は倫子と母の付き添いを交代し、病院の宿泊室に泊まった。

宿泊室といっても、畳十畳分くらいのただっ広い部屋をカーテンレールで仕切っただけの極めて殺風景な部屋で、私達にあてがわれたカーテンの敷居の中に入ると、昨夜倫子がヒマにまかせて読んだと思われるレディースコミックが置いてあった。私はそのイヤラシイ描写のすごさに感動しながら一夜をすごした。同じ部屋の隅のほうの敷居には別の家族があり、若い女性と年輩の男性のひそひそ声が聞こえた。今晚どちらかが泊まるのだろう。女性のほうだといいな、同じ部屋で女性と二人きり、何かあったらどうしようか、などとレディースコミック的な変なワクワク感を胸に抱きつつ床にいたが、消灯の際に「デンキ切りまーす」と男性の声がしたのでがっかりしたのであった。倫子は家に戻って矢野さんといっしょに一晩父の面倒を見たのであったが、翌朝病院に来て私に会ったときの第一声は、「ほとほと疲れたて」であった。

「あたしゃ、あんげんワガママ者とは絶対に一緒に暮らせねえわ。こつちが腹立つばかりで、精神衛生上よくねえわ。こつちがおかしくなってしまう。ばあちゃんが嫌がるの、よくわかったわ。」

施設に入る入らないでまた相当もめたらしい。《駄々っ子あやし作戦》を、倫子は母から教わっていなかったのか？ふと考えると、

倫子にも駄々っ子っぽい部分があることに気づく。父に似たのかどうかわからないが、駄々っ子でなければ最初の結婚はできなかっただろうし、離婚にも踏み切れない、再婚できなかったにちがいない。駄々っ子同士が意地の張り合いをしてももめるだけだ。どちらかが大人にならなければならない。

倫子は家に帰って早速カレーライスを作ったそうだ。カレーだったらしばらくの間作り置きがきくので、男所帯でも大丈夫と考え、あえてカレーにしたそうである。それが今朝になって、早起きの父がまたまた気をきかせて朝食の準備をしようとしたらしく、カレーを温めたはいいが、それをすっかり忘れて散歩に出て行ってしまい、焦がしてしまったそうだ。物のやけどげの強烈な臭いで倫子夫婦は目を覚まされたとのことだった。まったく危険極まりない。

「朝から焦げたカレーを食わされましたよ。」

矢野さんは苦笑いしながら、あきれた様子でそういった。

「やっぱダメらね。こりやもう、何があっても施設に入れねえばならんて。あやうく火事になるところらったて。」

倫子の決意は固そうだった。

矢野さんとの再婚生活ですっかり落ち着いたと思っていたが、こうと決めたら何物をもおそれず突き進むあの倫子の姿を、私はこのときひさしぶりに見出したのだった。

介護士が紹介した施設はYの街外れの小高い山の上にひっそりとあった。

私が運転する車の中で、助手席に座った父が「これはYへ行く道だろう。」と言うのでそうだと答えると、「何しに行くが?」と聞いてくる。昨日からいったい何度同じことを説明したことが。

「施設へ行くんだよ。」

「施設?何の施設ら?」

「じいちゃんがこれから入る施設だよ。」

「いやらいやあ!そんげん施設、俺は入らねえいや!」

ああ、せつかくここまできて、また始まってしまった。またも《若い女の子が手伝ってほしいとお願いしている》理論と《隆治伯父が待っている》理論とを使つて、一から説得する。とりあえず納得したようだ。すると父は、若い時に何度も通つたと思われる道路のルートをそのつど逐一解説する。この橋をわたつた先に 小学校がある、そこを左に曲がるとSの町へ出るなどと、こちらが聞いてもいないのに次から次へと教えてくれる。うるさくて仕方ないが、そこは私もはやすつかり慣れたもの、《駄々つ子あやし作戦》で、そうかそうかよく覚えてるな、と感心してみせる。するといかにも得意げに「何度も通つた道らすけな。あん時やほんに苦労したいや。」と昔を懐かしむ。昨日のことは全然覚えていないくせに、何十年も前のことはやたら鮮明に覚えている。

施設に着いて入り口でスリッパに履き替え、すぐ右手の受付で事務服姿の無愛想な年配の女性に用件を伝えると、奥から紺の縦縞のユニホームに身を包んだ若い女性が二人、にこやかな表情で現れた。こちらへどうぞと奥の部屋へ促され、受付を右に曲がる。そこから先は、別世界になった。長い廊下の壁の下方には色紙を切つて作つたチューリップの花々が彩り鮮やかに貼られ、上方には色紙の輪をつなげて作つたモールが波打っている。ところどころに絵が飾つてあるが、どれも入居者がクレヨンで描いたものと思われ、子供っぽいのだが、どこか子供らしくない絵だ。これはまさに保育園だ。

廊下の突き当たりを左に行くと、大きな食堂らしき広間に出る。広間にも色紙細工が所狭しと貼り付けられている。並んだテーブルの向こうにテレビがついており、その周りを車椅子に座つた老人達を取り囲んでいる。誰も何も話さず、死んだ魚のような目で、ぼつとテレビを見つめている。中には口から涎を垂らしているおじいさんもいる。テレビから軽快な音楽に乗つて若い女性タレントのCMが賑やかな流れ、それが老人たちの亡霊の集いのような雰囲気。いやおうに目立たせている。おっと、一人だけさもおかしそうにゲラゲラ笑っている人がいるぞ。単なる住宅関係のCMなのに、何が

おかしいのか。笑い方も独特で、かすれた声の、ひきつけを起こしたような笑い方だ。みんないつたいどんな気持ちでテレビを眺めているのだろうか。

なにぶんにもこうした施設に来たのは初めてなので興味はつきないが、彼らを見ること自体にどこか罪の意識を感じるものがあった。私は見てはいけないものを見てしまったかのように目をそむけた。だが父はちがった。興味津々で彼らを眺め、汚いものを見るとき表情、ガキ大将の子供が相手を見下してさも得意になるときの表情で彼らを見ていた。この二ヶ月後に自分が彼らの仲間入りし、他の患者から同じように見られるようになるうとは、まさかこのとき思ってもいなかったことだろう。

ユニホーム姿の眼鏡をかけた男性職員が一人、車椅子を押して広間に入ってきた。車椅子にはしわくちやのおばあさんが座っている。おばあさんは白目を剥いて、天井の一点を見つめたままだった。私達とすれちがうとき男性職員は軽く会釈し、明るく「こんにちは」と挨拶する。

大広間の隅の「相談室」と描かれた部屋で、職員との面談が始まった。二人の女性職員がにこやかに父の名と年齢を訊く。転倒直後、脳外科の先生から同じ事を訊かれたときはさすがにちがう。しっかりとじぶんの名前と年をいえる。事前に私達が書いておいた資料に目を通しながら、職員は言う。

「長沢さん、スポーツが得意だったんですね。お若い頃にはいくつも賞をもらったって聞いてます。」

この資料に必要な事項を記載したのは私だが、そこには「過去にご本人が経験された出来事で最も自慢としていらっしゃることをご記入ください」との質問に対して陸上競技でいくつか賞をもらっている旨を書いておいたのである。

二人の女性職員、どうやら父の好みのタイプの女性ではなかったと見えて、来た当初はさほど生き生きとしていなかった父であったが、いまの言葉ですっかり気を良くしたらしく、突然熱い口調で語り始

める。

「陸上のせんしゅらったがあて。四百メートルらて。三島郡ですうつと一位らったがあて。おれを知らねえもんはいねかったて。」

「それはすごいですね。それじゃあ、さぞかし女性にももてたでしよう?」

「いやあ、そんげんでもねえて。」

ちよつと照れながらも得意満面の笑みで返す父。調子付いて言う。

「まあ町を歩いてて『あれ、陸上の長沢さんらて』なんて女の子達がキヤーキヤー騒いでるのはわかったけどね。」

それ、ホントかよ……。

「そうですよねえきつと、お若いときだったら、私達でもウツトリしちゃうますよ。」

おいおい言い過ぎじゃないの、などと思いつながらも、女性職員の父との対応ぶりが、私がすでに実践している駄々っ子相手の大人の態度であることに気づく。しかもうまい。おそらく『認知症老人との対応方法』などというマニュアルか何かに、父のようなガンコ者タイプの認知症患者との対応方法が書かれていて、それに従って対応しているのだろう。マニュアルには、《軽度の認知症患者は直近の出来事より過去の出来事を詳細に記憶している。それも人生の最も輝かしい一時期の経験を最も記憶しており、これを唯一の生甲斐とする患者が多いため、面接等対応に際しこの生甲斐に触れることによつて患者は対応者に心を開くものである。》とか何とか書かれているのかもしれない。職員はさらに訊く。

「長沢さん、ここへ来る前は長岡市内の福祉センターに通われていたんですって?」

これも私が資料に書いておいた事柄である。

「そいがあて。おれは行きたくねえがあるも、センターの女の子がどうしても来てくれっていうもんでなあ。いろいろと手伝ってがあて。いい子らよ、あの子は。」

「お手伝いって、何のお手伝いしてるんですか?」

「ああん？いろいろらて。」

自慢すべきことが少ないからか、あるいは記憶が薄いからか、父の言葉がそこで止まる。すかさず私が父に言う。

「じいちゃん、誕生会かなにかでみんなの前で手品やって喜ばせてほしいじゃないか。」

「おお、そうらつたな。」

私は決して認知症患者対応マニュアルを読んだわけではないが、だいたいのことはわかる。マニュアルにはきつところも書かれているに違いない。《老人の生きがいは自身が社会的に必要なとされていることを自覚することによって生まれるため、患者には自らの社会的行為がどのように役立つているかを説き、生きることへの希望を忘れさせないよう努める必要がある。》

「ええっ、長沢さん、手品ができるんですかア？すつごーい。見たい、見たーい、ここでやってもらえませんかア？」

若い女の子が人にものを頼むときの、いかにもといった言い方で職員は言う。すると父はさらに調子付き、「でえ、じゃあやってやるうか」とタバコをポケットから取り出し一本火をつける。

「この火がついたタバコがあつという間になくなるすけ、見ててみ。」

「ええーっ、ホントになくなるんですかア？」

「なくなるがあて、どおれ、ハイッ！」

そう言つて、父はタバコを指の間に挟んだ手で顔を覆う。両手をぱつと広げたとき、その手からタバコは消えていた。手を表裏にしてどこにもタバコがないことを確認させ、自慢げな表情をする父であったが、その口元が大きく膨らんでいるので、口の中にタバコが入っていることは一目瞭然である。誰の目にもタネがわかつているのにさも得意げに演技する父の姿がおかしくてたまらず、腹を抱えて笑いたくなるのをぐつとこらえる。普段おとなしい義弘叔父が「アハハハ」と大声で笑い出す。しかし女性職員はさすがであった。パチパチと拍手し、大げさに「すつごーい、タバコ、どこへ行つた

か、全然わかんない。」などと手品そのものに感動している素振りを見せる。再び顔面に持つていった手をパツと手を開くと、指の間に火のついたタバコがある。口元は手品をやる前と同様の、やや開き加減の口だ。父は言う。

「どうやってるか、タネあかししようけ？」

「ええ、ぜひ教えてください。」

「どうしようかなあ、これ教えるとなあ、あとで面白くなくなるしなあ。」

私はもうおかしくてたまらず、思わず笑いながら言ってしまう。

「いや、もう十分面白いよ、じいちゃん。」

余計なことを言うなとばかり、ゲラゲラ笑う義弘叔父と私を一瞬目で制して、女性職員は父に言う。

「ここにはそんな手品できる人はいませんよ。こんど、ぜひみんなの前でやってもらいたいなあ、お願いしますよ、長沢さん。」

一通り面談を終え、父を誘ってタバコを吸いに行く。女性職員に喫煙所を訊くとこの施設にそんなものはないという。まったくどこもかしこも禁煙で、喫煙者にはつらい。喫煙者はどうしているのかと問うと、庭の隅に灰皿が置いてあるから、そこで吸っていると言う。先ほどの大広間を抜けてさっそく庭へ出ようとすると、ガラスの出入り窓の戸が全然開かない。鍵がかかっているのだなと思って鍵を探すが、通常はガラス戸の真ん中にあるべき鍵がなく、はるか下方に鍵がかかっている。ああこれだ、と鍵を開けるが、それでも戸はびくともしない。そんな私達の様子を見て女性職員が声をかける。

「ああ、それは上のほうにも鍵がかかっているんですよ。」
上を見ると、たしかに鍵がかかっている。

「勝手に外へ出ちゃう人がいるので、上下に鍵をつけてるんです。でもさすがに背が高いと便利ですね、私達じゃなかなか上まで手が届かなくて……。」

庭へ出ると、そこにはさきほどすれ違った眼鏡の男性の職員が来

ている。男性職員はスタンド型の灰皿の脇に立って、いかにもうまそうにタバコを吸っている。私達を目にして軽く会釈をするので、思わずこちらでも会釈を返す。

「タバコはここでしか吸えないと聞いたものですから。」
と男性職員に言つと、

「そうなんです。一応医療機関の施設ですから、館内は全面禁煙なんです。」

と答える。

「タバコ吸いにはつらくないですか？」

「もう慣れましたよ。」

毎日毎日老人介護に追われ、さぞ大変なのだろう。先ほどのおばあさんのように、寝たきりの人ならまだしも、父のようなガンコなワガママ者を相手にしていれば気も滅入ってくるだろう。母はそれで倒れたのだ。介護の仕事なんて、仕事だと割り切らない限り、普通の人には到底できるものではない。たとえ介護の対象者が血を分けた肉親であってもだ。これが老人ではなく自分の子供であれば、その子のために必死で尽くすだろう。しかしそのときの無償の行為のことは介護とは呼ばない。

ここには椅子がないので、ずっと立ちっぱなしでタバコを吸う父を気遣い、職員は「すみませんが、これで・・・」とそばにあったバケツをひっくり返し即席の椅子として父に勧める。男性職員は言う。

「タバコを吸う方の入居は今回が初めてですね。これからは一緒に吸いに来れますね、よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく願います。一人ではここへ来れないので、そのつど誘ってやってください。」

「わかりました。私もタバコをすいに出る口実ができてありがたいばかりです。」

と職員は言つて、大きく吸い込んだ煙をふうつと鼻から出す。

「ここは眺めがいいですね、長岡の街がすっかり見渡せる。あれは

病院ですね、いま母があそこに入院してるんですよ。」
私がそう言つと、

「あの地震の前までは向こうは見えなかったんですよ、このすぐ前に杉の林があつて。この間の地震で山が崩れて、すっかり見晴らしがよくなつてしまった。」

小高い山の上からは、一面田んぼが広がるYの田舎町が見渡せた。ところどころにこんもりした林が見える。人家は道路に沿つてぼつりぼつりとしがなく、目立つ建物といつたら農協のマークのついた古びた建物が一軒見えるだけである。農作物の共同集積所か何かなのだらう。その建物のすぐ横を小川が流れている。小川には小さな橋がかかつていて、まれに軽自動車か橋を渡るのが見える。信号はほとんどないようだ。田んぼのはるか先には信濃川の土手が見え、その向こうには霞にかかった長岡の街並みがある。母の入院する病院はその土手のすぐ手前の灰色の建物で、マツチ箱を立てたように見える。一部残つた杉林からはアブラゼミのザワザワ鳴く声がうるさい。まだまだ暑い日が続いていた。冷房の効いた施設の中から外へ出ると、すぐに汗が出てくる。

「じいちゃん、暑いからそろそろ中へ戻ろうか。」

と父を促すが、タバコはとくに吸い終わっているのに
「もうちよつと待つてれいや。」

となかなか動こうとしない。逆さバケツの即席椅子に腰掛けたままはるか遠くの長岡の街を見ている。汗をかいている雰囲気があったくないのに驚く。

「暑くないのかい、じいちゃん。」
と訊くと、

「ぜんぜんあつちやくねえ。」

と答える。まさか暑さまで忘れたわけじゃないだろうな、と少々心配になる。

その日の面接の結果、明日から父の入居が許可された。これで当

面心配ない、ようやく一段落したと思いきや、わが父はそれほど甘い男ではなかったのだった。父の駄々っ子ぶりは通常の駄々っ子の域をはるかに超えていた。

（介護篇・中へ続く）

介護篇（中）

（介護篇続き）

父の入居はその日のうちに決まった。準備でき次第入居できるという。私は義弘叔父といったん家に戻り、父の部屋から小さなテレビ運び出した。それから施設の『入居の手引き』にしたがって洗面用具と着替え一式を用意した。手引書には「他の人の所有物と間違えぬよう衣類関係すべて、靴下一足に至るまで名前を記す」よう指示があった。また、「何かご本人の思い出になるような品物（たとえばアルバムや記念品）を持ってくるといい」とあったので、私は娘が三、四歳頃の四切写真を額縁に入れて持たせた。娘の写真は父のベッドの脇に立てかけられた。父はその写真に「おお、かわいいいいやあ、かわいくてしょうがねえいやあ」と言つて頬ずりした。手引書にはタバコを持参していいとは書いていなかったが、カートンだけ持たせた。現金は事故になるといけないので不要とあったが、何かあったときのために現金二千元を渡した。父はその金をふだんから大事にしている皮製の財布におずおずとしまいながら、「これだけらか、もつとよこせや。」

と言う。ここにいればそんなに金を使う機会はないはずだからこれで十分と言つと、

「金がねえと、心配でならねえがいや。」と返す。

「そんなに持つてて、いったい何に使うんだよ。」

「タバコらとか何だやらで、いろいろあるろうがや。」

「ないよ、そんなの。タバコだつて一箱あるんだから、これではらくは持つよ。」

タバコカーテンは、先ほどの男性職員に渡しておいたのだが、そんなことなどすっかり忘れていた父であった。

父の入る部屋にはベッドが三台置いてあり、それぞれカーテンで

仕切られていた。父のベッドは部屋に入ってすぐのところだった。私たちが荷物を運び込んだとき、隣のベッドではよそのおじいさんが口をぽっかりあけて死んだように眠っていた。

すべての準備を整え、私はさびしげな様子の父に別れの言葉を言った。

「じゃあな、じいちゃん。おれはこれから東京に帰るよ。また来週来るから、それまで何とかガマンしてここですごしてくれ。そうしないと、ばあちゃん心配で病気が治らないからな。ばあちゃんが元通りになったらまた家に帰れるから、それまでの辛抱だから、がんばってくれ。」

さびしげな表情を浮かべながらも父は、

「おう、わかったいや！」

と語気を荒げてさもうるさそうに言った。ガンコでワガママな姿勢を一切崩さなかったわけだが、このときの父の態度は、実は義弘叔父と一緒にいたからだということが後になってわかった。

この翌週、私だけで見舞ったとき、父はこんなワガママなガンコ者ではなく、気の弱さをそのまま丸出しにしていた。ケンカに負けたガキ大将がちょうどこんな感じだ。ふだん子分の前では威張り散らしているくせに、よそのガキ大将とケンカして負けたりすると、それまでとはまるで別人のように大人しくなってしまう。父は、私の前では心の傷を、破けて中の肉がむき出しになったような心の傷を、あるがままにさらけだしていた。そんな父は、私の言うことすべてをまるで神のお告げか何かのように聞き入れた。そして涙ぐみながら、

「陵輔、ばあちゃんを助けてくれやなあ、お願いします、お願いします。」

などと殊勝なことを言って、私を神様のように拝むであった。そんな父がかわいそうに思えてならなかった。

しかし、これが私の他に誰かが一緒にいる場合、その人の前では一切弱みを見せないのだから不思議なものだ。よく同行してもらっ

たのは義弘叔父だったが、この人は父の八人兄弟の末っ子で、私とは最も年齢の近い叔父である。もの静かで温和な、誠実な人柄で、昭和一ケタ世代の父とちがい、多分に現代風いまなところのある常識人である。父はその末弟の前で兄貴として無様な姿を見せたくなくなつたのにちがいない。

父の実家はあの辺一帯の地主だったこともあつて、昔ながらの封建的な風土が根強く残っていた。目上の者の命令には目下の者は絶対服従、そのかわり目上の者は目下の者を保護し、かつその威厳を保たなければならぬ、そんな精神が体の隅々まで、骨の髄から髪の毛一本に至るまで兄弟の血の中に染み渡っていたのだ。

それから約一月の間、私は毎週末東京―長岡間を往復した。金曜日、会社が終わるとすぐ東京駅で新幹線に乗り、夜、長岡へ着く。真つ先に母の見舞いに病院へ向かい、翌日の土曜日、父の様子を見に車で施設へ行く、そんな週末が続いた。母は日に日に快方へ向かい、いつでも退院できるほどまでに至つたが、父はますます老い衰えていき、認知症はひどくなるばかりであつた。

入居当初のこと、私は会社で急ぎの仕事に追われていた。突然私の携帯に電話が入った。施設の職員からだつた。お父様がぜひ息子さんとお話したいと申されていますので、というのでやむなく変わつてもらつと、電話の向こうからしわがれた父の声がする。

「陵輔、俺らいや。もう、嫌らいや、こんげんとこ。へえ首くくつて死んでしまひてえようらいや。俺やあ家うちに帰りてえや。」
今にも泣き出しそうな言い方である。そんな父を私は冷たくつき放す。

「なにを言つてんだよ、まったく。いま家に帰つたつて誰もいないんだぞ。ばあちゃんが入院して今にも死にそうなのに（当然ウソ）、じいちゃんがここでがんばらないでどうする。じいちゃんがあんまり心配ばかりかけると、ばあちゃん余計に悪くなつてもう病院か

ら出て来れなくなるかもしれないぞ！」

「そいがあか、そんげん悪いがあか。」

「ああ、悪いんだ。生きるか死ぬかの境目だ。おれもがんばってるし、ばあちゃんもがんばってるんだ。じいちゃんもそこでしっかりがんばってくれなきゃ。じいちゃんが我慢してくれればそのぶんばあちゃんは早く退院できるんだからさ、もうちょっと我慢しろや。」

「おおや、わかつたいや。」

そう言うといったんは引つ込むのだが、その後忘れかけたころにまた電話がかかってくる。出ると、やはり父で、先ほどとまったく同じ内容を申し立てる。

「何度も何度も電話してくるなよ、こっちだって忙しいんだから！」とたしなめると、

「いつ俺が電話したいや？おめえに電話なんかしてねえよ。」
と言っ。

「さっき電話してきたばっかりじゃないか！」

思わず怒鳴るが、相手が認知症であることに思い至る。そう、ここで怒ってはいけないのだ。東京ではつい忘れてしまいがちな《駄々っ子あやし作戦》を改めて思い返す。私は父に言う。

「じいちゃん、悪いけど、施設の人に代わってくれんか？」

施設の担当者が電話に出る。男性の職員だ。一緒にタバコを吸った彼かもしれない。私は言った。

「すみませんけど、父に電話しないよう措置していただけませんか？施設の担当者は申し訳なさそうに言う。」

「お仕事中に申し訳ございません。あまりにもお気の毒そうだったものですから。」

「何とか電話しないようお願いできませんか？」

「がんばってみますけど、お父様は電話できなきゃ、もう死ぬ、死ぬとおっしゃいまして……。」

あきれてものが言えなかった。私は職員にこうお願いした。

「それじゃあ、もし父が電話したいと言って来たら、私に電話する

フリして、『出ません』と言ってやってください。」

「それでよろしいんでしょうか？」

「全然問題ないです。本当にもし何かあった時だけ、私の携帯あてにそちらから電話するようにしてください。」

「わかりました。」

とりあえずこれで父からの電話は止んだのだが、この父の執拗な電話攻撃に煩わされたのは私だけではなかった。父は、義弘叔父はじめ気軽に声をかけられる親戚には、片っ端から電話をしていたのだ。電話の内容はみなだいたい同じだった。ここから出してくれ、出してくれなきや首くくって死ぬ。さもなければ金の無心だった。

父をよく知る親戚たちは父が首をくくるなどということは絶対にないとよくわかっていたので、死ぬと言われても慰めて元気づけるだけのこと足りたのだが、金の無心については親戚である手前、果たして持つて行った方がいいのかどうか判断つきかねた。私のイトコなどには現金十万すぐ持つて来いなどと命じたらしい。当然断られたが、父はそれが相当頭に來たらしく、後になってさんざんそのイトコの悪態をついていた。

「貞夫のやつあ、ほんに金に汚ったねえ奴らいや。」

「いったい父は金を何に使うつもりだったのだろうか。」

父の金の使い道がわかったのは、約一カ月後、この施設を退出するときであった。

荷物をまとめて車に放り込み、さて最後にごあいさつをと受付まで行くと、例のメガネをかけた男性職員がちよつとこちらへと手招きする。何事かと思つてそばに行くと、私にそつと千円札を一枚手渡す。何の金かと問うと、ひそひそ声で職員は言った。

「このあいだ施設で夏祭りがありましたね、毎年やっているんですが、近所の子供たちがこの施設にいっぱい集まるんです。子供たちみんなこの暑い中を踊りやら歌やらで一生懸命やってくれましてね、汗だくになっている子供達を見て、お父様、きつとお気の毒にお思ひになつたんでしょうね。『これで子供にアイスキャンデーでも買

「つてやってくれ」とおっしゃって、私にこのお金をお預けになったんです。本当にありがたいことなんです。こちらとしてはこういったお金を受け取るわけにはいきませんので、お返ししておきます。お父様のご好意を無碍にはできませんし、といってご本人にお返しするわけにもいきませんから、これはお父様にわからないように息子さんにお返しさせていただくのが適当だろうと思ひまして。でも、本当にいいお父様ですね。」

確かに父にはそんな一面があった。私が家族連れで長岡に帰ったとき、父がわが子らにこう言っていたのを思い出す。

「一所懸命勉強してくれやなあ、そうすりやおじいちゃん、いつでもネラ（おまえ達）に小遣いやるすけんなあ。」

父が施設に入ったことによつて、とりあえず一月間の猶予ができた。しかしあくまで一ヶ月間である。この間に私達は次の手筈を整えなければならなかった。

まずしなければならないのは母の入院期間の短縮である。最低二ヶ月は入院してもらふ必要があるとのことだったが、果たしてその期間を短縮できないものかどうか。まずは母と医者とに確認するしかあるまい。

父の入居期間が終わりに近づいた頃、母はすでに集中治療室を出て、一般病棟の六人部屋で寝泊りしていた。

私が病室に入ると、母は隣のベッドの同年代らしき女性の患者さんと楽しげに談笑していた。私の顔を見ると笑顔がさらに元気になる。隣のベッドの女性が「息子さんですか？まあ立派な息子さんをお持ちで。」などとお愛想を述べる。私は軽く会釈する。母はお見舞いにもらったクッキーの箱を手にして「向こうで話そうて」と立ち上がり、病室を出る。病室への廊下の途中に面会用の広間があった。他の家族が先客について、私たちがやや離れたテーブルにつくと、ちらとこちらを振り返る。振り返った黒髪の女性と目が合うが、お互いにあいさつはしない。母は「何か飲むかい？」と広間据付の

自動販売機に小銭を入れる。緑茶のペットボトルを手に、空いているテーブルに着く。クツキーの箱を開け、私に勧める。

「アタシやこんなに食べねえすけ、アンタ、食べれて。」

クツキーをむさぼりながら、私は懸念していることを母に相談した。「来週オヤジを施設から出さなきゃダメだけど、どうしようか。ばあちゃんはまだ入院してなきゃだめなのか？そろそろ退院できるんじゃないか？先生は何と言ってる？」

すると先ほどまで明るかった母の顔が急に曇る。母は私にこう言った。

「こんげんことになったからには、もう二度とあの人とは暮らせねえて。これ以上介護が続くなら、とてもじゃない、アタシのほうが先に死んでしまう。実は先生からはもういつでも退院していいと言われてるがあて。だけどオヤジの次の施設が決まるまでの間、もうちつとばか長く入院させてくれって、アタシから病院に頼んでるがあて。明日にでもアンタ、介護士の　さん呼んで、何とかオヤジをそのまま今の施設に置いてもらえねえか、アンタから頼んでくねえけ？」

クツキーを齧る私の手が一瞬止まる。

これは困ったことになった。母はもう父の介護はコリゴリだと言っているのである。自分がこのような体になってしまった以上、これからの老後を生きていくためには、余計な苦勞をしたくない、絶対的な安静が必要だ、そう母は言っているのである。体はそこそこ健康だが一人で生きていけない父と、アタマはしっかりしているものの心臓に爆弾を抱える母。たしかに、母にこれ以上父の面倒を見てもらうのは無理であった。さあどうしたらいいか。誰が父の介護を引き受けるのか。

「とりあえず明日、　さん呼んで、相談してみるよ。でも、たぶんダメだと言われると思うよ。そんな時はどうする？」

「今の施設じゃなくてもいい。有料でもどこでもいいから、何とかオヤジを引き取ってもらおうようにしてくれえて。一生のお願いら

て。アタシヤ、本当にもう懲りたて、あんげん人。一緒にいると、アタシのほうが先に逝ってしまつて。」

母は入院している間に二度と父と一緒に暮らさないといい決意を心の中に固めていたのであった。

夫婦が生活を供にしないということ、当たり前のことだがそれは則ち別居である。母がいなくなつたらおそろく父はこの先生きていけない。逆に母は父と暮らす限り、長く生きてはいけない。別居せざるを得ないのだ。この別居は、世にありがちな夫婦間の確執とか性格の不一致とかいったいわゆる離婚するときによく使われる理由による別居ではない。むしろお互いの余生を賭けた生存競争なのだ。この競争に勝つた方が残りの人生と生きる環境を手に入れる。『離婚篇』で、人は結婚する理由を明確に言い表すことは難しいが、離婚する理由はいくらでもつけられるものなのだ。要は、いつもその人と一緒にいたいから結婚するのだし、一緒にいたくないから離婚する、それだけだ。それが真の理由だ。

母の場合はどうなのか。まず父と一緒にいたくないのは間違いない。ずいぶん前からそう思っていたらしい。それを我慢に我慢を重ねて、何とかここまで来た。父が介護生活を送るようになっても、それでも耐えて支えてきた。怒鳴られながらも、口汚く罵られながらも、それでも父を見捨てることはしなかった。しかしもやは我慢の限界に来たのである。我慢は限界を超え、母の精神だけでなく肉体までも蝕んだのだ。このまま父と暮らすことは、母にとって死を意味する。わが家に帰り、余生を静かに生きていけるのは、父か母か。まさに生存競争である。この生存競争に子供たる私はどう対処したらいいのか。

だいたい夫婦が別居するとき、子供が二人の間に口を挟む余地はほとんどないと言っている。子供がまだ幼く、この子の将来を考え、あえて我慢して別居を踏みとどまるという場合も中にはあろう。しかし、総じて親の離婚に対して子供は何の意見も申し立てること

はできない。親は勝手に子供を作り、勝手に育て、勝手に別れる。そして勝手に死ぬ。まこともって勝手なものだ。とはいえ世の中はこんな勝手な親に対し「孝行の道」を説く。孝行息子というものは父にも母にも長生きしてもらい、幸せな老後を送ってもらおう、決死の努力をしなければならぬ。親が死に瀕した際は救わねばならない、たとえそれが両親同時であつてもだ。何があつても親の幸せを願う、それがあべき孝行息子の姿というものだ、それが正しい「人の道」なのだ……。

そんなことはいまさら誰に言われなくてもよくわかっている。できれば私もそうしたい。一人きりになつた父を首に縄をつけてでも東京の自宅に引き取つてもよかつたのだ。しかし現実はその甘くない。父を引き取つたとして、家の誰がつきつきりで父の面倒を見るといふのだ。妻か？妻に会社を辞めさせ、まったく無報酬で義理の父といふだけの赤の他人の世話を焼くよう命令するのか。あるいは来年中学受験をひかえた長女に面倒を見させるのか。いずれも無理な話である。父より先に、私の家庭が崩壊してしまう。

そもそも母が退院するまでしばらくの間うちに来るよう父に勧めた時、父は「東京なんか絶対嫌いや、長岡がいつちいや。」と言つていたのではなかつたか。あの大地震の時さえ一步も家から出ようとせず、母に見放された父だ。あのときも母は「じゃあんた勝手に死ねばいいさ。」と父を見放した。これを考えると、仮に父の認知症が完治したとしても、母ののぞみは変わらなかつたかもしれない。かつて倫子の離婚の原因にゲスの勘繰りを入れたように、私は母の別居に対してもまた「肉体的限界」という作られた原因を想像してしまうのである。生きるか死ぬかという境をさまよつた母に対してこの勘繰りはあまりにもひどいと思うが。

とりとめもなくそんなことを考える。まだまだ外は暑そうだ。窓から夏の日差しがキラキラ照りつける。向こう側のテーブルにいた家族の一人がまぶしそうな顔をして立ち上がり、ブラインドの紐を引つ張る。窓の日差しが少し弱まり、急に広間全体が薄暗くなった。

この父母間の生存競争に、倫子はどのような態度をとったか。倫子
は私ほどグダグダ迷っていなかった。まるでガタが来た車にさっさ
と見切りをつけて中古車屋に売り払うように父に見切りをつけ、ま
だ私達の母親として生き続けることができる母のほうに持てるエネ
ルギーのすべてを注ぐことに決めていた。母の希望を相談すると、
倫子は私にこう言った。

「だって、どっちを取るかといえばもう決まってるじゃん。ばあち
ゃんは治ればまだ自分一人で生きていけるけど、オヤジはもうダメ
らて。放っておいたら生きてねえし、ばあちゃんと一緒にしたらば
あちゃんのほうが先に死んじゃうよ。オヤジをどっかの施設に入れ
なきゃ、両方死ぬて。両方死ぬか片方だけでも生きてもらうか考え
たら、当然ばあちゃんには生きていてもらいたいすけんね。」
それを聞いて、私は父の気持ちに代弁するように言った。

「そりゃあそうだが、オヤジは帰る気ではないぞ。どうすんだ？」
すると倫子はまるで何かを宣言するような口調で言った。

「騙してでも何でもアタシヤ絶対に施設に入れるすけんね。」

このへん女というのはドライである。女の強さというのは、自分
ないし自分の愛する者が生きるために必要なことには全エネルギー
を注ぎ、これを犯すものに対しては、徹底抗戦して平気でいられる
ところにある。この女の強さを「生活力」と呼ぶ人もいる。倫子の
「生活力」は、これまでの人生で、自分でこうと決めたらどんな障
害も乗り越えてやってきた倫子だったからこそ持ちえたというので
は、決してないだろう。これは女性であれば誰にでも満遍なく備わ
っている力なのにちがいない。やっぱり女は強い、というわけだ。
なかなか煮え切らない私に対し、倫子は追い討ちをかけるように
言う。

「施設に入れる以外に方法ねえろね？うちで引き取るわけにはいか
ねえし、兄ちゃんとこだって事情はおんなじらる？夏子さん（うち
の家内です）だって、絶対いやらと思うよ。」

そのとおりなのだ。倫子の言葉を補足するように矢野さんが真剣なまなざしで私に言う。

「倫子の言うとおりでと思いますよ。うちもばあさんが寝たきりで、ずっと施設に入ってますが、それまでが一苦勞だった。家の中が糞尿臭くつて、私の娘が年頃なのに家に友達を連れて来れないくらいでしたから。」

父をどうするあてもないままに、施設の入居期限は刻々と迫り来つつあった。私達は焦るばかりであった。そんな時介護士が朗報をもたらした。

後光がよみがえったように見えた 介護士によると、あくまで有料ではあるが、いま母の入っている病院のすぐそばに大きなケアアウスがあり、今なら空きもあるので、審査次第でいつでも受け入れ可能である、とのこと。いやいや、決して審査次第ではないだろう、有料なんだから。絶対にそれなりのお金が必要にちがいないと思い、介護士が持ってきた封筒からパンフレットを取り出すと、いきなり豪華な表紙の写真に目をひきつけられる。清潔そうなアイボリー色のレンガ風造りの建物、その周りを豊かな緑の木々が取り囲んでいる。その右上に、きらびやかな金の飾り文字で『天使の庭』と書かれたロゴが浮き彫り印刷されている。中をめくると、おしゃれなシャンデリアのついた洋風の大広間、広々とした散歩道、ピアノやらバイオリンやらの楽器を取り揃えた音楽室、ビリヤード台や囲碁・将棋台を設えた趣味室に、ジャグジー付き露天風呂など、各施設の紹介写真がそれぞれキャッチコピーとともに掲載されている。介護施設のパンフレットというより、マンションのチラシだ。

これはちよつと父には贅沢すぎやしないか。いま父が入っている施設と比べると、まさに天国と地獄くらいの差がある。

パンフレットの中に黄色い紙が一枚はさまっており、それに入居等にかかる費用の明細表が載っている。入居初期費用がなんと五百万円、そのほか介護料やら食費やらの生活費だけで毎月十数万円と

いつかかるではないか！まさに地獄の沙汰も金次第。とはいえ、弁護士の話を聞くと他にもう施設のアテはないという。一ヶ月空ければいまの施設を改めて予約できるが、やはり短期入居にならざるを得ないらしい。

介護士は言う。

「一ヶ月ごとに短期入居を繰り返しながら空きが出るまで待つしかないのが現状です。」

「空き待ちって、誰かが出て行かなきゃ空かないんでしょう？出る人なんて実際あるんですか？」

私の質問に介護士は冷静な口調でこう答えた。

「出られる方はみなさん、だいたい亡くなって出られるんです……」

人が死ぬのをひたすら願いながら、あてもなく延々と待つ、普通の感覚の人間だったらそんなことできるはずがない。私達はなすすべもなくパンフレットを持って病院に行き、どうするか母と相談することとした。すると母も倫子も二つ返事で「絶対に入れる！金は何とでもする！」と言い放った。やっぱり女は強い。

「五百万もかかるんだぜ。そんな金、どっから出すんだよ。」
私が聞くと、母は言った。

「金は十分あるがあて。」

以前倫子の前夫・正明の姉の会社が倒産した時、父は退職金を前借りして、梨本家から土地を買わされたことがあった。その後景気が上向き、梨本家はその土地を買い戻したのだが、母があると言った金は、その時の金だった。

「もともとオヤジの退職金らすけね。自分で稼いだ金を自分で使うがあすけ、オヤジも納得するろっね。」

母は言った。

膳は急げとばかり、即倫子は『天使の庭』に電話を入れた。今病院にいと告げると、すぐそばだから一度来てもらって中を見学し

てほしいとのことだった。

『天使の庭』の場所はすぐにわかった。

行く前にパンフレットの裏表紙の地図からだいたい位置を確認すると、母の病室から見えるかもしれないと思われたので、窓からそれらしい建物を探すと、二、三百メートルほど離れた辺りに周りの建物から頭ひとつ飛び出た緑色のとんがり屋根が見えた。パンフレットの写真と照らし合わせて、あれじゃないかと指さして母に教えると、母は前からその建物が気になっていたようで、そうだったのかと納得したように相槌をうつ。

「あの緑の屋根の下に外国風の釣鐘があって、そのすぐ下がでっかい時計台になってるらしいよ。」

パンフレットを手にそう言うと、母は、

「へえ、ハイカラがあね。なんだかオヤジにやもつたいねえようらね。」

と言う。考えることはみんな一緒だ。外国風の時計台といい、アイボリーのレンガ造りといい、シャンデリアといいピアノといい、あまりにも父にそぐわないいしゃれたものばかりだ。実際に行ってますますその観を強くした。

『天使の庭』は老人ホームというより、まさに高級マンションだった。

広い駐車場入口の脇にパンフレットと同じロゴの看板が立っていた。私達の目の前に、パンフレットと寸分たがわない豪華なアイボリー色の御殿が聳え立つ。エントランスを入ると薄茶色のガラス張りの短い通路がある。通路の両脇になじみのない洋風の植物が陽を浴びて並び、私達をお出迎えしているようだ。その先には木目調の扉があり、右脇にヨーロッパ中世の銀色の鎧が立っている。これもお出迎えか。木目調の扉がすうつと開く。とたんにさわやかな冷気が体を包む。軽妙なクラシック音楽が聞こえる。目の前に大きなグランドピアノがある。右手の部屋はどうやら理髪室らしい。左手の

廊下の向こうは娯楽室だろうか。いずれもパンフレットと同じなのだが、実物は写真に比べるとやや安っぽく見える。

倫子が入り口正面の受付で用件を伝えると、若い女性が先ほど電話に出た担当者を呼び出す。担当者を待つ私達の前を、女性職員に車椅子を引かれた品の良さそうなおばあさんが通り過ぎる。おばあさんは、カールした髪の毛を薄紫色に染めて、淵無し眼鏡に厚手の化粧をしていた。私達に笑顔で「こんにちは」とあいさつするので、思わず会釈してしまう。どうも入居している老人もYとはだいぶ趣が異なるようだ。ややあつて理髪室の右手の奥からピンク色のユニホーム姿を着た背の高い若い女性が現れた。女性は「長沢さんですか?」と問う。そうですと答えると「こちらへどうぞ」と理髪室の隣のロビーへ通された。

「お暑い中、ご苦労様です。冷たいものでよろしいですか?」

女性はそう言つて、ロビー脇のコーヒールラウンジからアイスコーヒーを三つ運んでくる。それから名刺を出して、

「谷崎と申します、よろしく願います。」

と頭を下げる。名刺には「天使の庭ケアスタッフ・谷崎美恵」と書かれ、営業マンのそのように顔写真が貼られている。下のほうには『天使の庭』を運営していると思しき会社名が書いてある。

「だいたいのお話はご担当のケアマネの　　さんからおうかがいしております。」

谷崎さんはこう切り出した。ポニーテールの黒髪と黒目がちな大きな目、色白の肌、人目を引くほどの美人というわけではないが、とても上品な風貌で、好感が持てる。背の高さは倫子と遜色ないだろう。

谷崎さんは簡単に施設の説明をする。言葉遣いもまたとても丁寧だ。この施設、二階は寝たきり老人専用で、三階から六階までが一般の老人の個室になっているという。一般の老人という言葉にちょっとひっかかる。父は一般の老人ではない、認知症の老人だ。それを言つと、

「認知症の方も入っておられますよ。余りに重い症状の方でなければ、こちらでお世話させていただくことは十分可能ですから、どうぞご安心ください。」

「重い認知症って、どの程度なんですか？」

父の認知症は重い方ではないのか、もしそうならここに入れてもらえないのではないか、そんな心配から、私は質問した。

「ご自分のお名前さえはつきり言えない方も入居されていますよ。車椅子の方もおられますし。こちらでは介護レベル3までの方をお世話させていただいているんです。」

「うちのオヤジは介護レベル2ですね。」

ここに入れてもらえないとなるともう私達には後がないのだ。何とか父を入れてもらおうと、介護レベル2の父に十分入居資格があることを強調するかのように、私は訴えた。藁にもすがる思いなのだ。谷崎さんはそんな私をじつと見て、冷静な口調で答えた。そして笑顔を浮かべた。

「それは存じ上げています。ケアマネさんからおうかがいしておりますから。お話をおうかがいする限り、ご入居できると思いますよ。」

ありがたいことである。谷崎さんに射す後光が 介護士より一回り大きく輝いて見える。

「こちらにお預けいただければもうご心配されることは何もございません。子どもが責任を持ってお父様のご面倒を見させていただきます。お父様もきつとここの生活をお気に召していただけると思いますが。」

ちよつと営業トークっぽい口調であるが、こちらは父を入れたい一心なので、その言葉があるがままに受け入れてしまおう。この施設に預けてあえおけば、すべてが丸く収まるように思えてしまおう。それで私のほうも都合の悪いことをあえて言わないよう心がける。都合の悪いこと、それは父が単なる「介護レベル2の認知症老人」ではなく、ワガママ三昧なガンコ者で、キカン坊でガキ大将そのままの

人間であること、それゆえ普通の認知症患者よりもかなり世話を焼くのが大変だろう、ということである。寝たきり老人のほうかむしる世話が楽かもしないくらいだ。そんな私の隠し事を察知したかのように、谷崎さんはこう言った。

「ただ、ご入居いただく前に一度ご面会させていただく必要がございますね。お世話できない可能性もございますから。わたくしの方から、今長沢様がご入居されているYの施設へおうかがいさせていただきますでしょうか。よろしゅうございますか。」

実際に父に会い、父という人間を見定めた上でなければ、最終的な判断は下せないというのだ。まだまだ安心はできない。父だけを会わせるのちよつと危険だと思い、私は聞いてみた。

「私も同行したほうがいいですか？」

「そうしていただけるとありがたいのですが、お早目のご入居をご希望でしょうから、明日にでもおうかがいしたいと思います。明日は月曜日ですが、ご都合おつけいただけますか？」

「明日ですか、ちよつと無理だな、困ったな・・・」

そう言っただけのほうをチラと見る。すると倫子はそっけなく

「アタシもダメだよ」

と言う。さあ困った。父は、私達がいなくてもキッチンと谷崎さんと対応できるのだろうか？もし変な対応をして、バツテン食らって入居不可の烙印を押されたらどうしようか？『天使の庭』以外、もう当てはないのに。すると谷崎さんは言う。

「ご無理でしたら結構ですよ。ご担当のケアマネの　　さんにご同行していただけるようわたくしのほうから明日にでも連絡をとってみます。」

それは助かる。私は考える。だいたい『天使の庭』だってビジネスなんだから、空き室を作りたくないはずだ。多少父が変な対応をしてもある程度大目に見て、何とか受け入れてくれるのではないか。何せ五百万だからな。いやいや待て待て、ちよつと楽天的に過ぎやしないか？あのオヤジの事だ。入りたくないとか言っただけをこね

るかもしれない。なんだかこの介護相談そのものが、受注できるか失注となるかを模索する営業上の駆け引きのように思えてきたりする。

そんな打ち合わせの最中、ロビーの窓越しに、足元のふらついたおじいさんが若い女性スタッフに腕を組まれてヨボヨボと歩いていく姿が目に入った。スタッフの女性はまるで自分の恋人に話しかけるようにやさしげな笑顔でおじいさんに話しかける。おじいさんは何度も繰り返しながらうづいていて、男性がおじいさんでなかったら、どう見ても恋人同士のカップルだ。二人は建物の外へ出、この暑い中、腕を組んだままゆっくり信濃川の土手方面へ歩いて行った。散歩か何かなのだろうか。

私はそのおじいさんがうらやましくてならなかった。あんなに若くてきれいな女性と腕組みして歩けるなんて。そんな経験は若い時こそ若干あったものの、結婚して以降、ここ最近したことないぞ！なんてうらやましいジジイなんだ。

そう、この施設は『天使の庭』の名称どおり、まさにこの世の天国、しかも人生の終わり間近に経験できる楽園なのだった。

さて次の仕事は父に『天使の庭』に入居するよう説得することである。さあどうやって説得するか、果たして素直に納得してくれるだろうか、また散々駄々をこねるのではないか。みんなが心配する中、私には父を説得するだけの自信が十分にあった。何度も父の元へ通いつめるうち、父がどうという言葉に反応し、それをどこまで覚えていくのか、いつまで覚えているのか、何となく把握できるようになったのである。要するに父の扱い方を心得たのであるが、それができたのはおそらく私だけだっただろう。先ほど述べたとおり、父は他人の前ではみつともない姿をさらしたくないばかりに居丈高になり、それがガンコでワガママに見られたのであるが、長男の私にだけは一目置いていたようで、私が言うことは何でも素直に受け入れた。とはいえ家に帰りたくてたまらない気持ちは変わらず、も

うこんなジジ・ババばかりのところはイヤだ、首をくくるだの、金がないと惨めで死にたいだのと、会話がそこから始まるのは変わらなかったが。私は父のそんな訴えに対して、そのつど新たな理論で臨んだ。ガンコ者である父は、話のスジさえ通れば十分納得するのであつた。私はすでにそれを知っていた。『天使の庭』に入ることに對して、私は父にこう話すつもりでいた。

「おい、じいちゃん、喜べ。ここを出られるぞ！ あともうちよつとの辛抱だ。ここよりずっといい施設が見つかったんだ。それも、長岡のばあちゃんの病院のすぐそばだ。ばあちゃんの見舞いにもすぐ行けるぞ。ばあちゃんは病気が全然治らないから、まだ入院してなきゃダメだけど、その間どうせ施設に入るなら、今のところよりそっちのほうがずっといい。すばらしいところだ。ただな、じいちゃん、そこに入るには、ちょっとお金がかかるんだ。すごいいい施設だから、それはしかたない。普通の人じゃ金がなくて入れないんだよ。年金が十分なきゃダメなんだよ。だからじいちゃんなら入れる。ホラ、じいちゃん、いい会社に三十年も勤めてたたる？ それだけの年金出してくれる会社、そんなにないぞ。さすがだよ、じいちゃん。いい会社に勤めたよなあ。じいちゃん、ぜつたいにその施設、気に入ると思うよ。」

これぞ《じいちゃんではなければ入れない》理論！

この新理論を実際に使ったところ、以外にも父はすんなり納得したので、かえって拍子抜けしたくらいだった。私の予想はみごとに的中した。谷崎さんが会いに来ることも伝えた。父の興味を引くよう、こんなふうにしたのだった。

「その施設でじいちゃんを担当する人はね、若くてきれいな女の人だよ。今度その施設に入ったらその女の人が全部面倒見てくれるんだってさ。よかったなあ、じいちゃん。倫子くらい背が高くて、上品な人だよ。その人、じいちゃんに一度会いたいんだって。来週あたりさんと一緒にここに来るからさ、一回会ってやってよ。」父は目を輝かして私の言葉に聞き言ったのであつた。

時が過ぎるのは早い。『天使の庭』への入居は、谷崎さんとの面会后、即決まった。知らせを聞いて私達はほっと胸をなでおろした。これですべての気苦労から開放されるのだ。

父がYの施設を出る日、私は家族全員を連れて、荷物運びの手伝いをさせた。父は孫達に会って涙を流して喜んだ。父は一ヶ月ぶりに我が家に帰ってきた。家に入るなり大げさに「やつぱり家がいつちいいや。へえおれはどこへも行がねえいや。」と言い、そのまま何をすることもなく座敷の大型テレビに見入るのだった。私はまた『天使の庭』の説明を一から始めなければならなかった。

妻と子供達に父を監視してもらっている間に、私と倫子は『天使の庭』へ入居手続きをしに行った。谷崎さんが私達を出迎え、私達は事務室の奥の会議室に通された。会議室には背広姿の男性務職員が待機しており、私達が入ると深々と頭を下げた。デスクの上には『天使の庭』のロゴの入った書類封筒が置かれていた。封筒の中には入居契約書が入っていた。すでに契約書は出来上がっており、私達はハンコを押すだけだった。契約書を読み上げて、両者確認をするのは谷崎さんではなく、背広姿の男性務職員であった。確認作業が終わると、指示されるがままに契約書のあちこちに印鑑を押した。とりあえず『天使の庭』との契約は済ませた。契約金は後ほど指定口座に振り込めばよい。それまでに金を工面すればいいのだ。問題はいつから入居できるかだが、折り悪くお盆休みと重なって、入居は来週にならざるを得ないとのことだった。冗談じゃない、この間谷崎さんははなるべく努力すると言ったじゃないか！こちらは今日明日にでも入れると思って準備をしてあるというのに、明日から四日間、誰が父の面倒を見るというのだ！

いかにも腹に据えかねるといった口調で、倫子が背広の職員を問い詰める。さすがに強い女だ。倫子はさらに言う。

「五百万も払うんだから、そのくらい融通利かしてくれたっていいじゃないですか！こちらだって都合があるんですよ。今日明日はダ

メだとしても、あさつてくらいには何とか入れないでしょうか？」職員は申し訳ございません、申し訳ございません、契約審査の者がお盆休みに入っていますの一点張りで、ペコペコと頭を下げるばかりだった。谷崎さんも隣で申し訳なさそうに頭を下げている。そもそも「何とかご希望通りお早めにご入居できるようがんばります」と言つて私達を安心させたのは谷崎さんだった。その上品な谷崎さんが深刻な表情で深々と頭を下げている。ここにいるのが男性職員だけだったら私達は絶対に譲らなかつたただだろう。私達は折れた。折れざるを得なかつた。代わりの施設のアテがない弱みがあつたからだ。さすがの倫子も、ここでいったん契約をハキしてもつと融通の利く施設に変える、と強気で押し通すことはできなかつた。

こうして父が『天使の庭』に入るまで四日の間、誰かが父の面倒を見なければならなくなつた。倫子は仕事が忙しくてとてもじゃないが休めないという。矢野さんと再婚した後、倫子は福島の地元の小さな不動産会社で働いていた。勤め始めたばかりでまだ見習社員なのだという。勤務態度と業績がよければいずれ正社員にしてくれるとのこと、ここで休むとこれまでの苦労がフイになる、何とか私にオヤジの面倒を見てもらえないかと言つてきた。仕方がない、ここは長男の私が何とかせざるを得ないだろう。ああ、また会社を休まなければならぬのか。急ぎの仕事はたまるばかりだ。いつまでこんなことを続けなければならぬのか……。

さすがに申し訳ないと思つたのか、倫子は男所帯で居心地が悪からうとの配慮から、二日間だけあずさをヘルプで泊まらせると言つてきた。それはとても助かる。家に帰つてわが妻に相談すると、妻もまた私と父だけではとても不安だと配慮してくれ、わが息子を一緒に泊まらせると言つてきた。何だ、おいおい、私は小学一年生より頼りにならないというのかよ。

あずさはすでに十九になっていた。昨年暮れ、父の快気祝いで

会った時より大人の女性の色気を増して、座敷の畳の上で短いスカートからスラリと伸びた脚を崩す姿を見たときには、姪とはいえず、エロチックなものを感じた。あずさは今、新潟市内にある福祉関係の専門学校に通っていて、卒業したら介護福祉士になりたいのだという。

「それじゃちょうどいいや、じいちゃんて実習すればいいや。」

私はそう言ってあずさを元気づけたが、話によると、どうやら介護福祉士というのにもランクがあるらしく、あずさが目指しているのは「ケアマネージャー」という資格で、これがなかなか取りづらいのだそうだ。この資格を持っている人は、現場で実際に手取り足取り老人のお世話をするだけでなく、その人個々の性格や介護レベルなどに応じて、どのようなケアを施したらいいのかといった介護プランを作成することができるのだそうだ。この通称「ケアマネ」の介護指示に従って一般の介護士は動くのだそうだ。父の担当をしている介護士の　さん、たまに後光のさす、あの　さんは実は「ケアマネ」らしい。

それにしても介護の仕事というのはかなりつらそうに見える。

「じいちゃんが入った施設を見たけど、あそこで働いてる人、みんな大変そうだったぞ。だいたい皺くちやのワガママ老人の面倒なんて、おまえが見れるのか？痴呆でおかしくなった老人もいっぱいいるんだぞ、薄気味悪くないのか？」

正直な気持ちをあずさに伝えると、あずさは私を憐れむような目で見ながらこう答えた。

「そんなことないよ、お年寄りってかわいって思わない？この間研修でお世話したおばあちゃんなんて、年取ってもうぜんぜん動けないんだけど、とっても可愛いおばあちゃんだったよ。あだし、おじいちゃんおばあちゃんといろんなお話ししていると、とっても元気が出るの。この仕事、ずっとやっていきたいの。おじさんにはわからないかなあ？」

私には理解できない。あずさがなぜそう感じるようになったのか

の理由もわからない。しかし、あずさの話聞いて思ったのは、介護の仕事、福祉関係の仕事というのは、これを仕事と割り切らない限り、普通の人には到底できないだろう、しかしながらその一方でこれが仕事だからという理由だけでできるものでは決してないということだ。人間、特に老人に対して、海の底よりも深い愛情を持たなければ、そして人のために尽くす行為に誇りが持てなければ、生半可にできるものではないということだ。Yの施設の職員の姿が目に見えぬ。彼らもまた介護を自分の職業として選んだ人たちだ。彼らも老人達への愛情があるはずだ。彼らは老人を、そして人間をこよなく愛す。彼らに似た職業に保育士さんというのがあるが、彼らもまた手間のかかる幼児相手にまめまめしく世話を焼く。これもまた大変で、やっぱり仕事と割り切らない限りやっていけないだろうが、その一方で職業として保育士を選ぶ人はまず子供が好きでたまらないのにちがいない。

そもそも人は自分の職業をどういう理由から選ぶのだろうか。考えてもみたまえ。いまあなたがやっている仕事、お金をもらえれば、別にこの仕事でなくてもいいのですか？いやいや、決してそうではないでしょう。そこには、その仕事に対して何らかの愛情があるはずだ。（かくいう私だって、決して職業と言うわけではないが、ウンウン言いながら苦勞してこの小説を書いているが、それは小説が好きだからなんだ！）

ようやく父が『天使の庭』入居する日がやって来た。

父が入ったのは六階の角部屋で、入り口にはすでに大きな表札がかけられていた。中に入ると、広さは約六畳、備え付けの家具はクローゼットだけだった。私と妻と、そして倫子夫婦とで家から介護用ベッド、テレビ、応接セット、その他着替えやら洗面具やらの日用雑貨を運び込んだ。前の施設で使っていたものをそのまま持って来ればよかったので楽だった。妻は父のために気を利かせて、応接セットのカバー類を新調した。そのおかげで、家では薄汚く放置さ

れていたアームチェアと丸テーブルが、新品同様になった。これなら父も満足してくれるだろう。窓からは広い中庭の散歩道が見下ろせた。

父は『天子の庭』を一目見て気に入ったようだった。何より谷崎さんのことをよく覚えていたのには驚いた。谷崎さんと再会して父は言った。

「おお、あんた、この間Yに来た人らったな、バレーボールの県代表になった人らろ。」

どうやらYで面会した際スポーツの話で盛り上がったようだ。どうせまた自分の若い頃と倫子の陸上の話でたっぷり自慢したのだろう。Yの施設に入った時とは明らかに異なり、父はすべて納得したうえで『天使の庭』に入った。ようやくすべてが一段落したのだ。私達は見送りにエントランスまで出てきた谷崎さんに再三お礼を言つて『天使の庭』を後にした。そして、かねて段取りしたとおり、その足で病院に向かい、母の退院を手伝った。私はいつの間にか母の生き残りの手助けをしていたのだ。私達の手助けによって、母は晴れて我が家でのんびり一人暮らしをする権利を手に入れたのだ。生存競争の勝者となったのだ。

とはいえ、母の、そして私達の心配事はすべて解決したというわけでは決してなかった。Yの施設に入ったときとまったく同様、父の電話攻撃が始まったのだ。手始めに父が電話したのは家だった。母が電話に出ると、「俺らいや」と父の声が。母はとっさに電話を切ってしまったそうである。それ以来、母は電話には一切出なくなってしまった。連絡を取りようがないので、私は母に携帯電話を持たせた。

「この電話以外、出なくていいからな。大事な人にだけこの携帯の番号教えておけばいいから。」

母にそう言う私は、やはり母の手助けをしていたのだった。

しばらくぶりの安息がやってきた。週末をのんびりと家族で過

すのは本当に久しぶりで、私は平穩無事であることがいかに貴重であるかをかみしめるのであった。

父が『天使の庭』に入居して二週間ほど経った頃、私は様子見到長岡の家に戻った。母もまた、父のいない平和な毎日を充実してすごしているようだった。社交ダンスの友人たちに電話をし、父のようにボケないように、好きな推理小説を大量に買い込んでいた。なんだか、介護が始まる前の若さが母に戻ったように思えた。

母が『天使の庭』の契約金を払うのを手伝った後、私は父の様子に行くことにしたが、そろそろ大丈夫だろうと判断して、同行させることにした。

「アタシの顔を見て里心がついて帰りたいなんか言うて困るねかて。アタシは行かんほうがいいて。」
母はそう言つて同行を拒む。

「大丈夫だよ、むしろ元気になったばあちゃんをここで見せておいたほうがいいんだよ。オヤジには外出を許されるまで回復したけど、またすぐ病院に戻らなきゃダメだ、と言わなきゃだめだよ。」

「帰ると言わないらうかね？」

「まだしばらく入院しなきゃダメだと言っておけば、たぶん平気だよ。Ｙで俺、さんざん『ばあちゃんが大変な状態だから心配かけるな、じいちゃんがおとなしくここにいてくれれば、ばあちゃんの回復も早い』と言い聞かせてたから、そこまでは本人わかってるはずだよ。」

「そつららうか。」

母はまだ心配な様子だ。そこで私が新たな作戦を考える。

「もしまだ駄々こねるようだったら、これから当分ばあちゃんが遠くの暖かいところで療養しなくちゃダメになったから、お別れに来たつて言っておけばいいよ。そうさな、静岡あたりの療養所にしておこうか。医者からそこに入ってないと死ぬと言われたと言っておけばいい。」

これぞ新たな『ばあちゃん療養生活』理論！ 私には自信があった。

父はこの話を聞けば絶対に納得するはずだ、と。

『天使の庭』を初めて実物で見た母は、その豪華さに目を瞠り、「アタシが入りたいようらて」と言った。受付で谷崎さん呼び出し、母を紹介する。

エレベーターで六階に上がる時、入居者のおじいさんと一緒になった。銀髪で縦縞のワイシャツにチェックのベスト、ゴルフパンツといういでたちの、紳士然としたおじいさんである。谷崎さんがおじいさんに話しかける。二人は楽しげに笑う。おじいさんは五階で降りた。エレベーターが開くと、いつものとおりすぐ正面に監視の女性職員が二名座っており、私達の顔を見るとやや驚いた様子で「いらっしやいませ。」と声をかける。谷崎さんが「長沢さんにご面会です。」と職員に言う。

二ヶ月ぶりに母に会う父は、どことなくウキウキしていた。うれしくて仕方ないのに違いない。そのくせ母の顔を見たたん、「なんだ、俺の部屋に勝手に入って来るないや！」などと威張ってみせたりしている。すっかり自分の部屋だと認識しているようだ。もう安心だ。

このクソ暑い中、父は、冬物の毛系のセーターを着ていた。私が中学生の頃、母が手編みで作ってくれた群青色と灰色の横縞のセーターだ。あまりにセンスが悪いので、学生服の下以外に着たことがなかったやつである。三十年以上前の服をまだ持っているとは、さすが、昔の人は物を大事にするなあ、と改めて感心する。同時に、世の中のことに無頓着で、また世の中から置き去りにされた一組の老夫婦に哀れみとたまらない愛おしさが感じられてならない。

その毛系のセーターの襟から、これもまた私のオサガリと思われるボロボロのワイシャツの襟が片方はみ出ている。それを見て母は、「まあ！この暑つついに冬物のセーターなんか着て。」

と言いながら、まるでおいたのすぎる子供をしつけるようにワイシャツの襟を直す。その仕草に私は、お互いを知りつくした一組の男

女のカップルを感じ取って、ちょっと目をそむけなくなった。老いたとはいえ、また、すでに一緒に暮らすことはできなくなつたとはいえ、二人はやはり夫婦なのだ。そして私をこの世に送り出してくれた親なのだ。

世話焼きな母は、普段の生活と何ひとつ変わらない調子で小言を言いながら父の身の回りを片付け始めた。

「まあ！靴下片っ方だけこんげん所置いて」

「これ洗濯するがある？洗濯物はここに入れておくがあげ？」

その様子には、久しぶりに世話を焼くことに対するうれしさが垣間見えた。父もまた「ナアは黙ってれいや！」だの「勝手に人のものに触るないや！」などと怒鳴ってはみせるものの、二ヶ月ぶりに妻に会えたうれしさにこみ上げる喜びを隠し切れず、怒鳴り声の中にも笑みが混じって、ついウワついた調子になる。

父の部屋の手洗いを出て、ふと洗面所を見ると、白い洗面台の上に新品の歯ブラシが二本、ブラシの部分が紫色に染まって転がっている。だらしないな、しまつてやろうと思つて一本取り上げ、水で洗うが、紫色のハミガキ粉が全然落ちない。おかしいなと思つて親指の腹でゴシゴシやるが、それでもなかなか落ちない。ブラシの先は紫色の物体でガツチリと固まつたまま、びくともしない。ようやく取れたと思つたら、塊のままボロボロ零れ落ちる。この物体は絶対にハミガキ粉ではない。これが何かわかつたのは、うがい用のマグカップの中に立てられたチューブ状の薬品を見たときだった。その薬品は歯ブラシについていたのと同じ紫色の外装をしており、見た目こそハミガキ粉とそっくり同じだが、何を隠そう総入歯安定剤だったのである。これで歯を磨いたのにちがいない。何でこんなもので歯を磨いたのか。

わが妻はきちんとハミガキ粉は歯ブラシといっしょにし、入れ歯道具とは別に用意しておいたはずだ。そう思つて洗面台の引き出しを開け、歯磨きセットを取り出すと、まったく手付かずでビニールの封さえ空いていないハミガキ粉が出てきた。これを手にしたとき

私はガテンがいった。なるほど、そうか、そうだったのか……。わが妻が用意したハミガキ粉は太くて丈の短いキャップを下にして置けるタイプのものであった。わが家はこのタイプのハミガキ粉を使っているので、わが妻は父も同じものでよからうと思ってこれを用意したのだろう。しかしながら父の脳内にあるハミガキ粉は、この総入れ歯安定剤と同じ形状の、細長いチューブ型のものなのだ。たしかに昔からハミガキ粉というのは細長いチューブ形のものであった。子供の頃ずっと家で使っていたのはこの型だった。父はこの細長いチューブの形状をハミガキ粉と判断したのにちがいない。それにしても、よくまあこんなもので歯を磨いたものだ。どこかおかしいとは思わなかったのだろうか。

紫色に固まった歯ブラシを母に見せると、母は大笑いして父に言った。

「アンタ、こんげんので歯みがいていたがあけ？これは入れ歯をとめる接着剤らねかて。よくこんげんので歯みがけたねえ。わからなかったがあけ？」

すると父は烈火の如く怒り出すと思いきや、意外にも何にもしゃべらない。追い撃ちをかけるように母が言う。

「アンタ、ハミガキ粉はけれられね。これは入れ歯を止めておく接着剤があよ。」

そう言われてもまだ答えない。

「アンタ、聞いてがあけ？なんか答えれさ！」

それでもなおダンマリを決め込む父である。気に入らないことがあると、母に何も言い返せない父は《ダンマリ作戦》で口をつぐんでしまうのにちがいない。呆れ返って母は私にもう帰ろうかと促す。

「そうだな、勝手に俺の部屋に入るなってんだから、帰ろうか。」
すると父は、

「ちと待ていや、下でコーヒー飲んでいげいや」
と、突然口を開く。

倫子夫婦と初めて来たとき通された一階ロビーのすぐ隣が小さな
コーヒールラウンジになっている。でかい書棚の真ん前だ。近くの職
員に言えばすぐに熱いコーヒーをいれてくれる。時間があれば、長
い長い老人の話し相手にもなってくれる。父はもうすっかりお馴染
みさんらしく、私達がエレベーターで一階に下りると、髪をちよっ
と茶色に染めたきれいな女性が笑顔で声をかけて来る。年の頃は二
十代後半か三十代前半といったところだろう。実を言うと私の好み
のタイプの女性で、赤ワインのよく似合いそうな大人の女性といっ
た感じの人だ。

「長沢さん、今日はおお客様ですか？まあ、ご家族のかたですか、い
いですねえ、みなさん来て下さって。」

父はさも自慢げに

「俺んセガレらて。東京から来たがあて。」

と私を紹介する。母のことにはまったく触れない。私は美人の職員
にちよつとだけドギマギしながら軽く会釈し、

「父がお世話になってます。」

と言う。その脇から母が

「ほんとにお世話になってまして、こんなワガママ者をねえ、まっ
たく。ご迷惑おかけしてなかったでしょうかね？」

「奥様でいらつしやいますか。迷惑だなんてそんな。こちらこそお
世話になってます。」

美人職員はそう言うが、迷惑をかけていないわけがないのである。
その迷惑の張本人が怒鳴って言う。

「ナアは余計ん事言わんでいいつや！」

私達は父を真ん中にして小さなカウンターに腰掛けた。美人の職員
はカウンターの向こうからコーヒーを三つ出した。

「おめさんはYの生まれらつたかの？」

「いえ、Nなんです。やだなあ、長沢さん、忘れないでくださいよ。」

「
幾分媚びたような、女性特有のあの調子で美人職員は返す。」

「ああ、そうだったねえ。仕事でおつ家ちのそばで働いてたがらったねえ。」

「ええ、三丁目の設計事務所で働いていたことがあるんですよ。」
三丁目にそんな設計事務所なんてあったか？私はちよつと首を傾げる。

しばらくすると、いつもの父の自慢話が始まった。例の若い頃の陸上競技の話である。美人の職員は、父の話の合間合間に「へえ、そうなんですか」とか「すごーおい」とか、いかにも初めて聞かされたように相槌を入れるが、この話を何度も繰り返して聞かされたのにちがいない。いずれにしても、父がこの私好みの女性とすつかり仲がいいのが、ちよつとくやしかったりする。

美人職員の前で得意満面に語る父を、母は笑顔を浮かべながらも冷やかな目で眺めていた。その笑顔は、美人職員を前にしたお愛想もあつたのだろうが、ようやく訪れた心の平安と、父と別れて新たな人生を送ることを改めて決意したといった、どこか満足げな勝利者の笑顔だった。ほつとしたようでもあり、しかしどこかさびしげなところのある表情だった。

「じゃあそろそろ帰るから、と母を促して外へ出る。エントランスで「じゃあ、またしばらくしたら来るから。あんまり迷惑かけないようにな。」と言い、手を振って別れようとする、父はトコトコ外までついて来る。なんだ、やつぱり帰ってほしくないんじゃないか。その様子を見た美人職員はすかさず父の手を持って、

「さあさあ長沢さん、外はまだ暑いですから、中へ入りましょうよ。」

と父を促す。美人職員、私達のことを気遣ってくれたに違いない。父は、

「そつらのお」

と言いながら、美人職員に恋人のように腕組みされて『天使の庭』に戻っていった。私は父と美人職員が建物の中に見えなくなるまで見送った。母は一度も父を振り返ることなく、ただすたすたと帰り

の車に向かうのだった。

（介護篇・下に続く）

介護篇（下）

これでようやく落ち着いた日々を送れると誰もが思った頃、それは父が『天使の庭』に入居してほぼ一ヶ月が経つかという頃だった。またもや私の携帯に突然の電話がはいった。携帯電話は『天使の庭』と表示していた。久しぶりの父の電話攻撃だろうかと思い、一気に憂鬱になる。身構えながら電話に出ると、電話の主は谷崎さんだった。

谷崎さんは、らしくない落ち着きのなさで、そうでなくても聞き取りづらい携帯電話の向こうから、何事か滔々とまくしたてる。なかなか要領を得ないのでひとつひとつ語を切って確認しながら聞いていくと、どうやらこういうことらしい。

今日いつもどおり父を連れて散歩に出た。信濃川の土手近くまで行こうとしたところ、途中で父が「ちと待つてくれてエ」と足を止めた。どうしたのかと顔を見ると、額に冷や汗のタマを浮かべてゼイゼイといかにも苦しげな息をしている。顔色は青ざめ、今にも死にそうな雰囲気だ。決して長い距離を歩いたわけではないにしてもや走ったわけでも何でもないのに、この表情は尋常ではない。さらに足をさすってくれと言うのでスポンの裾をたくし上げると、両足とも風船のようにパンパンに膨れ上がっている。その場でこれは危険と判断し、肩を抱いて母の入院した救急病院に何とか運び込んだ。病院もまた一目見て危険と判断し、とりあえずそのまま入院するこ
とになった・・・。

ああ、なんとわずかな平安であったことか！一体これからどうしたらいいのか、私はその場ですぐに判断できなかった。ただ「そうですか、そうですか」と返すしかなかった。谷崎さんは私から何らかの指示を仰ごうとしたのに私が一向にそれらしいことを言わないので、こう言った。

「ご自宅にお電話を入れたのですがお留守のようでしたので、息子

様の携帯にお電話させていただきました。」

「どうやら母は私の指示通り、私が与えた携帯電話以外一切電話に出ないようだ。谷崎さんの今の言葉で徐々に冷静さがよみがえってきた。」

「で、いまオヤジはどうしてるんですか？」

「いまはとりあえずN病院の救急病棟で酸素マスクをつけて寝ておられます。何せちょっと動かれただけで息が上がってしまっ、とっても苦しそうですね。足は腫れているしどこかお加減が悪いに違いありません。」

「そうですか。で、私はどうしたらいいでしょう？」

「思わずそう言ったものの、それはこっちが聞きたいことだ、というのが谷崎さんの気持ちだっただろう。谷崎さんは「えっ、えっ？それは、それは・・・」と口ごもってしまった。会話にほんのちよつと間が空いて、谷崎さんは言った。」

「今は私がおそばについておりますが、私もずつと付きっ切りというわけにはいきませんので、どなたかお越しになっていただきたいんですが、ご無理でしょうか？」

「そうですか。私が行ければいいんですが、今東京ですので、すぐと言うわけにはいきません。それより入院しないで、『天使の庭』でお預かりいただくわけにはいかないんですか？」

「それはできません。お医者様の診断ですから。」

谷崎さんはきっぱり言い放った。

「さあ誰に行ってもらったらいいか。母に行ってほしいのだがおそらく無理だろう。とはいえこのままにはしておけない。やむを得ず私は谷崎さんに言った。」

「わかりました。すぐに誰か行かせるようにします。」

「よろしく願います。」

「まずは母に相談だ。携帯に電話すると案の定母はすぐに出た。概要を伝えると大いに驚き、

「いやあ困ったねか。どうしたらいいが？」

と聞いてくる。気持ちには私と同じようだ。

「ばあちゃん、行けないか？」

と問うと、絶対に行けないと答える。「行けない」のではなく本当は「行かない」というのが正しい。もつと正確に言うならば「行きたくない」が正しい。その母の気持ちがよくわかるので私は言った。「仕方ないな、じゃあ、おれから義弘叔父さんに電話して、とりあえず叔父さんに行ってもらおうよう頼んでみるよ。で、おれはこれからすぐ会社を出て、病院へ向かうから。」

会社を早退して長岡についたのはその日の夕方だった。病室内にはオレンジ色の淡い夕陽が射しこみ、それが電灯の青白い光と交じり合っただけで、かえって室内が暗くなっているように思えた。ベッドに横たわる父の周りを義弘叔父と私のイトコの貞夫さん、秋幸さん、そして倫子夫婦が取り囲んでいた。父の口には透明の酸素マスクをあてがわれていた。黒茶けたシミだらけの左腕が投げ出された枯れ枝のようにシーツの上にむき出しになり、その先端の人差し指にぐるぐる巻きにされた白い包帯からは電気のコードが延びていた。コードは脈拍を計測すると思しき機械につながっていた。父は自分がどういう状態にあるのかいま一つはつきりわかっていないようだった。

私は駆けつけてくれた義弘叔父とイトコ達にお礼を言い、父の容態を問うたが、誰も何も答えようとはしなかった。父は私の顔を見て一瞬私が誰であるか考える様子を示し、どうやら私だとわかったらしく、おもむろに上体を起こした。そして、いかにも邪魔だとはかり口元の酸素マスクを引き剥がした。それを見た倫子がマスクをはずさないように注意すると、父は「黙ってれいよ！」と倫子を一括した。倫子はその言い方にカチンと来たらしく、きつい口調で父に言った。

「何言つてがあて、おめさん！これしてねえきゃ、死んでしまつて先生が言つてたろ？死んでもいいがきゃ勝手にはずせばいいさ。」

そのまま死んでもらったほうがこつちも楽らて！」

本音に近い。みんなが物静かになつていたのがなぜか、倫子のこの一言でガテンがいった。父のいつものワガママ三昧が始まつていて、だれも何も言い出せなかつたのだ。

「倫子、何だお前は！親に向かつてその口の聞き方は！」
父が怒鳴る。

「何さ、アタシはおめさんが心配らすけん言つてるがねかて！いつとも勝手なことばつか言つて！」

私の来訪に力を得たのか、倫子も負けていない。

「何だア〜！このズベは！」

おそらく母にそうやったのとまったく同じように、父はきつい目つきで倫子を睨みつける。まさに一触即発、壮絶な親子バトル開始寸前の気配が漂う。

読者のみなさんにはもう十分おわかりのとおり、この状況は父を説得するに最も悪い状況なのだ。父の周りをこうして目下の親戚が取り囲み、やいのやいのと言ひ聞かす。言っていることがいかに正論でも、そこは封建社会の真つ只中を生きてきた父だ、目上の者が白と言えば黒いものも白くなければならぬ。父は、生き残っているただ一人の兄弟である義弘叔父の助言に対しても、すでに代変わりして家督を継いでいる私のイトコ達の忠告に対しても、彼らがただ自分より年下だという理由だけで一切耳を傾けないのだ。むしろここぞとばかり彼ら目下の者達に年長者として説教をし始める始末。そして、悲しいかな、彼らもまた父とまったく同じ封建社会に育つた人達であつた。説教とも愚痴ともつかぬ、つじつまの合わない父の訓戒に対して、黙つて恐縮するばかりで一言も返すことができないのだ。相手は単なる認知症のガンコジジイだぞ。でも兄貴分だから何も言えないのだ。

「ネラ（お前達の意味です）は親の面倒もきちんと思ねえで勝手なことばつかやつて、死んだ一秋も隆治もネラにどれぐれえ手え焼いたか、わかつてがらか！」

茶目つ気のあるイトコの貞夫さんは、訓戒をたれる父の目を盗んで、私にだけにわかるように指で小さなクルクルパーを作って示した。もうすぐ六十になる貞夫さんのその仕草は先生に叱られる脇でこっそりアカンベーをする子供とそっくり同じで、私は思わず吹き出しそうになった。

父の妙なお小言は続く。倫子はもう処置なし、といった感じで私のほうを見る。私は父にこう言った。

「じいちゃんさ、そうは言うけど、みんなこうしてわざわざ駆けつけてくれるってのは、すごいことなんだよ。みんながじいちゃんのことを心配してるんだよ。何でそこんとこわからないんだよ。こんなふうみんなが来てくれるのを、もっとありがたいと思ったほうがいいよ。」

父は私の言葉に一瞬口をつぐむ。私には一目置いているのである。今こそチャンスとばかりに倫子が言う。

「そうらよ、兄ちゃんの言うとおひらよ。みんな忙しいのに心配でこうやって来てるがアすけさ、もっと人の言うこと聞いたほうがいいよ。」

普段は寡黙な義弘叔父も加勢する。

「お前さ、今残ってる兄弟は俺と千葉の康弘だけらねかて。それをよく考えれて。お前が人の言うこと聞かねえで死んだら、もう兄弟は二人しか残らんがあれ。そこんとこよく考えて、ちゃんと医者 of 言うこと聞かんきゃダメらねかて。」

父は義弘叔父の言葉にうたれたのか、急にしゅんとなって、

「俺はどうしたらいいがいや。」

と、オイオイ泣き出し始めた。私は父が可愛そうになった。私は言った。

「じいちゃん、まずは先生の言うことをよく聞くことだよ。そうすりゃ、いずれよくなるから。よくなったらあちゃんの見舞いにも行けるじゃないか。」

父は声を上げて泣く。私はさらに念を押すように言った。

「じいちゃんが心配でみんながこうして集まってくれてるんじゃないか、幸せ者だよ、じいちゃんは。」

「そつらなあ、俺は幸せ者らいなあ。みんなが来てくれるがあすけなあ。」

父は泣きながらこう言うのだった。

一同が暗い気分沈む中、病室の入り口から先輩の看護婦さんが顔を出し、手招きして私を呼んだ。廊下に出て話を聞くと、明日の午後先生のほうから診断結果の説明があるから病院に来てほしいとのこと。ああ、明日も休みを取らなければならないのか。ようやく一息ついたと思ったのに介護生活の再開だ。平穏な日々は長く続かないものだ。私は再び憂鬱な気分になった。そんな私に追い討ちをかけるかのごとく、看護婦さんは言う。

「それで大変申し訳ないんですけど、今晚どなたか付き添いの方を・・・」

その夜私は再び病院の簡易ベッドに横たわった。もう慣れたもので、このベッドの快適な寝つき方を十分心得ていたつもりだった。しかし今回はほとんど眠れなかった。夜中にいつ父が起き上がったベッドを抜け出しやしないか心配でならなかったからだ。ちよつとウトウトしかけたと思うと、すぐに父はむくつき起き上がって、寝苦しいのだろう、酸素マスクをはずそうとする。そのつど私はマスクをはずさないよう注意する。時にベッドを降りようとするので、どこへ行くのかと問うと、「便所らいや」と言う。仕方なく看護婦さんと呼んでマスクをはずしてもらおう。まさかこんな夜が延々と続くのではないだろうな・・・。そう思うと憂鬱でいたたまれなくなる。目の前が真っ暗になる（真夜中だからではない）。

翌朝父を看護婦さんに任せ、赤く腫らした目をこすりこすりいったん家に戻る。倫子夫婦は昨夜のうちに福島へ帰っていたから母だけしかない。ほとんど眠れなかった昨夜の状況を報告すると、母

は眉をしかめてこう言った。

「そりゃあ困ったねえ、どうしたらいいだろうねえ、これから毎日付き添えなんて言われたら。困ったてえ。」

まさか母に付き添いを任せるわけには行くまい。病院には、今晚は誰も付き添いできないからヨロシクと言い置いてそのまま東京へ帰ってしまおう。母に余計な心配をさせてはいけない。ストレスで心筋梗塞が再発したら、今度はおそらく生きてはいないだろう。

「病院にはおれの携帯電話伝えてあるから、何かあったらおれのところに連絡があるはずだから心配ないよ。ばあちゃんは、家の電話には絶対に出なくていい。携帯電話にだけ出ればいいからね。だから携帯はいつも持って出歩くようにしてくれ。」

父と母の生存競争はまだ終戦を向かえたわけではなかった。さしむね私は日中戦争で中国軍に武器等を後方支援する同盟国のドイツのような存在だった。いやいやそんなカッコいいものではない。「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」とうたっておきながらイラクに兵隊を派遣し、イラクの復興のためと称してアメリカ軍を後方支援するわが日本国に近いのかもしれない。

母はすべてを心得ていた。そして、戦闘に直接加わることなく、後方支援する日本のような私に対して深い感謝感激の念を送るのだった。しかしさすがに母は女であった。私がすっかり見落としているさまざまな現実を実に冷静に見ていた。母は言った。

「オヤジがこんげんなつて、『天使の庭』のほうはどうなるがあるうね。」

そうだ、そのことをすっかり忘れていた。

『天使の庭』とはすでに契約を済ませていた。母は父の預金通帳から五百万円を引き出し指定口座に振り込んだ。父の預金通帳はすべて母に握られていたのである。認知症と判断されたその日から母は父から預金通帳を召し上げ、管財人として振舞っていたのだ。これじゃあ戦争になんか勝てるわけないじゃないか。すでに勝敗の決し

た戦争なんだ。太平洋戦争か、これは？

「今日の午後先生から説明があるから、それを聞いたからおれから『天使の庭』に連絡しておくよ。すぐ出てくれるようだったらそのま戻れると思うよ。まあ家賃払った分だけちよつと損だけどね。」
私がそう言つと母はほそりとこつと言つた。

「アタシや、今回の入院でオヤジはもう出て来ねえんじゃねえかと思つて。」

軽く仮眠を取つてその日午後一番で母を連れて病院へ行く。先生からの病状説明の前に父を見舞おうと何度も母を誘つたものの、母は病室にはまつたく近づこうとしなかつた。理由は「里心がつくとまずいから」だ。やむなく母を待合室に待たせて父の病室に行くとすでに義弘叔父が見舞いに来ていた。父はベッドの上に起き上がったうつろな目でテレビを見ていた。ペイテレビのカードは義弘叔父が買つてくれたものらしい。酸素マスクが昨日のものと変わつていた。口全体を覆うマスク型ではなく、鼻の穴に二本、酸素口があつて、チューブを両耳にはさんでかけるタイプのやつである。前に比べるとこれなら多少楽だろうと思われた。それ以外に目を引いたのはベッドの下のベージュ色のマットである。ビニール製の奇妙なマットで、ちょうどベッドを降りたところに敷かれており、下からは電気コードが延びていた。看護婦さんにこれが何か聞いたところ、酸素マスクを勝手にはずして出歩かないよう、ベッドを降りた所にこれを敷いて、これが踏まれるとナーステーションにアラームが出る仕組みになっていふとのこと。今はアラームの電源を切つていふからマットを踏んでも大丈夫だが、夜中に電源を入れたら間違つて踏まないよう気をつけてくれ、と言われた。世の中にはずいぶん便利な道具があるものだ。

父は私の顔を見るなり、

「陵、タバコくれいや。」

と病人らしからぬ要求をする。義弘叔父はタバコを吸わないので、

父は私に来るのをずっと待っていたのかも知れない。やはり自分がどういふ状態に置かれているのかわかっていない。「そんな体でタバコなど吸っていいわけじゃないか」と叱りつけてとくと言い聞かせてやりたいところだが、そこはさすがに父の扱いにはすっかり慣れた私である。

「じいちゃん、健康によくないからタバコはやめたほうがいいよ。実を言うと、おれもうタバコやめたんだ。」

真っ赤なウソである。しかし父は目を丸くして私を見、口を尖らせて、

「ホントらか、タバコやめたがあか？」

と驚く。

「ああ、もう半年になるよ。」

これも大ウソだが、父はウソだなんて思ってもいない。だいたいつい最近『天使の庭』のエントランス前で一緒にタバコを吸っているのにすっかり忘れている。このウソは父が認知症であるからこそつけるウソで、これは父にタバコを吸わせないための新たな作戦なのである。名付けて『おれも禁煙したんだからじいちゃんもやれ作戦』。

さて、今度の担当の先生はずいぶん若い。一年前に転んで頭を打ったときに担当してくれた脳外科の若ハゲ先生、いたずらっ子のよくな表情と長岡弁丸出しのしゃべり方に親しみが持てるあの先生とも、母の心筋梗塞を診断した心臓外科の先生、いかにもマジメなエリート然としているがちょっと口臭のきついあの先生とも、まったく違うタイプの先生だ。医者と言うよりも、まだ合コンに誘われてもおかしくないサラリーマン新入社員といった風情があり、このタイプの合コンに行くと、だいたいエリート君だと言うだけでモテてしまう。そんな感じの先生だ。さほどイケメンというわけでも、背が高いわけでも、話がやたら面白いというわけでも、カラオケがものすごくうまいというわけでも何でもないのに、モテて当然と思っている医学部の学生に雰囲気近く、それなりに遊んでいるよう

にも見える。

この合コン先生だが、机ひとつ置いてあるだけの殺風景な相談室に私と母と義弘叔父を通し、淡々と父の病状について説明をし始めた。先生の話はこうだ。

父の呼吸困難はおそらく肺気腫によるものである。「おそらく」というのは、まだ詳しく検査したわけではないのはつきりとした診断を下せないからだ。いずれにせよレントゲン写真と症状から推察するに、肺気腫を患っていると思われる。癌ということも考えられるが、いまの段階では断定できない。仮に腫瘍があったとしても、どこにあるのか部位を特定できない以上、措置のしようがない。部位を特定するためには放射線を使った特殊な検査をする必要があるが、機材、薬品ともに今日明日中に手配はできない。カテーテルを入れる方法もあるが、高齢であること、そして認知症であることを考慮すると、危険性が高いのでやらないほうがいい。また、足のむくみ方が尋常でないのは、腹に水がたまっているためであろう。この症状は腎不全と思われる。場合によったら人工透析の必要があるかもしれない。すべて糖尿病に端を発しているものいであろう。「カルテを拝見させていただきますが、前に脳梗塞や高血圧症などを併発されていますね。糖尿病は以前より悪化していますし、タバコもまだお吸いになつていますね。いまや体中病気の塊みみたいなものです。まさに成人病のデパートといったところです。」合コン先生は若ハゲ先生やインテリ口臭先生のように図に描いて説明しはしなかったが、非常にわかりやすく説明してくれた。見かけによらず頼もしい話しぶりである。

「いずれにしても、癌検査と腎検査含めて、詳細な検査は来週させていただきます。診断と処方はその以降になります。その際改めてご説明しますので、ご連絡をお待ちください。」

暗澹たる気持ちで義弘叔父と病室に戻ると、父は上体を起こし、うつむき加減になつて、何やら一生懸命手元をいじりまわしていた。目は手元の物体一点に集中しており、時折不思議そうな表情で指先

を見つめた。父の手元の物体は、強烈な赤い光を発していた。それは小さな赤い豆電球であった。父は指先に巻かれた包帯を自分で外し、中にある脈拍計測器の先端部をバラバラに分解してしまったのであった。血のような真つ赤な光を鮮やかに発する豆電球。そこから緑と黒のコードとか細い針金が痛々しそうにむき出しにされていた。これは一大事だ。私は急いで看護婦さんと呼んだ。かけつけた年輩の看護婦さんは思いつき顔をしかめ、

「まあ大変！あなた、これ壊しちゃったわね！まあ、まあ、どうしましょう。ダメよ、こんなことしちゃ！」

と父をしっかりとつけた。すまなそうな顔をする父。看護婦さんは本気で怒っている。

「この機械、高いものなんですからね！今度やったら弁償してもらいますからね！」

看護婦さんの強い言葉の調子に自分も一緒に叱られているように思え、私は恐縮した。

義弘叔父はこの一件をこう分析した。

「白い包帯の先から赤い光がちょっともれてたすけ、タバコと間違えて吸おうとしたがあねえろかね。」

その週の金曜日、私の携帯にまたも突然の電話が入った。携帯には「N病院」との表示がある。見たとたん一気に憂鬱になる。このまま出ないでおこうかとも思うが、そうもいかない。しぶしぶ電話に出る。年輩らしき看護婦さんの声がする。看護婦さんは言う。父の精密検査の日取りが来週の水曜日に決まった、その翌日木曜には診断結果が出るので、先生のほうからご説明をしたい、ついては来週木曜ないし金曜にお越し願えないだろうか……。冗談じゃない、またもや平日じゃないか。

「すみません、来週の土曜日になりませんか。」

そう言ったが、どうやら合コン先生の都合が悪いらしい。やむなく来週金曜の午後で承諾する。看護婦さんは「ああ、よかった」と喜

ぶ。そして、畳み掛けるようにこう聞いてくる。

「今週末はお来しになりませんか？」

「今週はちよつとカンベンしてください、家のほうも忙しいので。」

「そうですね。」

それからちよつと沈黙があつて、

「あの、たいへん言いにくいことなんですけど、今週末どなたか付き添いできる方はいらっしゃいませんか？」

ああ、また出た。付き添いのお願いだ。もう決まり文句だ。病院からの電話の何がイヤだといって、付き添いのお願いくらいイヤなものはない。私はやや腹立ち紛れに言う。

「そんな、毎週のように付き添いなんて、できませんよ！夜勤の看護婦さんがいるんだから、私らが行く必要ないじゃないですか。」

「大事なお身内の方の付き添いですよ、ましてや親御さんじゃないですか。家の方がいらした方が患者さんも安心というものです。」

確かにその通りなのだ。父が大事ではないことは、決まてないのだ。看護婦さんは至極当たり前のことを言っているのだ。世の中の常識を語っているのだ。親を大事にしない者は親不孝者なのである。看護婦さん、私を親不孝者となじっているのか。常識のない人間だと非難しているのか。そんなことを考えると余計頭にくる。つい怒りの口調になってしまう。

「私とはかく行けませんよ！だいたい何で付き添う必要があるんです？夜勤の看護婦さんではダメなんですか？」

「いえ、決してできないというわけではありません。ただ、他の患者さんもおられまして、看護婦もずつとつきつきりでお見守りするわけにはいきませんので。なにぶんにもお父様は認知症でいらつしやるので、夜中に看護婦が気づかないうちにベッドを抜け出して院内を徘徊でもされて、何か事故があつたら大変です。」

「そりゃあ、そちらの都合じゃないですか。だいたいオヤジはちよつと動くとすぐ息切れしてしまうから、夜中にベッドを抜け出しても徘徊なんてできないですよ。看護婦さん達で十分面倒見れるはず

ですよ。」

「こちらも努力はしております。しかし万が一と言うことがありますので……。事故か何かあったらこちらでは責任を負えません。」

「いいんですよ、責任なんて負わなくても！」

「そんな……。何かあつてお父様がどうなつてもいいんですか？」

「何もありませんよ、事故なんて、ゼツタイ！」

「そうですか。では、息子さんがダメでしたら、奥様に付き添いをお願いするわけには行きませんか？」

「いいよ、怒りがこみ上げて来、声が震えはじめる。そして爆発する。声が荒く。」

「何を言ってるんですか！オフク口はこの間心筋梗塞でオタクに入院して、この間やっと退院したばかりじゃないですか！担当の先生からはしばらくは安静にしてるように言われてるんですよ。これでまた付き添いなんかやって、ストレスでまた心筋梗塞になるかもしれないじゃないですか！今度やったら命の保障はできないって先生にも言われてるんですよ！そんな病人に付き添いをさせるんですか！それでオフク口が死んだら、病院が殺したのと一緒にですよ！人殺しをするんですか、オタクの病院は！」

「周りで私の電話を聞くとともに聞いていた会社の同僚達が、何事かと思つてチラチラ見やる。それが気に入らない。怒りは収まらない。」

「看護婦さんとさんざん押し問答を繰り返した末にようやく見つけた落としたところはこうだ。まず私は今週末は絶対に病院には行かない、付き添いは、母以外の誰かに行ってもらおうよう私が手配する。結局、私がやらないにしても、付き添い自体はやらざるを得なくなったのだから、看護婦さんの粘り勝ちだったのかもしれない。私は倫子に今週末の付き添いをお願いし、倫子はしぶしぶ引き受けたのだった。」

精密検査の結果説明の当日、私は母を連れて病院へ行った。すで

に義弘叔父が来ていた。母は相変わらず父を見舞おうとしなかった。合コン先生の前回の診断説明を聞いてから約十日たったわけだが、その間に父はまるきり別の人間になってしまった。そこにいるのはもはや私の父ではなかった。あのYの施設の老人達とまったく同じ種類の老人、彼らに混じって遜色ない老人であった。灰色に変色した栄養が足りなそうな髪はどこどころ抜け落ち、まるで中越大地震で木々が崩れ落ちて地肌がむき出しになったあの越後の山々のように、薄肌色の肌が覗いていた。頬はゲツソリとこけ、口は開いたまま閉じることにはなかった。目は転んで入院したときのあの赤ん坊の目、クリクリとした純心無垢な子供の目、一点の濁りもないガラス玉のようなあの目に戻っていた。

わずか十日前後の間、病院で絶対安静の療養体制に置かれるだけで、ここまで人間は変わってしまうものなのだろうか。ひよっとしたら病院というところは患部として認定した身体の一部を治療するために、身体の他の部分あるいは身体全部を犠牲にするしているのかもしれない。父の場合、呼吸器と腎臓は多少直ったかもしれないが、その分頭のほうが悪くなったのではないか。そんな風に疑いたくなるほど父の変わり様はすさまじかった。いや、病院のせいにしてはいけないのだ。だって父と同じように入院しても父ほど老け込み方が激しくならない人だっているのだから。父が急に老け込んだのはやはり父自身に原因があるといわざるを得ないだろう。今回の入院によって、父は生きる意欲を完全に失ってしまったのだ。『天使の庭』で暮らしていたときは若い女性に囲まれて心地よい刺激として脳にインプットされた欲望が記憶機能と結びつき、それが生きる意欲、生甲斐を生み出していたのにちがいない。今の入院生活のように、動くことも許されず、均質の白い空間の中で同じような毎日を送るようになって、生きることへの欲望そのものが認知症によって忘却の彼方に遠ざかってしまったのかもしれない。老いというのは、やっぱり生甲斐をなくすことから来るのにちがいない。生甲斐を失って何もすることがない、テレビを見ることと食事を摂る

こと以外に何の楽しみもない、そんな毎日の入院生活は、父を老いた人間から「古い」そのものへと変貌させたのであった。生きる意欲を失うということ、それはまるで流れ来る大きな濁流をかるうじて堰き止めていた泥の堤防が、もはや自らの存在意義を見失って自ら崩れ落ち、濁流に飲み込まれて、跡形もなく消え失せていくようなものである。生きる意欲は変化の濁流を懸命に堰き止め、時間の重みを必死に支えているのだ。そしてこの支えが刺激となって脳を活性化するのだ。

驚いたことに父は自分の変化にまるつきり気がついていなかった。病室に入って来た私を迎え入れようとベッドから上半身を起こしたとき、ベッドの右脇の洗面所の鏡に自分の姿が写った。その鏡の中の自分に父は「ごきげんようございますねえ」と頭をペコリと下げたのだった。

「じいちゃん、誰にあいさつしてるんだい？それ、鏡だよ」
私が笑ってそう言うと、鏡の中の人自分が自分であることに気づいたのか、あるいは気づかなかったのか定かでないが、父は鏡の中の人自分がとまったく同じ動きをするのをさも不思議そうに眺めていた。

白衣のボタンをはずした合コン先生が颯爽と部屋に入ってきた。私達、私と母と義弘叔父は、先週合コン先生から一次診断説明を受けたのと同じ相談室にいた。私達の姿を見て先生は軽く会釈した。早速精密検査の結果を問う。先生は言った。

「実は精密検査はできませんでした。」
私達は啞然とした。理由を問うと「危険すぎるから」と答えが返ってきた。

「精密検査は体力的なものも伴います。人間ドックを受診されたこととはありますか？ それなりに疲れるでしょう？ あれと同じです。」

「そりゃあ何本も注射を打たれて、胃カメラだの内視鏡だのといろん

な器具を体の中に入れば、疲れるに決まっている。先生の言う精密検査というのは、どうやらこれくらいのレベルのものらしい。検査ができないということになると、いったい父は、そして私達は、どうしたらいいのだろうか。率直に先生に聞いてみた。

「もはや手の打ちようがない状態なのです。今できるのは、投薬による療法と酸素マスクを付けていただくこと以外にありません。」
はつきり言ってしまう。合コン先生は、もはや何をやっても快復する見込みはない、寿命だ限界だと言っているのだ。父は、いわゆる「医者も匙を投げた」状態にあるのだ。追い打ちをかけるように、合コン先生は言う。

「酸素マスクをつけていてもすべて安心と言うわけではありません。おそらく心肺機能が今以上に良くなることはないでしょう。むしろ悪化する方が確率が高い。最悪の場合、呼吸が薄れていって、そのまま停止してしまうでしょう。」

「それじゃ父はこれからずっと酸素マスクをして生活しなければならぬんですか？」

「そのとおりです。」

「でもあんな状態じゃマスクなんてすぐはずしてしまいますよ、手足を縛ってでもおかなきゃ。」

「手足を縛るのは拘束医療に当たりますので、法的にやれません。」

「じゃどうやってマスクをつけさせるんですか？」

「ご自身でマスクをつけておいていただく以外にないのです。マスクをはずすと危険であることに変わりはありませんから。」

見かけによらず、慎重この上ない先生である。先生は続けてこんなことを言った。

「まあ人工呼吸器をつければ、呼吸が停止することはありませんから、最悪の事態だけは免れますけどね。」

「人工呼吸器？」

私と母は声を見合わせた。

「ええ、機械を使って、人工的に気管から直接肺に空気を送り込む

のです。これならば呼吸が停止することは絶対にありません。ただし、これをいったん取り付けたら、患者本人の意思がない限りは誰にもはずすことはできません。これは法律で定められたことなので
す。」

また法律か。固いな、合コン先生。

「とはいえ、長沢さんの場合は酸素マスク同様、勝手に呼吸器も外してしまうでしょう。」

「それじゃ、おんなじじゃないですか。縛ることもはずすこともできないんじゃない、いったいどうしたらいいんですか。」

「ずっと眠っていていただく以外方法はありません。」
「ずっと眠っているだつて？漢字にすると「永眠」じゃないか。つまり死んでるってことだ。でも呼吸してるんだから生きてるということになるわけで。私と母は目を合わせた。お互い考えていることは同じだった。その考えを先に口に出したのは母のほうだった。」

「それは植物人間になる、ということですか？」
「そういうことになります。」

先生は迷うことなく言い切った。私達は再び目を合わせた。

植物人間・・・何と言う嫌な響きだろう。少なくともこの言葉は私が子供の頃にはなかった。もし子供の頃この言葉を聞いていたら、仮面ライダーの怪人かウルトラマンの宇宙星人を想像していたことだろう。子供から思春期を過ぎ大人になって今に至るまでの、それなりに長い年月を経る間に医療の技術はぐんと進み、ついに植物人間を生み出すまでに至ったのに違いない。脳死という問題は一昔前にはずいぶん議論になった。そもそも脳死という言葉もまた妙な言葉だ。脳だけが死んでいて他が生きているから脳死というのだろうか、そもそも脳が死んでたら、人間生きていないんじゃないのか？
そもそも人の死というのは、何をもって死と定義するのだ？
脳は死んでいてもほかの部分が全部生きていれば死ではないということなのか。そこまで発達した医療技術、脳が死んでいてもほかの部分を生かす医療技術、その一部が合コン先生の言う人工呼吸器なの

だろう。人工呼吸器があるくらいだから、勝手な想像をさせてもらうと、ほかにもきつと人工心臓作動器だの人工消化器官動作器だの人工排泄器だのといった技術があるのではないか。もしかして人工生殖器なんてのもあって・・・、ん？人工生殖器？それに近いものは、ずいぶん前から世の中にあるな。病気の人じゃなくてむしろ正常な人（？）が大いに利用している。俗に『オトナの玩具』っていう、そう、あれだ。南極一号だの張形だの、いろんなやつがある。まあ、これを使ったからといって生殖できるわけではないから、医療技術ではないし、正確には人工生殖器ではないが。弁解するわけでもないけれど、私は使ったことはない。

おっと話が変な方向に行ってしまった。

脳が死んでいながらも生命活動を維持する医療技術の話だった。そんなもの、一体なんの役に立つというのだろうか？手足を動かすこととはなく、話すこともせず、笑いも泣きもしないが、呼吸をし、栄養を摂り排泄するといった生命活動を機能がある限り人は死んでいない、という考え方。そんな考え方が世の中にあっというのか？母と私が目を合わせたとき、お互いの心の中にあっというのか？そんな感じだった。私達の気持ちは決まっていた。しかしそれを私のほうから言い出すことはできなかった。私にはそんな権利はないのだ。なぜなら、父は血を分けた私の親であるから。今や父の生死は私達の手に乗ねられているのだが、私が思っていることを先に口に出したとたん、私は親殺しの烙印を押されるのである。私は母と目をあわせながら、一言も発することができなかった。母はそんな私の気持を汲み取ってくれたようだった。私達がお互いに思っている気持を、母のほうから先に口に出した。

「そこまでして生かさんでもいろいろ。どんげんバカになっても頭がおかしくても、ワガママでどうしようもない人間であつても、普段動き回ってなんかしゃべったり、ご飯食べてうまいと言ったり、テレビ見て笑ったり泣いたりしてるうちは、まだ人間らねかて。ウンともスンとも言わねえでただ眠ってるだけらきゃ、それは人間じ

「やあねえやね。」

母の声が涙をこらえているように聞こえたのは私の気のせいだったのだろうか。いずれにせよ私は母の言葉に「そうだな」と全面的にあいずちを打ったが、そのときこんなことを考えていた。脳が死んでいても生命活動を維持する医療技術、それはあつていいのだ、むしろ必要な医療技術なのだ。それを必要とする人がいるからこそ、そのような医療技術が生まれたのである。この技術の登場によって、脳死も植物人間も問題としてクローズアップされただけであつて、本来的に医療技術として必要な措置であることは変わらないのである。そんな必要な医療技術を受けている人はたとえ植物人間であっても「患者さん」なのだ、病気に苦しむ人間なのだ、立派に生きているのだ。仮に植物人間となるのが父ではなく私の子供であつたとしたら、私はどうするだろう。迷うことなく生き続けてもらうほうを選ぶだろう。植物人間となつてもだ。

私達は、仮に人工呼吸器をつけざるを得ない事態になつてもそこまでする必要はない、延命治療は不必要、との決定を下した。合コン先生にそれを告げると、先生は事務的に「わかりました」と言うだけだつた。私達のこの決定は戦勝国による軍事裁判の判決と同じだ。連合国による極東裁判だ。生存競争という戦争に勝利した母は父の生殺与奪の権利を握り、父を裁いたのだ。

そのとき私は急に義弘叔父の視線が気になつた。義弘叔父は先ほどこから私達の会話を黙つて脇で聞いているだけで、横から一切口を挟まなかつた。義弘叔父は普段から寡黙な人ではあるが、根は陽気な人で、ここぞという時にはしっかりと自分の意見を主張する人であつた。しかもその意見は健全な常識に裏打ちされていたものだったので、父母はもちろん、私にとつても頼りがいのある相談役といった役どころの人だつた。その義弘叔父がこのような重大な私達の決定に対して黙つて脇で見ているだけで、一言も意見を発しないのだ。私にはそれが気になつてならない。義弘叔父の沈黙が無言の圧力となつた感じられてならない。義弘叔父の視線は私達にこんなことを

告げているように思われた。

<お前の父親はお前にとって父親であると同時におれにとっては今やわずかに存命する血を分けた兄弟なのだぞ。お前のやっていることはおれの兄弟を殺すことなのだ。そこをとお前達はお前達は理解しているのだろくな。とはいえお前達にも生活があるだろつからこのまま生きてもらうのは困るし元気になってもらっても困るといふ事情はよくわかる。やむを得ないとおれも思う。おれがお前達の立場であっても同じ事をするだろつ。しかしおれはまた一人この世から兄弟を失うのだぞ。だが今さらそれを言つて何になる。生きることのほうがはるかに重要だ。だからおれは何もあえて口を出さないのだ。だがお前達の決めたことは人殺しと同じだと言うことをよくわきまえておくように。殺される人間の兄弟としてはお前達の事情を察するゆえにお前達を許すことにする。>

押し黙つたままの義弘叔父の眼鏡の奥から、かすかな悲しみの光が漏れているように思えた。

合コン先生の説明が一通り終わった。先生は言った。

「それでは当面のことについてお話し合いをしましょうか。今日、向こうのお部屋にいま長沢さんがお入りになっている介護施設の責任者の方に来ていただいていますので、相談してみてください。今ご説明したことは、すでに先方の方には大まかに伝えてあります。」

『天使の庭』から来ていたのは谷崎さんではなくマネージャーの××さんだった。××さんはナースステーションの奥の小部屋で、机の隅のほうにちょこんと座り、まるでようやくアポをもらえたキーマンを緊張して待つ営業マンといった面持ちで私達の入室を待っていた。私達が小部屋に入るとすつくと起立し、背筋を伸ばしたまま一礼する。先に立った合コン先生が、

「遅くなりました、今ご家族の方にはご事情を説明しました。」
と言つて××さんの対面に座る。一同も座る。

私は××さんの左隣に座り、母は私の左に座った。義弘叔父は母

の対面、合コン先生との間に席を一つ空けて座った。折りたたみ椅子を引く金属音がおさまると、××さんは座ったままで私に名刺を差し出した。私は横を向いて、こう切り出した。

「先生から聞きました。父はこれから一生酸素マスクを付けて暮らさなければならぬのです。そんな状態でも『天使の庭』で預かっていただけるとはいいのでしょうか？」

××さんは神妙な表情で答えた。

「結論から申し上げますと、お預かりすることはできません。」

頭の中が一瞬真っ白になった。××さんは続けた。

「せっかくご入居いただいてさあこれから第二の人生を楽しんでいただくという矢先に、大変申し上げにくいのですが、何分にも当施設は介護療養施設として、医療施設ではございませんので医療行為が認められていないのです。」

「医療行為？ 酸素マスクを付けて生活するだけなのにそれが医療行為になるんですか？」

「はい、りっぱな医療行為です。」

「でも自宅で酸素マスク付けて生活してる人もいるって聞きましたよ。それと同じじゃないんですか？」

「ご自宅でやられる行為は法律で禁じられているわけではありませんから、何でもできます。」

なるほど。カゼひいて家で寝込むのは医療行為ではないが、入院して寝込めばそれは立派な医療行為になる。それと同じだ。××さんは、さもすまなそうに話を続ける。

「お父様はとても明るく気さくな方で、谷崎をはじめ、職員には大変ご親切にしていたきました。ほかの入居者の方々とも仲良くなられて、毎日のようにお部屋を歩き来されていました。会合でも積極的に皆さんを笑わせてくれて、こちらとしましてはぜひこのままご入居いただきたいのはやまやまなのですが、何分にも医療行為ができませんので、ご退居いただくほかはありません。」

「そこを何とか面倒見ていただくわけには行かないのですか？」

私は食い下がるが、××さんは頑として受け付けてくれない。私も母もあきらめざるを得なかった。××さんは言った。

「ご契約金ですが、ご入居いただいた期間が一ヶ月以内ですので、契約書記載の通り全額を払い戻しさせていただきます。月々の介護料につきましては日割り計算というわけには行きませんので一か月分だけ頂戴いたします。」

たとえ五百万が一千万になってもいい、何とか父を引き取ってくれないだろうか、そんな思いで私達は××さんの言葉を受け入れた。すべては振り出しに戻ってしまった。こうなってしまった今、父は単なる介護老人ではなくなっていたから、父の面倒を見れる施設は病院以外になかった。とはいえ単なる病人でもない、介護付き病人なのだから、介護を行うことができ、さらに医療行為も行なえるような病院を探さなければならぬ。しかし世の中にそんな都合のいい病院ありやしない。じゃあどうするのだ？ こんなになつてしまった父をいつたいたいこの誰が面倒見てくれるというのだ？ ××さんが帰った後、私達はすがりつくような思いで合コン先生に相談したのであった。合コン先生は言った。

「拘束医療が認められている病院で療養してもらう以外ないですね。」

「どんな病院なんですか？」

藁をもつかむ思いで必死に先生の次の言葉を待つ私達。合コン先生は至って冷静な口調で言った。

「精神病院です。」

合コン先生が紹介した精神病院は、長岡のはずれ、海に近いMの町にあった。三階建ての病院で、周囲は常緑樹の生垣で囲まれ、広い中庭には小石が敷き詰められていた。車が敷地内に入ると、タイヤに踏み潰された砂利がジョリジョリときしみ、窮屈そうな音を上げた。受付で用件を告げ、待合室で呼び出しを待つ。この病院は精神科だけでなく内科もある。内科はそれなりに流行っているらしく、

待合室に順番を待つ外来患者が数多くいた。

このときは私と母と、そして倫子夫婦が一緒だった。前の日、何日かぶりで父を見舞った倫子は、父のあまりの変貌ぶりに愕然とし、泣いた。可動式ベッドに座って背中を曲げ、開いたまま閉じない口からは涎を垂らして、うつろな目でテレビに見入る老人、それがよもや自分の父親だとは、倫子には信じられなかった。ここまで現実を目の前に突きつけられて、倫子には泣くことくらいしかできなかった。父はもはや倫子の前で封建主義から来る威厳を振りかざそうとさえしなかった。そんな父は、倫子にとつてもすでに父ではなくなっていたのだった。倫子はM病院へ向かう車の中で私にこう言った。

「昨日オヤジ見たけど、あんげんになったオヤジ、あたしは見たくなかった。あのガンコ者のオヤジがあんげん哀れなジジイになつてさ、あれが自分の親らと思うとアタシは涙が止まらんかった。」とは言うものの、合コン先生の診断結果に対する倫子の意見は私達とまったく同じであった。倫子もやはり延命治療を望んでいなかった。

待合室で順番を待つ患者はほとんどが地元の人だった。農作業用の野良着に、一昔前のオレンジ色の農協マークが刺繍された紺の帽子を被って、熱でもあるのか赤い顔してぼつとした目つきで空を見上げるオジサンがいる。鼻水をズルズルと音を立ててすする泥だらけの割烹着姿のオバサンがいる。薄汚いTシャツに下はジャージという妙な取り合わせの中年男がいる。いずれも農作業の合間に外来にきている地元の人たちだろう。長岡の街中から来た私達はこの中でちょっと浮いている。

それにしても結構待たせる。どのくらいの時間が経つたのだろう。倫子はかなり疲れているらしくソファにもたれうとうと居眠りを始めた。私もいい加減週刊誌に飽きてきた。ようやく名前を呼ばれ、倫子が眼を覚ます。一同、緊張の面持ちで立ち上がる。度ぎつい黒ぶち眼鏡をかけた化粧の濃い年輩の看護婦さんが待合室に入っ

て来る。看護婦さんは紙の挟まったピンク色のプラスチック板を手に私達をキョロキョロ見回して言う。

「長沢さんですか？ どうぞこちらへ。」

看護婦さんの後をいそいそとついていくと、事務机と回転椅子があるだけの殺風景な小部屋に通される。看護婦さんが抱えていた紙に、指示されるがまま必要事項を記入する。初診の際に問われるようなくありきたりの事柄を記入する。合コン先生からすでに連絡が行っているのではないか、何で今さらこんな紙に、などと訝しく思いながらも指示に従って「はい」「いいえ」の欄に丸印をつけていく。わからぬところはいい加減に記す。先ほどの看護婦さんが「書き終わりましたか？」と言って、いったんプラスチック板を取りに来、またせかせかと出て行ってしまった。部屋に戻ってきた看護婦さん、

「じゃあ長沢さん、こちらのお部屋へお越しください。」

と、また別の部屋に私達を通す。なんだ、この部屋で先生とお話するんじゃないのか。

改めて通された部屋は、先ほどの殺風景な小部屋とはうって変わった壮麗な応接室であった。応接室の真ん中にはヒノキか何かの木目調テーブルが置かれ、周りを高価そうなふかふかのソファセットが囲んでいた。木製テーブルの上には白い花柄刺繍のクロスが敷かれ、その上に可愛い黄色い小花を生けた花瓶と厚手のガラス灰皿、シガレットケースが小奇麗に置かれていた。壁を見回すと、額縁に入れられた医師会の感謝状やらドイツ語で書かれた表彰状らしきものがズラリ並べかけられている。中には写真入の賞状もあってヒゲ面の外国人と一緒に賞状を見せながらニッコリ微笑んで写っている銀縁眼鏡の初老の日本人が写っている。これがおそらくこの院長先生なのだろう。

先ほどの看護婦さんがお茶を入れに来た。蓋のついたお茶が茶卓に乗せられて運ばれて来る。

「すぐに先生がいらっしやいますから、いましばらくお待ちくださ

いね。」

そう言つて看護婦さんはお盆片手にちよこんとお辞儀をして、そそくさと部屋を出る。

ノックの音がして白衣を着た初老の紳士が現れた。賞状の写真の人だ。写真よりも若干白髪が増えている。

「どうもどうも、大変お待たせしました。」

先生は明るい表情でこの病院の院長だと自己紹介し、ソファに座つた。両手の指を組み合わせ、立てた肘を膝に乗せて、前のめりになつて話し始める。左の薬指には銀の指輪が光っている。

「お話はN病院の先生からうかがっております。だいぶ深刻なご様子ですね。」

それなら話は早い。すぐにでも入院させたいのだが、いつごろ入院できるかと問うと、先生は銀縁眼鏡の向こうから私の目をじつと見つめて言つた。

「その前に、ここが精神科の病院であることはすでにご存知ですね？」

「十分承知しております。」

「それでは精神科というものがどのようなものであるかはお存知ですか？」

改めてそう言われてみれば、精神科というものがいったいどのような所であるか、実のところはつきりわかっていない。だいたい先生の言う「どういふもの」というのが何を指すのかよくわからないから素直に聞く。

「どのようなもの、ということ？」

「具体的にどのような治療をしているのか、ということですか。ご存知ですか？」

「いえ、よくわかりません。」

「そうですね。だいたいまなさん精神病院と聞くと、名前を聞いただけでいふんなことをイメージされて、勝手な想像を思い浮かべる方が多いのですが、さすがに慣れていらつしやる。」

私が慣れているだって？ いったい何に慣れていると言うのだ？

問いただす暇も与えず先生は父の病状について切り出す。先生がはめている金の腕時計に目が行く。どう見てもロレックスだな。

「たしかお父様は老人性の認知症でしたね。老人性の認知症自体は快復はほぼ不可能と考えていいです。アルツハイマー症もまったく同じです。これらの病気は現在の医学では治療は不可能です。治せないのです。抑うつ質やてんかん質といった精神障害ならば投薬等の処方も考えられますが、そういうものとは違う病気です。ここのところはよろしいですね？」

十分理解しているわけではないが、この先生にじつと見つめられながらそう言われると、なんとなくわかった気になってしまう。要するにここに入院したからといって父の認知症が治ることを期待するなということだろう。

「この病院には認知症の方もかなり入っておられます。認知症の場合、症状によって入っていただく病棟を変えています。軽度の症状の方と重度の方とお入りいただく病棟が違うわけです。もしお父様が入院されるならば、軽症の病棟に入ってくださいということになります。」

「そうですか。そこでは酸素マスクをつけておいていただけられるのでしょうか？」

「問題はそこです。」

先生は銀縁眼鏡の奥から黒真がちな大きな目で私の目をじつと見据えて言う。

「酸素マスクをつけていただくことも可能ですが、おそらくずっとつけておくことはできないでしょう。理由はもうおわかりですよね。」

「ええ、わかります。でも、N病院の先生は酸素マスクをはずさないためには拘束するしかないと言っていました。この病院であれば拘束してでも酸素マスクをつけることができるという先生に紹介されたのですが、そうではないのですか？」

どうも合コン先生からうまく話が引き継がれていないのではないのか。そんなふうに思え、私は確認するように問うた。

「ここなら確かに拘束して治療することはできますヨ。」
「なんだ、できるんじゃないか。」

「それなら手足を縛ってでも酸素マスクをつけさせておいてください。」

そう言ったとき、院長先生が一瞬笑みを漏らしたように見えた。

「事はそう単純ではありませんよ。これだからシロウトは困る。」
その笑みはこう言っているように思えた。

拘束すること、つまりは患者から自由を奪うということの重大さに対して、私はあまりに鈍感でありすぎたのかもしれない。たとえその拘束が患者を治療するために、あるいは患者の生命を守るために行なわれるものであったとしてもだ。自分が手足を縛られて、猿轡をはめられ、大声を上げることさえできない存在と化したときのことを想像してみたまえ。先生の無言のまなざしは、そんなことを私に訴えているように思えた。私は質問を変えた。

「父のように認知症で酸素マスクをつけると言われてもはずしてしまふ患者さんって、他にもおられるんでしょう？」

「認知症で酸素マスクをされている患者さんは、確かに何人かおられます。ただ、みなさん認知症ですが、拘束まで至った方はおられないのです。」

「どういうことですか？ 手足を縛りもしないで酸素マスクをははささない方法が何かあるのですか？」

「いや、そうではなくて、はずそうにもはずせないんです。ほとんどみなさん寝たきりで、手足の自由も利かないような方ばかりですから。つまり酸素マスクが必要な方は、相当重い認知症の方ばかりなのです。」

「それじゃ、拘束ってどういう時にするんですか？」

「暴れたり喚いたり他の患者さんに危害を加えそうになった時がほとんどですね。老人でそういう方はおられません。」

なるほどそういうことか。確かに認知症で酸素マスクの療養をやっているのは寝たきり老人だけということか。そして精神科が拘束するのは精神病患者によって他の患者に被害が及ぶ場合だけだということか。どうも話が違う。父の場合、寝たきりではなくそれなりに動けるから始末に悪く、それゆえこちらの要望は、手足を縛ってでも動けないようにして絶対酸素マスクを取らないようにしてほしい、ということである。とはいえ、暴れて他の患者に危害を加えることなどあの父からしてまずあり得ない。ガンコでわからずやで封建主義者でカッコつけたがり人間ではあるが、根は善良な人間であつて、人様に暴力を振るうようなことは絶対にない。その証拠に、あれだけ普段から怒鳴り散らし続けてきた母に対して、実は結婚してから今に至るまで、一度も手を挙げたことはない。そんな父を拘束していいものだろうか。拘束するということが、それはまさに父の自由を奪ってしまうことだ。これは悪魔のような仕打ちではないのか。私達はそのような状態にされたときの父の気持ちをもっとよく考慮していなかったのだ。当然のことながら、認知症とはいえ父にもまだ人間の感情がある。ところどころボケはするものの、それなりに会話ができるし、食事をしてうまいと言つこともできた。一人でトイレに行くこともできた。テレビを見て笑つことも怒ることもできた。私達は自分の生活を守ることばかりに意識が行つていて、そのため必死になつており、父がまだ持っているそんな人間としての在り方、人として感じる心にまで思い至る余裕がまったくなかったのである。院長先生はそんな悪魔のような私達の気持ちを見透かしたように、ただ私達を見つめるだけだった。

しばらく座は沈黙した。院長先生が口を開いた。

「もしお父様を拘束するとなると、認知症の一般病棟ではなく精神病棟の方になります。そこならば拘束しても酸素マスクをつけることができそうですが、それでいいのですか？」

誰も答えなかった。私は答えることができなかった。あまりに残酷な選択だ。そのとき倫子が口を開いた。

「そこでしかできないならば、そこに入れてください。」

そして母のほうを振り向いて、

「ばあちゃん、いいよね？ もうそうするしか方法ねえろ？」

同意を求める倫子に、母は言った。

「そうらね。それ以外に方法がねえきゃあ、そうしてもらうしかねえね。」

そして倫子は院長先生に向き直り、改めてきつぱりと言った。

「他に方法はありません。私達も困っているんです。ぜひここに入れてください。」

すると院長先生は、軽く笑みを浮かべてこう言った。

「一度精神病棟がどんなものか、実際にご覧になってからお決めになったらいかがですか？ まずは中を見てください。それから決めても遅くはないでしょう。」

院長先生の受け答えには、まるで悲壮感丸出しで突進してきた格下の力士を軽く受け流して土俵外に出してしまう横綱といった風情が漂っていた。

「他の病棟は普通の病院と同じでお見舞いの方も自由に行き来できますが、精神病棟は許可された人間しか入れません。患者さんはそこに監禁され、私ども職員が責任を持ってしっかりと監視いたします。脱走でもされたら困りますからね。」

先生は私達を精神病棟に案内しながらこう言った。私は先生に聞いた。

「脱走しようとする患者さんなんているんですか？」

「これからご案内する階は認知症のご老人しか入院されていませんから、そこで脱走はありませんが、若い患者さんのおられる病棟ではまれにあります。」

脱走を企てた若い患者が身体ごとすっぽり袋詰めになされて手足の自由を奪われ、皮の紐で猿轡されて大声を上げようと必死でもがくが声にすらならない、そんな映画のワンシーンのような映像が頭をよ

ぎった。アメリカ映画でジャック・ニコルソンがそんな患者を演じていた。タイトルはたしか『カッコーの巣の上で』。ここに入院すると、父もあんなふう拘束されてしまうのだろうか。ここから脱走をしようとした若い患者さんは、もしかしたら父のように我が家に帰りたくてたまらなかつたのかもしれない。その悲痛さを想うと胸が痛む。

旧式のエレベーターが二階で停まり、扉が音を立てて開いた。いきなり目の前に厚手の摺りガラスのドアが現れた。通路は四方を壁で囲まれ、狭苦しい。ガラスのドアの右横にはテンキーのような数字の並んだセキュリティボックスが据え付けられていた。先生は首から下げた自分のIDカードをセキュリティボックスに通し、数字を打鍵しながら言った。

「ここから先は別世界になりますから。」
ガラスのドアが音もなく開くと、いきなり私達の目に飛び込んできたのは、青いポリバケツを抱えて走り回る白衣の若い女性の姿だった。女性は私達には目もくれず、せわしそくに前を走り去った。女性の去った向こうから、熱帯ジャングルの奥に潜む珍鳥が鳴きだてるような「ヒーツヒーツヒーツ」という甲高い奇声が聞こえた。辺り一帯に異様な臭いが漂っていた。先ほど女性が走り去った方から今度は別の女性が、やはりポリバケツを両手で抱え、それもいかにも重そうに体を斜めにかしげながらやってきた。前を過ぎる時ポリバケツの中を覗くと、そこには薄黄色に汚れた大量のオムツが入れられていた。バケツを抱えた女性は反対側から来る別の女性とすれ違い様に、何事か声をかけた。声をかけられた女性は白いタオル地の布を片手に、先ほどの女性を振り返りながら何度もうなづき返し、これまた大急ぎで小走りに私達の前を走り去った。映画がドラマの一場面を見ているようだった。あの『天使の庭』が文字通りこの世の至高の楽園だとすると、ここはまさにその対極に位置していた。まだYの施設のほうが人間の生活に近かった。ここはまるで野戦病院だ。

「この時間帯はまだ平和なほうですよ。食後の休憩時間ですからね。」
訳知り顔で先生がそう説明する。首を伸ばして奥のほうを覗き込むが、うまい具合に壁やパーテーションで仕切られていてよく見えない。また奥のほうから奇声が聞こえてくる。

「さ、よろしいですかね。だいたい雰囲気はおわかりいただけだと思います。戻りましょうか。長くいる所じゃない。」

先生は人事先生は他人事のように言い、エレベータに乗り込んだ。

私達は沈鬱な面持ちでM病院を後にした。帰りの車の中では、自然、みんなの口が重くなった。突然倫子が啜り泣きを始めた。

「あんげな精神病院に入らんきゃダメらなんて、じいちゃんがあんまりかわいそうでさ。『天使の庭』にいた時は生き生きしてたがある？ それがあんげん中に入れられてさ、手足縛られてさ、そんげんがきや死んでもらったほうがよっぽど楽らかもしんねえねえ。」
誰も倫子の言葉に返す人は誰もいなかった。倫子のすすり泣く声だけが聞こえた。隣に座った矢野さんは倫子の肩を抱き寄せた。倫子は矢野さんの胸に顔をうずめた。運転席のルームミラーからそんな二人の姿を見て、私はちよつと恥ずかしくなった。さきほど院長先生に対して最もはつきりと入院させる意思表示をしたのは、いまよよと泣き崩れている倫子ではなかったのか。この涙、果たしてホンモノなのか。倫子の奴、自分をメロドラマの主人公か何かと勘違いしてるんじゃないのか？・・・おつと、そうだった、倫子の場合、決して勘違いではないのだ。この小説のタイトルどおりなのだ。倫子は自分のこれまでの人生そのものをメロドラマと見立て、自分がその主人公であるとみなしているのだ。だからこのときの涙はホンモノである。もちろんM病院でキツパリと父を入院させるようお願いした倫子もまた、間違いなくホンモノである。

M病院で精神棟を見た後、私達はいったん応接室に戻り、入院に必要な書類に必要事項を書いたのだった。その書類の中に拘

束医療を実施する際の同意書が含まれていた。

「これを書いていただかないと法的に罰せられます。」

院長先生は言った。いつ入院できるかについて、院長先生は「早ければ一、二週間後、おそくとも一ヶ月後には入れるでしょう。」と言っただけで、確実なことは一切言わなかった。ここもYの施設と同じで空きができるまで入れない状態なのだった。その間、父を今のN病院に入れておく以外、私達には方法がないのであるが、果たしてN病院がそれを許可してくれるかどうか。仮に許可したとしても、またもや「付き添いを・・・」などと言ってくるのは目に見えている。私達の不安は尽きなかった。憂鬱だった。不安と憂鬱は父への罪悪感と入り混じって増すばかりであった。

応接室を出るとき、院長先生は私達にこんなことを言った。

「ここに入院されている患者さんのご家族の方々は、みなさん一様に同じ思いで毎日を暮らしておられますよ。みなさん決して自分の行為を悪くとらないようにしてくださいね。すべて善悪の彼岸で考えるになってください。長沢さんなら十分にできるはずですから。」このニーチェみみたいな言葉は、院長先生からの私達への励みしだったのだろうが、暗に非難しているとも思える妙な言葉で、私は訳がわからず「はあ」とうなづくことしかできなかった。

Mの病院の一件を合コン先生に報告し、とりあえず空きができるまでの間、父をこのままこのN病院に置いてもらうよう私達は再三先生に頼み込んだ。とりあえず了承をもらい、いったん私は東京に戻った。この時みんなタカをくくっていた。すぐにでもM病院は空くだろう、と。病院側も私達も、一ヶ月もすれば空きができるだろうから、ほんの少しの辛抱だと思っていた。しかし事態はそう甘くなかった。三週間がたち、一ヶ月がたつてもM病院からは何の音沙汰もなかった。N病院のほうも「まだ連絡ありませんか？」と何度も聞いてくる。空きを願うのは私達だけではなく、看護婦さんたちも同じだったのだ。徐々に父をヤツカイ者扱いにしだしていたのだ。

やむなく私のほうからM病院に電話して、まだ入れないかと問うてみたが、何度聞いても「あと一、二週間で空くと思います。」の繰り返しだった。なんだか蕎麦屋の出前のように思えてくる。「まだですか?」「たった今出ました。」

これに追い討ちをかけるかのように、最悪の事態（いや最良か?）が発生した。酸素マスクと投薬療法の効果なのだろう、父の容態が徐々に快復し出したのである。入院した当初はほんのちよつと歩いただけでゼイゼイ息を切らして今にも死にそうだった父が、この頃を境に、急に元気になり出した。ひどかった足の腫れはすっかり引き、膨れ上がっていた腹もおさまって、腹の水もなくなつた。そうなる自力でどこへでも歩いて行けるようになるから始末が悪い。それならもう酸素マスクはもう不要かというところと決してそうではない。いつ再発するかわからないからしばらくそのままつけておくようにとの合コン先生の指示で、そのままつけていなければならなかつた。やっぱりこの先生、顔に似合わず慎重だ。

さあ大変なことになった。大変なのは患者本人ではない。周りで世話を焼く人々が大変なのだ。病気が快復するということは本来大いに喜ばしいことであり、誰だって健康であることを望まない者はない。しかし今の父くらい快復を望まれていない人はなかつた。それにしてもあれだけひどかつた症状がここまで回復したのだから、この病院の措置はきわめて正しかつたということがわかる。医療技術の高さも十分に証明している。さすがN病院、病院はこれを誇りに感じてくれていい。医者というのは本当にたいしたものだ。私達としても感謝の言葉もない。しかしこと父に限っては、決してそうではなかつた。病院は自分で自分の首を絞めてしまったのだ。労苦のタネを自ら撒き、自ら育ててしまったのだ。そして私達は、父の快復を喜んでいいのか、あるいはヤツカイな火種の再発火を悲しむべきなのか、複雑な思いで成り行きを見守るしかなかつた。

すっかり元気を回復した父は、救急病棟の個室から一般病棟の六

人部屋へ移された。早速その週末見舞いに行くと、部屋の入口で何やら揉め事が起きていた。何事かと思つてそばまで行くと、人だかりの中心に、何と、父がいるではないか！ 父は口をとんがらせ、唾を飛ばしながら、目を吊り上げて見知らぬ他人に怒鳴り声を上げている。父が食つてかかつているのは灰色の作業着姿の年輩の男性だった。作業着の男は怒鳴り立てる父に薄ら笑いを浮かべながらも、明らかに戸惑いの様子を見せていた。一体このジジイは何をそんなに怒っているのだろう、俺がこのジジイに何か悪いことをしたのか腕っ節には自信があるからいつでも殴り倒せるが、見るからに弱々しそうなこのジジイに対して変に暴力を振るつて大きな問題になるのも面倒だし、第一大人げない、はてさて一体どうしたことやら・・。そんなふうな表情がありありと見て取れた。一方父のほうは真剣そのもので、今にも男の胸倉に掴みかからんばかりの勢いであった。義弘叔父がそんな父を必死に食い止めている。その脇で、年輩の看護婦さんが顔をしかめて何事か父に言いきかせている。若い看護婦さんがその隣で心配そうに事の成り行きを見守っている。父と同室の患者とおぼしきバジヤマ姿のボサボサ頭の若い男が一同から一歩下がったあたりで、なすすべもないといった表情で佇んでいる。他の人たちは単なるヤジウマだろう。もの珍しげに父と男のやり取りを眺めている。

私は憤りと焦りと羞恥心で頭がカツとなり、突撃ラツパを聴いた兵隊のように人だかりの中へ割つて入った。

「じいちゃん、何怒ってるんだよ！ ホラッ、ベッドに戻らなきゃダメじゃないか！」

そう言つてか細くなった父の二の腕を引っ張る。体を斜めに傾げながら、まだその場を去ろうとしない父。まだ男に一言何か言つてやらねば気がすまないようだ。私は年輩の男を振り返り、

「すみません、老ボケで自分が何をやっているのか全然わかっていないんです、すみません。」
と謝る。すると父は、

「誰が老ボケらいや！」

と怒鳴る。もう処置なしだ。

なんとかなだめすかしてようやくベッドに戻すが、まだ腹の虫が収まらないらしく、ブツブツと文句を言っている。

ようやく事が落ち着いたところで、先に見舞いに來ていた義弘叔父に詳しい事情を聞くと、どうやら被害者の作業着の男は単なる通りすがりの見舞い客で、急に便意を催し、近場にあつたこの病室のトイレを借用したらしい。父はベッドの上からその様子をずっと見ている、男がトイレから出て來ると、急にベッドを飛び出してつかつかと近寄り、男の腕を捕まえて、

「おめさん、何のことわりもないで人の家の便所に勝手に入るとや、どういうことら！」

と、詰め寄つたのだそつだ。

いかにも父らしいガンコさである。筋の通らないことには断固抗議するし、自分が納得しない限り絶対妥協はしない。どこか倫子に似たところがある。もし遺伝による類似が精神的特長にもあてはるのであれば、父のガンコ気質は私ではなく、倫子に伝わつたのにちがいない。だからこそ父は、倫子がこれまでに起こした数々の身勝手なふるまいを決して許さなかつたのだし、それにもかかわらず倫子が可愛くて仕方なかつたのだ。一方、倫子もまた自らの行動を信じて疑うことがなかつたから、父の倫理原則の上に築かれた行動上の規律をつるさいものと感じてならなかつたのだらう。お互い似たもの同士の反目というわけだ。

そして、私には母から伝わつた優柔不断さとお人よしさがあつた。ガンコ一徹な父が、私には弱みを隠さないのは、母に対してそうするのと同等なのである。確かに私にも母にも、自らを律する行動原理もなければ倫理もないような気がする。仮にそれらに似たものがあったとしても、他者に強要することはまずない。私や母のそのよくな心の在り方は実に日本人的な在り方ではないだらうか。聖徳太子は言つてゐるじゃないか、「和を以つて尊しと為す」と。それが日

本人の心の在り方、社会の在り方ではないのだろうか。そう考えると、父と倫子の心の在り方は、若干ではあるが一神教の世界の在り方に近いような気がする。

「なあ陵、どうらや？ 人人家ちに勝手に上がりこんで便所借りて、なんも言わねえてや、おかしいねかや。あんまりに常識がねえてやなあ。お借りしますの一言ぐれえあつて当たり前前らるうが。おれはこういう性格らすけんな、ちつと注意してやったこてや。」

理屈は合っている。極めて正しい。違っているのはここががわ家でないことだけだ。しかしこのわずかな違いが大きな問題なのだ。精神科にかかる必要のある人と健康な人を隔てるのはこのわずかの差だけであつて、それ以外は変わらないのかもしれない。この差は人が持つ行動原則そのものに表れるわけではないだろう。自分の行動に関して何らかの原則を持たない人というのはこの世に存在しないはずだが、その原則自体は理路整然として人を納得させるに十分なのに、精神病と認定されてしまう人は、原則に則つて発現される行動のほうに問題があるのだろう。それはタイミングであつたり場所であつたりする。いわゆるTPOというやつだ。今の言葉で言えばKYとでも呼んだほうがいいのか。いずれにしても言っている内容自体、間違つていないこの父をM病院に入れることについて、私の心にいまだに何かひつかかるものがあつた。といつて父が健常者であるなどというつもりは毛頭ないのだが。

父を見ながらそんなことを考えていると、いつもの年輩の看護婦さんが病室に入ってきた。看護婦さんは私の顔を見るなりこう言つた。

「この人、ほんとに手に負えなくて、今みんな困つてるんですよ。今日なんてまだいいほうですよ。この間なんて大暴れしましてね。病室が大騒ぎになりました。」

「ええっ！ほんとですか？ 今まで暴れたことなんてなかったのに、いったい何があつたんですか？」

「いえね、こちらでおむつを穿かせてさしあげようとしたんですよ。」

そしたら嫌がつて大暴れして、若い看護婦を突き飛ばしましてね。

看護婦は腕に軽い傷をつけました。」

「そうだったんですか……。それは大変申し訳ないことをしました。すみません。」

看護婦さんの言をにわかには信じられなかったが、私にできることはただひたすら謝ることしかない。父は私達の心配をよそに、会話には上の空で、うつろな目ではかんと口を開けたまま、何事も起こらなかったかのように大相撲中継を見ている。その姿は、先ほどの怒鳴り声を上げて人に食って掛かっていった父ではなく、のんびりと余生を過ごす好々爺といった雰囲気であった。だからこそ看護婦さんの言葉を簡単には信じられないのだ。看護婦さんは言う。

「最近元気になられたせいでしょうか、ちょっと目を離れた隙にお一人でフラフラ出歩かれることが多くなって、私どもみんな大変がっています。この間なんて一人でエレベータに乗って、一階まで降りていってしまったからね。私達、大慌てで探したんですがなかなか見つからなくて。下で息が上がってゼイゼイ苦しんでいるところを他科の看護婦が見つけて通報してくれたんです。こちらとしてはもう毎日心配のし通しでして、実は大変困っております。」

「すみません。」

「Mの病院のほうからは、まだ連絡がないんですか？ 先生ともいろいろ相談しているんですが、やっぱりM病院で診ていただくのがいちばんよろしいかと思えます。」

看護婦さんもひたすらM病院の空きを待っているようだ。合コン先生の力でなんとか早めにM病院に入れることはできないものだろうか。

「M病院からはまだ連絡がありません。もう少し待つようには言われてますけど。」

「そうですか。早く空くといいんですがねえ。あ、そうだそうだ、今お父様はご自分で紙おむつを穿いていらっしやいます。後でで結構ですから下の売店で大人用の紙おむつを買っておいてください。」

「わかりました。」

「それからですね、ちょっとこちらへ。」

と言って看護婦さんが私をいざなった先は、見舞い客用ロビーの奥にひっそりと置かれた灰色の公衆電話の前だった。看護婦さんはひそひそ声で言う。

「今週末の三連休ですが、ちょっと看護婦が足りなくなるものでして、申し訳ないのですが、付き添いをお願いできませんでしょうか？」

巨大掲示板じゃないが、キターツ！ である。どうやらこの病院、週末になると看護婦さんの人数が減るものと見える。それは仕方がないことだろう。手こずる父に対して、普段からこれだけのことをやってもらっているのだ。ありがたいと想わないではいられない。しかしながら、この三連休の間に、子供の通う小学校で秋の大運動会が入っていたのである。今年は用具係という大役（？）もあり、絶対にここだけははずせない。看護婦さんたちには大変申し訳ないが、付き添いはできない。はっきりそう言つと、看護婦さんは、

「そうですね、わかりました。いろいろご都合があるのですものね。」

と言う。ここでまた母に付き添ってもらうように依頼すると、また私に「殺す気か」などと言われかねないので、いったんは引き下がったのである。すると看護婦さん、

「あのですね、あまり大きな声では言えないんですけど、世の中にはヘルパーさんという職業がありますよ、ここでは病院の付き添いという仕事もやっているんですよ。ホラ、ここに。」

と言って公衆電話の下の棚から黄色い電話帳を取り出し、ページを繰って、とあるページの下方にある広告を指差した。広告は黄緑色の四角い枠に囲まれており、橙色の菱形の地に、白抜き文字で『ヘルパー派遣！お気軽にお問い合わせください』と書かれている。そのすぐ下に小さく「家事・冠婚葬祭手伝い」などと並んで「病院付添」というのが書かれていた。経営しているのは大手通をちょっと

はずれた殿町の有限会社である。殿町と言つのは長岡の飲み屋街で、なんとなく胡散臭そうな感じだな、と一瞬思う。

「決して病院はここを紹介しているわけでも斡旋しているわけではありませんからね。あくまでこういった方法もあるというお話をさせていただいているだけです。こういうところをお使いになるかどうかはそちらでご判断ください。」

看護婦さんは繰り返しそう言う。病院の紹介だとか何か病院にとつて都合の悪い事でもあるのだろうか。いずれにしても、初めて聞く話であったので、早速家に帰って母と相談することにした。

母は二つ返事で承諾した。看護婦さんに教えてもらった電話帳のページを開いて、まず広告のヘルパー会社に電話する。何度かの呼出音の後、年輩の女性が出る。

「あの、電話帳見て電話したんですけど。」

「はいはい、毎度ありがとうございます。ご用件は？」

「病院の付き添いをお願いしたいんですけど、できますか？」

「ええ大丈夫ですよ。病院はどちらになりますか？」

「N病院です。」

「ああ、やっぱり。」

やっぱりって、そんなお得意様になっているのか、あの病院は。

「うちの付き添いの依頼はほとんどがN病院の患者さんです。ですから慣れてますよ。ご安心してお任せください。」

どうもN病院というところはそういうところらしい。

「あの病院もけっこう組合が強くてねえ。看護婦さんってホラ、つらいお仕事じゃないですか。いろんな患者さんがいるし、夜勤とかもあるし。やる人が少なくなってきたらって聞きますよ。人手不足なんじゃないですかねえ。」

介護の仕事も大変そうだが、それでも看護婦さんに比べればそれなりに人が集まるらしい。あずさがそうだった。

「そうですね。で、付き添ってもらつのは父なんですが、これが認知症がひどくって、病院でも手を焼いているらしいんです。付き添

い、できますか？」

「ええ、大丈夫ですよ。何かあったら看護婦さんをお呼びすればいいんでしょう？」

「ええ。そうです。」

よくわかってるじゃないか。

「付き添っていただけの人ってどんな人なんですか？」

殿町の有限会社だということ、ついよからぬ想像をしてしまう。まさかフーズクの派遣じゃないだろうな。

「みなさんこちらで契約している方々です。主婦の方が多いですね。派遣するヘルパーはそれぞれみなさんの都合によって決まりません。」

値段は一日当たりで決まっていて、昼間の時間帯と夜間とで違っているそうだ。当然夜のほうが値段が高い。私は来週日曜の夜から翌日早朝までの派遣を依頼し、東京へ戻った。

翌週月曜は国民の休日であった。月曜のお昼前に新幹線で長岡へ行き、早速N病院へ父を見舞う。

昨夜ヘルパーさんが来なかったか父に聞くと、誰も来なかったと言っ。

「そんなことないだろ、昨日の夜、付き添いの女の人がここへ来て泊まっていったはずだよ。だってヘルパー頼んだんだもん。」

「いやあ、誰つれも来んかったなあ。」

「いや絶対に来てるって。昨日の夜泊まって今朝帰っていったはずだよ。じいちゃん忘れてんだよ。よおしく思い出してみ。」

ヘルパーの来訪が事実であることを半ば強制するような口調になる。すると父は言った。

「おお。そう言えば来たなあ。来た、来た。」

「そうだろ、やつば来てるだろ。じいちゃんが心配だから高い金払ってヘルパー雇ったんだぜ。」

ほっとしてそう言った。それからヘルパーという職業にちょっと興

味があつたので、さらに突っ込んで父に聞いてみる。

「来たのはどんな人だった？」
返ってきた答はこうだ。

「あの人らしいや、ホラ、バレーボールの県代表らつた女の人。名前なんらつたかなあ。」

バレーボールの県代表だつた人？それって、もしかして……

「谷崎さんかい！？ 『天使の庭』の？」

冗談じゃない、『天使の庭』とはとくに解約手続きを済ませているし、第一なんで谷崎さんが父なんかの付き添いで泊まらなければならぬんだ。ああ、そうだった、マトモに受け取ってはいけなかった。マトモに取るだけこちらがバ力を見る。父は言う。

「おお、谷崎さん言うたかなあ、あの人。」

「何言つてんだよ、じいちゃんボケちゃって。あの谷崎さんが来るわけないじゃないか。そうじゃなくてさ、昨日の夜から来てここに泊まつていった人だよ。」

「ああ、市役所の人のことか？」

ダメだ。全然記憶してない。簡易ベッドと綺麗にたたまれた貸し毛布が置いてあるところを見ると、誰かが付き添いをしたことは疑いようがない。病院からの付き添いの催促電話もなかったし、ヘルパーの人は絶対に来ているのである。間違いない。

私は父の記憶をたどるように、そして父の記憶力がどこまで正常に機能しているのか確かめようとして、こう聞いた。

「じゃあさ、じいちゃん、昨日の昼間、誰が見舞いに来たかい？」

「昨日か、昨日は柴田が来たつたかなあ。」

柴田さんというのは私もよく知っている。父が勤めていた会社の後輩で同じ町内に住む人で、何年前前に退職し、父とは庭いじりの趣味が合つて長いお付き合いをしている人である。たしか私より五つ六つ下のかわいい娘さんがいたはずだ。今頃あの娘さんはどうしていることか。すっかりオバサンになつていゝるんだらうな。そんな柴田さんが昨日見舞いに来たというのは、ホントかどうかは措くとし

ても十分信憑性のある話である。

「ああ、柴田さんが来てくれたのか。そりゃあよかったな。結構来てくれてんの？柴田さんは。」

「おお、毎日来てるいや。いい男らいなあ、あれは。」

おいおい、いくら定年退職してヒマになったとはいえ、柴田さんも毎日は来ないだろう。

結局ヘルパーさんが本当に来てくれたのかどうか、最終的な確認はできなかった。しかしこの一件で私はひとつだけ父を見舞う際の決めごとを作った。それは、父の顔を見たらまず最初に必ず誰か見舞客が来なかったかどうか聞いてみることだった。これを毎回繰り返していけば、少しでも認知症の進行を遅らせることができるのではないか、そんな淡い期待があった。私は父を見舞うたびに、必ず昨日誰が来たか聞いた。父の言を信用すれば、毎日のように誰かが見舞いに来ていて、数に換算すれば、一日あたり十人近くの人が見舞いに来たことになる。そんなバカな……。

そんなほんのわずかな努力にもかかわらず、父の認知症はますますひどくなるばかりであった。M病院からの連絡はあいかわらずなく、私達は不安な毎日をすごすことしかできなかった。

(介護篇・了)

父の死

「M病院さんからはまだ何の連絡もありませんか？」

そう言つて携帯に突然電話をしてきたのは、N病院のいつもの先輩の看護婦さんである。仕事の真つ最中に、例によつて携帯に「N病院」と着信表示されたので、ああ、また父が何か問題を起こしたか、あるいはまた付き添いのお願いかと一瞬うんざりしたのだったが、電話に出てみると看護婦さんの調子がいつもとちよつと違う。どこか晴れやかで、ウキウキした感じがある。M病院から音沙汰もなく困つてしていると告げると、看護婦さんは言った。

「ああ、それならよかつた。実はですね、もしM病院さんから連絡がないようだったら、Kの町なかの病院にお父様を移されたらいかがかと思ひましてね。それでお電話したのです。」

看護婦さんの声色が明るい理由がわかつた。ようやく父を厄介払いできるからだ。

「その病院つて、精神病院ですか？」

私は気がかりを一つずつ潰すように看護婦さんに聞く。

「いいえ、一般の総合病院です。ただ、ここのような救急医療型の病院とちがつて長期療養型の総合病院なんです。」

認知症で徘徊癖のあるガンコ老人を拘束することなく酸素マスクを付けさせておくことができる、そんな奇特な病院が世の中にあるのか？

「こちらは救急医療病院ですから、お父様の看護にはどうしても限界があります。急患があつたらそちらを優先しなければなりません、そのためにベッドも確保しておかなくてはなりません。お父様は入院された当初は危険な状態でしたが、酸素マスクさえつけておいていただければ、かなりお元氣になられましたから、この際長期滞在型の病院へお移りいただいたほうがよろしかろうと……。これは先生のご判断です。」

なぜ父がN病院で厄介者扱いされるのか理解できた。

一口に病院と言っても病院にはさまざまなタイプがあるらしい。

N病院は救急医療型の病院で、Kの病院は療養型の病院なのだ。救急医療型病院に元気になった患者を長く置いておけないというのは確かに道理であるし、そちらを専門に看護する人達に対して介護もどきの業務をお願いするのはそもそも筋違いである。それでもやってくれというのは虫のいい話なのだ。

それならはじめからM病院などという精神病院を紹介せずK病院を紹介してくればよかったのに、と父の担当医にイヤミの一つも言いたくなるが、そこは慎重な合コン先生のことだ。拘束してでも生命活動を維持してもらったほうが安全と考えて下した診断だったのだろう。それにしても、療養型病院で父を預かってくれるというのなら、こんなありがたい話はない。

「で、今空きはあるんですか？」

そう聞くと、

「ちょうど空きができたのです。もしM病院からまだ何も言っていないようであればそちらはキャンセルなさって、すぐにでもこちらへお移りになられたらいかがでしょうか？　すでに　先生（たぶん合コン先生のことだろう）から先方の先生に連絡が行っておりまして、先方からは、今なら入れるからすぐにでもお連れするように、とのことなんです。いかがでしょうか、K病院の電話番号をお教えしますから、まず一度ご連絡なさってみたらいかがですか？」

早速看護婦さんに教わった番号に電話して用件を伝えると、入院手続きは後回しでかまわないから、すぐにでも本人をつれて来い、できれば明日にでも来いと言う。

明日だって？　明日は平日じゃないか。また休みを取って長岡まで帰らねばらねばなんのか。その辺を匂わすと、K病院の事務員さんは脅しとも取れそうな、こんなことを言った。

「早く入院されませんかとすぐに次の患者さんが入ってしまいますよ。」

やむを得ず翌日休みを取って新幹線で長岡へ。いったん家へ帰り、急いで車でN病院へ行く。

それにしても、K病院は老人専門の療養型病院だというから、空気ができたということは、おそらく誰か老人が一人亡くなったという事だ。父はその亡くなった老人の後に入るということになる。

N病院まで車を走らせながら、私は漠然とK病院に《姥捨て山》のイメージを抱いたのであった。

N病院側はもうすっかり準備が整っていて、あとは父の身の回りの品をまとめるだけだった。ずいぶん用意のいいことである。一刻も早く父を追い出したいのだろうが、厄介払いできてせいせいするといった雰囲気を感じさせないところがまたイヤラシイ。

とはいえ人の感情というのはどんなにひた隠しにしてもビミョーに表に現れてしまうものだ。いつもツンケンしていた看護婦さんたちが、今日に限ってどこかほほえましく、やたら優しい。父がいる間には見たことのない晴れやかな笑顔で対応してくれる。中には「せっかくお友だちができたのにねえ。」だの「これから寂しくなりますねえ。」などと声をかけてくる看護婦さんもいる。

しかしながら、まだ病院は甘い、父を甘く見ているとしか言いようがない。K病院に移るに当たり、重大な懸念事項が一つあることに、看護婦さんたちはまったく気づいていないからだ。それは父を説得し、何らかの《理論》で十分納得させることができるか否かだ。これに成功しない限り、父はテコでも動かないだろう。駄々をこねて、みんなを困らせるだろう。

母の心筋梗塞以降、この三ヶ月の間、父は合計三つの施設を転々としてきた。Y町の介護施設、介護付き有料老人ホーム『天使の庭』、そして今のN病院。これから向かうK病院が四つめの施設になる。私はそのつど何らかの《理論》を使い、またそれらしい《作戦》を立案して、ことごとく成功を収めてきた。《若い女の子が手伝ってほしいとお願いしている理論》であったり《じいちゃんであれば

入れない理論》であったり、はたまた《駄々っ子あやし作戦》であったりと、すべては父が認知症であればこそ可能な《理論》であり《作戦》であった。そのつど手法も言っている内容も変わったが、これまでの傾向を振り返るに、きちんと筋さえ通っていれば、たとえ内容がウソであろうと父は納得した。父はそのつど私にいいように言いくるめられ、何とか施設を移ったのであった。このたびの移動に関しても、私には十分に勝算があった。もし嫌がるようだったら、私は父にこう言っただけでやるつもりだった。

「じいちゃん、今度の病院は山奥の環境のいいところだぞ。酸素マスクなんかいらなくらい空気が澄んで、きつとよくなるよ。」これぞ新たな《自然環境のいい病院で療養する」といい理論！

ところが、である。意外にも父は、このたびの移転に関しては、何の抵抗もなく「そうらか」と素直に受け入れたのであった。ずいぶん気合を入れて理論を作ったのに、私は拍子抜けしてしまった。それと同時に何か嫌な予感がした。

「そいじゃ、行こうかの。」
そう言っただけでそのベッドを下りる父の姿は、自らの死期を悟り、伝説の墓場へ向かう老いたアフリカ象を想像させた。

「K病院まではわたくしがご同行しますから。」
そう申し出たのは、いかにもまじめそうな、丸顔で目の細い若い看護婦さんだった。主に平日の日勤帯で働いているのだろう、初めて見る顔だ。

看護婦さんは、どこからか人間の片脚ほどの大きさの酸素ボンベを運んで来た。結構重そうな灰色の酸素ボンベで、看護婦さんはそれをよっこらしよと専用の車椅子に取り付けようとする。か弱い女性が一人でやるのは相当難儀だろうなと思われた。それでも看護婦さんは、これは自分に与えられた仕事なのだと言わんばかりに、懸命に取り付けようとする。しかし、なかなかはかどらず、私に手伝って欲しいような感じだったので、

「やりますよ。」

そう言つて手伝つと、

「助かります、ありがとうございます。」

と大いに感謝する。

車の後部座席に父と丸顔の看護婦さんと酸素ボンベを乗せ、K病院までの略地図を片手に、N病院を後にした。

大手大橋を渡るとき、父は自慢げに看護婦さんにこう言った。

「この橋はおれが作ったがあて。設計のときからずっとやってたがあて。」

ホントかよ！ 私は思わず大声で笑つてしまつたが、さすがに看護婦さんは扱いに慣れていた。

「へえ、そうなんですか、すごいですね、長沢さん。こんな大きい橋を作つたなんて。」

父の言うことがまつたくのデタラメだったかというのと、実は必ずしもそうといえないフシがある。というのは、この橋の建設に当たつて父の会社が電気工事を請け負つていた可能性があるからだ。父が現場監督として電気工事に立ち会つたということは、決してあり得ない話ではない。だからといって「自分がこの橋を作つた」ことにはならないが、正常な人なら「この橋を建築するに当たつて電気工事に立ち会つた」というべきところを、認知症患者でありかつ自慢好きな父は「自分がこの橋を作つた」と表現したのかもしれない。父の言うことがまつたくのデタラメだと断定できない理由を、子たる私はよく知つていたのだ。しかし看護婦さんは父のそんな過去の業績など知るよしもない。看護婦さんは認知症患者の単なるたわけた妄想と捉えていたのに違いない。父のことをほとんど知らない看護婦さんの認識と父の子である私の認識との間にこのような微妙なギャップがある。看護婦さんが父の取るに足らない自慢をまつたくの妄言と捉え、職務として対応する大人の態度がちよつと癪に障る。相変わらず父は昔のことは実によく覚えていた。地理に不案内な私達、私と看護婦さんにKの町を次々道案内する。「ここを曲がる

と昔の操車場に出る」そのとおり曲がると本当に操車場跡がある。「このＴ字路を左に曲がれば町役場の前に入る」実際そのとおりであった。

なぜ私達はこんな父を認知症患者として扱わねばならないのだろうか。よりによって私達はこんな父を精神病院に入れて拘束しようとさえしたのだ。M病院に入れなくて済んだことを大いに感謝する私であった。

K町はもともと独立した一つの町だったが、このたびの市町村合併で長岡と合併した。山奥の小さな町で、芸能人や有名人が何人か出ている。高校時代の同級生でここから長岡までバスで通っていた友人が何人かいた。K町にも高校はあるが進学校ではないので、成績のいい奴はこちらへ来るのだ。今でこそ幹線道路が整備され、車で三十分も走ればK町まで行けるが、当時そんな便利な道路はなく、冬になると主要道が雪で閉ざされてしまうので、K町出身の同級生連中は長岡市内にアパートを借りて自炊していた。

小さなK町の中心を信濃川の支流となる川が流れている。町並がこの川中心に形成されているのを見ると、古くはこの川が長岡との交通手段であり、重要な流通経路であったことが偲ばれる。町役場も警察署も消防署も公園もすべてこの川に沿って建てられている。K病院もまたK町を彩るこれらの建物の一つとしてこの川沿いにあるのだが、この川、恐いことにはガードレールが一切張られていない。道路からすぐ下が崖になっていて、一つ運転を間違えると、車ごと真つ逆さまに川の中に落ちてしまいそうである。折からの豪雨で川は茶色く濁り、水嵩が増していた。車をK病院の駐車場に入れる際、川に落ちないよう十分注意しなければならなかった。

K病院はひっそり閑としていた。入り口を入るとすぐ左手が受付、目の前が待合室になっている。暗い待合室には長椅子がいくつか置いてあるだけで、外来の患者さんはお婆さんが一人いるだけだ。お婆さんは背中を丸めて古びた女性週刊誌のページをめくっている。

奥には小さな売店が見える。中の売り子のおばさんはいかにもヒマそうな感じだ。

この病院、小さいながらも昔はK町を代表する総合病院だったよ
うで、レントゲン室やCT室など、それなりの施設を備えている。
が、なにぶんにも患者がいない。事務員のほうが多いくらいだ。後
で聞いた話によると、数年前に長岡とK町との境にできた大型総合
病院に患者をこっそり取られてしまったとのことだ。N病院にも匹
敵するその大型病院が開設されて以降、老人介護医療専門の療養型
病院として路線を変更してしまったため、せつかくの最新医療設備
もほとんど使われることなく、過去の栄光を偲ぶだけの記念碑のよ
うになってしまった。

「長沢さんはこちらの病室になります。」

整った顔立ちのちよつと小綺麗な中年の看護婦さんが案内した部
屋は、三階の三人部屋だった。父のベッドはいちばん奥の窓際であ
る。

他のベッドには半ば動きの止まったおじいさんが横たわり、じつ
とテレビを見ていた。新参者の入室で騒がしくなったにもかかわら
ず、彼らは私達を目で追うだけで、看護婦さん達の会話はもちろん、
これから自分達と一緒に生活することになる老人がどんな人なのか
という最も重要と思われることに対して、興味すら示そうとしな
かった。それぞれのベッドは間隔が狭いわりにピンク色のカーテンで
仕切られているだけで、ちよつとした物音もうるさそうであった。

これではテレビもまともに見られないのではないか。
テレビといえば、驚いたことにこの病院のテレビは液晶テレビで、
ベッドのすぐ脇の台に金属のアームで据え付けられている。このア
ームを調節すると、画面が前後左右に百八十度回転するという便利
なシロモノで、もちろん地上デジタル放送も見れる。N病院はまだ
アナログ放送のブラウン管だったぞ。さらにすごいのはリモコンの
ボタンを押すと『院内メニュー』という画面が出てきて、ここから

食事の選択や売店で買いたい物ができることである。これはホントにすごい。優れモノである。ただしこの老人達がこれを使いこなしているかどうかは大いに疑問であるが。ちなみにテレビを据え付けてあるこの台のことを、専門用語で床頭台というらしい。床頭台そのものも明るい木目調でしゃれていてN病院の金属製のやつよりもずつと高級感がある。

看護婦さんの制服もちょっとカワイイ。カワイイだけでなく優しい感じがする。N病院の看護婦さんの白衣はブルーがかっており、それはそれで清潔感と折り目正しさが感じられたが、その分どこか冷たい印象がある。この病院の看護婦さんのはピンクがかっていて、ぬくもりと若々さが感じられる。

色の違う白衣を着た二人の看護婦さんは父の引継ぎをする。あれこれと専門用語を使って、ひとつひとつ手順を確認しているようだ。後で聞いたところによると、看護婦さん同士のこのようなやりとりは、正式には「引継ぎ」とは言わず「申し送り」というのだそうだ。やさしさが感じられるのは白衣だけではない。看護婦さん達本人もまたN病院の看護婦さんのようにツンケンした、人を見下したような態度がない。全員どこか素朴な田舎びたあたたかみがあり、すれた感じがしない。N病院が決してそうでないというわけではないが、患者を人間として扱おうという態度がうれしい。いずれにせよ精神病院に入って手足を縛られて酸素マスクをつけられるよりはずつと居心地がいいはずで、M病院に空きができなかったのは、かえって幸いというべきだ。

院長から話があるというので、父を看護婦さんに任せ、私は院長室へ出向いた。院長室は同じ三階の小さなナースステーションのすぐ脇にあった。中に入ると、右の壁には書類が雑然と積み上げられた事務机とびっしりスケジュールが書き込まれた白板があり、左の壁には薬品箱や茶色い薬瓶がすわり並んだ棚があった。院長室というより薬局といったほうが近い感じの部屋だ。

院長先生は五十半ばのずんぐり太った人で、黒々した天然パーマ、

日焼けなのか酒焼けなのか、浅黒い顔に厚ぼつたい大きな口、垂れた小さな目をしていて、白衣をまとっていなければ医者というより土建屋の社長といった雰囲気だった。院長先生は黒いビニール皮の回転椅子に浅く腰掛け、重そうな上半身を背もたれにもたせかけ、ここへ座れと手招きした。診察を受ける患者さんのように先生の前へ座ると、先生は太鼓腹の目立つ体の向こうから見下ろすような視線で言った。

「N病院からお話は聞いています。ここに入ればもう安心ですから。」

それから父の病状を簡単に聞き取り、手元の紙を遠目がちに見ながらこんなことを言った。

「お父様があんまり手を焼かせるんで、N病院のほうもずいぶん大変だったようすなあ。本来であればこちらもそう簡単に患者さんをお引取りするわけにはいかないんですが、何せN病院の看護婦さんたちが担当の先生に何とかしてくれて、みんなして大勢で直訴したらしいですからね。もう担当医じゃどうにもならないんで、結局N病院の副院長からじきじき私のほうに依頼がありましたね。それで今回こうしてお預かりさせていただくわけなんです。」

「ハア、そうなんですか。ありがとうございます。」

しばらく間がある。再び院長先生が口を開く。

「医者の世界というのもサラリーマンの人たちとおんなじで、いろいろとつながりがありますね。N病院の副院長は同じ大学のボクの一コ先輩なんですわ。その人のたつてのお願いじゃねえ。無理しなくても何とか空きを作らないとね。」

「ハア。」

そうだったのか。こういう施設の空きは、誰かが死なない限りできないとばかり思っていたのだが、今の院長先生の話っぷりだと必ずしもそうでもないらしい。

また少し間ができる。こちらが何か言い出すのを院長先生が待っているようにも感じられる。私が何も言いそうにないのを見て取っ

たのだろつか、院長先生は、フウツと大きくため息をついて、再び口を開く。

「まあね、お預かりするからには、こちらで責任をもって面倒見させていただきますから、ご安心ください。」

「ハア、よろしくお願ひします。」

「それとね、M病院の空きをずっと待っていていらしたんですって?」

「ハア、そうなんです。なかなか空かなくて、困っていたんです。」

「フウム、なるほどね。ナルホド、ナルホド……。そりゃあそうでしょうな。」

院長先生はそう言つて、何やら意味ありげにやりと笑つた。厚い唇がいびつに歪む。ナルホドを繰り返すからには、何らか私の預かり知らぬ医者の世界の事情があつて、院長先生はそれを十分知つているのだろつ。院長先生は言う。

「とりあえずM病院には入院願を引き下げると言つておいてください。なに、電話でかまいませんよ。」

「ハア、わかりました。」

「ハイそれじゃね、入院の手続きだけは今日中に済ませておいてください。お父様のほうは後ほど診察させていただきますから。あ、そつだ、あとね、入院の受付といっしょにここの介護センターのほうも受付しておいてください。」

「え?介護センターですか?どこにあるんですか?」

「この病院棟の隣の棟が老人福祉介護センターになってます。入院の手続きが終わつたら事務員が場所を教えてください。長沢さんの場合、単なる入院じゃなくて介護付きの入院になりますからね、ここへ行って担当の介護福祉士を決めてもらつてください。」

「長岡の福祉センターに担当の介護士さんがいましたけど、そちらはどうなりますか?」

たまに後光の射すように見えたあのxxさんのことである。

「それとは別の申請になります。ここの病院の介護福祉士でなければ介護はできません。」

「そうですか。わかりました。」

院長先生との面談で確実にわかったことがある。それはN病院の看護婦さんたちが労働組合の団交にも似た訴えを起こしたことであり、これに困った合コン先生が父をここに入れるためにN病院の副院長まで動かしたということである。真偽のほどはともかく、院長先生はなぜわざわざそんなことを私に教えてくれるのだろうか。その理由がわかるのはこれからもう少したってからのことである。あのMの精神病院がなぜなかなか空かなかったのか、その理由もそのとき明らかになる。

父がK病院に入った当初、看護婦さんから私あてに何度か電話があった。想定範囲内ではあったが、それでも電話を受けるたび私は憂鬱な気分になった。何度かに一度は電話を取ろうとさえしなかった。普段から電源をきっておこうかとさえ思った。K病院からの電話の内容はN病院とほとんど同じであった。父が酸素マスクをはずして勝手に歩き回るので困る、何とかしてくれ……。看護婦さんの悲痛な訴えである。私は看護婦さんにこう言い切った。

「本人が勝手にはずして出歩いているんですから、無理矢理マスクつける必要はないです。見つけたときに適当に注意してくださいれば、それで結構です。」

「でも何か事故でもあると大変ですから。何かあったらこちらでは責任を負えません。」

これもまたN病院の看護婦さんが言ったこととまったく同じだ。それに対しては私も同じ言い方で返す。

「大丈夫、事故なんてありませんよ。仮にあっても、そのときに処置を考えればいいじゃないですか。」

「それでは困ります。この間だつて一人で階段を下りられて、二階の踊り場でせいぜいされてたので、階段から落ちでもしたら大変だと、看護婦みんな大騒ぎでしたよ。あそこから飛び降り自殺でもするんじゃないかと言う者もありましたくらいで。」

「大丈夫ですよ。オヤジに限って自殺なんてしやしませんから。」

「いや、そういう問題ではなくて・・・。」

「大丈夫です。放っておいてください。」

ここまでのやりとりはN病院の時とさほど変わらない。K病院がN病院と決定的にちがっていたのは、看護婦さんのこの一言だった。

「わかりました。もし何か事故がありましたもこちらとしては一切責任を負わないということでもよろしいですね？」

「全然かまいません。何も文句は言いませんから。」

これ以降K病院からの突然の電話はびたりと止んだ。私はふと考えた。もしかしたら、私からこの一言を得るためだけに電話してきたのではないだろうな、と。

現在の母の生活はすでに父の不在を前提として成り立っていた。

何しろ介護の労苦から開放されたのだから、まずそれだけで日々を十分平穩無事に過ごすことができる。心臓への負担を考えるとこれは大きい。何をやっても怒鳴られる心配はないし、友人達とのつきあいも自由にできる。子供に手がかからなくなってパートに出ることを決めた若奥様の気持ちに近かったかもしれない。

父がN病院に入院した当初、母は父がもはや家に帰ることはないだろうと直感した。母は自分の直感を信じ、父の存在をわずかでも意識させるものをひとつずつ身の回りから消していき、家の中を母の望む色合いに染めていった。有名な洋画のコピーを壁に貼り、台所の暖簾を新調した。水冷式クーラーを撤去してエアコンに変えた。BSアンテナを取替え、地上波デジタル放送を見れるようにした。父不在の毎日が徐々に当たり前の日々となっていく。母は生存競争の勝利者としてその権利を思う存分行使したのであった。

とはいえ、いまだに母を捉えて離さない気がかりがひとつ存在した。それは父が健康を快復して家に戻ってくることであった。

父が生きているのは紛れもない事実であり、生きているからには快復の可能性がゼロではない。医者 の 匙 加 減 ひとつでいつまた家に

帰されるかわからないのである。毎日を平穩に暮らすうち、この気がかりは次第に不安へと変わり、不安は恐怖となって母を苦しめるのであった。実際には父が元気になって帰ってくることはまずあり得なかつただろう。にもかかわらず母の不安は日々増すばかりで、果ては父が勝手に病院を抜け出して一人で山道を歩いて帰って来るのではないかという、まるで父が幽霊かゾンビか何かのような恐怖の妄想を抱くまでに至った。こうなるともはや神経症に近い状態で、M病院に入ったほうがいいのはむしろ母ではないかとさえ思われた。かつて元気だった頃の父より現在の父を恐怖に感じるというのは、おかしな話である。不安で現実が見えなくなっているのかもしれない。このように不安が原因となって恐怖を抱く神経症のことを精神病理学の専門用語では何というのだろう。脅迫観念症？抑うつ質？不勉強な私にはよくわからない。

病院からの電話はすべて私が取次ぐから余計な心配するな、ろくに歩くこともできない父があんな山奥のKの町から家まで帰れるはずがないではないか、私はそう言って何度も母を安心させたが、母の心の底にいったんこびりついた不安はなかなか簡単には拭い去ることはできなかつた。父が生きている限りこの不安が消滅することはないだろうと思われた。

生存競争には勝利したものの、母の心の中にはこれまで父から受けた数々の仕打ちに対する嫌悪感がトラウマとして根強く残っていて、このトラウマが、今度心筋梗塞を再発したら確実に死ぬという恐怖感とないまぜになり、不安をいつそう煽ったのかもしれない。あるいは父を現代の『姥捨て山』へ捨ててしまったことに対する罪悪感が心のどこかにあって、この罪悪感がわだかまりとなっていたのかもしれない。

いずれにせよ、父が帰ってくることへの母の恐怖はすさまじいものがあつた。K病院へ見舞いに行こうと何度誘っても決して行こうとしなかつた。自分が行くことによって里心を起こされたら困るといのが行かない理由だったが、正直なところ、母はもはや父に会

いたくなかったのだろう。その理由は、決して父を嫌っているからではなく、父の顔を見ることによって、自分の中の不安と恐怖が増幅してしまうことを恐れたからだろう。この不安を少しでも抑えるために、まるでキリスト教徒がイエス様に誓いをたてるように、母は二度と父に会うまいと心の中で誓いを立てたかのようであった。

父が生きている限りいつ何時家に舞い戻るともわからない、そこで母は考えたのであった。仮に父が帰ったとしても、そこに自分の居場所がないとわかれば再び病院に戻るのではないかと。そのためには、ここがもはや自分の家ではないことを父に十分わからせる必要がある、この家がもはや父のものではないこと、父が安逸を得られる唯一の場所ではないことを、何らかの形として徹底的に示しておく必要がある、と。生存競争に勝利した母がいまや生活の全権を握っており、誰もそこに口を挟むことができないことを、誰の目にも明らかかな形で明確にしておく必要がある、と。家の前庭を取り壊して駐車場にしてしまおうと母が言い出した背景には、こんな理由があった。表向きの理由は手入れをする者がいなくなったから。そして庭を駐車場にしたいからであったが、本当はそうではない。確かに庭を駐車場にしまえば私や倫子が帰省したとき車の置き場所に困ることはないし、水撒きや雑草むしりなどの面倒な手入れ作業からも開放される。いいことだらけだ。

そもそも庭は父が命の次に大切にしている大事な財産であった。実際施設に入っている時も父が最も心配していたのは庭の手入れを誰がやるか、誰が植木の面倒を見るかということであった。実際には誰も面倒見てなどいなかったが、私は近所の柴田さんがやってくれているから大丈夫だと言って父を安心させたのだった。

立派な庭のある家に住むことは、父の子供の頃からの夢だったのだろう。いや、夢というよりもむしろ、地主の家に生まれ育った自分、他の人間と格式が違う自分が住むにふさわしい家は立派な門構えに豪華な庭のついた家以外にない、そのような家に住むのが当然と、そんなふうに思っていたのかもしれない。それゆえ父はこの家

をはじめから庭ありきで建てたのだった。庭は父の手で造られ、育まれた。赤松やらツツジやらモミジやらの植木が次々と植えられた。父は毎日のようにこれらの植木に水をやった。どこからか大きな庭石が運び込まれ、狭い庭の山紫水明を彩った。私がまだ幼かった頃、庭には小さな池があり、大きな錦鯉が泳いでいた。この池を大きな庭石が取り囲み、春になるとこれらの庭石の上を薄紫の藤の花の房が垂れ下がった。池の手前には水芭蕉が活けられ、熊ん蜂がしょつ中飛んで来た。池にアマガエルが卵を産みつけたこともあった。卵が孵って大量のオタマジャクシが大量発生したが、ほとんどマツモムシに食われてしまった。庭でカクレンボもできた。狭い庭ながらも子供にとって絶好の隠れ場所になるところがいくつもあった。雪が積もってスキーやソリをしたこともあった。庭で遊んでいて植木鉢を壊すと父にこっぴどく叱られたものだ。庭は父の宝物であると同時に私にとっては子供の頃を思い出させてくれる貴重な場所でもあった。そのような庭であったにもかかわらず、取り壊して駐車場にすることに關して、私も倫子も一切反対しなかった。

庭の取り壊し工事は、父がK病院に入って二週間ほど経った土曜日、朝から半日がかりで執り行われた。母は私の従兄弟である本家の秋幸さんに頼み、本家で使っている庭師を手配してもらったのだ。この庭師、実は秋幸さんの母方の親戚で、その縁もあってかなりお安くやってくれるとのことだった。

庭師は、クレーン付の大型トラック一台に小型のショベルカーを積み、軽トラック二台にスコップだの荒縄だの用具類一式を積み込んでやってきた。総勢五人。全員ヘルメットをかぶっている。中にはあきらかにバイトと思われる若い人もいた。トラックの荷台の横には『(有)安岡造園』と白ペンキで書かれていて、本家の叔母さんの旧姓が安岡さんであったことが初めてわかった次第である。

始めに取り払われたのは庭石だった。あるものはネットをかけられ、またあるものは荒縄でしばられ、それぞれクレーンで吊り上げ

られた。クレーンのある大型トラックのそばで、誘導係が吊られた石を見上げ、オーライオーライと大声をあげていた。がなりたてるクレーンの騒音を聞きつけた近所の人たちが、何事が始まったのかと表に出てきた。はす向かいの鈴木さんの旦那さんがびっくりした顔で出てきて、私に問う。

「陵ちゃん、庭、壊すがあけ？」

「ええ。オヤジがあんなになった以上誰も手入れができませんからね。去年の冬も雪囲いしなかったんですから、今年はもういいだろうとばあちゃんが言うもんで。」

この鈴木さん家の旦那さんもまた十年近く前に母同様心筋梗塞で倒れた人だ。今は心臓にペースメーカーを埋め込んでいるという。母が入院していた頃、私が回覧板を持って行ったのだが、そのとき心筋梗塞の恐さをいろいろと教えてくれた。最悪の場合、脳梗塞を併発し、半身不随になる場合もあるという。鈴木さんの旦那さん、「ホラ、触ってみ」と自分の左胸の上方を指さすので、おそろおそろ人差し指で触ると、そこだけがカチンカチンになっていた。四角い小さな板が皮膚の下に埋めてあるのだ。旦那さんは教えてくれた。「これがペースメーカーらて。いまは技術が進歩したすけん、十年ぐれえ電池交換しねえでいいがて。これさえすれば絶対に心臓が止まることはねえすけ、安心して生きていらつるて。ありがてえこつつあ。」

子供の頃、まだ新婚家庭で子供もなかった鈴木さんの家へ回覧板を届けに行くとき必ずお菓子をくれた。私はそれが楽しみで鈴木さんの家には欠かさず回覧板を届けに行ったものだ。奥さんはきれいな人だった。昔の思い出だ。あれから四十年近くたち、旦那さんの髪の毛は薄くなり、奥さんもすっかり白髪になった。お子さんは二人とも東京で働いている。今はご夫婦二人で静かな隠居生活を楽しんでおられる。母は言っていた。この町内はすっかり老人の町になつてしまった、と。

庭石は土のついたまま大型トラックの荷台に積み込まれた。荷台

はあつという間に石で一杯になった。めぼしい庭石のいくつかは近所の柴田さんが自分の庭用に両手で抱えて持っていった。柴田さんは父と同じ会社の仲間で、庭いじりを共通の趣味としていた。父が最も心を許していた同僚で、入院してからもたまに父を見舞ってくれている。

庭の中央に赤松が聳え立っていて、そのちょうど真下あたりに置かれた庭石が最も大きな石だった。どうやら父が群馬の業者から二束三文で購入した庭石らしく、ここへ運搬する際、秋幸さんが手伝いをさせられたという。ここにまた私の知らない歴史があった。子供の頃から毎日見慣れた庭であつたが、どのようにして成り立ったのかについて私は何も知らなかったのだ。私よりはるか年上の従兄弟たちは、私の知らない歴史の証人であつた。普段何気なく眺めているのに、実はそれがどうやってここに存在するようになったかわかっていない事柄というのは数多くある。自分にとつてあまりに当たり前すぎて興味を抱くことさえない事柄の経緯を、それに無関係な他人がよく知っているというごくありふれた事実には、私は改めて驚くとともに、そのような事柄があることを理屈ではわかっていながらも、実体験として肌で知るといふことがいかに貴重な体験であるか、目を見開かれる思いに捉えられるのであつた。

植木の引き剥がし作業が始まつた。懐かしい四季の思い出とともにある木々が次々引き抜かれていく。春になると淡い上品な紫色の花房を垂れる藤の木が引き抜かれる。恥じらいもなく豪華な赤い花を身にまとう椿がスコップで掘り起こされる。小さなピンクの花々で綿帽子のような可愛らしさを見せるツツジが地面から根こそぎくり抜かれる。秋になると小さな赤い実を自慢するようにふんだんに身にまとうナンテンが残酷に引き抜かれる。カエデの木が掘り返される……庭は断末魔の悲鳴を上げているように思えた。

いくつかの植木は庭師が土ごと根っこに荒縄を巻いて持ち帰つた。どこかに売り払うのであろう。冬が近づく頃、これらの木々に一生懸命竹で雪囲いをしていた父の姿が目に見えなくなる。さあ、いよいよメ

インの赤松の番だ。庭師の一人が聳え立つ赤松にするすると登り、手始めに邪魔になる枝をノコギリで次々切り落としていく。

「この赤松、結構いいものだとかヤジは言っていましたけど、これもどこかへ売れないですかね？」

傍らにいた監督らしき年輩の庭師にそれとなく聞くと、庭師はダミ声でこう言った。

「たぶん元は相当いい樹だったがあでしょうな。それなのに旦那さん、自分でいろいろと手を入れてしまったんで、これじゃあ商品価値はゼロですわ。いや、もったいねえことをしました。この松を相当可愛がってたがでねえでしょうかねえ、旦那さんは。」

この赤松を引き抜く作業に最も手間がかかった。ブロック塀を崩した小型ショベルカーをそのまま庭まで引き入れ、何度も根っこから掘り起こすが、赤松はびくともしない。ショベルで向こう側に押し倒そうとするが、それでもだめだ。それじゃあとということに縄をかけ、軽トラックで引つ張るが、それでも抜けない。子供に読んでやった絵本を思い出す。「おじいさん、おばあさん、孫、犬、猫、ねずみがかぶをひっぱって、それでもかぶはぬけません」ってやつだ。まったくびくともしないので、仕方なく胴体を切り倒すことになった。聳え立っていた赤松はチェーンソーで真つ二つに切られた。この状態ならば四方からショベル力で掘り起こすことが可能だ。根元の部分が徐々に揺れてきた。あともう少しだ。根元に荒縄を巻きつけ、四人がかりでせえので引つ張る。その反対側からショベルカーがぐいぐい根っこを掘り起こす。しっこかった赤松もこれでようやく観念した。引き抜いたときにズボツという音がしたように感じられた。みんな汗をかきかき労働の成果を喜び合った。

子供の頃から見慣れた庭はこうして跡形もなく解体され、湿った黒土が剥き出になり、でかいミミズが行き場を失ってくねくね這い回っていた。小型ショベルカーが黒土を掻き分け掻き分け全体を平らにならしていった。かつて華やかだった庭はコンクリートが打たれるまでの間青いビニールシートで覆われた。

このとき私はかつて倫子が離婚する前、初めて梨本家に招かれたときのことを思い出していた。あのときまだ倫子の亭主だった正明は私にこんなことを言った。

<家の主が死ぬと、庭の樹木のどれか一本必ず枯れる。自分がまだ小さい頃竹林の前に大きな楓の木があったが、曾祖父の死と同時に枯れ果ててしまった。たぶん自分の父が死ぬと必ずどれか一本枯れるであろう。植物も生きていて、自分と同じ時代を生きた人と一緒に一生を終えるものらしい。>

私は当時この言葉を聞いて「鬱蒼と生い茂る梨本家の庭の樹木の中、私は不思議な感覚に捉えられた。時空を超えたいけとしいけるものの性を目の当たりにしたというか、何かこう梨本家にいまも息吹く土地の霊とでもいったものに私の存在が認知されたような感覚だった。私は現在の梨本家だけでなく、その土地の霊にさえ卑屈にされたのかもしれない。」と感じたのであった。

取り壊し工事は夕方近くに終わった。一段落した後、私はK病院へ向かった。

越後の山々がそろそろ赤く色づき始めようかという頃だった。黄金色になった棚田の上を赤とんぼの群れが飛び交っていた。夏を彩った蝉の声は止み、代わって蛙の鳴く声がどこからともなく鳴り響いていた。陽は徐々に弱まりあかね色が増してきた。静かな初秋の夕暮れだった。

Kの市街地を抜けるとすぐに川と交差する。この川のほとりにK病院がある。川の脇の道路を走りながらふと川面に目をやると、そこに一羽の白鳥がすくと立っているのが目に留まった。いったいどこから飛んできたのか、白鳥は川の中州に細長い脚を立て、しなやかに伸びた首を上下に動かしながら水を飲んでいて。黄金色の夕日が白い身体を輝くばかりに照らし、暗い川底に鮮やかに映えていた。私は珍しいなと思うと同時にその不思議な美しさにしばし目を奪われた。おっと、車を運転していたのだった、危ない、危ない。

三階の病室へ行くと父がベッドにいないので、慌てて看護婦さんに行方を聞くと、同じフロアの大広間でテレビを見ているという。酸素マスクはどうしたのだろう、勝手にはずして行ったとしか考えられないが、看護婦さんはそれを放っておいたのだろうか。電話で言ったとおり見て見ぬふりをしているということか。そんなことを考えながら大広間へ向かうと、そこにはソファに座る見舞い客達に混じってテレビの真ん前を陣取る父の姿があった。父は薄汚れた病院着姿で車椅子に座ってあんぐりと口をあけたままテレビを見ていた。車椅子の下には濡れてくしゃくしゃになった新聞紙が所せましと散らばっていた。車椅子に据付の簡易テーブルに飲みかけのお茶を入れた紙カップが置かれていた。K病院の看護婦さん達はこのあわれな父の姿を見て何も感じないのか？ 何の措置もしてくれないのか？ これがN病院だったら一大事だぞ。

「じいちゃん、何だよこれ、汚つたないな。お茶でもこぼしたのかい？」

そう声をかけると、質問には答えず、「おお、来たか」と返すだけだった。

私はすでにお約束となっている質問をする。

「今日は誰が見舞いに来たかい？」

父は答えた。

「おお、今日は半蔵が来たいや。」

半蔵？ 私の知らない名だ。誰のことだ？ それ。誰のことか問うより、今は父の気分を少しでも良くしてあげたい。

「おお、そうか、そうか。よかつたなあ、じいちゃん、見舞いに来てもらって。他に誰が来た？」

「阿部のシゲが来たなあ。」

阿部のシゲ？ それも知らない人だなあ、いったい誰なんだ？

後になって義弘叔父や本家の秋幸さんにこの話をし、父を見舞つたというこれらの人達がいったい誰なのか聞いた。

「半蔵らあ？ 裏の家のか？ そりやお前、何十年も前に死んでるれや。」

秋幸さんはゲラゲラ笑いながら答えた。

「あと、阿部のシゲさんという人も見舞いに来たと言ってたな、どこの人だろう？」

「それもこつて（たいそう）前に死んでるいや！」

私は愕然とした。さらに私は父が言ったことを確認するように聞いた。

「あとさ、『本家の婆さ』って、ここの家のおばさんのことかな？
「うちの婆さんのことか？」

「いやね、じいちゃんが『本家の婆さが見舞いに来た、いい婆さらつたなあ、あの婆さは』とか言ってたんでね。」

いまだ健在な秋幸さんのお母様、つまり私にとって義理の叔母に当たる本家のおばさんが見舞いに来た、とボケた父は言ったのだらうと思っていた。しかし義弘叔父に聞いたところ、父は本家の叔母さんのことは「本家の母ちゃん」と呼んでいたという。ということは「本家の婆さ」というのは、二十年ほど前に死んだ私の祖母、つまり父の母のことを指していたのである。これを聞くに及び、私は父が決してボケていたのではない、決してウソを言っていたのではないということを知ったのであった。彼らは確かに父の元へ来ていたのだ。ただし、彼らは見舞いに来たわけではなく……。その先はまだ語らないほうがいいだろう。

「陵、喉が渴きたいや、水くんねえか。」

父の求めに応じて小さなペットボトルのお茶を買ってきて、紙コップに注ぐ。のっそりとコップを手にしお茶を啜った瞬間、父はゲホゲホと激しく咳き込んだ。いったん飲み込んだはずのお茶が涎と痰と混じり合い、すべて吐き出されてしまった。

「なんだおい、しょうがないなあ、じいちゃんは。」

そう言っただけにはあつた新聞紙で父の汚れた胸元と腿を拭いた。床にもこぼれていたの、これも拭いた。汚れた新聞紙の原因はこ

れだった。父はいまだに咳き込んでいた。見ていてあまりに苦しもうなので、

「大丈夫か？　じいちゃん。」

と、私は父の背中を何度もさすった。山脈のような背骨の瘤の感触が手のひらに伝わった。しばらく咳き込んだ後、ようやく咳は止まった。

「どうだい、楽になったかい？」

「ああ、楽になった。ありがとな、陵。」

ふと周りを見渡すと、見舞い客はみな私と目を合わせようとしない。われ関せずといった表情で新聞を読んだり、テレビを見たりしている。私が見舞い客の立場だったらやっぱり同じ態度を取っただろう。「陵、おれが良くなったら、またみんなで温泉行こうねなあ、正月になったら、みんなして、正道やあずさも呼んで、また温泉行こうなあ。」

父が施設を転々とし始めてから、この言葉を私は何度聞いたことだろう。さらに父は言う。

「ミキヤユメヤトシアキ（うちの子供たちの名前です）にまた小遣いやるすけんなあ、ホントにいい子供達らいやなあ、大事に育てんきゃあダメらろ、なあ。」

これも何度となく聞いた。私はそうだな、そうだなと繰り返し答えるだけだった。

父はしばらくぼうつとテレビを見て言った。

「陵、タバコくれいや。」

また始まった。返す答えはいつも同じだ。

「さっき吸ったばかりだろ、じいちゃん！」
すると、

「おお、そうらったかなあ。」

と言って引き下がる父であった。

もうすぐ六時になる。そろそろ家に戻って、帰りの新幹線に乗らねばならない。

「じいちゃん、じゃあ俺、そろそろ帰るから。明日用事があるから、これから東京へ帰る。」

そう言つて席を立つと、父はよぼよぼと細い腕を差し出し、掌を上にして、

「陵、カネが無えがいや、ちとカネくれいや。」

と言う。私は父の手を握り返し、軽く微笑みながら、

「何だ、じいちゃん、オレにカネをくれるってんじゃないのか？

カネなんてじいちゃんのほうがたくさん持つてるだろ？」

私の笑顔につられて父もまた弱弱しく笑い、

「カネなんか無えがいや。」

と返す。

そのやりとりがおかしかったのか、田舎っぽい見舞い客の男性が「アハハ」と笑う。その人と目が合い、私はもうあきれてマトモに相手に出来ないという様子の視線を返した。

大広間を後にしようとする例の顔立ちの整った中年の看護婦さんがやって来た。

「あの、今日はこのままお帰りですか？」

そのつもりだと答えると、

「大変申し訳ないんですけど、もうすぐ夕食ですので、それが終わるまでお付き添いいただけませんか。お食事が終わればすぐにお休みになると思いますので、それ以降はお帰りになって結構ですから。」

若干夜遅くなつても上りの新幹線ならいくつかあるだろう。東京に着くのは十時過ぎかもしれない、そんな風に思い、しぶしぶながら父の夕食に付き合うことにした。

K病院の食事はそれなりに豪華で、ちょうど空腹感を覚えていた私には羨ましく思えた。オレンジ色のプラスチックのお盆に載せられて夕食が運ばれてきた。今日のメニューは煮込みうどんとヨーグルトにバナナ、そしてオレンジジュースであった。ベッド備え付け

の台にお盆を乗せ、父は背中を丸くしてうどんをすすり始めた。煮込みのいい香りが運ばれてくる。腹が鳴る。

「じいちゃん、ずいぶんうまそうだな、それ。いいなあ。どうだい、うまいかい？」

「ああ、うんめえ。」

「そうか、そりゃあよかつたなあ、じいちゃん。何だか俺も腹が減ってきたよ。」

すると父はとヨーグルトを手にして

「これ食うか？」

と勧めるが、遠慮する。

オレンジジュースを口に含んだとき、父は先ほどのように激しく咳き込んだ。いったん飲み込んだジュースがすべて口から出てしまふ。シートがオレンジ色に濡れて染まる。口から糸を引いて垂れた黄色い涎が、咳で前後左右に揺れる。かなり苦しそうである。

「大丈夫かい、じいちゃん。」

先ほどと同様、私は懸命に父の背中をさすった。ようやく咳は収まったが、それから父はジュースに手をのばそうとしなかった。私は一瞬思った。まさか、水を飲みこめない状態になったのではないだろうな、そういえばさつきも喉が渴いたと訴えていたし、看護婦さんも先生もこんなになつた父の姿にまったく気づいていないのだからか。

ジュースをあきらめた父は、やむなくヨーグルトを食べようとするが、蓋をつまき剥がすことができないので、私に空けてくれと頼む。ヨーグルトをじゅるじゅる注ぎ込むようにして食べ終わった父は、子供のように口の周りを白くする。

「ホラ、口拭けよ、じいちゃん。」

床頭台の上のティッシュを一枚取って父に渡す。ゆっくりと口をぬぐう父。

「メシは終わったかい？ うまかったかい？ じいちゃん。」
父は素直に答える。

「ああ、うんめかったいや。」

二人だけの静かな晚餐は終わった。お膳を片付けて、例の液晶テレビをつける。土曜の夜のバラエティ番組をやっている。はやりのお笑い芸人がおかしなゲームをやっている。テレビは賑やかな笑い声を立てている。この液晶テレビ、絵はそれなりに綺麗だが、音はかん高く安っぽい。楽しい笑い声であるにもかかわらず、か細く金属質の高音なので、どこか虚しく、淋しささえかもし出しているように思える。お笑い芸人の滑稽な動作を見て、私は声を上げて笑うが、父は仰向けになって目を閉じたままである。

「じいちゃん、おもしろいよ、見るかい？」

アームを動かして画面を父の方へ向けると、父は横目でちらと見て「ああ、見える」と答えただけで、再び目を閉じてしまう。

「もう寝るかい？ じいちゃん」
寝るといのでテレビを消し、明かりを落とした。病室全体が墓場のように静かになった。

私はせめてぐっすりと眠り込むまではそばについていてやろうと思ひ、しばらく父の脇で文庫本を読み始める。すると父はいきなりむっくり起き上がり、酸素マスクをはずそうとする。

「じいちゃんダメだよ、これはずしちゃ。」

とマスクを付けさせようとすると、

「脚がしゃっこい（冷える）て、寝らんねえがいや。」

と言う。そりゃあそうだろう、両足が毛布からはみ出ているんだから。

「これでいいか？ どうだい、まだ冷えるかい？」

毛布を直してやるが、まだ冷えると言うので、床頭台の中からバスタオルを出し、毛布の上からかけてやる。それでも冷えは収まらない。

「仕方ないな、おれが足をさすってやるよ。」

私はそう言っ毛布の上から何度も父の足をさすった。父の足は棒切れのように細くこつこつして、肉の感触はどこにもなかつ

た。かつて中距離走で世を馳せた男の足とは到底思えなかった。

「どうだい、じいちゃん、ちつとはあったまったかい？」

「おお、楽しかったいや。ありがとうな。」

「そうか、じゃあもう一人で眠れるな。おれ、明日用事があるからこれから東京に帰るけど、看護婦さんの言うことよく聞いておとなしくしてなきやダメだぞ。マスクも外さないようにな。はずすと死んじゃうんだからな。」

「おお、わかつたいや。」

「じゃあな、じいちゃん、また来週来るから。」

そう言つて私はK病院を後にした。

母の作った夕飯を食べて長岡駅に着いたのは八時をちょっと過ぎた頃だった。駅に着けば上りの新幹線はすぐ来るだろうと思つていたが、甘かった。ひとつ前の新幹線は十分ほど前に出たばかりで、次が来るまでまだ三十分以上あるではないか。一刻も早く家に帰りたいのに、この三十分がとつともなく長く感じられる。今週も見舞いで貴重な週末が潰れてしまったのだ。ここ三、四ヶ月の間、まともな家族と週末をすごしたことはない。週末を家族とのんびり過ごす時間がいかに貴重なものであるか、家族みんなで終日ダラダラ過ごすだけの休日がいかに尊いものであるか、私は改めて思い知らされた。この分だと家に着くのは十一時だろう。JRをうらめしく思つたりする。

やむなく自動販売機で切符を買い、一階のスタバで時間を潰すことにした。苦いコーヒーを啜りながら駅ビルで買い物する華やかな女性客らをガラス窓越しに眺め、長岡にも都会的できれいな人が増えたなあなどと考えている間にいつしか時間は過ぎ、発車の十分前になった。いそいそとスタバを後にし、改札を通り抜け、東京行きホームの階段を上がる。列車のドア番号が表示されている箇所の前にすでに短い行列ができています。この時間なら自由席も空いているだろう。適当な列の最後尾に並ぶ。私の前では大きな旅行鞆を持つ

た〇し風の女性客が携帯メールを打っている。飾りのついた長い爪であるが、キーを打つのはすごく早い。言い訳するわけじゃないが、この列を選んだのは偶然で、あえて女性客の後ろを選んだわけではない。

” 今度の四番線には二十時四十分発MAXとき三百五十号東京行きが参ります。この電車は二階建て八両編成で自由席は一号車から四号車です・・・”

聞きなれた新幹線到着前のアナウンスが流れる。ようやく家に帰れる。新幹線よ、早く来い。

突然尻のポケットの携帯電話が震えた。一瞬心臓が止まりそうになる。表示を見ると、ああ何ということだろう、K病院である。あれ以来しばらくなかった突然の呼び出しだ。

もしかしたら私は今日この呼び出しの電話が来ることをある程度予感していたのかもしれない。父の様子がこれまでと明らかに違っていたからだ。水を飲んであれだけ咳き込む姿からして、父の容態はかなり悪化していると思われる。何かあるにちがいないのだ。しかしながら私のとった行動は哀れに変わり果てた父に対して何ら措置を施そうとしないK病院のそれと同じだった。容態が悪くなっておりことを知っていながら私は普段の見舞いとまったく同じそぶりをしたのだ。私が一刻も早く家に帰りたいのは、本当は早くこの場から逃れたい、現実から逃避したいという気持ちから来るものだったのだ。

勇気を出して私は携帯電話に出た。いつもの小綺麗な看護婦さんの声だ。看護婦さんは言った。

「お父様の様子がお変なんです、すぐこちらへお越し願えませんか？」
「変って、どう変なんですか？ また勝手に歩き回ってるんですか？」

「息子さんが出られた後またおひとりでお出歩かれてしまいました、その途中で倒れられたんです。」
頭の中に苦しげな息をしてベッドに横たわる父の姿が浮かんだ。例

によつて歩き回つて看護婦さんに迷惑をかけたのだらう、しかたない、謝つておくか。それですむかと思つたが、どうも看護婦さんの様子がいつもと違う。悲壮感が漂っているような声である。もしかしたらもつと何か大切なことを看護婦さんに確認すべきではないのか、その大切なことつて、一体何だ？　いろいろと思案するうち、「どうでしょう、すぐこちらへ来れますか？」
看護婦さんが改めてそう私に問う。

「いや、もう無理ですね。実は私、今、駅にいまして新幹線が来るのを待つているんです。あと一、二分で新幹線が来ます。申し訳ないのですがそちらで対応していただけませんか？」

「そうですか、来ていただけませんか、困つたな……。それじゃ仕方ありませんね。でも事は緊急を要するのです。もし息子さんが来れないなら、誰かご家族の方でいいですからすぐに来ていただきたいのですが、どうでしょう。」

そのとき私は看護婦さんに必ず確認すべき事が何であるのか、ようやく気がついた。

「いま、父は意識があるのですか？」

そう、これなのだ、これを確認しなければならぬのだ。看護婦さんは冷静に答えた。

「それがまったく意識がないのです。」

この一言を聞いて、一瞬頭の中が白くなった。新幹線がゆっくりとホームに入ってきた。もうどうしていいのかわからなくなり、看護婦さんに言った。

「もう新幹線が来ました。すみませんが、これから乗ります。とりあえず私のほうから母に連絡して、必ず誰かそちらへ行かせるようにします。」

「わかりました、必ず来てください。お待ちしています。」
そう言つて電話は切れた。

新幹線のドアが開いた。列に並んでいた人たちが順番に電車の中に入つていく。私の前にいた女性が大きな旅行鞆を転がしながら進

み始めた。しかし私はその場に立ち竦んだままだった。頭の中に今日一日のさまざまな映像が浮かび上がっては消えていった。咳き込んで水を吐き出す父、背中をさする私、足をさする私、取り壊される庭、引き抜かれた赤松、K町の川に佇んでいた白鳥……。

私のすぐ後ろに並んでいた人が、一向に前に進もうとしない私に「すみません」と声をかけた。私はすつと列を離れた。後ろの人はいぶかしげな表情で私を見、私を通り越して前へ進んだ。次の人もその次の人も同じように電車の中に入って行った。

私は後ろを振り返り、ホームの階段を急いで駆け下りた。一刻も早くK病院に行かなければならない。新幹線の発車のベルがホームにけたたましく鳴り響いた。待ってるよ、じいちゃん、すぐ行くからな……。

(父の死 了)

葬式篇

いま手元に父の写真が一枚ある。写真の中の父は黒い背広を着て薄青い背景の中でのっこり微笑んでいる。髪の毛は黒々とし、ふくよかな丸顔で、特徴のある垂れ目はちよつと黒目がちだ。黒枠に入つたこの写真、実は父の葬式で雛壇に飾られた写真である。数ある父の写真の中から私と母と倫子とで選びに選んだ一枚なのだが、これを選ぶに当たってはかなりの苦労があつた。葬式にふさわしい写真がほとんど見当たらなかつたからである。

この元になつた写真は、私の長女が生まれた頃、当時私が住んでいた高崎の社宅で撮られたものだ。六十代前半の父は生まれたばかりの初孫を両手にかかえ、相当うれしかつたのだろう、普段ならカメラを向けるとヘンにカッコつけてブスつとした表情になるのに、このときばかりはカメラに自然な笑顔を向けたのであつた。

ところで、葬式にふさわしい写真、祭壇に飾られる写真を選ぶとなると、まずそれなりにカッコいいものである必要がある。バツチりきまつたカッコいい写真ならプロの写真屋が撮つた記念写真が適切だろうと思ひ、数少ない父のアルバムから最近のやつを探すと、おお、あつたあつた。わが子供らが七五三の時の家族写真、これがいちばん直近のものである。それなりにしっかりと写っているが残念なことに父の表情が固い。カッコつけている。口はへの字に曲がつているし、そもそも目に生氣というものがまるで感じられない。で、結局ボツになつて他を探す。茶色く変色したモノクロの結婚写真が戸棚の奥から出てきた。燕尾服姿の父と白無垢の文金高島田姿の母である。二人とも若い。七三に分けた黒々とした髪とツルリとした肌艶の父は一昔前の銀幕のスターといった感じで、こんなのを雛壇に飾つたら誰が死んだのか誰もわからない。通りがかりの人が見たら若死にした一人息子の悲しい家族などと勘違いされてしまつかもしれない。だいたいどんな人でも若い頃はそれなりにカッコ

いいのだから、その頃の容姿を参列客に見せつけるような変な見栄を張っているように思われてしまう。葬儀に見栄を張っていては失礼だ。参列してくれる人たちだけじゃない、死んだ本人にも失礼だ。まああの本人はかなり見栄っ張りではあったが。

記念写真はあきらめるとして、それなら直近のスナップ写真か何かでいいのかというとこれもまた必ずしもそうではない。これはこれで問題がある。老いさらばえてみっともない姿を人前にさらすのもやっぱり参列客に失礼だからだ。そうなるなるべく直近の写真でかつ葬式に使えるようなものに候補は絞られる。ただでさえ父の写真は少ないのに、母が「笑顔の写真がいい」などとまた余計なことを言い出すものだからますます候補は少なくなる。まったく困ったものである。それにしても父が笑顔で移っている写真がないというのは、今回発見した新たな事実だ。実のところは父の生活は内面的には苦渋に満ちていたのではないか。あらぬ疑いを抱かずにいられない私であった。

そんな中で、唯一自然な笑みを漏らしている写真、それがこれなのである。悩みに悩みぬいた末ようやく選び出した一枚だけあって、生まれたてのわが娘を両手に抱いた父は、本当にうれしそうに微笑んでいる。父の笑顔をおさえた貴重な一枚である。

最近の写真のデジタル合成技術が進んでいて、元の絵さえあればどんな写真にも加工できる。この高崎の社宅で撮られた写真を見ると、部屋はすいぶん散らかっているし、父は小汚いポロシャツを着ている。デジタル合成技術は小汚いポロシャツをパリっとしたスーツに変え、散らかった社宅の床を薄青の清澄な背景に変えてしまった。出来上がった写真はすっかり葬式にふさわしい様相に仕上げられていた。

この葬式写真は大判サイズのもので一枚と手のひらサイズのもので二枚、合計三枚あって、大判サイズのやつは長岡の実家の座敷に掛けられている。手のひらサイズの一枚は同じ座敷の仏壇の中に納まり、残る一枚が東京の我が家の箆笥の上にあるというわけだ。

それにしても不思議なのは、この写真の父を毎日見ていると、最期の父の姿がこのとおりだったように思えてくることだ。死ぬ間際の父は決してこんな顔をしていなかった。

父の生前の最期の写真はN病院で義弘叔父がデジカメで撮影したものだ。これが直近の父の姿を写したリアルな写真だ。

誰が入れ知恵したのかわからないが、父を身体障害者として認定してもらえば新車を安く買うことができるし電車賃も安くなる、実際に父が車を使うことがなくても全然かまわない、父の名義で買えばいい、身体障害者をうまく利用すると何かと便利だとのこと。これを聞かされた母は、それならばとばかり義弘叔父に頼んで、見舞いのついででかまわないから申請書用証明写真を一枚撮ってきてくれるようお願いした。出来上がった写真はいかにも身体障害者ですと人様に訴えかけるに十分な効果を持ったものだった。薄汚れた入院服がはだけてあばら骨が浮き出た胸元がのぞいているし、ところどころ抜け落ち灰色の髪は栄養不足でございといった感じがする。垂れた目には生気がなく死んだ金魚のようだ。何とも印象的なのはポカンと開けたまま閉じることのなさそうな口元である。みつともなさを通り越してどこか滑稽なところさえある。写真を見ただけで身障者認定してくれそうな気配だ。母はこの写真を見て大声上げて笑い「本家のばあちゃんにソックリらねえ」などと言っていた。悲哀感漂うこの写真、身障者認定には十分効果的であるが、とても葬式の雛壇なんか飾れるシロモノじゃあない。

厳密に言えば、この写真の顔もまた最期の顔ではない。棺に収められた父の顔がちがうのだ。最期の父の顔は、葬儀屋の専門家の手によってみごとに若々しく化粧を施された顔だった。乾いた土色の肌は真っ白く塗られ唇に真っ赤な紅がさされた。灰色の髪は真っ黒に染められ七三に分けられた。顔全体をふくよかにみせるため、げっそりとこけた頬に綿を含ませた。最後に眉と睫毛を書き入れられ、父はカッコよく若返った。

しかし、葬儀屋によって作られたその顔はもはや父の面影をまっ

たく留めていなかった。元気なとき父はこんな顔をしていなかった。若々しく化粧を施されたが、若かりし頃の父の顔では全然なかった。やはり作られた顔、他人の顔だった。この顔を見て私は誰かに似ていると思った。躊躇なく言おう。マイケル・ジャクソンだと。

父の死の第一報は、私が東京行き新幹線に乗り込もうとする寸前、K病院からの突然の呼び出しだった。私はすぐさま母に電話を入れ、東京へは帰らず、これからタクシーでK病院に向かうから、義弘叔父に連絡を入れておいてほしいと告げた。

K病院に着いたとき、父は病院の小部屋のベッドに横たわっていた。父はあんぐりと口を開け、気持ちよさそうに眠っているように見えた。念のため父の口元に手のひらを寄せてみたが、そこに命の息使いはなかった。ぽっかり開いた口の中は真つ暗闇で、無限の宇宙につながっているように思えた。父が死んだ。私にわかったのはその事実だけで、死をあるがままに受け入れる、それ以外の思考は一切なく、何の感情もわかなかった。悲しみも哀れみもなかった。唯一できたのは父に声をかけてやることだった。

「死んじゃったか、じいちゃん。」

私はしばらく父の死顔を見つめていた。あれだけワガママだった父がまた何か要求してきそうな気がする。どれくらい時が流れただろうか、いつしか本家の秋幸さんと義弘叔父、おちやめなイトコの貞夫さんが到着していた。私の電話を受けて母が連絡しておいたらしい。

「オヤジさん、どうら？」

本家の秋幸さんが問う。

「死んだみてえら。」

そう答えるのが義務であるかのように私は淡々と答えた。それを聞いて、義弘叔父も秋幸さんもイトコの貞夫さんもめいめいが廊下に出、一斉に携帯電話をかけ始めた。父の訃報はこうやして一族に伝播された。

しばらくすると若い医師がやってきた。医師は言った。

「今日息子さんが帰られた後、七時半頃ですかね、どうやらまた一人で歩き回られたようなんですよ。看護婦が発見したときには別の病室（そこは婦人病室なんですがね）の真ん中のベッドに横たわっています、呼吸も脈拍も停止していました。緊急マツサージ措置を行って薬を打ちました。それからしばらくマツサージを続けましたが蘇生の見込みがないと判断して、私のほうで死亡とさせていただきます。」

「また歩き回っていたのですか？」

「そのようですね……。もう少ししたら主治医が着きますので、後は主治医のほうから詳細をうかがってください。ではこれで。」

若い医師は逃げ去るように部屋を後にした。

父がいつ死んだのか、正確な死亡時刻が何時何分何秒なのか、実は誰にもわからない。最も父のそばにいたはずの医者だつてわからないはずだ。もちろん父本人もわからない。だいたい自分が死んだとさえ思っていないかもしれない。とはいえ父の死亡時刻は医者によつて午後八時三十分と認定された。後でわかったことだが、医師による死亡診断書という紙が保険やら年金やらの証明で大活躍するのである。つまりこれが金をもらう際の証明書となり、政府なり自治体なりの信用のおける公の機関が父が死亡した事実を認めない限り、保険会社も年金機関もビター文金は払わないというわけだ。家族や親族の間でこそ父の死が明らかな事実であるのに、国がこれを認めなければ金は払えん、世の中はそう言っているのだ。父が死んだことは政府の認める医師免許を取得した人間によつて確認され、これを証拠として公の機関が戸籍なりのデータベースを更新し、世の中に父が死んだことが公に認められてはじめて、保険会社や年金機関は金を私達に支払ってくれる。保険会社も年金機関も決して人間を甘く見ていない。その意味で世の中のあらゆる制度は性悪説に立って作られている。だから医師による死亡認定というのは、生き残った私達家族にとつて葬式並み、いやそれ以上に重要な儀式なの

である。

院長がK病院に着いた時、院長は赤い顔をしていて、明らかに晩酌中だったと察せられた。院長は数珠を手に父に向かって合掌し、悔やみの言葉を述べた。先生その姿はいかにも悔やんでいるといった表情で、ずいぶんサマになっていたが、父に対して手を合わせているのでなく、遺族たる私達に対して申し訳なく思っているように思えた。

私達には先生を責めることはできなかった。私達にも共謀者のうしろめたさがあったからだ。いずれ近いうち父がこのようにして死を迎えることは、その場にいた誰もがわかっていたことだった。誰も父が元通り元気な姿で家に帰るなどとは思っていなかった。だからそこに哀しみの気配は微塵もなかった。私達は、ただ懸命にすまなそうに手を合わせるだけの院長先生と、あんぐりと口をあけたまま何もしらず気持ちよさそうに横たわる父の死に顔を交互に見ることしかできなかった。

看護婦さんがやってきた。銀縁眼鏡をかけた中年の看護婦さんで、ナース帽の脇からヘタクソに縮れたパーマ髪がはみ出てい、単に塗りたくっただけの厚ぼつたい真つ赤な唇が妙に印象的だった。看護婦さんは、遺体を綺麗にして引き渡すまでしばらく時間がかかるから、その間に葬儀屋に連絡して、運搬の準備をしておくといいと私達に言った。そして、

「どこかお宅さんでお決めになっている葬儀屋さんなんかありますか？もしないようでしたらこちらでいつもお願いしているところをお呼びすることもできますが。」

と言うので、私はいつも本家の葬式を頼んでいるところでもなかったほうが何かと都合がいいだろうし、そもそもふだんから儀屋なんてつきあいがいいから、結局本家の秋幸さんに任せることにした。秋幸さんは、

「じゃウチムラだな」

と軽く言い、電話帳で『ウチムラ葬儀店』を捜すと、あったあった。

広告入りででっかく出ている。早速電話を入れ、すぐに来てもらうことにした。

ウチムラ葬儀店の社長は黒縁の眼鏡をかけた五十代後半の小男だった。もし人の商売を見た目で判断できるなら、この社長こそ葬儀屋というにふさわしかった。下顎の強そうな三角形の顔の上に、黒々とした髪が整髪料でなでつけられて光り、真つ黒の背広に黒いネクタイで、数珠を手に父の遺体に合掌するその姿は、じつに格好がよかった。いや、よかったのは格好だけではない。そこには仏に対する敬いの気持が表れていた。これぞ葬儀のプロ。院長先生のようなわざとらしさはまったくない。そりゃあそうだろう、仏様で商売させてもらっているんだから。仏様を作ってはならない商売の病院とはそもそも成り立ちが違う。比べちゃいかん。

父は病院からウチムラ葬儀店の専用車で運び出された。父を運んだのは、義弘叔父、秋幸さん、イトコの貞夫さんとウチムラ社長の四人。布団に乗せたままかつきこまれ、座敷の横の床の間に枕を北にして横たえられた。見舞いに来た私を見るたびに家に帰りたい、帰りたいと泣くように訴えていた父は、ようやく三ヶ月ぶりになつかしいわが家に帰って来たのだった。北枕に横たえられた父はまだ息をしていて、静かに眠りこんでいるように見えた。私は思わず父にこつ声をかけた。

「じいちゃん、おかえり。やっと帰ってこれたなあ、よかったなあ。」

「まず仏様にマクラギョウをあげなければなりません。」
仏様を運び込んで一段落すると、ウチムラ社長はおもむろにそう言った。マクラギョウ？何の事だ、そりゃ？

ポカンとするわれわれを意に介さず、社長は続けた。

「こちらはハツボトケ様ですね、おそらくセエベエさんですと、ボダイジはガンコジジイ様だと思いますが、そちらでよろしいでしょうか。」

何を言っているのかよくわからない。ここはひとつ本家の秋幸さんに助けを求められない。テーブルの隅に座る秋幸さんに訴えかけるような視線を投げかけると、秋幸さんは言った。

「ガンコー寺でいい。ここん家のオヤジはへえ、こつてえ前から自分が入る墓の場所を決めてたがあて。」

話を総合するとつまりこういうことらしい。

まず、セエベエというのは本家の屋号で、あの辺一帯で「清兵衛さん」といえば本家のことをさす。ちなみに本家の隣の家はヨシベエさん、前の家はチヨウベエさんである。で、この「清兵衛さん」家が菩提寺としてるのがガンコー寺というお寺なのだ。このガンコー寺、実はお盆に帰省したとき必ず墓参りに行っていたお寺なのだが、ガンコー寺という名前であることを、私は初めて知ったのであった。父は生前から自分の入る墓の場所をこのガンコー寺のここと決めていたらしい。その場所は本家の先祖代々から所縁の仏様まで、セエベエ一族の墓が固まっっていて、父が自分が入ると決めていた場所は、ちょうど先祖代々の墓のま裏にあたっていた。そういえば私がずいぶん小さい頃、家族で墓参りに行った際、「おれはここに入るからな、おめえら、覚えとけやな」などと父が言っていた記憶がある。

ウチムラ社長の言ったマクラギヨウというのは漢字にすると「枕経」と書き、死んだ直後に読んでもらうお経のことらしい。お経をあげてもらうのは坊さんをお願いするしかないから、つまりウチムラ社長は今から「清兵衛」一族の菩提寺であるガンコー寺の住職を呼び出せというのである。

夜中の十一時になろうとしているのに、今から坊さんと呼んで果たして来てくれるものかどうか。私は半信半疑のまま秋幸さんに教わった番号に電話を試みた。電話に出たのは女性だった。ずいぶん若そうな声だ。まず父が死んだ旨を伝え、とにかくこれから来てもらえないかとお願いとすると、「少々お待ちください」と言って女性性は電話口を離れる。通話を保留状態にせず受話器を置きっぱなし

にしているので電話の向こうで何を話しているか筒抜けだ。女性は住職を呼んで、簡単に事情を説明しているのだが、女性の声の合間合間にしわがれた男の声が聞こえる。「で、どこの家?」「ナガサワさんとか言っていましたけど」「ナガサワ?どこのナガサワだ?」そんな会話が聞き取れる。そうこうするうちしわがれ声の主が電話口に出た。住職だ。私はまだマクラギヨウという言葉を知らなかった。先ほど女性に話したのとまったく同じことを繰り返す。住職は「ハイ、ハイ」と繰り返す。果たして坊さんわかっているのだろうか。不安になって言葉が途切れる。私は再び本家の秋幸さんに目で助けを求める。秋幸さんは仕方なさそうな表情で「どれ」と電話を変わる。

「ああ、住職ですか、清兵衛です。ああ・・・、そう、大島の清兵衛です。夜分遅く悪いですねえ、うちの分家の三郎がいまさつき死んだがあです。え?ああ、そうです、あの三郎です。」

秋幸さんの会話で住職は死んだのが誰かすぐ特定できたらしい。いまから来てくれるという。いきなり見ず知らずの者から真夜中に電話を受けて「長沢三郎」という人間が死んだと聞かされても、さすがにすぐにはピンと来ないのだろう。だが「清兵衛」とこの三郎、これですぐ住職はわかったのである。さすが本家である。

住職が来るまでの間に枕経の準備が始まった。ウチムラ社長は北に向けられた父の枕元に小さな台を据え付けた。そして私達を呼び、「ご親族の方々、ご遺体の手をこう指を組んで合わせてあげてください。」

私は恐る恐る父の手に触れた。父の手は氷のように冷たくゴツゴツしていて、枯れ木のように固まっていた。ここに横たわる父がもはや生きていないことを、私は触感によって改めて知らされたのだ。私は一本一本を織りたたむように父の指を組み合わせ、静かに胸の上に置いた。

「次に両足に足袋を履かせてください。」
ウチムラ社長に言われるがまま足袋を着ける。足もまた冷たく、や

はり生命いのちのぬくもりはなかった。

一通り枕経の準備が終わると、次にお通夜と告別式をどうするか話し合われた。まず喪主を決めなければならない。母には極力苦勞をかけたくないので私が喪主をやることにした。ウチムラ社長は今後喪主としてすべき事柄を逐一私に教えてくれた。まず日取りの決定である。さすがに明日すぐにお通夜というわけにはいかないだろう、明日は月曜だから、知っている限りの範囲でかまわないので、明日中に父の死亡を告知すべし、段取りをすべて済ませたら、明後日の火曜日を通夜に当て、翌水曜日を告別式に当てるべし、のとことだった。

「それにしても、住職、ちと遅いな。」

本家の秋幸さんが言う。すると母が不安げな様子で秋幸さんに訊く。

「秋幸さん、枕経ん時のお布施をやどれぐれえあげればいいがるかね？」

「これぐれえでいいがんえろかね。」

秋幸さんはそう言うて人差し指と中指を二本立てて示した。決して二千元ではないだろう。それを見てウチムラ社長は言った。

「相場は三万前後だと思えますが、まああくまで気持ちですから、そのくらいでもかまわないと思えます。」

住職が来たときすでにわが家の狭い座敷は急報を聞いてかけつけた親族で一杯になっていた。ガンコー寺の住職はウチムラ社長によつて恭しく奥座敷に通された。親族一同、住職に深々と頭を下げた。

ガンコー寺の住職は年の頃六十代前半、半白のイガグリ頭に細くたれた目、顔つきはいかめしいが、どこか人懐こさを感じさせる坊さんだった。電話と同じしわがれ声で「それじゃあ早速はじめましょうかね」と言い、そそくさと父の枕元に向かった。そして黒い法衣の懐から丁寧に折りたたまれた紙を取り出し、枕元の台に置いた。紙には毛筆で何やら書かれていた。たぶん南無阿弥陀仏と書いてあるんだらう。それから線香を二、三本手に取り、火をつけて香鉢に

横置きした。普段嗅ぎ慣れない線香の匂いが部屋中に漂った。住職は数珠を手にし、お経を読み始めた。私たちはみな正座してお経を聞いた。だんだん足が痺れてきた。ようやくお経が終わった。座敷で母が住職にお茶を出した。住職は茶を啜りながら「あれだけ元気な人だったがんにのう。」などと生前の父の様子を語った。みな恐縮して住職の話を聞いていた。住職はキリのいいところで白いクラウンに乗って帰っていった。母は結局三万円包んで住職に渡した。

倫子夫婦がようやく福島から駆けつけてきたのは親族一同がほとんど帰った後だった。倫子は化粧を施された父の横に正座し、しばらくうつむいていた。私の位置からは背中しか見えなかったが、倫子が泣いているのは明らかだった。倫子の隣で矢野さんがやはり正座して静かに両手を合わせていた。

翌日は葬式の準備やら告知やらで目の回るような忙しさだった。まずしなければならなかったのは隣近所に通夜への参列をお願いすることだった。私と母とで告知がたら一軒一軒回った。子供の頃から知っている懐かしい人たちは、みないい老人になっていた。

「この町にはへえ老人しか住んでねえて。老人の町らて。」
母はそう言っていた。

喪主として私がいさつしたのは通夜と通夜後のお齋とき、告別式と告別式後のお齋の計四回であるが、通夜と告別式のあいさつは遠方からはるばる来ていただいた大勢の弔問客の前だったので、大いに緊張した。前夜にウチムラ社長がくれたあいさつのお手本を必死に暗記したのだが、通夜のあいさつこそそれなりにうまくいったものの、告別式はからつきしダメだった。前の晩の通夜でほとんど夜通し酒を飲まされたからだ。後になって子供らに「お父さん、だいぶかんでたね。」などと揶揄された。

通夜にも告別式にも大勢の弔問客が集まった。告別式には、黒服の弔問客の中に、私が子供の頃から見慣れた深緑色の作業着姿が何人か混じっていた。父が勤めていた電気工事会社の人達だった。

仕事で現場に出向く途中せめて香典だけでもと、忙しいさ中立ち寄つてくれたのだ。私は彼らに深々と頭を下げた。感謝の気持ちを表さずにいられなかった。頭を下げながら目頭が熱くなった。

葬式はウチムラ葬儀店が経営するセレモニーホールで行われた。セレモニーホールはレンガ造りのたいそう立派な建物で、三つの棟に分かれていた。真ん中の屋根の丸いちばん大きな棟にエントランスがあるが、このエントランスの両脇に西欧風な飾り窓が整然と延びていた。広い駐車場に大きな電光看板が立っていて、なかなかおしゃれな建物であるが、周りがだだっ広い田んぼなので余計目立つ。ウチムラ社長は相当の辣腕経営者であるらしい。

通夜も告別式も、司会はウチムラ社長自ら取り仕切った。葬儀会場はホールの真ん中の棟で行なわれた。祭壇を前に親族は祭壇に向かつて左、一般参列者は右に座った。祭壇は生花で溢れんばかりであった。生花の札には供してくれた人たちの名前が書かれていた。親族、従兄弟、兄弟らの札に混じって父の勤めていた会社の社長や私が勤める会社の社長の名前などがあった。そして祭壇の中央にはあの父の写真が大きく掲げられていた。写真の中の父は、まるで馴染みのお客様が大勢訪問してくれたことを喜んでいるかのように微笑んでいた。

ちなみにこの祭壇はウチムラ社長が持ってきた葬儀関係のパンフレットにあったものだが、値段に応じてピンからキリまで五種類あるうちの、一番高価でハデな祭壇より一ランク落ちるものである。それなりに結構値が張った。母は「安いのでいい」と言ったが、ウチムラ社長の読みでは弔問客が二百人前後とのことで、それだけの人数になると、もっとも目に付く祭壇をケチってみすばらしく見えるよりは、多少派手目めにしておいたほうが、お客さんに失礼がないだろうとのことだった。

式が始まるとすぐ、ウチムラ社長はガンコー寺の住職を紹介した。「導師は真宗大谷派ガンコー寺第十四代住職××師でございます。」祭壇の脇から、きらびやかな紫と金の法衣を身にまとった住職と橙

色の法衣を着た若い坊さんが入ってきた。若いほうの坊さんは住職の息子さんらしい。お経の読み方は若住職のほうが上手だとの評判だ。

住職と若住職の二人によるお経が始まった。みな神妙な面持ちで静かに経に聞き入っている。それとなくお経を聞いているうちに、私の脳髓にあるイメージが鮮明に浮かび上がってきた。それは、真っ白い衣装を身にまとった父が、黄金色に輝く階段を天に向かう姿であった。雲は薄紅色の輝きを滲ませ、隙間から光の帯が下界に向かって注がれている。二人の坊さんがかなでる二重唱のお経のゆったりしたリズムに乗って、父は天国への階段を一步一步踏みしめて上っていく。たまに下界を振り返って笑みを浮かべる父。すべては神々しく、厳粛で、美しい光景だった。

これから私達は初七日やら四十九日やらでこのお経を何度となく聞かされることになるのだが、繰り返し聞かされるうち、うちの子供らは「キミヨームーリョージュニーヨーライ」などと節まわしを覚えてしまった。『門前の小僧習わぬ経を読む』を地で行ったのである。後で調べたところによると、このお経、実はこういうものらしい。

歸命無量寿如来
南無不可思議光
法蔵菩薩囚位時
在世自在王仏所
覩見諸仏浄土因
国土人天之善悪
建立無上殊勝願
超発希有大弘誓
五劫思惟之撰受
重誓名声聞十方
普放無量無辺光

『正信念仏偈』という真宗大谷派でよく読まれるお経で、「阿弥陀如来への絶対帰依」を述べているんだそうだ。

「なんだか変わったお経ですね、なんだか音楽聴いてるみたいでしたよ。」

このお経を初めて聞いた矢野さんが私にそう言った。

「え？ 矢野さんのところはこんなお経じゃないんですか？」

「ええ、全然違います。まず驚いたのは、木魚がないことですね。

うちは和尚さんが木魚をポクポク叩きながらカンジーザイボーサツとかいってお経読んで、シンバルみたいなのでジャジャーンってやるんですよ。お経は般若心経らしいです。」

なるほど言われてみればガンコー寺の住職の格好はテレビや何かでよく見かけるお坊さんの姿とちよつと違う。いわゆる「和尚さん」のイメージではないのだ。これは宗派の違いなのだそうで、矢野さんの家は曹洞宗なのだそうだ。曹洞宗では仏壇も黒檀、お寺では卒塔婆をよく見かけるとのこと。そしてわが妻の家もまた同じ曹洞宗であった。たしかに妻の実家の仏壇も黒檀であった。

これは私の勝手な推測であるが、曹洞宗というのはもしかしたらわれらが(?)真宗大谷派と違い、戒律が厳しいのではないか。お坊さんの戒律を檀家衆にまで持ち込んでいるのではないのだろうか。というのは、下世話な話であるがわが妻も矢野さんも人前では決して放屁をしないからだ。いやちよつと待て、いくら私でも、エライ人の前や見知らぬ人の前で平気でブーブーやっているわけでは決まてないよ。「人前で」と言ったのを「家族の前でさえ」と言い直す。そう、私も倫子も母も父も、そしてセエベエ一族のものはほとんどみな、家の中で寝転がりながら平気で大きな音で屁をたれる。それが家族の証であり、肉親の証であり、仲間であることの証であるかのようにさえ思っているフシがある。それなのに、わが妻は連

れ添ってもう何年にもなるが、一度たりとも私の前で屁をしたことがないのだ。わが妻だけではない。妻の実家の人たちみなそうなんだぞうだ。矢野さんの家もまた同じらしい。倫子が驚いていた。

「あそこん家はぜつたい人前でオナラしないよ。」

高校時代だったか、日本史で鎌倉仏教を習ったとき、禅宗は武家を中心に広まり真宗は民衆に広がった、みたいな話を聞いたことがある。武家を中心として広まった禅宗、曹洞宗がおのずと戒律に厳しくなるのはなんとなく理解できる。真宗のようにただナムアミダブツとさえ唱えていさえすれば、厳しい戒律などなくても誰でも極楽浄土へ行ける、だから何をやってもいいのだというアマイ考え方がいい言い方をすれば、民衆独特のおおらかさみたいな考え方はそこにはないのではないか。

通夜の後の夜伽よかの話をしておこう。

夜伽はホールのメイン会場の横の長屋風の建物の中にある宿泊棟で行なわれた。宿泊棟には六畳の和室が二つと洗面所、シャワー室がしつらえてあった。和室の床の間に父の棺を置き、ロウソクと線香が途絶えることのないよう、夜を徹するのであった。夜伽には総勢八名が集まった。喪主たる私と倫子夫婦、おなじみの義弘叔父と従兄弟の本家の秋幸さん、おちやめないとこの貞夫さん、秋幸さんの弟の武郎さん、そして私と一番年の近い従兄弟の光さんである。武郎さんは新潟市内から、光さんは横浜からかけつけてくれた。

夜伽は親族を失った悲しみにつつまれ亡き人を偲ぶというものは、まったくなかった。わがセエベエ一族による夜伽の実態は、夕方ぶりに顔を合わせた親族らによる大宴会であった。たいして酒の飲めない私には本当につらい一夜だった。翌日告別式の喪主あいさつを控えている身であることなど誰も考慮などしてくれなかった。安っぽい横長の卓袱台に、缶ビールや日本酒やら焼酎やらの酒瓶、ビニールパックになった氷塊、プラスチック製の使い捨てコップ、割り箸などがセットされ、通夜後の会食で出たオードブルの残りや

差し入れにもらった乾き物のオツマミ類が所狭しと並べられた。酒が進むにつれ昔話に花が咲き、わが一族の久々の宴会は大いに盛り上がったいった。

公務員の貞夫さんは普段固い仕事に追われているせいか、親族の飲み会になると極端にハメをはずして酔っ払う。酔ったとは誰も手がつけられない。清兵衛一族の”虎”として名をはせている。この日もまさに”虎”の面目躍如であった。

「リヨウ、オメエはたいしたもんだ、きちんと喪主やってたすけんなあ。立派らこてや。それに比べりゃあおめえ、武郎なんか気の毒らこてや、今まで喪主なんかさしてもらったこと一度もねえもんなあ。だいたい寺迎えは武郎の役目らったすけんなあ。武郎もたいしたもんだこてや。寺迎え一筋で苦節三十年、なかなかできることらねえろ。」

一同大爆笑である。武郎さんは苦虫を噛み潰したような笑いを浮かべる。調子付いた貞夫さん、さらに続ける。

「だいたいな、セエベエ一家は昔から封建社会んがいや。何でもア二（長男）が一番、オジ（次男）はカスみてえな扱いらこてや。

本家行つても秋幸はもう別格でな、武郎なんかずうつと隅っこに追いやられて、”カスオジ”らとか言われていじけてたこてや。おめんちの父ちゃんも三男坊らすけんな、ココんちの（と本家の秋幸さんを指差して）父ちゃんみてえに大事にされんかったがいや。だすけに負けん気だけはやたら強いこてや。」

家の中で隅に追いやられた者の気持ち、私には何となくわかる気がする。うなづく私を見て、貞夫さんは言う。

「リヨウ、おめえも長男らけど、倫子のほうが陸上で一斉を風靡したすけん、おめえんちの父ちゃんは倫子、倫子言っておめえのことなんか何くんにもかまわんかったろ、なあ。」

「確かにそうだね。」

すると貞夫さん、今度は倫子に毒づく。

「倫子！ おめえ、ちとこつちこいや！」

「何だねえ？」

仕方ないな、このヨツパライオヤジは、といった表情で倫子と矢野さんがそばに来る。貞夫さん、すでにパンツ一丁になっていて、脇から剛毛につつまれたお宝袋がはみ出ている。倫子に対して説教を始めるが、そんな姿ではまったく説得力がない。倫子も目のやり場に困っているようだ。

「おめえはなあ、今までこんげなふうな飲み会にやあ一度も出たことなかったろ！ おめっちの父ちゃんはそればっかずうつと気にしてたがあれ。でもな、いかったこてや、こうやっていいダンナにめぐり合えて、父ちゃんも喜んでるこてや。なあ、父ちゃん！」

そう言つて脇で棺のガラス窓から派手に化粧された父の顔を覗き込み、

「おお、父ちゃん笑つてらいらあ！」

矢野さんは底なしの酒飲みだから、いくら飲んでも陽気になるばかりで全然変わらない。東北の人の酒飲みにはこういうタイプが多いような気がする。素朴で誠実な人柄が酒によってそのままにじみ出た矢野さんであるが、わがセエベエ一族での評判は飲むことに高まつていった。前夫の正明は決してこんなことはなかった。

貞夫さんと千葉の叔父の掛け合い漫才が始まる。お互いの過去の悪事をばらしあう。一座は大笑いである。

「オメエは今のかあちゃんと付き合ってるのをオヤジに黙っててくれと頼んでおいたのに、平気でバラしやがって、こういう男んがいや、こいつは。」

「貞夫、バカ、おめえはホントにバカらな！ おめっちのオヤジがどんげん心配しておれに言ってたか、全然知らねえがあすけんな。シワワセ者らいや、おめえは。」

こんな話が延々と続き、夜が更けるとともにいつしか酒が底をついた。

「リヨウ、おめえ、ちと買出し行って来い。」

千葉の叔父が私に命令する。

「周りに店なんて何も無いよ。こんな晩くなつて。」

「国道まで出りゃあコンビニ二ぐれえあるだろ。行つて来い。」

私は真夜中に買い出しに行かされるはめになった。言われるがままに、寒い中、私は片道約一キロの田んぼ道を歩き、国道まで出た。ようやく戻ってきたとき従兄弟の光さんはすでに酔い潰れていた。酒が到着すると千葉の叔父は光さんの布団をめくつて、

「オラ、光、何寝てるがいや！」

と光さんの頭をバチバチ叩いた。叩き起こされてボーっとしている光さんに千葉の叔父は言った。

「なんでえ、光、おめえは。センパイを差し置いてガーガー寝やがつて。ホレ、飲め！ お通夜みてえな顔してるんじゃないやねえ！ 飲め！ パーっといこうれ！」

お通夜みてえつて、これ、そもそもお通夜なんだけど・・・。

この夜伽の席で私は自家の秋幸さんからこんな話を聞いた。父が息を引き取つたあのK病院の院長先生のことである。

秋幸さんによると、K病院の院長は手塚さんといつて秋幸さんの奥様の母方の親戚なのだそうだ。

「大酒飲みんがてや、ありやあ。お前つちのオヤジが死んだ時も赤い顔して来てたろう、あん時どつかで見た顔らなと思つたがいや。もつと早くわかつてりやN病院なんかさっさと引き払つてこつちに入れらいたがあるもな。」

父がN病院からK病院へ移つたのは、N病院の看護婦さん達が面倒見切れなくなつて、N病院の副院長の紹介で移された、K病院の院長はそう教えてくれた。

「先生の紹介がなきゃ入れないんじゃないの？」
そう聞くと、

「そうらねえがいや。あんげん医者胸三寸で決まるがいや。知り合いらとか親戚らと言えは融通つけてくれるがいや。」

何だそうだったのか。それじゃ医者の世界というのも普通のサラリーマンとビジネス構造はさほど変わらないじゃないか。秋幸さんは

さらに衝撃的なことを教えてくれた。K病院に入るまでずっと空きを待っていたあのMの精神病院も、金次第ですぐにでも入れたという。それじゃM病院からの連絡というのはいくら待っても来なかったということか。

秋幸さんはこの話を奥様を通してK病院の院長から聞いたという。父をK病院に移した時の院長先生の何やら意味ありげな態度の理由がようやくわかった。

院長は、本来なら見ず知らずの認知症患者を受け入れるからには何らかの報酬をいただきたいところだが、先輩からのたつての依頼であるから仕方ない、その辺をわきまえてくれよ、と暗に言っていたのだ。良きに計らってやる代わりに見返りをよこせと仄めかしていたのだ。私たちはこの医療業界のプロトコルにいたって無知だったのである。この契約には見積書もなければ請求書も領収書もない。あるのはただ阿吽の呼吸だけである。

ようやく皆が床に就いたのは明け方近くになってからだ。夜が更けるにつれ徐々に寒くなってきたが、夜伽を執り行うこの部屋には三人分の布団しかなかった。この三枚の布団を八人が奪い合いながら眠りに就いた。最後まで酒をあおり続けて、もぐりこむべき布団を失った千葉の叔父は、暖かそうに布団にくるまっていて武郎さんの頭をピシヤピシヤたたきながら大声で「武郎、おめえは一人で布団取りやがって！センパイを差し置いて、なんらあ！」などと大声で叫んでいた。紅一点たるは倫子は矢野さんと二人で布団を分け合っていた。私はほとんど寝付けないまま、徹夜状態で朝から始まる告別式に喪主として望まねばならなかったのだ。

通夜でも告別式でも、私はほとんど涙を流さなかった。深い悲しみに胸打たれた出来事がひとつだけあった。一とおり式が終わわり、出棺前に参列者が次々父の棺に花を入れていく中、われわれ親族の間で「北ん家の婆さ」と呼ばれている隆治叔父の奥様、つまりあの茶目っ気で酒の席を賑わす従兄弟の貞夫さんのお母様が花を入れる

番になった。「北ん家の婆さ」は突然

「ああ、長岡のお父さん！」

と大声を上げて泣き崩れ、棺に取りすがった。その姿を見て、しばらく忘れていた涙で目が曇った。涙が流れないよう上を向いて歯を食いしばった。隣に立つ倫子は俯いてハンカチを鼻に当てていた。

父の写真と位牌を掲げて霊柩車に乗り込むとき、一瞬ではあるが、私は自分達が特権階級になったような、得意げな気持ちになった。

黒服の参列者がみな私達に向かって両手を合わせ、車が出るまでの間ずっと見送ってくれたからだ。参列者への最後の挨拶は義弘叔父がやった。根がマジメな義弘叔父はこの御礼のあいさつに私以上に緊張していたらしく、あの嵐のような通夜の夜、とても酒など飲んでいられる状態ではなかったようだ。

霊柩車霊はキャデラックだった。火葬場は長岡の南東、栖吉の山奥にあり、私にとって子供の頃からおなじみのところだ。火葬場に対して”おなじみ”という言葉はちよつとおだやかではないが、祖父も祖母も隆治叔父も、私の知る限り清兵衛一族の者はほぼ全員がここで焼かれたのだから、そう言うほかはない。

私はそもそも背の高いほうなのだが、清兵衛一族はそもそも全員ガタイがよく、一族総出で火葬場に並ぶとそれはそれは壮観であった。本家の秋幸さんはじめ、イトコら、イトコの子供らはみな百八十五センチをゆうに超える大男ばかり、女もまた倫子の百七十五センチを筆頭にズラリ丈の高い大女がそろっている。隣の列の家族が小人の一族のように見える。

おなじみの火葬場は今までとちよつと様相が変わっていた。天高くそびえ立っていた煙突があの大震災でぼつきり半分に折れてしまっていたのである。火葬場の煙突というのは本来天高く伸びていて、煙とともに死者を天国まで送り届けるような趣きがある。丈の高い煙突は白い鉄筋コンクリートの建物とほどよくマッチしていて、均整が取れている。この均整が火葬場に厳肅なイメージを与えているのに、その象徴たる煙突が銭湯のそれより短くなってしまい、どこ

か滑稽で、まぬけな感じがする。妙にかわいらしくさえ見える。コンクリートの床は所々ひび割れが補修されているし、大震災でおかしくなつた父は大震災で様子の変わった火葬場で焼かれるのであつた。

火葬場へ行く途中、霊柩車の後部座席から母が一軒の家を指さし、「あれがハヤカワさんの家らねえろかね」と言つた。

「この近辺で一番高い松の木がおれん家ら言うてたすけ、たぶんあれらろ。」

確かに広い庭のはじめに大きな松が立っていて、それなりに目立つが、周りと比べて取り立てて立派というほどのものではない。

「あの人も自慢ばつかする人られうあね。なんで西の男てや自慢コキが多いがあるかね。」

まったく同感だと私は思った。母の言う西の男、それは信濃川の川向こうの地域の人のことだが、まさに父のことを指しているのである。ハヤカワさんというのはどうやら父のイトコ筋に当たる人らしく、会社で父の上司に当たる人だった。父が現役中、それなりにお世話になつたらしい。張りのあるよく通る声とどこか偉そうな素振りが目立つた。社会的地位が高いのだらう、お斎の席や大勢親族が集まる中、常に話題の中心にいて、またそうでないと不機嫌になる人だった。

火葬が終わるまでの間、親族、隣近所の皆さんに昼食を振舞わねばならない。これをお斎という。お斎の会場は大手通の割烹を予約してあつた。喪主たる私はお斎の司会までやらされることになつた。うまそうな懐石料理が次々と運ばれ、酒が進む。お酌をしているうちにいつしか時は過ぎて、すでにみな食事を終え、手持ち無沙汰そうにしていた。そろそろメモ時だ。だがどこでメモをすればいいのかタイミングがわからない。恐る恐るみんなの顔をうかがいながら、ようやく「ごちそうさまでした」の音頭を取つたのは、お斎が始まってかすでに二時間が経とうとする頃だった。

もう火葬は終わっているはずだ。誰かがお骨拾いをしに行かねばならない。だがこの場のメメとお客さんの送り迎えは誰がやるのだ？ 私しかないだろう。私は急遽、倫子と矢野さん、そして『寺迎え一筋三十年』と通夜の席でさんざんみんなにからかわれた武郎さんにお骨拾いに行ってくれるようお願いした。武郎さんははじめ渋い表情を浮かべたが、引き受けてくれた。そんなわけで結局私はお骨拾いに立ち会えなかった。

お斎の席で、私は参列してくれたすべての人にお酌をした。私の知らない親族、隣近所の人たち、友人たち・・・いずれも私が父を知る以前から父をよく知る人々であった。お酌をしながら、私はその人たちから父の思い出を数多く聞いた。

「オヤジさんは『セエベエのサブ』って呼ばれてての、あの辺りじやあ知らん者がいねえかつたがあて。ガキ大将らこてね。隣村とケンカするときも仲間まとめて先頭切っていったがあて。またケンカが強くてなあ、まあどうしようもねえキカン坊らつたこつあね。俺なんてショーゾー、ショーゾー言われてこき使われたこてさ。」
そう語るおじいさんがいれば、

「オヤジさんは足が早くてなあ。ここの家のオヤジ（秋幸さんのお父さん）がマラソン、西ん家のオヤジさん（隆治叔父）が短距離で、おめえんちのオヤジが中距離らつたがいや。その当時、この三人が集まればどの運動会に出てもいっつもこの地区一等賞らつたこてさ。」

お客様のおもてなしは、お斎の席でとりあえず終わった。会場から一同マイクロバスに乗り込み我が家へ向かい、そこで解散となった。ようやく気苦労から開放された。後に残ったのは私たち家族と斎場から持ち込んだ豪華な花束だけだった。狭い我が家の奥座敷は花束で溢れかえっていた。父の骨は美しい白木で造られたの骨壺に入れられ、生花に包まれた床の間に置かれていた。

やれやれやっと思ついたら、まだすべきことがあつた。

ガンコー寺への最後のお礼参りである。本家の秋幸さんによれば、この最後のお礼参りでお布施を渡すのだそうである。

一口にお布施と言ってもいろいろ種類があるらしい。まず今回の一連の葬儀のお礼としてのお布施がある。秋幸さんの相場ではだいたい五十万前後。参列客は香典とは別に持参した「志」とか「灯明代」とか書かれた封筒、このお金はそのままお寺さんに渡すのだそう。これだけではない。どうやら「永代供養料」というのがあるらしい。本来であれば親族が毎日お墓にお参りし、南無阿弥陀仏を唱えなければならぬのだが、この行為をお寺さんが親族に成り代わって末代までやってくれる、その報酬としてお支払いするお金なのだそうである。

「いくらくらい渡せばいいのかな。」

秋幸さんにそう聞くと、

「俺ち家は百万払ちつたいや。」

と返す。百万だって!? どこにそんな金があるというのだ。五十万だってままならないのに……。これが真実かどうか確かめるべく、後でコツソリ義弘叔父に相場を聞くと、義弘叔父はこう言った。「そりゃ本家らすけん、仕方ねえこてや。いいがいや、分家は。気持ちの問題らこてや。払える分だけ払ちつておけばいいこてや。」

私も母もちよつとホツとした。結局私たちは「永代供養料」として二十万円を包んだ。

その夜九時過ぎ、私と母、倫子夫婦、本家の秋幸さんとでガンコー寺にお礼参りに行った。ガンコー寺には毎年お盆の時期に墓参りに行っているが、そのときはいつも裏手に車をつけて墓場に直接入っていたので、表門から入ったのはこれが初めてだった。表門から入ってみると、暗いながらもガンコー寺がずいぶん大きな寺であることがわかった。デンと構えた大きな本堂の前に広々とした庭があり、右手には釣鐘台が、左手には大きな庭木が何本も植えられている。年の暮れはずいぶんと人手で賑わうそうだが、それ以外の日でも普段からちよつとした町内のコミュニティー広場として使われている

るらしい。アマチュアロックバンドの演奏さえ催したことがあるという。

本家の秋幸さんが「ごめん」と言って入っていったのは、本堂に続く脇の棟の玄関だった。家の奥から四十代前半と思われる女性が現れた。住職の奥様らしい。住職の年を考えるとずいぶん若い。後妻なんだそう。前の奥様は病気で亡くなられたらしい。初めてガンコー寺に電話したとき初めに電話を受けたのはこの人だ。

私たちは大きな座敷に通された。若奥様がお茶とお菓子を運んで来、「しばらくお待ちください」と言った。

住職が来るまでの間、私は秋幸さんにどのタイミングでお布施を渡したらいいのか、ヒソヒソ声になって訊いた。帰る間際でいいだろうとのことだった。住職はなかなか来なかった。みんな押し黙ったまま、病院で順番を待つときに似た気持ちで住職を待った。手持ち無沙汰だったので、私は部屋の様子を眺めた。床の間には花が活けられ、何やら文字の書かれた掛軸がかかっていた。違い棚には洒落た焼き物と開いた金の扇子が飾られていた。障子をはさんだ廊下の向こうにおそらく庭が広がっているのだろう。雨戸が閉められているのでわからないが、昼間はそれなりに風流な景観なのにちがいない。

ようやく住職が現れた。一同正座してお辞儀をし、礼を述べた。昨日今日の葬式の様子をみんなで振り返る。反省会だ。「いい葬式だった」「人が大勢来た」「云々・・・」。その後これからの法事の予定について話し合われた。葬式に続く重要な法事は四十九日だ。来月の三連休のいずれかでやりたいが住職の都合はどうかと母が訊くと、住職は

「十二月の三連休ですか、ええつと私の都合はどうだったかな。」
と言って黒い手帳を広げ、指を舐め舐めページを繰る。

「二十三日の土曜日の午前なら空いています。それでどうですか？」
一同顔を見合わせる。

「わかりました。そこでお願ひします。」

まだ喪主たる責任感を若干残していた私がそう言ってみんなを仕切った。一同異論はなさそうだった。

「それじゃあ決まりですね。」

住職は日程を手帳に書き込む。するとそれまで黙っていた倫子が口を開いた。

「十二月二十三日だともう死んでから四十九日を過ぎてますよね、それでいいんですか？」

みんな一斉に倫子のほうを見た。

「じいちゃんが死んだのが十一月五日だから、四十九日って十二月十五日前後になるんじゃないですか？ いいんですか、二十三日で。」

倫子が言うと、住職は微笑みながら

「全然かまいませんよ。」

と答えた。すると倫子は住職の余裕綽々の態度が気に入らないといった様子で口をとんがらせて食らいつく。

「前に義理の父が死んだときお坊さんに言われましたよ、死んだ最初の七日間は人の靈魂はまだこの世を彷徨ってるんだって。初七日で三途の川を渡って、それから七日ごとに裁判があつて、最後の七日間で閻魔大王の裁きがあつて天国へ行ったり地獄へ行ったりする。その裁きが全部で七回あつて七日×七回で四十九日になるんだ、だから絶対四十九日の日は守らなきゃダメだって。そう言われましたよ。」

倫子のお話を黙って聞いていた住職は、それまでの丁寧な口調と違って変わった調子でこう言った。

「ほう、そうかい、あんた、それ見たんかい。」

倫子は口ごもった。誰も口を出さなかった。住職は続けた。

「あのねえ、人が死んだら三途の川原を渡るとかエンマさまが裁くとか、そんなことはどうでもいいことなの。そう思いたい人は思っればいいの。肝心なのは生きているあなたがいかに真摯な気持ちで故人の冥福を祈るか、それだけなんですよ。四十九日めに絶

対法事をやらなきゃならないなんてことはないの。生きている人たちみんなの都合に合わせて、みんなが故人を偲んだほうがいいんです。死んだ人が大事じゃないとは言わないけど、生きてる人のほうが大事なの。そんなの当たり前のことじゃない。なんで死んだ人の都合に合わせなきゃならないの。死んだ後なんて誰あれも知らないでしょ？」

確かにそのとおり。死んだ人の都合より生きている人の都合を優先する。これも宗派の違いというものか。曹洞宗はこのへんかなりキビシイらしい。確かにすでに死んだ人より今生きている人の都合を優先してくれるというのは、ありがたいことではある。しかしよく考えてみれば、私たちは父が生きていた時、父の都合などまったく無視していたのではなかったか。

ガンコー寺の本堂で、住職による最後のお経が上げられた。本堂は広く古びた木の香りがした。本尊はおそらく阿弥陀如来だろう、かなり大きかった。ガンコー寺は真宗大谷派としては県内有数のお寺らしい。本尊の手前の、私達が焼香する棚のすぐ横には、現在改築中の京都の東本願寺の瓦が大事そうに一枚置かれていた。

最後のお経が終わった。住職は「それじゃ、そういうことで」と言っただけで奥へ引き上げようとした。おいおい、まだお布施を渡していないぞ。タイミングを逸した私たちは、「これ、どうしよう」と秋幸さんを見る。秋幸さんは「あ、そうだった、忘れてた」と言い、「住職！、住職」大声で呼びかける。その声で振り返る住職。待ってました、言わんばかりの振り返り方である。

「これ渡さんきゃだめらったて。」
秋幸さんが笑いながらお布施一式を渡すと、住職は、「そうだった、そうだった。一番大事なことを忘れとった。」
と、お布施一式、何事もなかったような表情で受け取って、そそくさと奥へ引き上げたのだった。

秋幸さんがいなくなったら病院のとき同様、お寺とのプロトコルも確立できなかっただろう。このプロトコル、データ通信のようにと

ここに規約として明示されているわけではない。目に見えないプロトコルなのだ。お布施一式の値段だって「相場」という得体の知れないものがあるだけで、住職から見積書をもらったわけでもなければ、お布施を渡した後、住職が領収書をくれるわけでもない。すべては不可視の、しかしながらしつかり確立されたプロトコルなのである。病院とのプロトコルだって事前に秋幸さんに聞いておきさえすれば、もっと素直に医者や看護婦と接することができたろうに。

帰りがけ、ふと本堂の壁に目をやると、大勢の人の名前が書かれた紙が所狭しと貼ってある。よく見ると、どうやら永代供養料を支払った人たちを貼りだしているらしい。

「俺ち家も名前を出てるれ、ホラ。」

秋幸さんが指差した紙は他の紙より一回り大きく、確かに秋幸さんの名前が書かれている。「永代供養料 金百萬円」が目を引いた。いずれこの中に私の名前が書かれた小さな紙が貼りだされるのだな。

四十九日までに仏壇を買っておかねばならない。秋幸さんが安い仏壇屋を知っているので紹介してくれるという。葬式が終わった翌週、改めて長岡に戻り、秋幸さんと母とで仏壇屋に行った。

仏壇屋は例の火葬場へ行く途中をちよつとはずれた通りにあつた。キャデラックの窓際から山の端に大きな看板を見かけたことを思い出した。二階建ての仏壇屋のビルにはいると、秋幸さんは売り場へは行かず、二階の事務室へ向かった。曇りガラスのドアを開けると店長らしき人が事務机でスポーツ新聞を広げていた。その人はわれわれを見ると席を立ち、秋幸さんに軽くあいさつした。この店長、実は秋幸さんの母方のイトコなのだそうだ。仏壇の値段ってどのくらいなのか秋幸さんに聞くと、ピンキリだというが、

「ここで買えばいいヤツを安くしてくれるて。」

とのことだった。

売り場へ行つて、どの仏壇がいいか母と物色する。売り場は明るく、大きささまざまな仏壇が整然と置いてある。金ピカの仏壇もあれ

ば黒檀のシブいのもある。どでかい金の仏壇の値札を見てたいそうびっくりした。車が買える。私は黒檀のシブいやつが好みであったが、母は金ピカがいいという。理由は部屋が明るくなるから。仏壇を置いておいて明るいも暗いもないと思うのだが、ここは母の好みを優先させることにした。念のため店長に宗派によって仏壇が違うのかどうか聞くと、真宗大谷派では金の仏壇が好まれ、曹洞宗では黒檀が好まれるとのこと。言われてみればわが妻の実家の仏壇は小さな黒檀だった。次は大きさだ。父は生前すでに奥座敷の床の間に仏壇を収める観音開きの棚を作っていた。物置がわりになっていゝるその棚は結構広く、このスペースを埋めるだけの仏壇となると、かなりの大きさになる。

「小さいのでいい。」

母がそう言うので小ぶりの仏壇を見定めることにした。

ところで、仏壇の寸法ってどういう単位で決められているのか、読者のみなさんはご存知だろうか？ 仏壇の寸法を示す単位は「代」だ。三十代というのがいちばん小さいく、大きいものになると二百代になるのだそうだ。この「代」に合わせて、仏壇の奥に祭る本尊の大きさが決まる。いや、あるいは先に本尊の大きさが決まっていゝて、それに仏壇の寸法を合わせているのかも知れない。どちらが先かはわからない。

小さい仏壇は売り場の中央部に並べられている。三十代のはその中でももつとも隅のほうだ。中にひとつおしゃれなものがあった。木でできた部分が赤茶けていて、見た目に品がある。仏壇の中の作りも細かくできていて、全体的に垢抜けた感じだ。値段を見ると、さすがに予算を大幅に超えている。仕方なく隣の同じ三十代の仏壇に目を向ける。こちらなら十分予算内に収まるが、先ほどのと比べるとちよつとカッコよくない。真っ黒な木枠と安っぽい扉、金色がやたらに目だつて、どことなく田舎の農家によくある仏壇を想像させる。私は赤茶けたほうの仏壇を指差して、店長に

「これ、いくらかまけてもらえないですか？」

と交渉してみると、十万ほど引いてくれた。しかしまだまだ予算を超えている。それを十分心得ているくせに、私は母に予算内に収まるかどうか聞いた。母と私との間で瞬時に店長を相手どった暗黙の交渉術が成立したのだった。

「こつちのほうがいいるも、仕方ねえて。いいて、これで。こつちで十分だて。」

母はカツコ悪いほうの仏壇を指差して言う。そこで今度は私。

「これかい？ これ、やっぱりカツコ悪いよ。どこにでもある普通の仏壇って感じがする。ずっと家に置いておくなら、やっぱりこつちだよ。ぜつたい。」

「そうらけどさ。お金が足りねえて。」

母がそう言っていると、私たちのやりとりを窺っていた店長がズバリこつち聞いてきた。

「いや、さすがにお目が高いですね。こつちの仏壇は長岡の腕の立つ職人が作ったものです。服で言うならオーダー服でしょうかね。」

「こちらはいわゆる既製服です。で、ご予算はおいくらほどで？」

こちらの予算を告げると店長は、

「わかりました。それならばこちらのほうをこちらの定価と同じお値段でお譲りしましょう。」

そう、そうこなくつちゃ。この店長、われわれとのプロトコルをよく心得ているじゃないか。まあ紹介してくれた秋幸さんの顔を立てる意味合いもあったのだろうが、こうしてわれわれはまんまとカツコいいほうの仏壇を安く手に入れたのであった。

仏壇が決まると、店長はお寺様からご本尊を買うときに「三十代をください」と言うよう教えてくれた。

「え？ ご本尊って、お寺さんから買うのですか？」

仏壇のご本尊というのは、本来三枚の掛軸から成り立っているのだそう。真ん中に掛けられるのが本尊で、本尊の両脇にそれぞれ一枚ずつ掛け軸が掛けられるのが普通だ。この両脇の掛軸のことを脇掛という。本尊も脇掛も、宗派によって様子がまったく異なる。

真宗大谷派の場合、ご本尊はご存知「阿弥陀如来像」で、脇掛は何やらありがたみのある文句の書かれたものであるらしい。同じ真宗でもお西になると脇掛は仏像になる。曹洞宗では本尊からしてちがう。

「ご本尊はお寺様からしか買えません。でも脇掛ならうちでも売ってますよ。うちで買えば一枚五千円くらいです。」

ご本尊の値段、これを聞いて驚いた。ずいぶんお高いものだ。少しでも費用を節約したいならここで脇掛を買って安くすませてしまえばいい。ついでだから買って行こうとすると、店長はこう諭した。「いやいや、お待ちください。まずはお寺様からご指示を仰いだ上でお決めになってください。ご本尊だけではダメだ、脇掛といっしょでなければダメだとおっしゃるお寺様もおられますので・・・」

「そうなのか。はたしてガンコー寺の住職、どう言うだろうか。」

「来週には仏壇が入りますから、三十代のご本尊をお願いしたいのですが。」

私たちの申し出に、住職はわかりましたと言って、鉛筆舐め舐め例の黒い手帳にメモを取った。初七日の法事の席であった。倫子夫婦と義弘叔父、本家の秋幸さん、貞夫さんといったいつもの顔ぶれが揃っていた。

誰が「本尊だけでいい、脇掛はこちらで買うから」と言い出すのか、みんなお互い腹の中を探り合っていた。早く誰か切り出せよ、私はそう思った。みんなもまた私が切り出すのを期待しているようだった。住職はスラスラと手帳にメモを書きながらこう言った。

「二週間後くらいには東本願寺から本尊が届きます。届いたら連絡をください、仏壇に魂入れをしますから。」

このまま誰も言い出さなければ住職は本尊と脇掛の三点セットで申し込んでしまうだろう。早く誰か切り出すんだ！

切り出したのは案の定、気の強い倫子だった。

「あの、仏壇で本当に必要なのはご本尊だけでいい、両脇の掛け軸

は付属品だから仏壇屋で買ってもいいと聞きましたけど、どうなんですか？」

キターッ！ 倫子の言葉に住職は一瞬ムツとした表情になり、眉をひそめる。そして、あたかも無知な衆生の者どもにありがたい訓告をたれるようにこう言った。

「あのねえ、そもそも宗教って何でこの世に生まれたのか、オメサン（お前さん）方、考えたことあるかね？ ねえろ？ 宗教なんか本当に必要んがるかって、そう思ってる人は大勢いらっしやるるもね、それでもちゃーんと宗教は世の中にある。世の中にあるってことは、やっぱり必要とされてるすけんがあて。

じゃあ何で必要とされてるがるね。もしかしたら宗教なんかねえほうが世の中幸せかもしんねえのう。でもそんな世の中はユートピアだろうの、きつと。宗教は極楽のことを説くけど、極楽で宗教が語られているという話は今まで聞いたこともねえ。極楽には宗教は要らんがあるうの、きつと。だあすけ宗教ってのは必要悪なんじゃねえろかね。あんたらが大酒飲んだりバクチしたり色欲にふけったりするのと同じ、人間にとっての必要悪んがるね。これがないと世の中が成り立たないようなモンのひとつんがあて。

中にはおれは宗教なんか要らんっていう人もいるるもね。ガンとして宗教を受け付けない人ね、これはこれでひとつの宗教んがるうね。こういう人は身内の人^{おんな}が亡くなったらいつたいたいどうするがあるかねえ。まずご遺体をどうするか。マンションに住んでたら地面にも埋めらんねえでしょ？ 焼いたお骨を海に撒くなんていう人もいるるも、今の世の中環境問題がうるさくてそれもなかなかできないらしいのう。そういう人には、それなら宗教に頼りなさいな、と言いたい。だいたいどんな人でも肉親の死を平然としていられる人はまずいない。もしいたらその人はそういう宗教を信じている人らるうの。何らかの形で誰しもが近い人の死を嘆き悲しみ、悼むもんらこてね。その気持ち^{おんな}が大事ながあて。その気持ち^{おんな}が宗教の基本的があて。オレは無宗教らという人がいるけど、そいらつたら人が死

んで坊主なんか呼ばんきやいいねかね。何でもぜくんぶ一人で解決すればいいねかね。ホントに無宗教の人は、無宗教という宗教しかねえこてさ。

じゃ宗教つてのは人が死んだときだけのために必要なのかというと、実はそうでもねえがいの。

オメサン方、普段は宗教のことなん全然考えてねえろね？ とりあえずそれでいいがて。宗教によっちゃ日常のイトナミ全部規定して神様を身近に感じる宗教もあるろも、日本人はそうらねえろね。オメサン方は無宗教じゃなくて、宗教が身近でねえだけんがて。

だいたい人間がこの世にオギヤーと生まれてから死ぬまでの一生に、何か意味があると思うかね？ たぶん意味なんか何にもねえがあて。たまたまこの世に生まれて、生まれたからには生きなんきやダメら。大昔らつたら生きることすら大変らつたすけ、何かにすगरあなきや生きていけんかつたがあて。キリスト教もイスラム教も仏教もそのあたりの事情は同じらこてね。でもね、本当の宗教、特に仏教の本質というのは、生まれてきたことに意味がないという事実を自覚することから始まるがあて。意味がなかつたら生きていても仕方ないと普通は思うろね？ だけどちがうがあて、これが。意味がねえすけに一生懸命生きればいいがあて。逆に自分の生には何らかの必然性がある、何らかの使命を担って自分は生まれてきたんだなんて考えてみなせえ。その人はアタマがおかしいと思われろこてさ。生まれてきた意味なんか本来ない、地球と同じくすべて偶然の産物んがあて。であればなおさら人間は何迷うことなく生きればいいねかて。どう振舞つてもいいし何やつたつてかまわんがて。そこには善も悪もねえがあて。あるのはただひとつ、生きねばならないということんがあて。生きることに迷いは要らんがあて。もし迷つたらどうするか。真宗じゃ人間何やつたつて「南無阿弥陀仏」と唱えてさえいれば必ず阿弥陀如来が救ってくれる。親鸞聖人はおつしやつた。『善人なおもて往生をとぐ、況や悪人をや』。学校で習つたらろね？ だから本当なら人間は生きてるうちはいつでも「南

無阿弥陀仏」を唱えていんきやあダメんがらて。死んだ人が出て初めて「南無阿弥陀仏」が身近になるんじやダメんがらて。つまりの、「南無阿弥陀仏」を唱えるのは死んだ人の成仏を願うだけじゃねえがあて。今生きてる人に宗教を身近に感じてもらって、生きることへの迷いを絶つという意味があるがあて。

で、南無阿弥陀仏を唱えるとき何にもねえ所で唱えるよりは阿弥陀如来をご本尊にいただいて唱えたほうが余計信仰心が沸くる？

ご本尊がいつも目の前にあればいつでも宗教の意義を感じることができるねかね。だあすけん、ご本尊は絶対必要んがあて。そのご本尊も、魂が入ってなきゃただのモノでしかねえがて。」

延々十分も話されたらどうか。われわれは誰一人として、何一つとして住職に言葉を返せなかった。こうして住職は尊い教えを説きつつも、いつの間にかわれわれを煙けむに巻いてしまったのだった。しばらく沈黙が続いた。沈黙を破つたのは、またしても倫子だった。

「それじゃ阿弥陀如来のご本尊はお願いしますけど、脇掛じたいは飾りみたいなものなんでしょ？ それじゃ別に仏壇屋から買ってもいいということですよね？ どうしても本願寺から買わなきゃならないわけじゃないですよね。」

倫子の言葉にそれまでしかめっ面をしていた住職は突然顔を笑みでほころばせて、こう言った。その顔がまたとても人懐っこく、照れた子供のような、憎めない顔なのである。

「まあまあオメサンさ、そう言うなて。仏壇はこの家の財産になるがあねかて。車らってテレビらって、何でもそうらるね、やっぱりブランド品がいろいろがね。そんな仏壇屋から買ったマガイモノをご本尊の脇に飾ったらバチが当たるて。」

何だ、最初からそう言えばいいじゃないか。キリスト教だのイスラム教だのまで持ち出してきやがって。この坊さん、相当な営業マンだ。私が営業でお客様回りをしてもこれだけの営業トークを展開するのは難しい。ご本尊セットを東本願寺から取り寄せると、何か坊さんの位が上がるんじゃないか、あるいはいくらかキックバック

やインセンティブなんかがあるんじゃないか、そんな疑いさえ抱いてしまう。まあさすがにノルマなんてものはないのだからうけれど。

一流の営業マンたる住職の口車に乗せられ、結局私たちは法名に院号まで授けてもらうことになった。院号というのは法名につける尊称のようなもので、いくらかお布施をするとつけてくれるのだそうだ。法名の上に「院」とつき、位牌にこの院号つきの法名が記されて仏壇に置かれる。これがあるとないとで死んだ人が来世で扱いが違うのかと言うと、そうではないらしい。院号があってもなくてもちゃんと成仏できるし、きちんとお寺さんは法事を執り行ってくれる。だから実際は飾りみたいなものだ。住職のさらなる演説の前に、私達は飾りのためだけにまた大きな出費をしたわけである。この坊さん、ホントにたいしたものだ。サラリーマンで営業やったら、きつとかなりの業績を上げるにちがいない。

仏壇はその翌日には納入された。スーツに身を包んだ若い店員が来て仏壇を組み上げた。店員は奥座敷に入るとまず正座し、数珠を手に父の骨壺に向かって合掌し、仏壇を組み立て始めた。三十代の仏壇は生前父が用意した棚よりずっと小さく、ずいぶんと隙間ができたが、観音扉を開くとそれなりに丁度よく収まっているように見えた。仏壇が収まると次は仏具だ。店員は大きな段ボールから次々紙箱を取り出し、蓋を開けていく。紙箱の中には薄い白紙に包まれた金色（こんごう）の仏具が透けている。店員は次々と紙包をはぎ、丁寧に仏壇にセツトしていく。

「宗派によつて並べ方つてあるんですか？」
私がそう聞くと、

「もちろんございます。仏具そのものがまず違います。同じ真宗でもお西と大谷派でまた違うのです。」

店員は真宗大谷派の仏具の置き方をよく心得ていた。私は店員の仕事ぶりを感心して眺めていた。その時私はあつと思つた。店員が手に取つたのは、首を天に向けて長く伸ばした金の鶴だった。私はこの鶴を前に一度見ていた。それは父を最後にK病院に見舞つたあの

日だった。K町の川の中洲に黄金色の夕日を浴びて白鳥が一羽佇んでいた。私はその場違いな美しさにしばし見とれ、あやうく車のハンドルを切りそこねて川に落ちそうになったのだった。その時の白鳥の姿がこの金の鶴の燭台とまったく同じだったのである。あの時の白鳥が父の魂を極楽浄土へと運び、今こうして父の仏壇の中に戻ってきたのかもしれない、私は一瞬そんなふうに思った。

仏壇は三十代よりもう少し大きくてもよかったかもしれない。棚のスペースがありすぎるのだ。ちなみに本家の仏壇は二百代だそうだ。仏具もすべて手作りだそうで、何年かに一度きれいに手入れしてあげないと。金が黒ずんでしまうのだそうだ。この手入れにまた百万以上かかるらしい。さすが本家である。本家のから見ると、さすがに我が家の仏壇はかわいらしく見える。

仏壇棚の空いたスペースには一冊の大判のスクラップブックと古ぼけた賞状の束がしまわれた。

このスクラップブックには、倫子が若かりし頃、インターハイやら国体やらの陸上競技で世をはせた古い新聞記事が保存されていた。父は倫子の偉業をすべてこうし保存していたのだった。中にはコピー機で複写された記事もあったが、このコピーの記事は、父が同僚達に自慢するために会社へ持っていったものに違いない。これを仲間達に見せながら、わが娘たる倫子の偉業を得意満面に語ったのに違いない。その当時、私はそんな父の姿が恥ずかしくてならなかったが、今となつては父への妙ないとおしさがどこかくすぐつたい思いつい出とともにあるだけである。倫子もまた同じ思いだったのである。倫子はまるで生まれたての我が子を慈しむような目で自分が載っている記事を眺めていた。ページをめくる倫子の目に、うつすら涙がさしているのがわかった。

古びて茶色になった賞状の束は、父の遺品を整理している際、押し入れの奥からひょっこり出てきたものである。中身を見ると、どうやら父が若かりし頃に地区の陸上競技大会でもらったものらしい。日付はいずれも昭和二十年代、父が二十歳前後の頃のものであった。

ずいぶん量がある。お斎の席で父を知る人達から伝え聞いた話がまんざらウソでなかったことがわかる。母にそのことを言うと、

「確かにまあ足は早かったことさ。それを人に自慢さえしなきゃあ、本当に立派んがあげどね。」

笑いながら母はそう言うのであった。

ガンコー寺の住職によつて仏壇に魂が入れると、私たちは住職に教わつた作法に従つて合掌した。

お焼香にも作法がある。真宗大谷派ではまず線香を立てることはしない。香鉢の大きさに従つて折つてもかまわない。抹香を焚くときは、淡々とつまんで線香にかければよい。抹香を額におしいただくこともしなくていいし、立ち上る線香の煙を仰ぐ必要もない。焚くのは二回と決まつているが、素っ気なくらいそのままかければよろしい。ただし、焼香を終えた後にしなければならぬことがひとつある。次に焼香する人のために、つまんで凸凹になつた抹香の表面を平らにならしておかなければならない。仏様ではなく生きている人に向けたマナーのように思える。合掌のしかたにも個性がある。頭を垂れて合掌することはないのだ。背筋をまつすぐに伸ばし、両手は胸元で合わせ、なるめくシャキつとしたいい姿勢をとるように、とのことだった。この姿勢のまま「南無阿弥陀仏」を十回唱えるのである。

この作法は通夜の席で教わつたのだが、私が喪主であつたからまず最初に焼香するのは私になる。後に続く参列者は私を真似て焼香するのだから、私の責任は重大であつた。作法を間違えないようにと思つと余計緊張する。緊張して焼香したせいだろうか、この大谷派の作法を、私は体で覚えてしまった。

線香に着火する際の作法については、これといった指示はなかったが、若い住職がやつた着火の仕方がいかにもその道のプロといった風情があつてカッコよかつたので、ちよつと紹介しておこう。

まず線香を二、三本手に取り、それをおおむね三等分に折る。次に揃えた先端を扇状に広げて手に持ち、一番下になつた一本を蠟燭

にかざして、その一本だけに火を着ける。火のついた線香を上下に煽りたてるように動かすと、あら不思議、火が一番下の線香から次々上の線香に昇っていくように見えるではないか。扇形の線香すべてに火が移ったら線香の火を消す。若住職がやったときは線香の火が一瞬にして消えて、扇の軸それぞれから白い煙が立ち上った。この若住職の着火方法があまりにもカッコよかったので、私は真似して今でもこのやり方で着火している。

私同様、わが子供らもまた線香を焚きつけることに面白さを見出したようだ。私が上げた後でも次々新しい線香に火を着けていく。もういいと言ってもすぐ火をつけたがる。おかげで奥座敷に煙が充満し、火事のような。いくら線香が芳しいとはいえ、それだけの煙が立ち上るとさすがに臭い。

父の骨を初めて目にしたのはこの翌年の春、ゴールデンウィークで長岡に帰ったときだった。

冬の厳しさが嘘のような麗らかな春の午後であった。父が生前指定していたガンコー寺の所定の場所には、すでに墓が建っていた。冬の間にも母が秋幸さんの知人を通じて安く買った墓だった。

墓を買うに当たって秋幸さんはサンプルの石板を何枚か持ってきた。いずれも御影石で、白い石もあれば黒い石も灰色の石もあった。サンプルの石板の裏にはマジックインキで「インド産」だの「糸魚川産」だのと書かれていた。秋幸さんによれば、国産の御影石は若干値段が張るのだそうだ。

「安いやつでいい。」

母は仏壇を買ったときと同じセリフで墓を買った。

周囲の墓と比べてピカピカに輝く墓石を私たち家族と本家の秋幸さん、貞夫さん、義弘叔父が取り囲んだ。みな礼服で汗ばむくらい陽気だったので、タオルで額を拭きながら、ガンコー寺の住職を待った。本堂から小さな鉦を手にした住職が現れた。一同住職にお辞儀した。

住職の指示に従って白木の骨壺が母の手によって開けられた。恥ずかしい話だが、墓の下に実際に遺骨が入れられるということを私はこの時初めて知ったのであった。父の骨は、葬式が終わってからずっと仏壇の脇に置かれ、母とともに一冬を過ごしたのだった。

開けられた骨壺の中からとところどころ薄茶色にまみれた灰白色の骨片が現れた。その骨を見た瞬間、私はこの骨がまさしく父であることを直感的に悟った。それどころかどの骨がどの部分に当たるのかさえ明瞭にわかるような気がした。

墓石の前の部分が開けられた。墓の奥は真つ暗闇だった。父の骨は、いったん母の手でアルミ製の大きな塵取のような容器にあけられた。この容器はガンコー寺から借りたものだ。母は父の骨を大事そうに一つ一つ丁寧に容器にあけていった。白木の骨壺に白い粉だけが残った。これも父の一部だった。この粉もすべて一粒残らずアルミの容器にあけられた。

「それではお墓にお骨をお納めください。」
住職が言う。納骨は私の仕事だ。私はアルミの入れ物を無造作に墓の中に傾けた。まるで塵取にたまったゴミ屑をゴミ箱に捨てるような感覚だった。墓の入り口が狭かったので、脇にいくつか小さな骨がこぼれ落ち、白い粉が舞い上がった。この様子を見ていた住職が大声で怒鳴った。

「おい、お前さん、バチ当たりな入れ方をするんじゃない！ 大切な人だったんだろ、もっと丁寧に扱わんかい！ まったくお前さんもいい加減な人だな。」

私が父を人として扱わなかったのはこのときが初めてではなかったような気がする。もうずいぶん前からだったような気がする。末期の父がK病院にいたとき、車椅子で父を運ぼうとして父の足を長椅子の角にぶつけてしまったことがあった。そのとき父は「いてえいやあ。」と訴えたが、その痛みを私はまったく無視したのであった。

納骨を終えて一月ほど経った土曜日の朝、まだベッドでうとうと
していると、突然枕元の携帯電話が鳴った。表示を見ると、めずら
しく倫子からである。倫子からの電話は本当に久しぶりだ。父が生
きていた頃は、病院からの電話同様、また父が何かやらかしたのか
と一瞬どきりとしたものだが、父の介護から解放された今となって
は、何気兼ねすることなく電話に出ることができる。ただ一つの不
安要素を除いては。私達に残された唯一の不安、それは母の健康状
態である。まさかまた母が倒れたのではあるまいか。いやいや、父
が死んでからかえって前より元気になった母のことだ、そんなこと
はあり得ない、だが急性の心筋梗塞が再発しないともかぎらない、
寝ぼけた頭でそんな思いをめぐらせながら電話に出る。電話の向こ
うから、明るい倫子の声が響く。

「寝てたけ？悪いね、突然。今さ、ばあちゃんとタカちゃんと三人
で富士山にいるんだよ。これから東京周りで長岡に帰るから、その
途中でオメサン家に寄りてえってばあちゃんが言うもんだから、こ
れから行くからね。」

倫子によると、死ぬ前に一度富士山に登ってみたいと母が言うの
で、日取りを合わせて昨日、行ったのであった。

倫子らは午後三時を少し回った頃にやって来た。

まだ子供達が保育園に通っていた頃、風邪を引いて休ませなけれ
ばならなくなると、呼び出せばすぐ長岡から駆け付けてくれたもの
だ。共働きの我が夫婦にはとてもありがたかった。それが父が死ん
で以降、こちらがいくら頼みこんでも「心臓が心配だから」と、一
向に来てくれなくなった。以前ほど子供に手がかからなくなったか
らまだいいものの、私はちょっと寂しかった。今になって思うに、
あの当時からすでに、母は一時でも長くワガママな父から逃れてい
たかったのだらう。孫の病気は家を離れる絶好の機会であったとい
うわけだ。そんなわけで、母が我が家を訪れたのは、実に久しぶり
であった。

一方倫子はというと、これが実に二回目の訪問だった。意外に思

われる方もおられようが、兄弟の縁なんてそんなものだ。まして情の薄い私のこと、兄らしいことをこれまで何ひとつしたことのない私のことだ、二度の訪問というのは多いほうかもしれない。

カラリとよく晴れた日曜の午後だった。倫子達はいそいそとやって来た。マンションのインターホンが鳴る。通話ボタンを押すと、「アタシらで、着いたて。」

と、玄関ホールに響き渡る倫子の声が聞こえる。子供らが「来た、来た」とはしゃぎ出す。しばらくすると部屋のインターホンが鳴り、うれしさのあまり狭い廊下をドタドタ駆ける子供らの後から、私はゆっくりと玄関口へお出迎えに出た。玄関の扉が開き、倫子が満面の笑顔で「どうも」と簡単な挨拶をする。そのすぐ後ろには母の笑顔があった。母の後ろからは人懐っこい矢野さんが顔を出す。

そのとき私ははっと思わず息を呑んだ。矢野さんのすぐ脇に父が立っているではないか！ 青々とした初夏の空を背景にして、父は写真とまったく同じ黒目がちな垂れた目で、歯のない笑顔をたたえてながら、じっと私を見ていた。

「何だ！おまえら、じいちゃん連れて来たんか！」
私は思わず大声で叫んだ。倫子が素っ頓狂な表情で私を見た。私がいったい何を言っているのかわからず、倫子は「はあ？」と言う。母が背後を振り返った。しかしすでに父の姿はなかった。

父が死んでからというもの、倫子はまるでこれまでの人生を反省するかのようになり、親戚づきあいを大切にしようになった。福島から帰った時は、なるべく本家に立ち寄るようになり、矢野さんとも評判を上げている。

「アタシ、この歳になってやっと。」
倫子は言う。

「親戚のありがたみがわかった。今の今まで、自分が人と人とのつながりの中で生きてることがわからなかった。」

母はやや耳が遠くなったが、父が生きていたときよりもかえって

元気になった。

千葉の叔父はこれからは自分の時代だとばかりに親戚が集まる宴席では、ますます遠慮なく酔っ払った。

義弘叔父は娘さんの友人からピアノを習い始めた。この友人というのが結構な美人だそうで、奥さんに言わせると、六十を過ぎての手習いに生きがいを感じているらしい。本人は

「お前んちの父ちゃん見てるすけん、今からボケねえようにしてるがいや。」

などと弁解してみたことを言っているが、案外まんざらではないようだ。

本家の秋幸さんは、葬式の二週間後に跡取り息子の結婚式を控えていた。秋幸さんは、母にこの際延期したほうがいいのではないかと相談したのだが、わが母はお祝い事とこれとは別だから気にせず進めてほしいと答えたのだった。

ちなみに秋幸さんの息子さんの結婚式には私が出席した。礼服は長岡に置きっぱなしだったので、ネクタイを黒から白に変えるだけでよかった。この一ヶ月間で礼服は大活躍したわけだ。結婚式が終わって、新郎新婦が来賓のみなさんにぜひ花束を持っていくよう勧めたが、私は「花ならいま家にたくさんあるからいいよ、菊だけ」と答え、秋幸さんらを笑わせた。新郎新婦が来賓をお見送りする際、小さな可愛いキャンドルをおみやげに配ったのだが、その時も私は「ロウソクなら家にたくさんあるからいいよ」と言って秋幸さんを笑わせた。

そして私。

私はいま、私の資格好立ち振る舞いのすべてが父そっくりになった、まるで生き写しだ、妻からも子供達からもそう言われている。

(倫子のメロドラマ・完 平成二十年八月)

葬式篇（後書き）

ここでいったん連載を終了させていただきます。

読みづらい雑文に最後までお付き合いいただきました読者の皆様には本当に感謝しております。本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3290a/>

倫子のメロドラマ

2011年11月16日19時10分発行